

千葉県八千代市

川崎山遺跡

——埋蔵文化財発掘調査報告書——

平成11年3月

川崎製鐵株式会社
八千代市川崎山遺跡調査会

千葉県八千代市

川崎山遺跡

——埋藏文化財発掘調査報告書——



例 言

1. 本書は千葉県八千代市萱田町字川崎山751-1番地外における、共同住宅の建設に先行して行われた、埋蔵文化財の記録保存のための、発掘調査報告書である。
2. 本書の遺跡名は本文「第2節 遺跡概観」にも触れられているが、以前より「萱田町川崎山遺跡」と呼称されてきた。しかし、近年町名を記する必要性が薄れ、明確に他の遺跡と識別する事ができるため、平成9年度財団法人千葉県文化財センター発行「千葉県埋蔵文化財所在地図」作成時ににおいて改定した（遺跡No241）。そのため本報告書においてもそれに準拠する。
3. 調査に関する契約は、平成6年4月1日付けで本開発の事業主体である川崎製鐵株式会社と調査主体となる八千代市川崎山遺跡調査会とで取り交わされた。
4. 調査は、千葉県教育委員会の指導を受けて八千代市教育委員会が事務局を受け持ち、日本考古学研究所から調査員の派遣を受けた八千代市川崎山遺跡調査会が実施した。
5. 発掘調査は現地調査が平成6年4月11日から平成6年10月30日まで実施され、基本整理作業は平成6年11月1日から平成7年2月28日まで行われた。
6. 本整理作業は、本調査の結果を受け、あらためて平成7年8月1日付けで契約が締結され、同日より開始され、平成9年3月31日まで行われた。
7. 調査組織は巻末に記した。
8. 本書の作成及び執筆は、調査担当者である小川和博（日本考古学研究所副所長兼茨城事務所長）が行い、その他第1章第1節は秋山利光（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課）、また第Ⅵ章第2節は大淵淳志（日本考古学研究所調査研究員）が行い、全体の編集は秋山が行なった。
9. 発掘調査から報告書刊行にいたるまで、多くの方にご協力をいただきました。記して感謝いたします。
川崎製鐵株式会社・千葉県教育庁生涯学習部文化課・八千代市教育委員会・日本考古学研究所・炎天下のなか調査に参加された多くの補助員の方々。

凡 例

1. 本書で使用した地形図は以下のとおりである。

Fig.1 参謀本部陸軍部測量局発行 1/20,000地形図「迅速測図」(明治15年)

Fig.2 八千代市発行 1/10,000地形図「八千代都市計画基本図」

Fig.3 国土地理院発行 1/50,000地形図「佐倉」

Fig.4 八千代市発行 1/2,500地形図「八千代都市計画基本図」

なお、掲載にあたり、加筆・修正して用いた。

2. 挿図にはスケールを示したが、概ね住居跡などは1/60、土坑は1/40、炉跡は1/20、土器は1/4、石器など小型のものは2/3及び1/2を基本とする。

3. 遺構実測図の炉跡は例1のように表示した。また、土器の実測図において赤彩は例2のように表示した。

例1 

例2 

4. 本書に使用した空中写真は平成6年、株式会社 写測に委託して撮影されたものである。

5. 土層の色調は、「新版標準土色帳」(13版 1993.1 小山正忠・竹原秀雄)を用いた。

萱田町川崎山遺跡発掘調査報告

目 次

第Ⅰ章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡概観	3
1. 遺跡の位置	3
2. 周辺の遺跡	4
第Ⅱ章 調査経過	9
第1節 発掘調査の経過	9
1. 確認調査	9
2. 本調査	10
第2節 調査日誌	13
第Ⅲ章 旧石器時代の調査	20
第1節 旧石器時代の発掘調査	20
1. 調査の概要	20
2. 遺跡の基本層序	20
第2節 旧石器時代の出土遺物	24
1. 概観	24
2. 石器集中地点(ユニット1)出土の石器	24
3. その他の石器	27
第Ⅳ章 縄紋時代の調査	29
第1節 遺構	29
1. 土坑	29
第2節 遺物	40
1. 土器	40
2. 石器	43
第Ⅴ章 弥生・古墳時代の調査	44
第1節 川崎山Ⅰ期集落の遺構と遺物	44
1. 第Ⅰ期の概要	44
2. 第Ⅰ期の住居跡	45
第2節 川崎山Ⅱ期集落の遺構と遺物	87
1. 第Ⅱ期の概要	87
2. 第Ⅱ期の住居跡	88

第3節 川崎山Ⅲ期集落の遺構と遺物	130
1. 第Ⅲ期の概要	130
2. 第Ⅲ期の住居跡	131
第Ⅵ章 古墳・歴史時代の調査	223
第1節 川崎山Ⅳ・Ⅴ期の遺構と遺物	223
1. 第Ⅳ・Ⅴ期の概要	223
2. 第Ⅳ期の住居跡	223
3. 第Ⅴ期の住居跡	232
第Ⅶ章 成果と今後の課題	237
第1節 調査の成果と今後の課題	237
1. はじめに	237
2. 川崎山遺跡の住居跡形態	237
第2節 八千代市川崎山遺跡を中心とした石製模造品の出現に関する一考察	242
1. はじめに	242
2. 時期	243
3. 廃棄の様相—八千代市川崎山遺跡 SI24住居跡の場合—	245
4. 廃棄の同時性と石製模造品	246

挿 図

Fig

1 萱田町川崎山遺跡位置図(1/50,000) ...	2	16 竪穴住居跡出土および表採石器	28
2 萱田町川崎山遺跡位置図(1/10,000)	3	17 縄紋時代土坑分布図	30
3 周辺の遺跡分布図	5	18 縄紋土坑(1)(SK04、05)	31
4 萱田町川崎山遺跡調査範囲(1/2,500) ...	6	19 縄紋土坑(2)(SK06、07、08)	33
5 確認トレンチ配置図	8	20 縄紋土坑(3)(SK11、12)	35
6 確認トレンチ出土土器	9	21 縄紋土坑(4)(SK14、16)	36
7 遺跡土層図(SI36 付近)	10	22 縄紋土坑(5)(SK17、24)	38
8 グリット配置図および遺構分布図	11・12	23 縄紋土坑(6)(SK25、28)	39
9 発掘風景	19	24 縄紋時代早期前半・後半の土器	41
10 基本層序	20	25 縄紋時代前・中・後期の土器	42
11 旧石器時代確認グリット配置図	22	26 縄紋時代の石器	43
12 旧石器時代確認グリット土層断面図	23	27 川崎山Ⅰ期集落	44
13 石器出土分布図	25	28 第15号住居跡	45
14 PG12 出土石器分布図	26	29 第15号住居跡炉	46
15 PG12 出土石器	27	30 第15号住居跡掘り方	46

31	第15号住居跡遺物分布図	47	71	第39号住居跡出土遺物	75
32	第15号住居跡出土遺物	47	72	第42号住居跡	76
33	第23号住居跡	49	73	第42号住居跡掘り方	77
34	第23号住居跡掘り方	49	74	第42号住居跡炉	77
35	第23号住居跡炉	49	75	第42号住居跡遺物分布図	78
36	第23号住居跡遺物分布図	50	76	第42号住居跡出土遺物	78
37	第23号住居跡出土遺物	50	77	第43号住居跡	80
38	第27号住居跡	51	78	第43号住居跡掘り方	80
39	第27号住居跡掘り方	52	79	第43号住居跡炉	81
40	第27号住居跡炉	52	80	第43号住居跡遺物分布図	81
41	第27号住居跡遺物分布図	53	81	第43号住居跡出土遺物	81
42	第27号住居跡出土遺物	53	82	第45号住居跡	83
43	第30号住居跡	55	83	第45号住居跡掘り方	83
44	第30号住居跡掘り方	55	84	第45号住居跡炉	83
45	第30号住居跡遺物分布図	56	85	第45号住居跡遺物分布図	84
46	第30号住居跡出土遺物	56	86	第45号住居跡出土遺物	84
47	第35号住居跡	58	87	第47号住居跡	85
48	第35号住居跡掘り方	59	88	第47号住居跡炉	85
49	第35号住居跡炉	59	89	第47号住居跡遺物分布図	85
50	第35号住居跡遺物分布図	60	90	第47号住居跡出土遺物	85
51	第35号住居跡出土遺物	60	91	川崎山Ⅱ期集落	87
52	第36号住居跡	62	92	第04号住居跡	89
53	第36号住居跡掘り方	62	93	第04号住居跡掘り方	90
54	第36号住居跡遺物分布図	63	94	第04号住居跡炉(炉1)	90
55	第36号住居跡出土遺物	63	95	第04号住居跡炉(炉2)	90
56	第37号住居跡	64	96	第04号住居跡遺物分布図	91
57	第37号住居跡掘り方	65	97	第04号住居跡出土遺物	92
58	第37号住居跡遺物分布図	66	98	第05号住居跡	93
59	第37号住居跡出土遺物(1)	67	99	第05号住居跡掘り方	93
60	第37号住居跡出土遺物(2)	67	100	第05号住居跡炉	94
61	第38号住居跡	69	101	第05号住居跡遺物分布図	94
62	第38号住居跡掘り方	70	102	第05号住居跡出土遺物	95
63	第38号住居跡炉	70	103	第06号住居跡	96
64	第38号住居跡遺物分布図	71	104	第06号住居跡掘り方	97
65	第38号住居跡出土遺物(1)	71	105	第06号住居跡炉	97
66	第38号住居跡出土遺物(2)	72	106	第06号住居跡遺物分布図	99
67	第39号住居跡	73	107	第06号住居跡出土遺物	100
68	第39号住居跡掘り方	74	108	第08号住居跡	102
69	第39号住居跡炉	74	109	第08号住居跡掘り方	103
70	第39号住居跡遺物分布図	75	110	第08号住居跡炉	103

111	第08号住居跡遺物分布図	104	151	第01号A住居跡掘り方	134
112	第08号住居跡出土遺物	104	152	第01号A住居跡遺物分布図	135
113	第11号住居跡	106	153	第01号A住居跡出土遺物	136
114	第11号住居跡掘り方	106	154	第01号B住居跡	137
115	第11号住居跡炉	107	155	第01号B住居跡炉	137
116	第11号住居跡貯蔵穴	107	156	第01号B住居跡貯蔵穴	137
117	第11号住居跡遺物分布図	107	157	第01号B住居跡遺物分布図	138
118	第11号住居跡出土遺物	107	158	第01号B住居跡出土遺物	138
119	第22号住居跡	109	159	第02号住居跡	140
120	第22号住居跡掘り方	110	160	第02号住居跡掘り方	140
121	第22号住居跡炉	110	161	第02号住居跡遺物分布図	141
122	第22号住居跡遺物分布図	111	162	第02号住居跡出土遺物	141
123	第22号住居跡出土遺物(1)	112	163	第03号住居跡	142
124	第22号住居跡出土遺物(2)	113	164	第03号住居跡掘り方	142
125	第32号住居跡(1)	115	165	第03号住居跡遺物分布図	143
126	第32号住居跡(2)	116	166	第03号住居跡出土遺物	143
127	第32号住居跡掘り方	116	167	第07号住居跡	144
128	第32号住居跡柱穴(P2)断面図	117	168	第07号住居跡掘り方	144
129	第32号住居跡炉	117	169	第07号住居跡炉	144
130	第32号住居跡貯蔵穴	117	170	第07号住居跡遺物分布図	145
131	第32号住居跡遺物分布図	118	171	第07号住居跡出土遺物	145
132	第32号住居跡出土遺物	119	172	第09号住居跡	146
133	第40号住居跡	120	173	第09号住居跡掘り方	146
134	第40号住居跡掘り方	120	174	第09号住居跡炉	147
135	第40号住居跡遺物分布図	121	175	第09号住居跡遺物分布図	148
136	第40号住居跡出土遺物	121	176	第09号住居跡出土遺物(1)	148
137	第48号住居跡	122	177	第09号住居跡出土遺物(2)	149
138	第48号住居跡掘り方	124	178	第10号A住居跡	150
139	第48号住居跡炉	124	179	第10号A住居跡炉	150
140	第48号住居跡遺物分布図	125	180	第10号A住居跡遺物分布図	152
141	第48号住居跡出土遺物	126	181	第10号A住居跡出土遺物	152
142	第51号住居跡	127	182	第10号B住居跡	154
143	第51号住居跡掘り方	128	183	第10号B住居跡掘り方	155
144	第51号住居跡遺物分布図	129	184	第10号B住居跡炉	155
145	第51号住居跡出土遺物	129	185	第10号B住居跡遺物分布図	156
146	川崎山Ⅲ期集落	130	186	第10号B住居跡出土遺物	156
147	第01号A・B住居跡	132	187	第12号住居跡	158
148	第01号A住居跡	133	188	第12号住居跡掘り方	158
149	第01号A住居跡炉	133	189	第12号住居跡炉	159
150	第01号A住居跡貯蔵穴	133	190	第12号住居跡貯蔵穴	159

191	第12号住居跡遺物分布図	159	231	第24号住居跡出土遺物	187
192	第12号住居跡出土遺物	160	232	第26号住居跡	188
193	第13号住居跡	161	233	第26号住居跡掘り方	189
194	第13号住居跡掘り方	162	234	第26号住居跡貯蔵穴	189
195	第13号住居跡炉	162	235	第26号住居跡遺物分布図	190
196	第13号住居跡貯蔵穴	162	236	第26号住居跡出土遺物	191
197	第13号住居跡遺物分布図	163	237	第28号住居跡	192
198	第13号住居跡出土遺物(1)	163	238	第28号住居跡掘り方	193
199	第13号住居跡出土遺物(2)	164	239	第28号住居跡炉	193
200	第16号住居跡	166	240	第28号住居跡貯蔵穴	193
201	第16号住居跡掘り方	166	241	第28号住居跡遺物分布図	194
202	第16号住居跡炉	166	242	第28号住居跡出土遺物	194
203	第16号住居跡貯蔵穴	166	243	第31号住居跡	195
204	第16号住居跡遺物分布図	167	244	第31号住居跡掘り方	195
205	第16号住居跡出土遺物	167	245	第31号住居跡炉	195
206	第18号住居跡	169	246	第31号住居跡遺物分布図	196
207	第18号住居跡掘り方	169	247	第31号住居跡出土遺物	196
208	第18号住居跡炉	169	248	第33号住居跡	198
209	第18号住居跡遺物分布図	170	249	第33号住居跡掘り方	199
210	第18号住居跡出土遺物	171	250	第33号住居跡炉	199
211	第19号住居跡	173	251	第33号住居跡貯蔵穴	199
212	第19号住居跡掘り方	174	252	第33号住居跡遺物分布図	200
213	第19号住居跡炉	174	253	第33号住居跡出土遺物(1)	202
214	第19号住居跡貯蔵穴	174	254	第33号住居跡出土遺物(2)	204
215	第19号住居跡遺物分布図	175	255	第34号住居跡	206
216	第19号住居跡出土遺物	175	256	第34号住居跡掘り方	207
217	第20号住居跡	177	257	第34号住居跡炉	207
218	第20号住居跡掘り方	178	258	第34号住居跡貯蔵穴	207
219	第20号住居跡炉	178	259	第34号住居跡遺物分布図	208
220	第20号住居跡貯蔵穴	178	260	第34号住居跡出土遺物(1)	210
221	第20号住居跡遺物分布図	179	261	第34号住居跡出土遺物(2)	211
222	第20号住居跡出土遺物	180	262	第41号住居跡	212
223	第21号住居跡	182	263	第41号住居跡遺物分布図	212
224	第21号住居跡掘り方	182	264	第41号住居跡出土遺物	212
225	第21号住居跡遺物分布図	183	265	第44号住居跡	214
226	第21号住居跡出土遺物	183	266	第44号住居跡掘り方	214
227	第24号住居跡	185	267	第44号住居跡炉	214
228	第24号住居跡掘り方	185	268	第44号住居跡遺物分布図	215
229	第24号住居跡炉	186	269	第44号住居跡出土遺物	215
230	第24号住居跡遺物分布図	186	270	第46号住居跡	217

271	第46号住居跡掘り方	218	285	第29号住居跡	229
272	第46号住居跡炉	218	286	第29号住居跡掘り方	229
273	第46号住居跡遺物分布図	219	287	第29号住居跡カマド	230
274	第46号住居跡出土遺物	220	288	第29号住居跡遺物分布図	230
275	第49号住居跡	221	289	第29号住居跡出土遺物	231
276	第49号住居跡遺物分布図	221	290	第17号住居跡	233
277	第49号住居跡出土遺物	221	291	第17号住居跡掘り方	233
278	第50号住居跡	222	292	第17号住居跡カマド	234
279	川崎山Ⅳ・Ⅴ期集落	223	293	第17号住居跡遺物分布図	234
280	第14号住居跡	225	294	第17号住居跡出土遺物	235
281	第14号住居跡掘り方	226	295	第25号住居跡	236
282	第14号住居跡カマド	226	296	第25号住居跡遺物分布図	236
283	第14号住居跡遺物分布図	227	297	第25号住居跡出土遺物	236
284	第14号住居跡出土遺物	227	298	Ⅰ～Ⅲ期住居跡長短軸指数と柱穴配置	239

写 真 図 版

PL1	川崎山遺跡遠景	PL10	1. 住居跡 SI04
PL2	1. 遺跡遠景		2. 住居跡 SI05
	2. 遺跡近景		3. 住居跡 SI06
	3. 遺跡近景	PL11	1. 住居跡 SI08
PL3	1. 表土層除去状況		2. 住居跡 SI11
	2. 表土層除去後調査		3. 住居跡 SI22
	3. 調査区全掘	PL12	1. 住居跡 SI32
PL4	1. PG7 北壁土層断面		2. 住居跡 SI40
	2. 石器集中地点	PL13	1. 住居跡 SI51
	3. 石器集中地点		2. 住居跡 SI01-A
PL5	1. 土坑 SK04		3. 住居跡 SI01-B
	2. 土坑 SK08	PL14	1. 住居跡 SI02
	3. 土坑 SK11		2. 住居跡 SI03
	4. 土坑 SK24		3. 住居跡 SI07
	5. 土坑 SK12		4. 住居跡 SI09
	6. 土坑 SK25	PL15	1. 住居跡 SI10 調査中
PL6	1. 住居跡 SI15		2. 住居跡 SI10-A
	2. 住居跡 SI23		3. 住居跡 SI10-B
	3. 住居跡 SI27	PL16	1. 住居跡 SI12
PL7	1. 住居跡 SI30		2. 住居跡 SI13
	2. 住居跡 SI36		3. 住居跡 SI18
	3. 住居跡 SI35		4. 住居跡 SI16
PL8	1. 住居跡 SI37	PL17	1. 住居跡 SI19
	2. 住居跡 SI38		2. 住居跡 SI20
	3. 住居跡 SI39		3. 住居跡 SI21
PL9	1. 住居跡 SI42	PL18	1. 住居跡 SI24
	2. 住居跡 SI43		2. 住居跡 SI26
	3. 住居跡 SI45		3. 住居跡 SI28
	4. 住居跡 SI47		4. 住居跡 SI31

PL19	1. 住居跡 SI33	2. SI35 出土遺物	
PL20	1. 住居跡 SI34	3. SI37 出土遺物	
PL21	1. 住居跡 SI41	PL28	1. SI38 出土遺物
	2. 住居跡 SI44		2. SI38 出土遺物
	3. 住居跡 SI46		3. SI39 出土遺物
	4. 住居跡 SI49	PL29	1. SI42 出土遺物
	5. 住居跡 SI50		2. SI43 出土遺物
PL22	1. 住居跡 SI14		3. SI47 出土遺物
	2. 住居跡 SI29	PL30	1. SI04・06 出土遺物
	3. 住居跡 SI17	PL31	1. SI19・20・21・24・
	4. 住居跡 SI25		26 出土遺物
PL23	1. 土坑 SK01、02、03	PL32	1. SI22・40・48 出土遺物
	2. 溝 SD01	PL33	1. SI12・16・18 出土遺物
	3. 調査区南端部	PL34	1. SI51・01 出土遺物
PL24	1. 旧石器時代遺物	PL35	1. SI09・10A・
	2. 縄紋時代早期の土器		10B 出土遺物
	3. 縄紋時代前期の土器	PL36	1. SI26・33 出土遺物
PL25	1. 縄紋時代中期の土器	PL37	1. SI33・34 出土遺物
	2. 縄紋時代の石器(石皿)	PL38	1. SI34・44 出土遺物
	3. 縄紋時代の石器(石鏃)	PL39	1. SI46・09・32・33・
PL26	1. SI15 出土遺物		10A 出土遺物
	2. SI23 出土遺物	PL40	1. SI29・17・25・10B・
	3. SI27 出土遺物		06・14・01・24 出土遺物
PL27	1. SI30 出土遺物		

第I章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

平成4年6月、杉山泰一氏より共同住宅建設のため、八千代市萱田町字川崎山751番地外における「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱について」の照会が、八千代市教育委員会に提出された。現況は山林で、以前より土地所有者の協力を得て「萱田町市民の森」として多くの市民に親しまれていたところであった。この周辺は「周知の遺跡」の範囲に含まれており、昭和54年には、照会地の北側に隣接する都市計画道路の建設に先だって発掘調査が行われている。この時、弥生時代後期の住居跡4軒、古墳時代中期の住居跡3軒が調査されていた。近隣でのこのような調査状況により、平成4年7月に「遺跡が所在する」旨の回答を千葉県教育委員会より得た。

その後、翌平成5年1月に照会の申請者が川崎製鐵株式会社になり、区域や面積も若干変更されたが引き続き、埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が進められた。

その協議結果を受け、遺跡の性格や時代、規模などを詳細に把握し、今後の保存措置を、適切に講じていくため、八千代市教育委員会が直営により、市内遺跡発掘調査事業として国及び県の補助を得て確認調査を実施することになった。調査は、平成5年9月20日から開始し、10月19日に終了した。その結果、縄文時代後期の住居跡1軒、陥とし穴1基、弥生時代後期の住居跡1軒、古墳時代前期～中期の住居跡43軒など多くの遺構の検出をみた。(調査の詳細については、平成5年度の「市内遺跡発掘調査報告」(平成6年3月31日刊行)に掲載) それらの遺構の検出の状況等から、開発面積15,614㎡のうち、大半の14,000㎡について保存措置が必要と判断された。

市教育委員会は事業者と埋蔵文化財の現状保存や発掘調査による記録保存について、協議を重ねたが、市では現状ですでに多くの調査を抱えており、この調査のため別に調査担当者を付けて、発掘の調査体制を組むことができない状況にあった。そのため、県教育庁生涯学習部文化課の協力を得て、日本考古学研究所に調査員の派遣を依頼することで、ようやく調査組織「八千代市川崎山遺跡調査会」の体制を整えることができた。調査員は発掘調査の期間を考慮して、日本考古学研究所から、二名の調査員を派遣することとなった。

保存措置は、緑地や公園などにあたる区域を現状保存とし、発掘調査による記録保存の区域を極力限定することにした。それにより、保存措置が必要となる区域14,000㎡のうち、現状保存される区域4,000㎡、本調査による記録保存区域が10,000㎡とすることで協議がととのい、発掘調査が開始されることとなった。

(秋山)

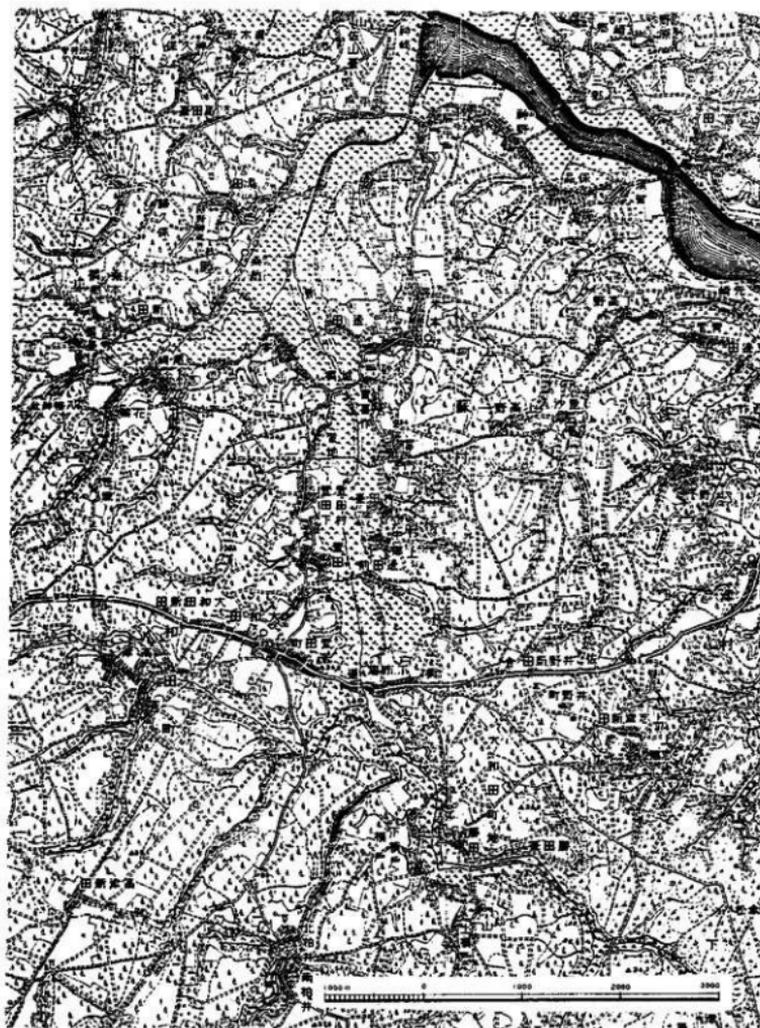


Fig. 1 葦田町川崎山遺跡位置図 (1/50,000)

第2節 遺跡概観

1. 遺跡の位置 (Fig.1・2)

今回対象となった萱田町崎山遺跡は、印旛沼水系に係わる八千代市萱田町川崎山に所在する。付近は八千代市市民会館や八千代市総合運動場をはじめ、最近開通した東葉高速鉄道など公共施設が隣接し、しかも遺跡そのものが市民の森として親しまれている利便の良い地域である。

遺跡は東側に流れる新川の右岸に立地している。この新川はかつて平戸川と称され、北流して桑納川と合流し、さらに神崎川と合流しつつ印旛沼へ注いでいた。しかし、昭和43年資源開発公団による印旛沼疏水路河幅開さく工事が実施され、河幅・深さとも増すとともに、流れが逆方向に変わり現在に至っている。本遺跡はこの新川の右岸、桑納川の南寄り、勝田川により近い地点に位置する。付近は東葉高速鉄道の開通により著しい地形改変が実施されているところであるが、明治42年の測量図（大日本帝国陸地測量部）(Fig.1)をはじめとする地形図をみると、ちょうど遺跡の目の前にあたる東側が大きく湾状の入江を形成している。新川が現在よりもさらに東側に流れをもっていたことがわかる。したがって、いまでもそ谷地形によって大きく分断され、急勾配で谷に落ち込む台地地形も、かつては台地下位に規模の小少な段丘が形成されていた可能性が高い。また本遺跡の占地する地形は、西方に広がる習志野原に連なる台地の東端部に当たり、さらに北側と南側は新川の小支谷によって開析されている。また当台地のほぼ中央にあたり、調査区の南端部には浅い谷が入り込んでおり、小規模ながらこの谷地形も集落構成に微妙な影響を与えていたものと考えている。(Fig.2)

また調査区内の地形をみると、谷地形以外はほぼ平坦で、起伏の比高差は数10cmの単位であり、標高23mのコンターラインが遺跡中央に走っているだけである。また低位面の標高は7m程で、台地平坦部との高低差は16mを測る。本遺跡の調査前の現況は萱田町市民の森の一角を占めた雑木林であった。ま

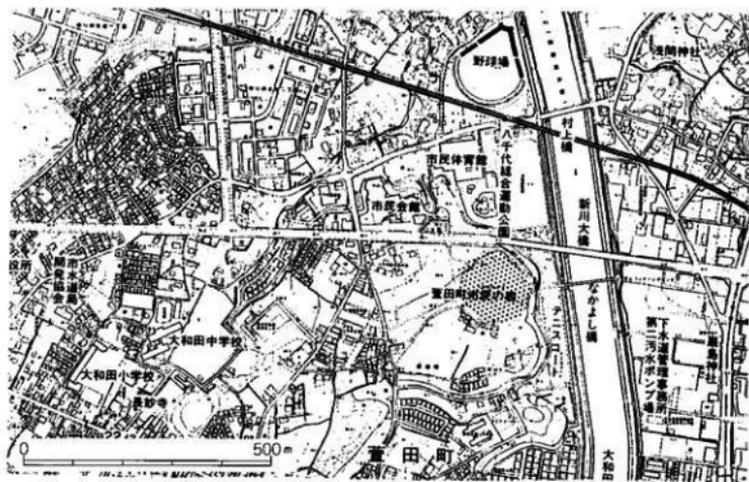


Fig.2 萱田町川崎山遺跡位置図 (1/10,000)

た本調査区の北西方向、現市民会館前付近では昭和54年3月から8月にかけて都市計画街路建設に伴う事前調査として確認調査および本調査が実施されている。この昭和54年の発掘調査報告書の中で、「川崎山遺跡」の遺跡名について村田一夫先生が詳細に記述している。引用文が長くなるが、重要なのでここに記載しておきたい。

〔(前略) 遺跡名は川崎山であったが、都市化が進行しているこの地域にあって、あえて町名をとって「萱田町遺跡」と名づけた。その際、No65と与えた番号は「八千代市の歴史」の巻末の文化財分布図と表に明記し、『全国遺跡地図-12 千葉県』（文化庁文化財保護部）では12-964と登録されている。尚、調査は「萱田遺跡」として行なわれていたが、終了後、八千代市教育委員会より、県文化財センター発掘調査中の「萱田遺跡」との混同を防ぐ為、報告書では「萱田町川崎山遺跡」と改称するようにとの要請があり、「萱田町川崎山遺跡」と改称した。(後略) (村田他1979)〕

今回の発掘調査でも文化庁等の書類提出には、この「萱田町川崎山遺跡」の名称で届出している。

2. 周辺の遺跡

印旛沼西端に流れをもつ新川流域は、埋蔵文化財の宝庫として明治時代から多くの遺跡が知られている。まず上流域の両岸には縄紋時代の貝塚である佐山貝塚（縄紋中期～晩期）と神野貝塚（縄紋中期～晩期）といった市内を代表する遺跡が存在するし、下流に下って島田台、米本、桑納、村上、そしてここ萱田地区は大規模開発に伴うとはいえ、調査例も増加しここ十年余りの間に新川流域の遺跡群は目を見張る程の成果をあげている。そこで本遺跡の近隣で、しかも本遺跡に関連する、つまりここでは旧石器時代、弥生時代後半、古墳時代前半が主体であり、この観点から周辺の遺跡を概観していきたい。

まず本遺跡の北方に広がる萱田遺跡群がある。ここは土地区画整理事業に伴い昭和52年から平成3年まで千葉県文化財センターによって発掘調査が実施され、膨大な資料を提供している。調査された遺跡は権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡・白幡前遺跡・坊山遺跡・ヲサル山遺跡の6遺跡で、縄紋時代の集落跡が極端に少ないという特徴であるものの、旧石器時代の243ユニットをはじめ、弥生時代から古墳時代、歴史時代までの竪穴住居跡と掘立柱建物跡が一軒を越える大規模遺跡が形成されていた。

この中であって旧石器時代については調査されたすべての遺跡で確認されている。とくに本遺跡で検出された第2黒色帯に相当するⅩ層に生活面を持つ石器群は、まず権現後遺跡で発見されている。第5および6文化層ではナイフ形石器、削器、彫刻刀形石器などみられ、石材は珪質頁岩・メノウ等であり、黒曜石は極端に少ないようである。やはり北海道遺跡でも同様にⅩ層上部、ここでいうⅦ層に相当する第3文化層ではナイフ形石器を主体とする石器群がみられ、やはり素材となる黒曜石は少なく、珪質頁岩が多いのが特徴である。井戸向遺跡ではⅩ層上部にあたるⅦ・Ⅹ層でナイフ形石器、楔形石器、削器石器が出土し、石材は安山岩を主体とするようである。白幡前遺跡では第4～6文化層に相当し、やはりナイフ形石器や楔形石器がみられる。ここでは上層(Ⅹa層=第4文化層)が黒曜石(栃木県高野山産)を主体とし、さらに中層(Ⅹb層=第5文化層)での黒曜石は信州系を使用している。また坊山遺跡でも第4～6文化層がⅩ層中に係わる生活面で、とくに第5文化層が最もまとまったユニットを検出している。ここでも石材の使用はチャートや安山岩を主体に、ナイフ形石器、削器等の石器がある。このように八千代の古期段階の旧石器文化は本遺跡や白幡前遺跡が黒曜石主体の石器群であるのと対し、他の多くの遺跡では逆に非黒曜石石器群である。

縄紋時代では既述したように、ヲサル山遺跡の中期(阿玉台式期)の集落(4軒)を除き、坊山遺跡で同時期の住居跡が1軒検出されているだけである。本遺跡でも縄紋土器や石器の出土はあるものの、



Fig.3 周辺の遺跡分布図 (1. 萱田町川崎山遺跡)

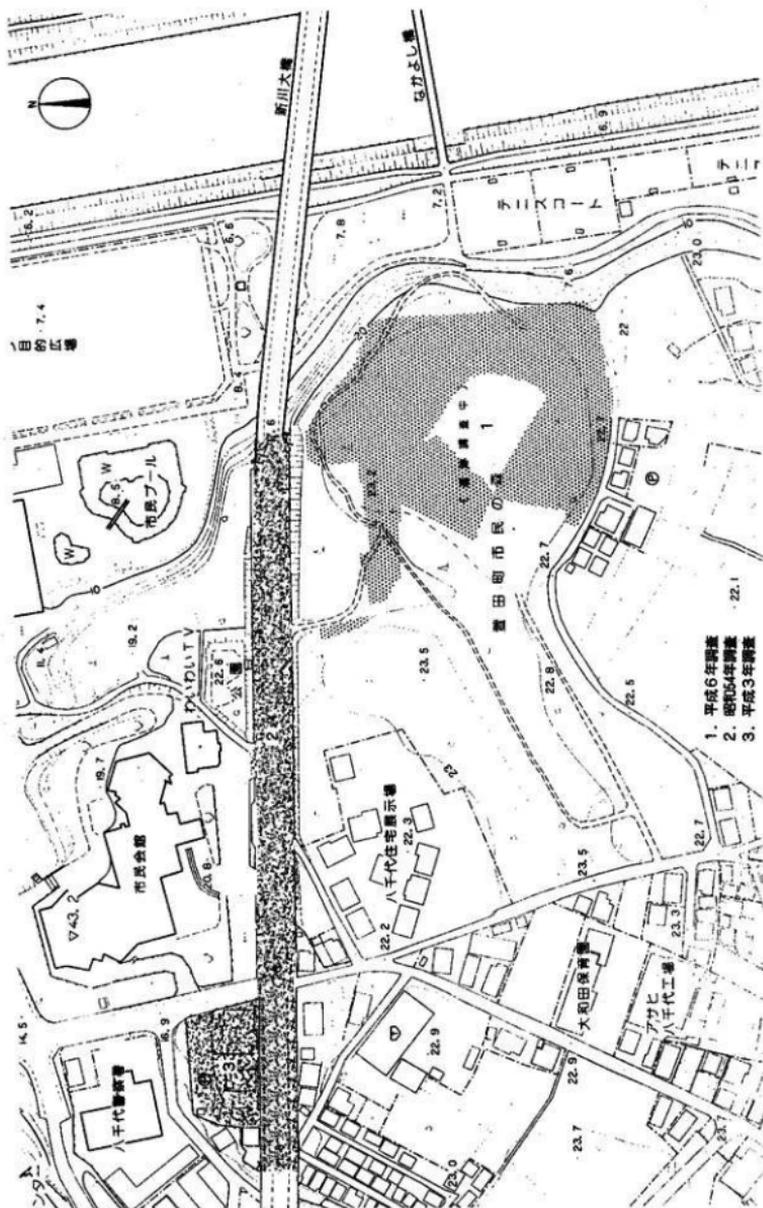


Fig. 4 葦田町川崎山遺跡調査範囲 (1/2,500)

集落跡は確認されていない。しかし、陥し穴と考えられている土坑は白幡前遺跡で19基、坊山遺跡で5基、井戸向遺跡で3基、池ノ台遺跡で4基検出されている。また対岸の浅間内遺跡や沖塚遺跡でも陥し穴の調査がされている。さらに周辺遺跡をみてみると仲ノ台遺跡やライノ作遺跡をはじめ芝山遺跡でも44基の陥し穴が検出されている。

弥生時代となると坊山遺跡以外で集落が形成される。とくに権現後遺跡では70軒を越える住居跡が検出され弥生時代後期を4期に分けて集落分析している。しかも、ここでの集落立地は新川を臨む台地東側縁辺部と、須久茂谷津を臨む南側縁辺部を中心に形成されており、各時期によって微妙な集落形成の変遷を捉えている。これには地形が大きく関わっている。またヲサル山遺跡では弥生時代の終末から古墳時代の初頭にかけての集落が展開している。これは本遺跡や先の権現後遺跡でも同様であったが、過渡期に相当すると思われる住居跡は12軒である。その他白幡前遺跡、北海遺跡、井戸向遺跡でも弥生住居が確認されているが、萱田遺跡群以外でも対岸の浅間内遺跡、村上遺跡群等でも集落跡が判明しているし、昭和54年の当遺跡の調査でも4軒の住居跡が検出されている。

古墳時代でも先のヲサル山遺跡例のように弥生時代と古墳時代を分離して捉えることが不可能との見解もあるが、この古墳時代前期におけるヲサル山遺跡ではⅡ群として分類した堅穴住居跡22軒と方形周溝墓3基が相当する。ここでは方形周溝墓といった墓域と居住域の関連性について論究している。また同じように井戸向遺跡でも堅穴住居跡32軒、方形周溝墓3基が検出されている。この両遺跡は本遺跡との多くの共通性が把握でき、3遺跡の関連性の追求は重要であろう。また中期になると権現後遺跡で5軒検出されている内実に石製模造品の工房跡が4軒で、多量の模造品製作の剥片等が出土している。北海道遺跡では23軒の住居跡が検出され、内12軒の住居跡より石製模造品やそれに関係する石製遺物が出土している。この22軒すべてを工房跡として判断することはできないが、いわゆる工作用ピット内の底面に白色粘土を貼り込んだものもあり、明確に工房跡と認定できる住居跡もいくつか確認されている。また当遺跡でも昭和54年の調査で3軒の内第5号、第6号住居跡の2軒がやはり工房跡であることが判明している。次の後期になると権現後遺跡で10軒、北海道遺跡7軒、白幡前遺跡で5軒、井戸向遺跡で8軒検出されている。

奈良・平安時代では本遺跡を含めた周辺遺跡で重要な位置付けがされている。対岸に占地する村上遺跡群における大集落や権現後遺跡から出土した墨書土器などから『和名抄』にみえる下総国印旛郡11郷の一つである「村神郷」との関連が指摘されている。いうまでもなくこの「村神郷」の比定地がここ現在の村上地区であることはほぼ誤りないであろう。したがって、萱田遺跡群内でも権現後遺跡をはじめ当該期の集落が検出されている。まず権現後遺跡では堅穴住居跡69軒、掘立柱建物跡21棟が確認され、北海道遺跡では堅穴住居跡116軒、掘立柱建物跡10棟、ヲサル山遺跡で堅穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟。隣接するヲサル山南遺跡では堅穴住居跡4軒。井戸向遺跡でも堅穴住居跡103軒、掘立柱建物跡44棟、井戸跡10基の他、墓跡も検出されている。また白幡前遺跡では堅穴住居跡297軒、掘立柱建物跡150棟をはじめ土坑や溝など関連遺構があり、萱田遺跡群のなかでは他を圧倒している。

(小川 和博)

村田一夫他1979「萱田町川崎山遺跡」八千代市遺跡調査会・八千代市
八千代市1991「八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世」
八千代市教育委員会1995「平成6年度 八千代市埋蔵文化財調査年報」
八千代市教育委員会1996「平成6年度版 八千代市埋蔵文化財調査年報」

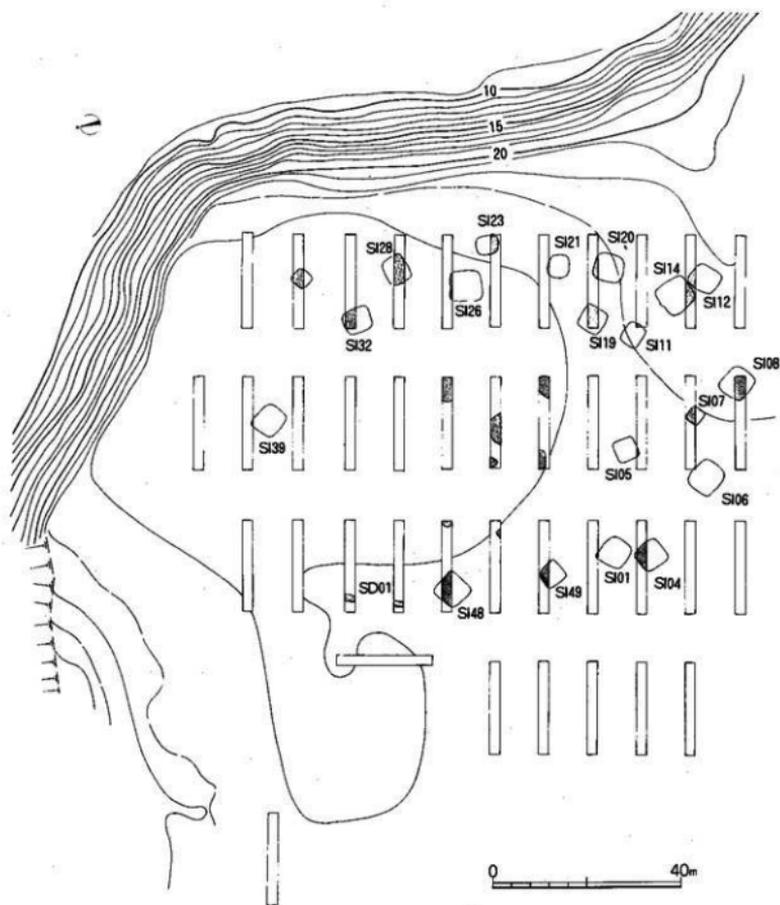


Fig. 5 確認トレンチ配置図

第II章 調査経過

第1節 発掘調査の経過

1. 確認調査

確認調査は、事業者によって計画された宅地造成計画に基づいて、事業地域内全域にわたって実施したもので、調査は平成5年度に行われた。すなわち、平成5年9月20日から同年10月19日の期間を要し、事業対象面積15,614㎡の11%に相当する1,720㎡を確認調査した。

調査の方法は、トレンチ法によって行なった。調査区の設定は公共座標軸に準拠したもので、2×20mのトレンチを対象区域全域におよぶように、定期的に配置し、遺構遺物の有無を確認した。なお、トレンチの設定は全部で43本におよぶが、東西方向を基本としたものの、樹木等の関係や対象範囲の都合により南北方向に設定した場合もある。また調査にあたっては、本遺跡の基本層序であるⅢ層（ソフトローム層）上面を各時期共通の遺構確認面として認識し実施した。

調査の結果、検出された遺構は全域にわたり、住居跡と思われる遺構46基、陥し穴2基、その他のピット23基を数えた。時期別にみると、縄紋時代後期の住居跡2軒、縄紋時代の陥し穴2基、弥生時代後期の住居跡1軒、古墳時代前期～中期の住居跡43軒である。また遺物は古墳時代土師器（五領式後半～和泉式）を主体に縄紋土器（後期加曾利B式）、弥生土器（後期）、奈良・平安時代の須恵器破片の他、石器としてチャート製の剥片1点が検出され、縄紋時代から歴史時代におよぶ集落跡であることが明らかにされた。

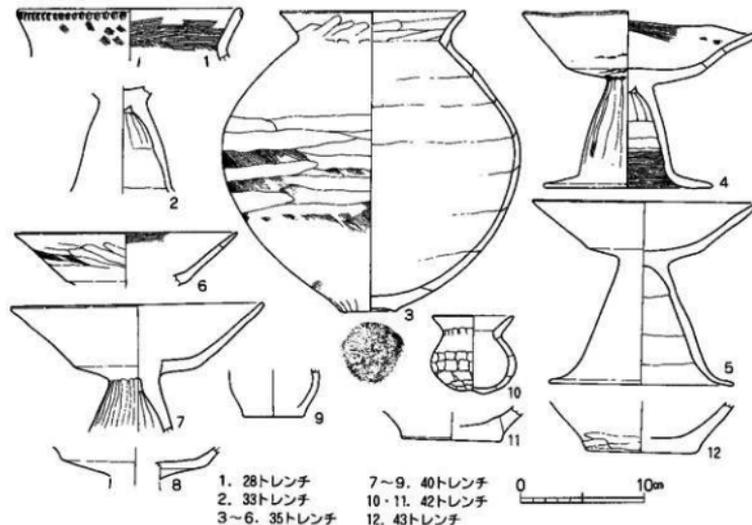


Fig. 6 確認トレンチ出土土器

2. 本調査

確認調査の結果に基づき、遺構・遺物未確認地区と樹木保存を兼ねた緑地公園以外の開発区域全面にわたる10,000m²が本格調査が必要と判断され、これらを対象に発掘調査を実施することとなった。本調査は平成6年4月11日から同年10月末までの約7ヵ月の予定で調査を開始した。既に確認調査の段階で、土層および遺構の状態は把握できており、遺跡全面に設置されている確認トレンチに基づき、まず重機（バックホー）による表土層除去を南東隅からおこなった。この結果、ほぼ確認調査で明らかにされたとおり、Ⅱ層中において、堅穴住居跡と考える黒褐色土の落ち込みが露出するようになる。しかし、表土層が比較的浅いため、表土直下のⅡa層が既に削平されている箇所も多く、またさらに下層のⅡb層もわずかな残存のみの箇所も見受けられる。したがって、一部すでにⅢ層（ソフトローム層）まで達してしまっているところもあったが、十二分に注意を払いながら極力縄紋時代の遺構確認面であるⅡb層上層までは機械掘削を行い、それから人力による掘り下げを行い、遺物の取り上げ、遺構の検出にあたった。この人力によるⅡb層の精査段階から測量会社に委託して調査区の座標を設定した。それは公共座標に基づいた東西南北の平面直角座標で、X座標（南北）、Y座標（東西）の数値を基に10m毎に基準杭を設定した。この10m方眼杭を1グリッドとし、X軸方向を数字、Y軸方向をアルファベットで表示した。すなわち南北座標は北から南に1・2・3、各グリッドは1-A区と呼称することにし、遺構および遺物の検出にあたってはすべてこのグリッド表示によって表している。

こうしたⅡb層からⅢ層上面まで人力による掘り下げ作業は調査区全面におよび、その結果、弥生時代から奈良・平安時代の堅穴住居跡51軒、縄紋時代の陥し穴状遺構13基、近世以降の溝状遺構1条と土坑20基が発見された。なお、排土処理の関係から調査法はスイッチバック方式を採用し、大きく2期に分けて進めたが、排土の大半を保存区域に集中させたため、調査工程には全く支障なく実施することができた。

また10月5日からは、堅穴住居跡の調査と並行して旧石器時代の調査に着手した。まず旧石器時代の遺構・遺物は試掘調査より開始した。基本的には2×2mのグリッドを堅穴住居跡以外の地点に、しかも遺跡全体を対象に設定した。各グリッドは深さ1.5～2mの武蔵野ローム層上面まで人力によって掘り下げた。その結果、わずか1ヵ所であるが下位のⅧ層より遺物の発見があり、その地点を集中的に拡張しながら調査をすすめ、予定どおり10月21日までにすべての調査を終了した。

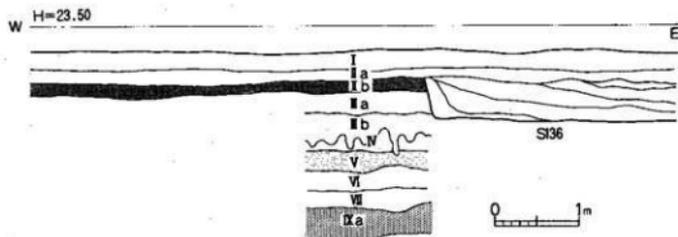


Fig. 7 遺跡土層図 (SI36 付近)

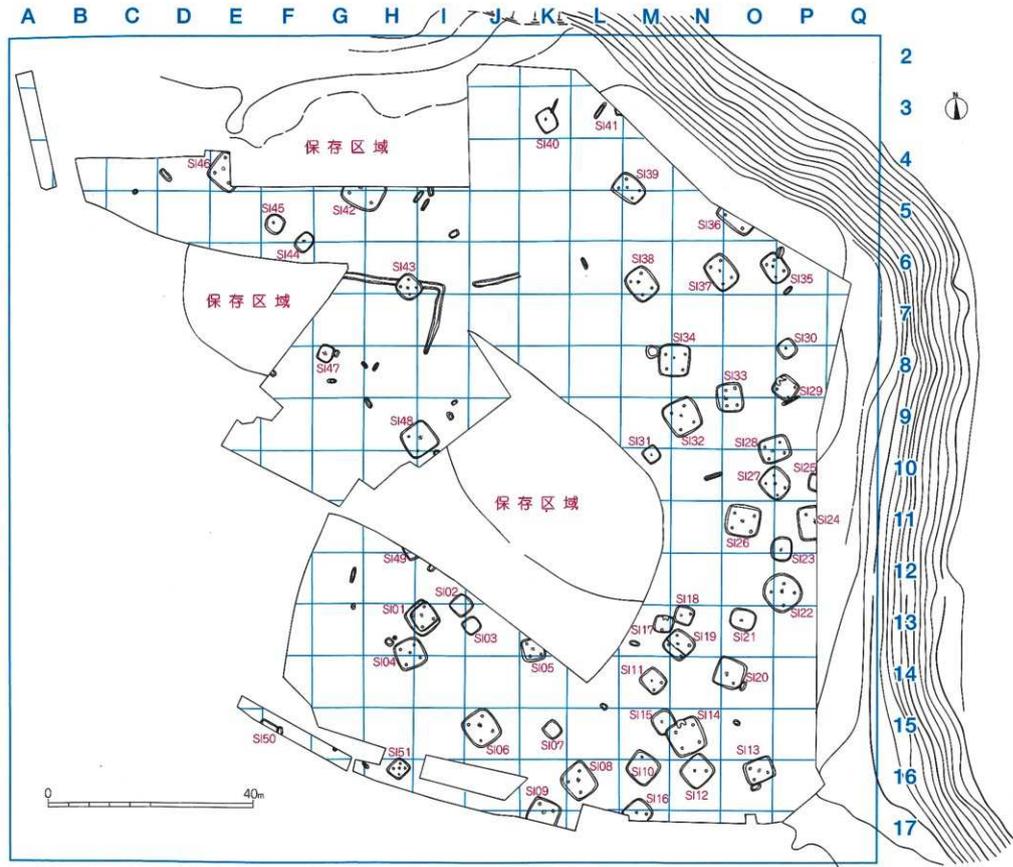


Fig.8 グリッド配置図および遺構分布図

第2節 調査日誌

第1段階(表土層除去)4月11日～5月17日

- 4/11 本日より調査を開始する。表土層の排土を開始する。南東地区より順に掘り下げる。Ⅱ層面で、2ヵ所の黒色落ち込み面(遺構)を検出する。
- 4/12 ユンボによる表土層除去作業を継続する。南側より新たに3ヵ所の黒色土の落ち込みを検出する。黒色土落ち込み部(遺構)より土師器が出土している。
- 4/13 表土層除去作業を継続する。黒色土落ち込み部(遺構)を新たに3ヵ所確認する。合計で落ち込み部は8ヵ所となる。
- 4/14 表土層除去作業の継続で、東側部に移動する。黒色土落ち込み部を新たに1ヵ所確認する。保存区域内の植生の取り扱いについて協議を行なう。
- 4/15 表土層除去作業の継続。東端部を中心に進める。
- 4/16 表土層除去作業の継続。押しプルによる盛り土移動を行なう。
- 4/18 表土層除去作業の継続。本日より調査作業員を導入させて調査を進める。
- 4/19 降雨のため、調査作業員は作業中止とする。ただし、ユンボによる表土層除去と盛り土移動は継続する。
- 4/20 表土層除去作業の継続。調査作業員は根起し作業を行なう。
- 4/21 表土層除去作業の継続。新たに遺構2ヵ所を確認する。作業員は根起し作業の継続。
- 4/22 表土層除去作業の継続。新たに遺構1ヵ所確認する。作業員は根起し作業の継続。
- 4/23 ユンボと押しプルによる北東部の表土層除去作業と盛り土移動を継続する。
- 4/25 北東部の表土層除去作業を行い、新たに遺構2ヵ所を確認する。南東部のⅡ層精査を開始する。
- 4/26 ユンボによる表土層除去作業の継続をす
- る。南東部のⅡ層精査により住居跡を1軒確認する。
- 4/27 北側の表土層除去作業に移る。Ⅱ層精査の継続。
- 4/28 北側の表土層除去作業の継続。Ⅱ層精査の継続。住居跡1軒を確認する。
- 4/30 ユンボ・押しプルにて表土層除去と盛り土移動を行なう。
- 5/2 調査区北側の表土層除去作業の継続。新たに黒色土落ち込み部を2ヵ所確認する。またⅡ層精査の継続。住居跡5軒を検出する。
- 5/6 ユンボによる表土層除去は北西部に移動する。土坑1基を確認する。Ⅱ層精査は東部に移動し、住居跡6軒を検出する。
- 5/7 調査区北西部の表土層除去により、溝状の黒色土落ち込みを確認する。
- 5/9 調査区北西部の表土層除去を継続し、黒色土落ち込み部1ヵ所を確認する。Ⅱ層精査は東部を中心に実施する。
- 5/10 調査区北西部の表土層除去作業を継続する。黒色土落ち込み部は確認できなかった。Ⅱ層精査の継続。住居跡3軒を検出する。
- 5/11 調査区北西部の表土層除去作業の継続。新たに黒色土の落ち込み部(遺構)1ヵ所を確認する。Ⅱ層精査を北東部中心に移動し、住居跡6軒を検出する。
- 5/12 降雨のため、押しプルによる盛り土移動を行なう。
- 5/13 調査区北西部の表土層除去の継続。新たに黒色土落ち込み(遺構)2ヵ所を確認する。Ⅱ層精査を更に北側に移動し、住居跡5軒を検出する。
- 5/14 調査区北西部の表土層除去の継続。
- 5/16 調査区北西部の表土層除去の継続。黒色土落ち込み部を1ヵ所新たに確認する。Ⅱ層精査。
- 5/17 調査区北西部の表土層除去作業をもって第1次調査表土層除去を終了する。北東部Ⅱ層精査を行い新たに住居跡2軒を検出する。

- 第2段階(遺構検出) 5月18日～8月4日
- 5/18 本日より住居跡の床土除去作業に取りかかる。SI06・08・10・11・15住居跡から床土除去。セクションベルトを設け、四区分により発掘する。
- 5/19 住居跡床土除去調査。SI08・09・10・11・15住居跡の床土除去継続する。
- 5/20 住居跡床土除去調査。SI06・08・09・10住居跡の床土除去の継続。SI05・07・13住居跡の床土除去を開始し、SI07住居跡をほぼ完掘し、平面実測を行なう。SI07住居跡は古墳中期である。
- 5/21 SI07住居跡の平面図の修正・検討を行なう。
- 5/23 住居跡床土除去調査の継続。SI06・08住居跡はセクションベルトを除き床面・壁部をほぼ検出する。SI06住居跡は弥生後期である。
- 5/24 住居跡床土除去調査の継続。SI10・11・15住居跡のセクションベルトを除き、床面・壁面の精査。新たにSI04・12・14住居跡の床土除去を開始する。SI06は弥生後期の土器がまわって出土する。
- 5/25 住居跡床土除去調査の継続。SI08・10・12・14・15住居跡のセクションベルトを除き、床面の精査。またSI06・07・11住居跡のセクション実測。新たにSI17・18・19住居跡の床土除去を開始する。SI06住居跡遺物分布状況図作成。
- 5/27 降雨のため調査中止。
- 5/28 SI06住居跡図面修正。周辺整備。
- 5/30 降雨のため調査中止。
- 5/31 住居跡床土除去調査の継続。SI06・08・10・12・14・17・18住居跡の床土除去。新たにSI16住居跡の床土除去を開始する。本跡は竈を有する住居である。
- 6/1 住居跡床土除去調査の継続。SI06・08・10・12・14・16・17・18住居跡の床土除去。SI14・15住居跡のセクション実測。
- 6/2 住居跡床土除去調査の継続。SI04・08・09・12・16・17・18住居跡床土除去。SI02・20住居跡の床土除去を開始する。SI06・07・08・10・11住居跡のセクション実測。SI11住居跡の写真撮影。
- 6/3 住居跡床土除去調査の継続。SI04・16・17・18・19住居跡床土除去。SI03住居跡の床土除去を開始する。SI09住居跡の遺物分布実測。
- 6/6 住居跡床土除去調査の継続。SI02・03・04・09・17・18・19・20住居跡床土除去。SI21・22・23・24住居跡の床土除去を開始する。SI04・05・09・12・13・16・17住居跡セクション実測。
- 6/7 住居跡床土除去調査の継続。SI03・04・09・19・20・21・22・23・24住居跡床土除去。SI01住居跡の床土除去を開始する。SI02・03・18・19・20住居跡セクション実測。SI05・08・10住居跡の遺物分布図実測。
- 6/8 住居跡床土除去調査の継続。SI01・09・14・16・20・21・22・23・24住居跡床土除去。SI26・27・28住居跡床土除去を開始する。SI04・06・11住居跡の遺物分布実測。
- 6/9 降雨のため調査を中止する。
- 6/10 住居跡床土除去調査の継続。SI01・02・03・05・14・19・20・21・23・24住居跡床土除去。SI25住居跡床土除去を開始する。SI11・12・13・14住居跡の遺物分布実測。
- 6/13 住居跡床土除去調査の継続。SI01・02・03・20・21・23・27・28住居跡床土除去。SI29・30・35住居跡の床土除去を開始する。SI15・16・17・18・19住居跡出土遺物分布実測。
- 6/14 降雨のため調査を中止する。
- 6/15 住居跡床土除去調査の継続。SI01・02・03・20・21・22・23・27・28・29・30・35住居跡床土除去。SI04・05住居跡完掘する。
- 6/16 住居跡床土除去調査の継続。SI01・02・03・20・21・22・27・28・29・30・35住居跡のセクションベルトを除き、床面・壁面の精査。新たにSI13住居跡の床土除去を開始する。SI04住居跡の全景写真撮影をおこなう。SI08・11・12・18住居跡完掘する。
- 6/17 住居跡床土除去調査の継続。SI21・22・

- 23・27・29・30・31 住居跡のセクションベルトを除き、床面の精査。また SI18 住居跡の竈実測。SI02・03・10・11 住居跡完掘する。SI06 住居跡平面図作成。
- 6/20 住居跡床土除去調査の継続。SI20・21・22・23・27・28・29・30・31・35 住居跡床土除去。
- 6/21 住居跡床土除去調査の継続。SI20・21・22・23・27・28・29・30・31・35 住居跡の床土除去。SI32・33・34 住居跡の床土除去を開始する。SI01・09・12・13・14 住居跡完掘する。
- 6/22 住居跡床土除去調査の継続。SI20・22・23 住居跡の床土除去。SI21・26・27・28・29・31 住居跡のセクション実測。SI15・16・17 住居跡完掘する。
- 6/23 住居跡床土除去調査の継続。SI20・22・23・24・30・32・33・34・35 住居跡の床土除去。SI22 住居跡のセクション実測。
- 6/24 住居跡床土除去調査の継続。SI20・22・23・24・30・32・33・34・35 住居跡の床土除去。
- 6/27 住居跡床土除去調査の継続。SI22・31・32・33・34・35 住居跡の床土除去。SI22・23・24・25 住居跡のセクション実測。SI10 住居跡は床面下に新たな床面を確認し、再度調査を継続する。
- 6/28 降雨のため調査を中止する。周辺整備。
- 6/29 住居跡床土除去調査の継続。SI22・28・31・33・34 住居跡の床土除去。SI36・37・38・39 住居跡の床土除去を新たに開始する。SI20 住居跡の遺物分布。
- 6/30 住居跡床土除去調査の継続。SI10・22・26・27・28・29・34・36・37・38・39 住居跡の床土除去。SI30・32・33・34 住居跡のセクション実測。
- 7/1 住居跡床土除去調査の継続。SI10・22・26・27・28・29・34・36・37・38 住居跡床土除去。SI40・41・42 住居跡の床土除去を新たに開始する。
- 7/4 住居跡床土除去調査の継続。SI32・33・34・36・37・38・39・40・41・42 住居跡の床土除去。SI15・16・17 住居跡完掘する。
- 7/5 住居跡床土除去調査の継続。SI32・36・37・38・39・40・41・42 住居跡の床土除去。SI44・45 住居跡の床土除去を開始する。SI20・22・23 住居跡完掘する。
- 7/6 住居跡床土除去調査の継続。SI33・36・37・38・45 住居跡の床土除去。SI10 住居跡床面下層の調査。SI35 セクション実測。
- 7/7 住居跡床土除去調査の継続。SI10B・34・36・38・44・45 住居跡床土除去。SI43・46 住居跡の床土除去を新たに開始する。SI21・22・23 住居跡遺物分布実測。SI24・25 住居跡完掘する。
- 7/8 住居跡床土除去調査の継続。SI10 B・33・36・39・45・46 住居跡の床土除去。SI26・27・28・29・30 住居跡出土遺物分布実測。SI24・25 住居跡完掘する。SI01 住居跡重複関係の精査。
- 7/11 住居跡床土除去調査の継続。SI01 B・10 B・33・36・39・40・44・45 住居跡の床土除去。SD01 溝の床土除去を開始する。SI30・32 住居跡完掘する。
- 7/12 住居跡床土除去調査の継続。SI36・37・39・40・41・42・43 住居跡、SD01 溝の床土除去。SI01 B・10 B 住居跡床面下層の調査。SI36・37・38 セクション実測。SI31・32・33 住居跡出土遺物分布実測。
- 7/13 住居跡床土除去調査の継続。SI32・36・37・40・42・43 住居跡床土除去。SI30・33・34 住居跡の完掘する。SI34・35 住居跡遺物分布実測。
- 7/14 住居跡床土除去調査の継続。SI32・36・37・42・43・46 住居跡の床土除去。SI08・11・12・13・14・15・16 住居跡平面測量。SI05・06・07・08・09・10・12 住居跡全景写真撮影。
- 7/15 住居跡、溝床土除去調査の継続。SI32・37・40・43 住居跡、SD01 溝の床土除去。SK01・02・03・04・05 土坑の床土除去を新たに開始する。SI35 住居跡完掘する。SI17・18・19・20・21・22 住居跡平面測量。SI13・14・15・16・17・18・19 住居跡全景写真撮影。

- 7/16 住居跡、土坑床土除去調査の継続。SI32・33・34・35・36・37・38・39・40・41・42住居跡、SK04・05土坑の床土除去。SK01・02・03土坑のセクション実測。
- 7/18 住居跡、土坑床土除去調査の継続。SI32・33・34・36・37・39・40・41・42・43住居跡、SK04・05土坑の床土除去。SI23・24・25・26・27・28住居跡平面測量。SI20・21・22・24・25・26・27住居跡全景写真撮影。
- 7/19 住居跡、土坑床土除去調査の継続。SI32・37住居跡、SK04・05土坑の床土除去。SI29・30・31・32・33・34住居跡平面測量。SI28・29・30・31・32・33・34住居跡全景写真撮影。
- 7/20 住居跡、土坑床土除去調査の継続。SI35・37・40住居跡、SK05土坑の床土除去。SK06・07土坑の床土除去を開始する。SI36・38・41・42・43・44住居跡出土遺物分布実測。
- 7/21 住居跡、土坑床土除去調査の継続。SI32・37住居跡、SK04・05・06・07土坑の床土除去。SK08土坑の床土除去を開始する。SI41・42・43・44住居跡セクション実測。SK04・05・06・07土坑セクション実測。
- 7/22 住居跡、土坑床土除去調査の継続。SI32・37住居跡、SK04・05・06・07土坑の床土除去。SK08土坑の床土除去を開始する。SI45・46住居跡セクション実測。SI43・44住居跡出土遺物分布実測。
- 7/25 住居跡、土坑床土除去調査の継続。SI32・37住居跡、SK05・06・07・08土坑の床土除去。SI35・36・38住居跡完掘する。SI39・40住居跡セクション実測。SI45・46住居跡出土遺物分布実測。
- 7/26 住居跡、土坑床土除去調査の継続。SI32・37住居跡、SK05・06土坑の床土除去。SI35・36・38・39・40・41住居跡平面測量。SI35・39・40住居跡全景写真撮影。
- 7/27 住居跡、土坑床土除去調査の継続。SI32・37住居跡、SK05・06土坑の床土除去。SI42・43・44・45・46住居跡平面測量。SI36・38・41住居跡全景写真撮影。遺構配置図作成。
- 7/28 住居跡、土坑床土除去調査の継続。SI32住居跡、SK06・08土坑の床土除去。SI37住居跡完掘する。SI41・42・43住居跡全景写真撮影。遺構配置図作成。
- 7/29 降雨のため調査中止。周辺整備。
- 8/1 土坑床土除去調査の継続。SK06・07・08土坑の床土除去。SI32住居跡完掘する。SI44・45・46住居跡全景写真撮影。遺構配置図作成。
- 8/2 土坑床土除去調査の継続。SK06・07・08土坑完掘する。SK01・02・03土坑全景写真撮影。遺構配置図作成。調査区の全面清掃作業。
- 8/3 SK04・05・06・07・08土坑全景写真撮影。SI33住居跡出土炭化物取り上げ。遺構配置図作成。調査区の全面清掃作業。第1・2段階終了する。
- 8/4 調査区航空写真撮影を実施する。
- 第3段階（住居跡貼床除去調査）8月5日～
- 8/5 住居跡貼床部除去調査を開始する。SI06・07・08・11・12・16・20住居跡の貼床部除去を開始する。
- 8/6 住居跡貼床部除去調査の継続。SI06・07・08・11・12・16・20住居跡の貼床部除去。SI10・17住居跡の貼床除去を開始する。SI07住居跡の貼床除去を終了する。
- 8/8 住居跡貼床部除去調査の継続。SI06・08・10・11・12・16・17・20住居跡の貼床部除去。SI05・14・18住居跡の貼床除去を開始する。SI05・06・11・16住居跡の貼床除去を終了する。
- 8/9 住居跡貼床部除去調査の継続。SI08・10・12・14・17・18・20住居跡の貼床部除去。SI01・02・03・09・13・21住居跡の貼床除去を開始する。SI14・18住居跡の竈調査を開始する。
- 8/10 住居跡貼床部除去調査の継続。SI01・02・03・09・13・21住居跡の貼床部除去。SI43・44・45住居跡の貼床除去を開始する。SI14・18住居跡の竈調査の継続。
- 8/11 住居跡貼床部除去調査の継続。SI43・44・45住居跡の貼床部除去。SI46住居跡の貼床

- 除去を開始する。SI01・02・03・04・05住居跡貼床除去を終了し、セクション実測を実施する。
- 8/12 調査区周辺整備。
- 8/13 調査区周辺整備。
- 8/15 調査区周辺整備。
- 8/19 住居跡貼床部除去調査の継続。SI43・44・45・46住居跡の貼床部除去。SI01・02・04住居跡貼床除去平面実測を実施する。
- 8/20 調査区周辺整備。
- 8/22 住居跡貼床部除去調査の継続。SI10・43・44・45・46住居跡の貼床部除去。SI36・38・39・42住居跡の貼床除去を開始する。SI12・14・17住居跡貼床除去を終了し、セクション実測を実施する。本日より調査区東部に確認トレンチを入れる。
- 8/23 住居跡貼床部除去調査の継続。SI10・43・44・45・46住居跡の貼床部除去。SI03・05・06住居跡貼床除去を終了し、セクション実測を実施する。調査区南部の表土層除去を開始する。
- 8/24 住居跡貼床部除去調査の継続。SI36・38・39・43・46住居跡の貼床部除去。SI29・33・35・37・40住居跡の貼床除去を開始する。SI08・10住居跡貼床除去を終了し、セクション実測を実施する。調査区南部の表土層除去を継続する。
- 8/25 住居跡貼床部除去調査の継続。SI29・33・35・37・38・39住居跡の貼床部除去。SI30・31・34住居跡の貼床除去を開始する。SI14住居跡貼床除去を終了し、セクション実測を実施する。調査区南部の表土層除去を継続し、住居跡1、土坑1を確認する。
- 8/26 住居跡貼床部除去調査の継続。SI35・37住居跡の貼床部除去。SI23・26・27・28・31・32住居跡の貼床除去を開始する。SI09・11・12・14・15・16住居跡貼床除去を終了し、セクション実測を実施する。調査区南部の表土層除去を継続する。
- 8/27 調査区南部の表土層除去を継続する。
- 8/29 住居跡貼床部除去調査の継続。SI21・23・27・35住居跡の貼床部除去。SI22・24住居跡の貼床除去を開始する。SI33・44・45・46住居跡貼床除去を終了し、セクション実測を実施する。調査区南部の表土層除去を継続する。
- 8/30 住居跡貼床部除去調査の継続。SI13・22・23・32・35・37住居跡の貼床部除去。SI15・19住居跡の貼床除去を開始する。SI17・18・20・21住居跡貼床除去を終了し、セクション実測を実施する。SI29住居跡電調査を開始する。調査区南部の表土層除去を継続する。
- 8/31 住居跡貼床部除去調査の継続。SI13・22・26・32・35・37住居跡の貼床部除去。SI30・34住居跡の貼床除去を開始する。SI22・23住居跡貼床除去を終了し、セクション実測を実施する。SI29住居跡電調査の継続。調査区南部の表土層除去を継続する。
- 9/1 住居跡貼床部除去調査の継続。SI22・26・32・35・37住居跡の貼床部除去。SI41・34住居跡の貼床除去を開始する。SI24・25・26・27・28住居跡貼床除去を終了し、セクション実測を実施する。SI01・02・03・04・05住居跡貼床除去平面実測。SI29住居跡電調査の継続。調査区南部の表土層除去を継続する。
- 9/2 住居跡貼床部除去調査の継続。SI22・26・32・35・37住居跡の貼床部除去。SI29・30・31・32・33住居跡貼床除去を終了し、セクション実測を実施する。SI06・07・08・09・10住居跡貼床除去平面実測。SI29住居跡電調査の継続。調査区南部の表土層除去継続。
- 9/2 住居跡貼床部除去調査の継続。SI22・26・32・35・37住居跡の貼床部除去。SI29・30・31・32・34住居跡貼床除去を終了し、セクション実測を実施する。SI06・07・08・09・10住居跡貼床除去平面実測。SI29住居跡電調査の継続。調査区南部の表土層除去継続。
- 9/3 調査区南部の表土層除去継続。
- 9/5 住居跡貼床部除去調査の継続。SI09・13・15・19住居跡の貼床部除去。SI35・36・37・38・39住居跡貼床除去を終了し、セクション実測を実施する。SI11・12・14・15・16住居跡貼

- 床除去平面実測。SI29住居跡竈調査の継続。調査区南部の表土層除去継続。
- 9/6 住居跡貼床部除去調査を終了。SI40・41・42・43住居跡貼床除去を終了し、セクション実測を実施する。SI17・18・19・20・21住居跡貼床除去平面実測。SI29住居跡竈調査の継続。調査区南部の表土層除去継続。
- 9/7 住居跡貼床部除去調査。SI22・23・24・25・26・27住居跡貼床除去平面実測、写真撮影。調査区南部の表土層除去を終了し、西部確認調査を開始する。
- 9/8 住居跡貼床部除去調査。SI28・29・30・31・32・34住居跡貼床除去平面実測、写真撮影。調査区西部確認調査の継続。
- 9/9 住居跡貼床部除去調査。SI35・36・37・38・39・40・41・42・43住居跡貼床除去平面実測、写真撮影。調査区西部確認調査の継続。
- 9/10 調査整理作業。
- 9/12 住居跡貼床部除去調査を終了する。SI07・08・09・10・11・12・13・14・15住居跡貼床除去写真撮影。調査区西部確認調査の継続。
- 第4段階（Ⅱ期下層の調査）9月13日～
- 9/13 Ⅱ期調査区の調査を開始する。土坑調査を開始する。SK12・13・14・15・16・17・18土坑床土除去。SK15・17土坑セクション実測。
- 9/14 降雨のため調査中止。周辺整備。
- 9/16 土坑床土除去調査の継続。SK12・14・15・16・17・18土坑床土除去。SK12土坑セクション実測・平面実測・写真撮影。SK14・15土坑セクション実測。
- 9/19 土坑床土除去調査の継続。SK13・14・15・16・17・18土坑床土除去。SK16・17・18土坑セクション実測・平面実測・写真撮影。
- 9/20 Ⅱ期遺構確認のため精査。
- 9/21 土坑床土除去調査の継続。SK13・14・15土坑床土除去。SK13・14・15土坑セクション実測・平面実測・写真撮影。
- 9/22 Ⅱ期遺構確認のため精査継続。
- 9/24 周辺整備。
- 9/26 Ⅱ期遺構調査を開始する。住居跡・土坑床土除去調査を開始する。SI47・48・49・50・51住居跡、SK19・20・21・22・23土坑セクションベルトを設定し、床土除去を行なう。SK21・22土坑セクション、平面実測。SK19・20・23土坑セクション実測。
- 9/27～29 降雨のため調査中止。周辺整備。
- 9/30 Ⅱ期遺構調査の継続。SI47・48・49・50・51住居跡床土除去。SK19・20・23土坑平面実測。SK19・20・21・22・23土坑写真撮影。
- 10/1 周辺整備。
- 10/3 Ⅱ期遺構調査の継続。SI47・48住居跡セクション実測、ベルト除去。SK24・25床土除去。
- 10/4 降雨のため調査中止。周辺整備。
- 10/5 Ⅱ期遺構調査の継続。SI47・48・49住居跡平面実測。SK24・25・26セクション実測、平面実測写真撮影。旧石器時代確認グリットを設定し、掘り下げ調査を開始する。
- 10/6 Ⅱ期遺構調査の継続。SI47・49住居跡写真撮影。SI50住居跡セクション実測。旧石器時代確認グリット調査の継続。
- 10/7 Ⅱ期遺構調査の継続。SI50・51住居跡の精査。旧石器時代確認グリッド調査の継続。
- 10/8 図面整理作業。
- 10/11～12 降雨のため調査中止。図面整理作業。
- 10/13 Ⅱ期遺構調査の継続。SI50住居跡写真撮影。SK27土坑セクション、平面実測、写真撮影。旧石器時代確認グリット調査の継続。
- 10/14 Ⅱ期遺構調査の継続。SI48住居跡精査。旧石器時代確認グリット調査の継続。P1GのⅩ層中よりナイフ形石器を検出する。
- 10/17 Ⅱ期遺構調査の継続。SI48住居跡精査。旧石器時代確認グリット調査の継続。P1Gを拡張し、調査を継続する。
- 10/18 研修のため調査を中止とする。
- 10/19 Ⅱ期遺構調査の継続。SI48住居跡精査。旧石器時代確認グリット調査の継続。P1G拡張区調査の継続。旧石器文化確認グリットP

- 3G, P4G, P5G, P6Gのセクション実測。
- 10/20 II期遺構調査の継続。SI48・50住居跡精査、拡張調査を行なう。旧石器時代確認グリット調査の継続。P1G拡張区調査の継続。旧石器文化確認グリットP7Gのセクション実測
- 10/21 II期遺構調査の継続。SI48・50住居跡精査、拡張調査を行なう。旧石器時代確認グリット調査の継続。P1G拡張区調査の継続。旧石器文化確認グリットP2Gのセクション実測。
- 10/22 図面整理作業。
- 10/24 II期遺構調査の継続。SI48住居跡出土遺物分布実測。SI51住居跡セクション実測。SK28・29・30土坑セクション実測。旧石器時代確認グリット調査の継続。P1G拡張区調査の継続。全体遺構配置図の作成。
- 10/25 II期遺構調査の継続。SI48・51住居跡写真撮影。SK31・32土坑セクション実測。SK28・29・30土坑平面実測、写真撮影。旧石器時代確認グリット調査の継続。P1G拡張区調査の継続。全体遺構配置図の作成。
- 10/26 II期遺構調査の継続。SI48・51住居跡平面実測。SK31・32土坑平面実測、写真撮影。旧石器時代確認グリット調査の継続。P1G拡張区調査の継続。
- 10/27 II期遺構調査の継続。SI48・51住居跡貼床部除去、セクション実測、貼床除去平面実測。旧石器時代確認グリット調査の継続。P1G拡張区セクション実測。
- 10/28 II期遺構調査の継続。SI51住居跡貼床部除去、セクション実測、貼床除去平面実測。旧石器時代確認グリット調査の継続。P1G拡張区写真撮影。
- 本日で調査を終了し、器材の撤収を行なう。



Fig.9 発掘風景

第Ⅲ章 旧石器時代の調査

第1節 旧石器時代の発掘調査

1. 調査の概要

今回調査対象となった萱田町川崎山遺跡の地形は、比高差がほとんどみられない平坦な台地が広がり、微高地あるいは谷頭等といった複雑な開折谷の入り込みはもちろん、台地上の起伏もなく、南北に流れをもつ東側の新川低地面へ急傾斜するのみである。本調査区域内の基盤は、下総層群である成田層が厚く堆積し地形面構成層をなし、その上位からローム層が堆積し、これを褐色土層群と現表土層が覆っている。なお、ローム層および褐色土層群各層厚は地震等の自然的要因や耕作等の人為的要因による影響はほとんどなく、ローム層より上位の各土層は、ほぼ良好な堆積状態を示している。

旧石器文化層確認のための調査は、ローム層上位の遺構検出終了後、遺構面を外して20ヵ所のグリッド(縦横2×2mの試掘坑)を設定して、立川ローム層下位まで調査した。その結果、調査区北西隅の第5グリッド(7P区)の下層から石器が出土したため、周囲を拡張し石器集中の範囲の検出にあたった。第5グリッドを中心に18㎡を拡張したが、わずか5m四方の範囲内にナイフ形石器を含む8点の石器集中地点(ユニット)を1ヵ所検出し、石器集中地点(ユニット1)と呼称した。また堅穴住居跡調査時の覆土中においても旧石器時代の遺物が3点、表採資料として4点出土している。

2. 遺跡の基本層序

本調査区における層序は、調査した20グリッドすべてでほぼ共通した土層堆積状態を示している。基本的には遺構検出面である立川ローム層直上(Ⅱ層)もしくは最上層(Ⅲ層)から立川ローム層の下位(X層)または立川ローム層を掘り抜き、武蔵野ローム層上面(XI層)までを確認した。ここでは表土層から立川ローム層まで14枚の土層に分層した。層厚は総じて表土層(Ⅰ層)が15~30cm。黒褐色土(Ⅱa層)・明褐色土(Ⅱb層)が15~20cmで、Ⅲ層以下X層までが立川ローム層で1.6~1.8mを測る。各確認グリッドでは若干の相違がみられるが、大きく3枚の鍵層が検出されている。まずV層は武蔵野台地における立川ローム層第1黒色帯にほぼ対比され、VI層とした明黄褐色ローム層はバブル型火山ガラスが包含されており、始良Tn火山灰(AT)と考えられている。この火山灰は鹿児島県の始良カルデラを供給源とし、今から2.1~2.2万年前に噴出したものである。さらにIX層は第2黒色帯に相当し、2もしくは3層に分層可能であるが、境界が明瞭に判断できないグリッドもある。なお、分層にあたっては千葉県文化財センターが八千代都市計画事業萱田特定土地区画整理事業にともない実施した萱田遺跡群の発掘調査結果および「下総台地における立川

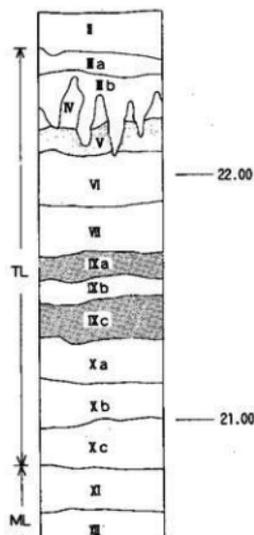


Fig.10 基本層序

ローム層の層序区分（高立・新田・渡辺1991）を参考とした。

以下発掘調査時における肉眼観察に基づく記載を行なっていきたい。

- I層 黒褐色腐食土層（10YR3/2）表土層。粒子はかなり細かいが、中には粗い粒子を含む。締まり、粘性に乏しく軟弱である。
- II a層 明褐色土層（7.5YR5/6）軟質でやや粘性を有する。粒子は密で締まりがある。遺跡全体に比較的良好に堆積しており、山林地帯ではよく発達するようである。なお、本層はいわゆる新期テフラ層と呼ばれている土層に相当するといわれている。
- II b層 黒褐色土層（10YR3/1）遺跡全体に均質的に堆積している。締まりに若干かけるが、粘性にとむ。遺物の包含は認められるものの、文化層として明瞭な時期決定は不可能である。なお、下層においてはIII層ソフトローム層が漸的に混じり、褐色土層（10YR4/4）となり境界が明瞭でない地点もある。
- III a層 黄褐色ローム層（10YR5/6）いわゆる立川ローム軟質部（ソフトローム層）の層中で色調の若干の相違によって二層に分離することができる地点がある。本遺跡では最も条件の良好なグリッドのみ分層が可能であった。本層は下層よりも明るい上層に相当し、遺跡全体を覆っており、二層に分層できない地点ではいずれもIII層ソフトローム層は本層に相当する。ソフト化によってやや締まりのなく、IV層との境界は明瞭である。
- III b層 褐色ローム層（7.5YR4/4）ソフトローム層下層に相当する。III a層よりやや暗い土層で、やはりソフト化によって締まりのない層で、スコリアは含まず、IV層との境界は明瞭であるが、かなり複雑な食い込みの状態がみられる。
- IV層 明褐色ローム層（10YR6/6）立川ローム硬質部（ハードローム層）に相当する。部分的にIII層に取り込まれ境界が明瞭なわりに層位として薄層である。赤色スコリア、黒色スコリアを含む。
- V層 黄褐色ローム層（10YR6/8）立川ローム層の第1黒色帯に相当する。IV層との境界は明瞭ではない。部分的に上層のIII層に食い込まれている。赤色スコリアや暗緑色スコリアを含む。締まりがあり、堅緻である。
- VI層 明黄褐色ローム層（10YR6/8）全体に堅く締まっており、均質である。始良丹沢火山灰（AT）が包含されている。ATはブロック状のものではなく、層中かなり拡散している。また赤色スコリア・暗緑色スコリアが多く包含している。
- VII層 黄褐色ローム層（10YR5/6）第2黒色帯上部に相当するもので、ATの包含がみられることから、比較的明るい土層を呈している。また赤色スコリア・黒色スコリアを多く含む。なお、下層のIX層との境界は明瞭である。
- IX a層 暗褐色ローム層（10YR3/3）第2黒色帯下部の上半に相当するが、上位各層の境界が不安定な分、本層では明瞭に分層できる。赤色・黒色・暗緑色スコリアおよび炭化粒子も包含され、締まりがあり、粘性もある。
- IX b層 濃い黄褐色ローム層（10YR4/3）第2黒色帯下部の間層である。本層が検出できないグリッドも多い。赤色スコリア・黒色スコリアの包含は多く、暗緑色スコリアは少ない。やや軟質で、粘性がある。
- IX c層 暗褐色ローム層（10YR3/4）第2黒色帯下部の下半に相当する。赤色スコリア・暗緑色スコリアがやや多く、黒色スコリアは若干少ない。締まりがあり、粘性もある。X層との境界は明瞭である。
- X a層 黄褐色ローム層（10YR5/8）わずかに赤色スコリア、黒色スコリアを包含する。硬質で、締

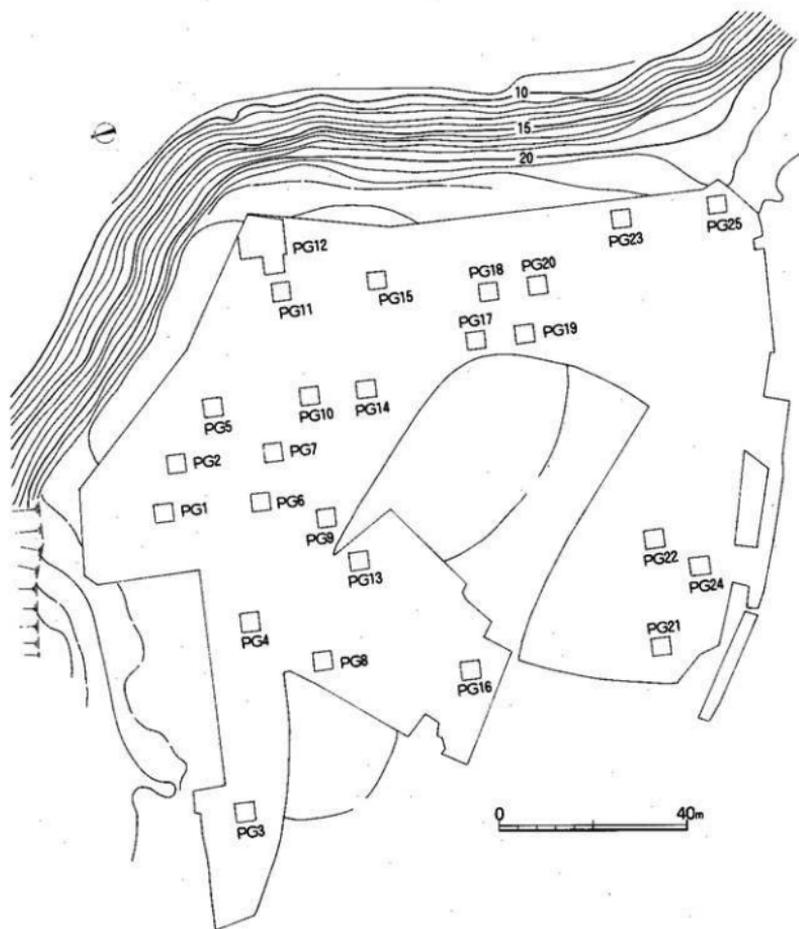


Fig.11 旧石器時代確認グリッド配置図

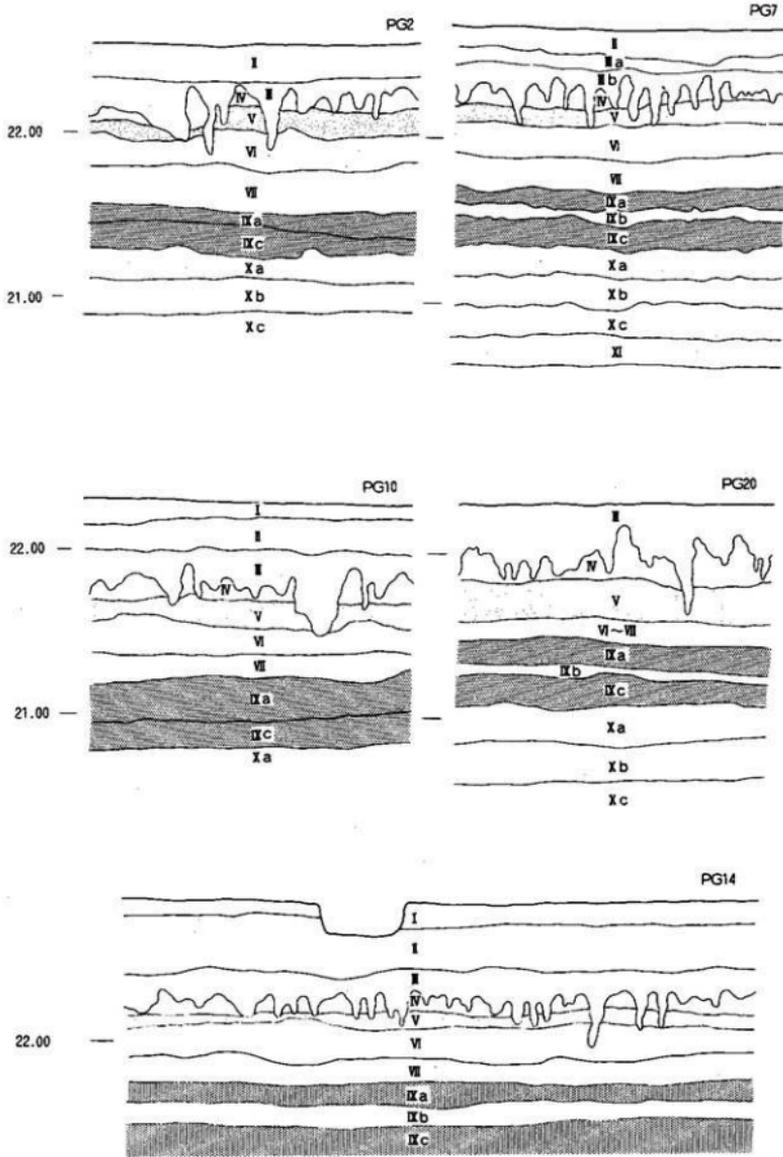


Fig.12 旧石器時代確認グリッド土層断面図 0 1m

まりがある。下層の境界はやや不明瞭である。

X b層 黄褐色ローム層 (10YR5/8) 上層よりも比較してやや暗いローム層である。わずかに赤色スコリアを包含する。締まりがあり、堅緻である。黒色帯の一つの意見もある。

X c層 黄褐色ローム層 (10YR5/6) 立川ローム層最下層に相当する。スコリアの包含が確認できないが、上層にはわずかに拡散したスコリアがみられる程度である。粘性があり、締まりがある。

XI層 灰褐色ローム層 (10YR6/1) 武蔵野ローム層最上層に相当する。粘性にとむ。締まりがある。

第2節 旧石器時代の出土遺物

1. 概観

今回の調査において、上層遺構の調査終了後、旧石器時代の文化層を確認するため2×2mのグリッドを20カ所設定し、立川ローム層下位まで確認した。その結果、石器集中地点1カ所を検出した。ここは調査区の北東隅に位置し、第2黒色帯下部のIX層を中心とした石器群で、ナイフ形石器・石核・二次加工のある剥片を含む総出土点数わずか8点の小規模ユニットである。その他、弥生時代の堅穴住居跡である第37号住居跡の覆土中より細石核を含む石器が3点出土し、表採資料として石核のほか剥片等4点を確認している。なお、石器集中地点(ユニット1)に伴う遺構については検出できなかった。

2. 石器集中地点(ユニット1)出土の石器 (Fig. 14・15)

出土状況 本ユニットは調査区北西隅の台地縁辺に位置し、6-P区を中心に6-O区にかけて検出され、現標高は21.30～21.80mである。石器の分布範囲は南北2.5m、東西5mにおよび、とくに偏ることはなく、出土石器の総点数8点と小規模な石器集中地点(ユニット)である。なお、これらの出土層位はばらつきがみられ、VI～VIII層下面1点、IX a層4点、IX c層2点、X層上面1点で、最大50cmの標高差があるが、総じてIX層に集中しており、当時の生活面はIX層中位面と考えたい。

石器組成 ナイフ形石器1点、二次加工のある剥片2点、石核1点、剥片4点の合計8点の石器が出土した。

1は不定形のナイフ形石器である。神津島産黒曜石を利用している。肥厚する幅広の縦長剥片を素材とし、左側縁と裏面右側縁に細部加工が部分的に施されている。また打点部を基部部として用いている。先端部は折損ではなく、未調整のままである。長さ4.23cm、幅3.33cm、厚さ1.17cm、重さ14.21gを測る。IX c層上面より出土。2は二次加工のある剥片である。神津島産黒曜石を利用している。尖頭状の縦長剥片を素材とし、右側縁に調整が加えられている。長さ3.82cm、幅2.49cm、厚さ0.77cm、重さ6.65gを測る。IX c層下面より出土。3は安山岩製の二次加工のある剥片である。横長剥片を使用し、素材剥片の打点部を残置する。略三角形を呈し、右側縁に調整を加えている。長さ3.74cm、幅3.96cm、厚さ0.99cm、重さ11.72gを測る。IX a層下面より出土。4は珪質頁岩製の石核である。円礫を利用し、一面に礫面を残置する。表面には分割面を設け打面としている。長さ4.99cm、幅5.01cm、厚さ3.22cm、重さ68.12gを測る。IX c層下部より出土。5～8は剥片である。5は安山岩製の剥片。横長剥片の主要剥離面を残し、また打点部を残置している。長さ1.60cm、幅2.76cm、厚さ0.30cm、重さ3.29gを測る。IX a層上部より出土。6は神津島産黒曜石製の剥片。縦長剥片で、礫面を残置している。長さ2.07cm、幅1.30cm、厚さ0.64cm、重さ2.54gを測る。IX a層上面より出土。7は神津島産黒曜石製の砕片。縦長剥

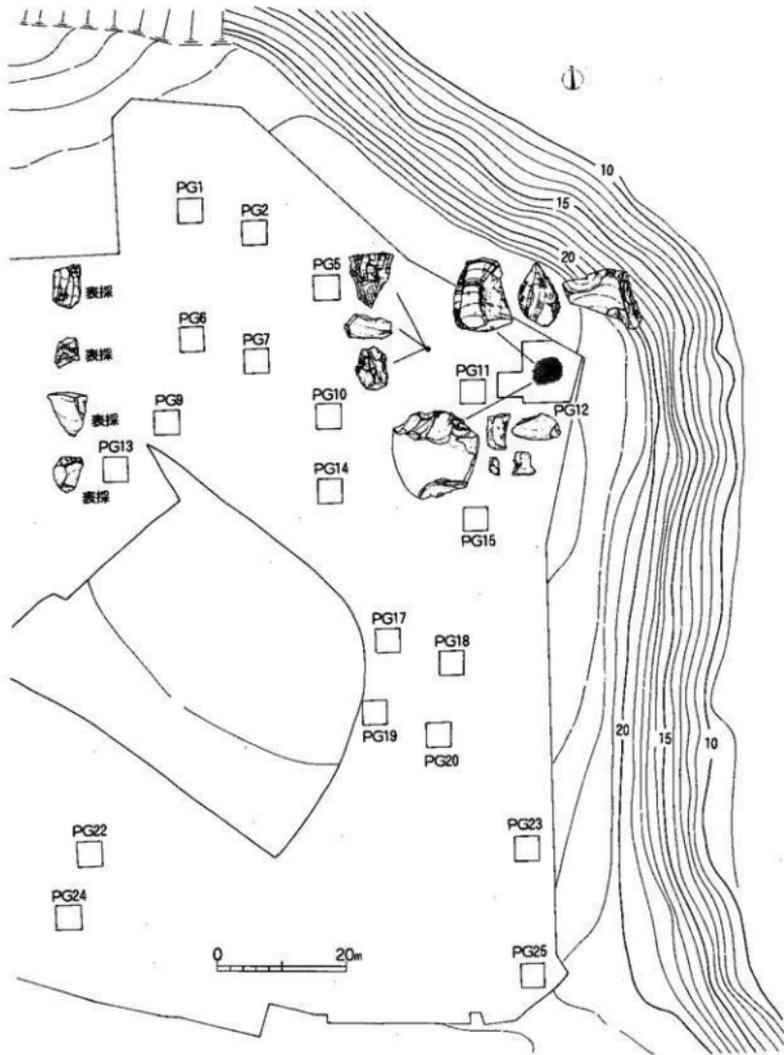


Fig.13 石器出土分布図

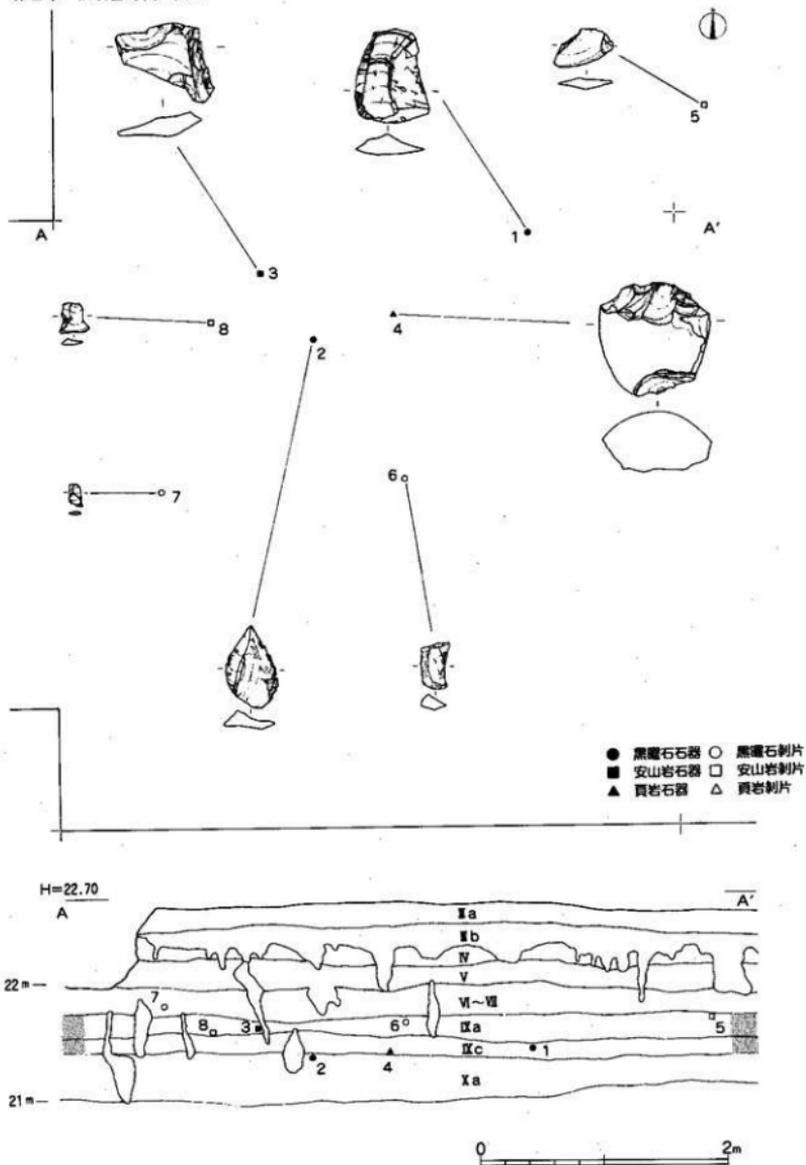


Fig.14 PG12 出土石器分布図

片で、主要剥離面を残している。長さ1.03cm、幅0.55cm、厚さ0.14cm、重さ0.35gを測る。Ⅶ層より出土。8も神津高産黒曜石製の剥片。縦長剥片で、打点部を残置している。長さ1.35cm、幅1.29cm、厚さ0.22cm、重さ0.62gを測る。ⅠA層下部より出土。

3. その他の石器 (Fig.16)

旧石器文化層以外から出土した石器を一括する。1～3は第37号住居跡 (SI37) 覆土中より出土。1は細石刃石核である。チャート製で、打面が大きな剥離面 (単剥離面) により構成されている石核で、三角錐の形態をもつ。打面は小さな剥離面からなる調整打面で、表面を除く正面および両側面に打面からの剥離面が残される、確認面では9条の細石刃剥離面がある。細石刃剥離作業面の長さ1.75cmを測り、打面角度は70°前後をなす。なお、裏面、右側縁と正面下位は剥離作業に伴う自然剥離である。高さ3.16

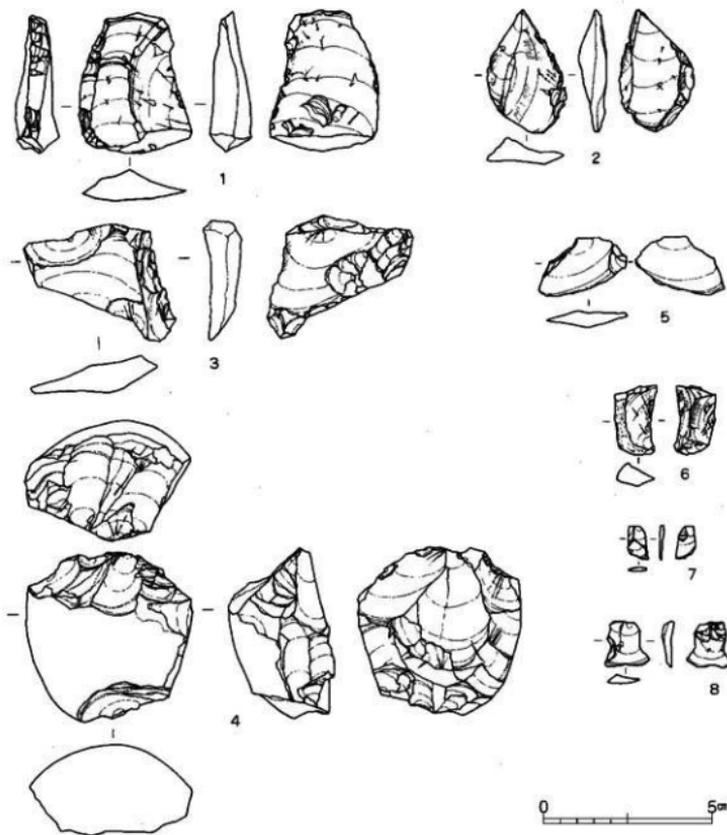


Fig.15 PG12 出土石器

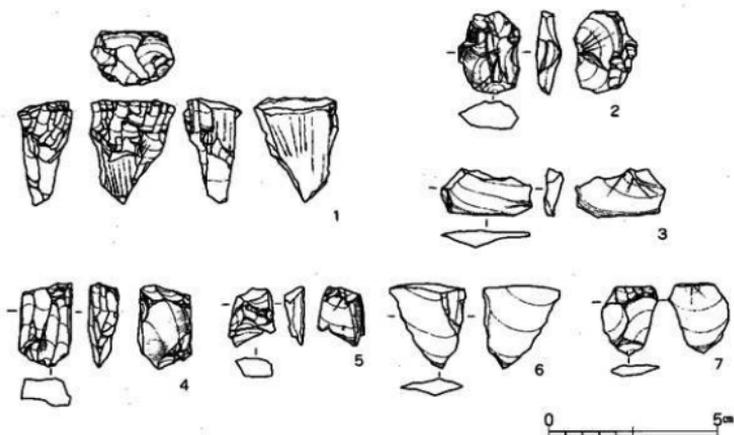


Fig.16 竪穴住居跡出土および表採石器

cm、最大幅2.48cm、重さ6.85gを測る。2は楔形石器である。黒曜石製で、横長剥片を素材としている。右側縁に打面を残し上下端に調整剥離が認められる。長さ2.43cm、幅1.79cm、厚さ0.74cm、重さ4.02gを測る。3は珪質頁岩製の剥片。横長剥片で、打面を上端に残置している。長さ1.38cm、幅2.77cm、厚さ0.54cm、重さ2.15gを測る。4～7は表採資料である。4は黒曜石製の石核である。正面が四角形に近い薄い角錐状を呈する。表面のみ剥片剥離作業面がみられ、上端は調整打面をもち、下位打面はほとんど残っていない。高さ2.58cm、最大幅1.63cm、厚さ0.90cm、重さ2.82gを測る。5～7は加工痕や使用痕のない剥片類である。5は黒曜石製で、縦長剥片である。上端に打面が残る。長さ1.72cm、幅1.38cm、厚さ0.70cm、重さ1.62gを測る。6は安山岩製の縦長剥片。打面位置に自然面をそのまま残置している。長さ2.56cm、幅2.27cm、厚さ0.48cm、重さ2.12gを測る。7も安山岩製の縦長剥片。やはり打面位置に自然面を残している。長さ2.07cm、幅1.70cm、厚さ0.29cm、重さ1.65gを測る。(小川 和博)

第IV章 縄紋時代の調査

第1節 遺構

1. 土坑 (Fig.17)

本遺跡の調査において、縄紋時代の遺構として考えられる土坑が13基検出された。いずれも出土遺物はなく、時期を決定する材料には欠けるものの、その形状から判断して縄紋時代に属するものと考えて大きな誤りはないと思われる。

平面の形態から分類すると、大きく2種類に分けることができ、隅丸長方形のAタイプと長楕円形のBタイプである。さらにAタイプは深度によって分けることができ、Bタイプはいわゆる「陥し穴」状形態を呈する土坑で、なかでもTピットと呼称されている溝型である。これらは遺跡全体に満遍なく分布しているが、Bタイプである溝型陥し穴は1基を除き台地北西側にまとまり、台地縁辺部に向かって構築されている。

第4号土坑 (SK04) (Fig.18)

位置 本跡は、調査区北端部S-I区に位置する。

形態 平面形は隅丸長方形A-1タイプである。上面長軸183cm、短軸128cm、下面長軸146cm、短軸69cm、深さ196cmを測る。長軸方向はN-60°-Eを指す。床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は9層に分けることができる。

1層	7.5YR3/1	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
2層	7.5YR3/2	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
3層	7.5YR2/3	極暗褐色土	少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
4層	7.5YR2/2	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
5層	7.5YR3/3	暗褐色土	少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
6層	7.5YR4/6	褐色土	少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
7層	7.5YR5/8	明褐色土	少量のローム粒子・ロームブロックを含み、締まりがある。
8層	7.5YR2/1	黒色土	微量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
9層	7.5YR1.7/1	黒色土	微量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。

覆土中より遺物の出土はなかった。

第5号土坑 (SK05) (Fig.18)

位置 本跡は、調査区北側6-L区に位置する。

形態 平面形は長楕円形Bタイプである。上面長軸192cm、短軸76cm、下面長軸139cm、短軸9cm、深さ172cmを測る。長軸方向はN-26°-Wを指す。床面は狭く、若干の起伏をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面南端に39×38cm、深さ31cmの円形ピットを付設する。

覆土は4層に分けることができる。

1層	7.5YR3/1	黒褐色土	多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
2層	7.5YR3/2	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
3層	7.5YR2/2	黒褐色土	少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。

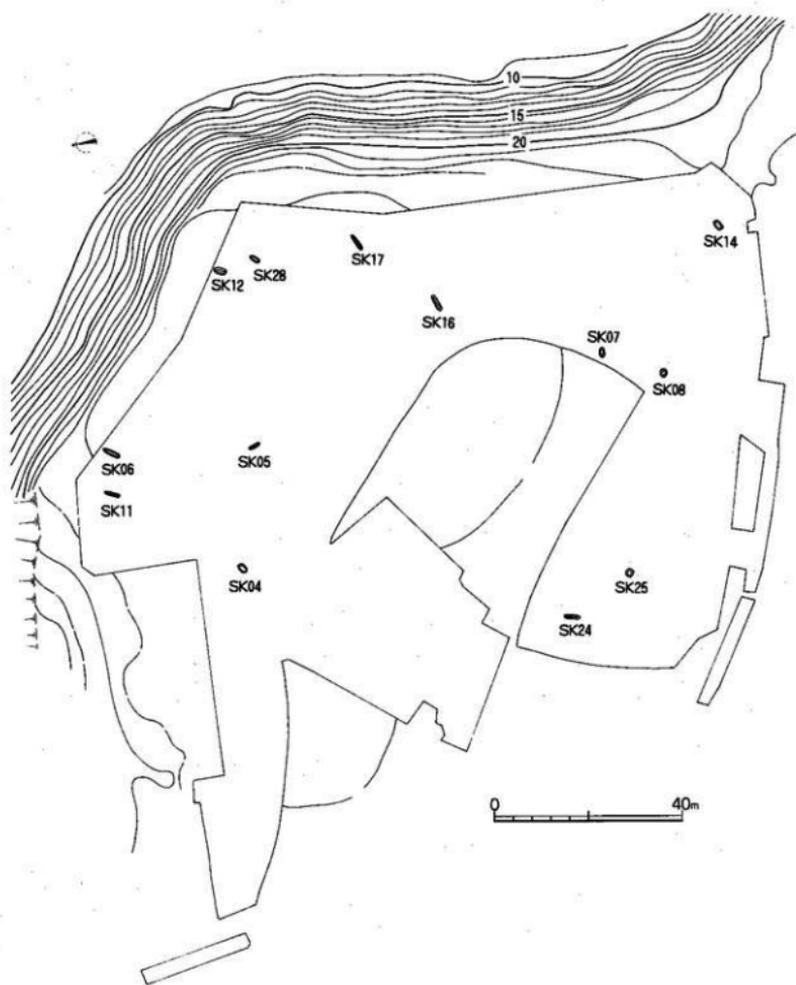


Fig.17 縄紋時代土坑分布図

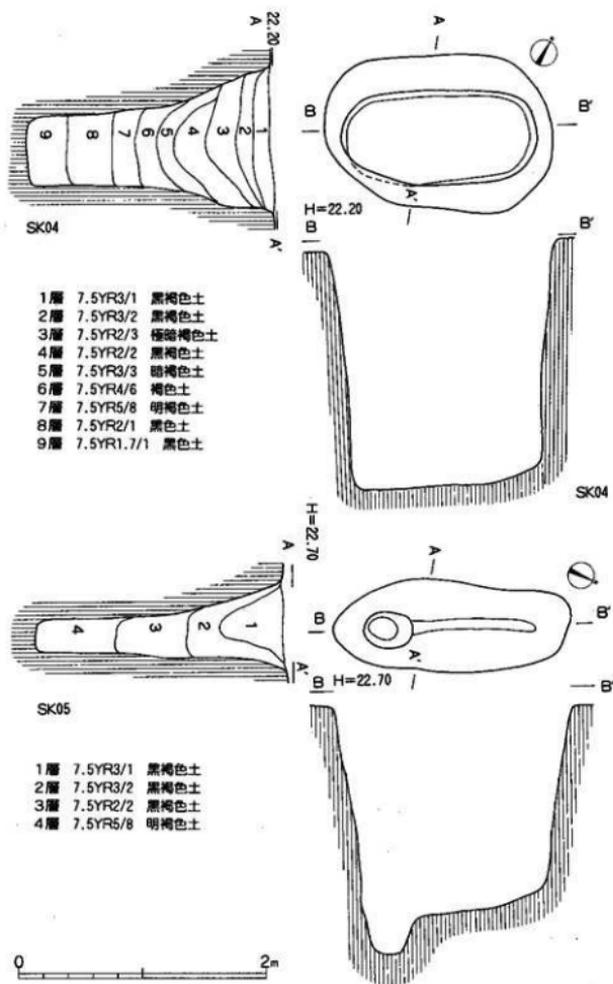


Fig.18 縄紋土坑(1) (SK04.05)

4層 7.5YR5/8 明褐色土 多量のローム粒子・ロームブロックを含み、締まりがある。
 覆土中より遺物の出土はなかった。

第6号土坑 (SK06) (Fig.19)

位置 本跡は、調査区北端部3-L区に位置する。

形態 平面形は長楕円形Bタイプである。上面長軸373cm、短軸59cm、下面長軸383cm、短軸41cm、深さ143cmを測る。長軸方向はN-38°-Eを指す。床面は狭く、起伏をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、長軸方向南西側が大きくオーバーハングする。

覆土は5層に分けることができる。

- 1層 7.5YR3/1 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
- 2層 7.5YR3/4 暗褐色土 多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
- 3層 7.5YR4/6 暗褐色土 多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
- 4層 7.5YR5/6 明褐色土 多量のローム粒子・ロームブロックを含み、締まりがある。

覆土中より遺物の出土はなかった。

第7号土坑 (SK07) (Fig.19)

位置 本跡は、調査区南東部13-M区に位置する。

形態 平面形は隅丸長方形A-1タイプである。上面長軸143cm、短軸78cm、下面長軸107cm、短軸53cm、深さ257cmを測る。長軸方向はN-10°-Eを指す。床面は平坦で、壁はほぼ垂直気味に立ち上がる。また床面は西側に小さくオーバーハングする。

覆土は深度が深いため、底面まで調査ができず、上面から2mまで分層し5層に分けた。したがって下層については観察していない。

- 1層 7.5YR3/1 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
- 2層 7.5YR3/4 暗褐色土 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
- 3層 7.5YR2/3 極暗褐色土 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
- 4層 7.5YR3/4 暗褐色土 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
- 5層 7.5YR5/8 明褐色土 多量のローム粒子・ロームブロックを含み、締まりがある。

覆土中より遺物の出土はなかった。

第8号土坑 (SK08) (Fig.19)

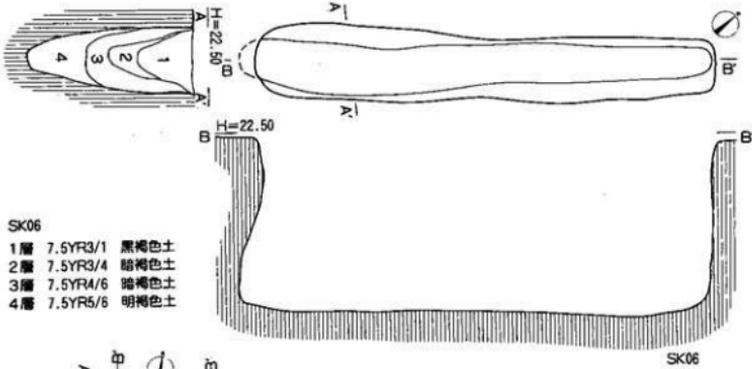
位置 本跡は、調査区南東部14-M区、15-M区に位置する。

形態 平面形は隅丸長方形A-2タイプである。上面長軸160cm、短軸94cm、下面長軸128cm、短軸62cm、深さ113cmを測る。長軸方向はN-47°-Wを指す。床面は平坦で、壁はほぼ垂直気味に立ち上がる。

覆土は6層に分けることができる。

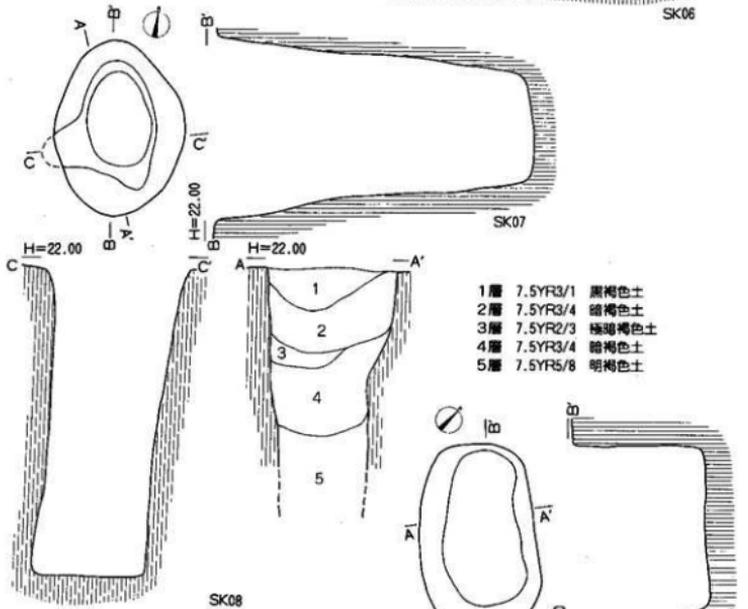
- 1層 7.5YR3/1 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
- 2層 7.5YR2/1 黒色土 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
- 3層 7.5YR2/3 極暗褐色土 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
- 4層 7.5YR4/4 褐色土 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
- 5層 7.5YR5/8 明褐色土 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
- 6層 7.5YR5/8 明褐色土 多量のローム粒子・ロームブロックを含み、締まりがある。

覆土中より遺物の出土はなかった。

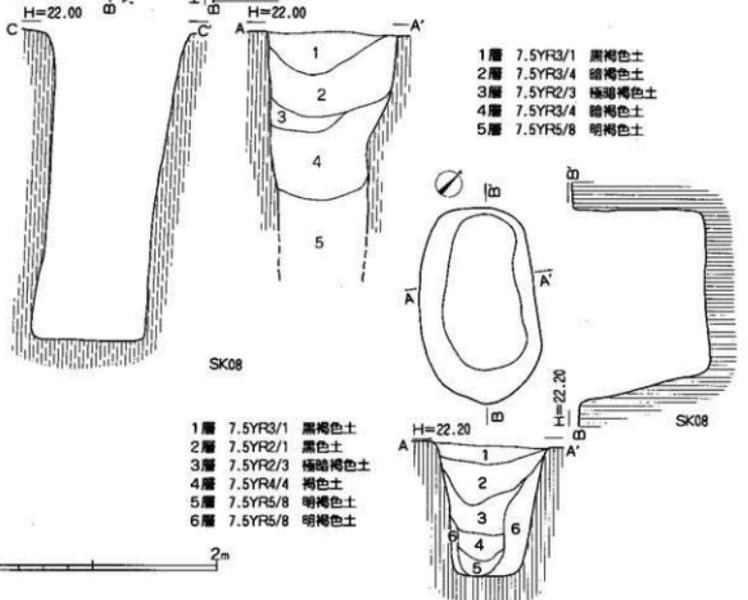


SK06

- 1層 7.5YR3/1 黑褐色土
- 2層 7.5YR3/4 暗褐色土
- 3層 7.5YR4/6 暗褐色土
- 4層 7.5YR5/6 明褐色土



- 1層 7.5YR3/1 黑褐色土
- 2層 7.5YR3/4 暗褐色土
- 3層 7.5YR2/3 極暗褐色土
- 4層 7.5YR3/4 暗褐色土
- 5層 7.5YR5/8 明褐色土



- 1層 7.5YR3/1 黑褐色土
- 2層 7.5YR2/1 黑色土
- 3層 7.5YR2/3 極暗褐色土
- 4層 7.5YR4/4 褐色土
- 5層 7.5YR5/8 明褐色土
- 6層 7.5YR5/8 明褐色土



Fig.19 縄紋土坑(2) (SK06,07,08)

第11号土坑 (SK11) (Fig.20)

位置 本跡は、調査区北端部3-K区に位置する。

形態 平面形は長楕円形Bタイプである。上面長軸263cm、短軸95cm、下面長軸271cm、短軸44cm、深さ185cmを測る。長軸方向はN-81°-Eを指す。床面は狭く、起伏をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、長軸方向東側が大きくオーバーハングする。なお、第40号住居跡(S140)によって切られている。

覆土は6層に分けることができる。

- | | | | |
|----|----------|-------|---------------------------|
| 1層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 2層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 3層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 4層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | 多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 5層 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 6層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | 多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |

覆土中より遺物の出土はなかった。

第12号土坑 (SK12) (Fig.20)

位置 本跡は、調査区北西端部6-P区に位置する。

形態 平面形は隅丸長方形A-1タイプである。上面長軸260cm、短軸147cm、下面長軸182cm、短軸89cm、深さ275cmを測る。長軸方向はN-42°-Eを指す。床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。なお、北西側に新期の土坑が重複しているが、さらに南側に第35号住居跡(S135)によって切られている。

覆土は7層に分けることができ、さらに新期土坑は2層に分けることができる。

SK12-a

- | | | | |
|----|----------|-------|---------------------------|
| 1層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 2層 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土 | 微量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 3層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 微量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 4層 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色土 | 微量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 5層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 6層 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色土 | 微量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |

SK12-b

- | | | | |
|----|----------|--------|---------------------------|
| 7層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 微量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 8層 | 7.5YR5/4 | いおい褐色土 | 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |

覆土中より遺物の出土はなかった。

第14号土坑 (SK14) (Fig.21)

位置 本跡は、調査区南東端部16-O区に位置する。

形態 平面形は隅丸長方形A-2タイプである。上面長軸233cm、短軸147cm、下面長軸121cm、短軸67cm、深さ103cmを測る。長軸方向はN-87°-Eを指す。床面は平坦で、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。

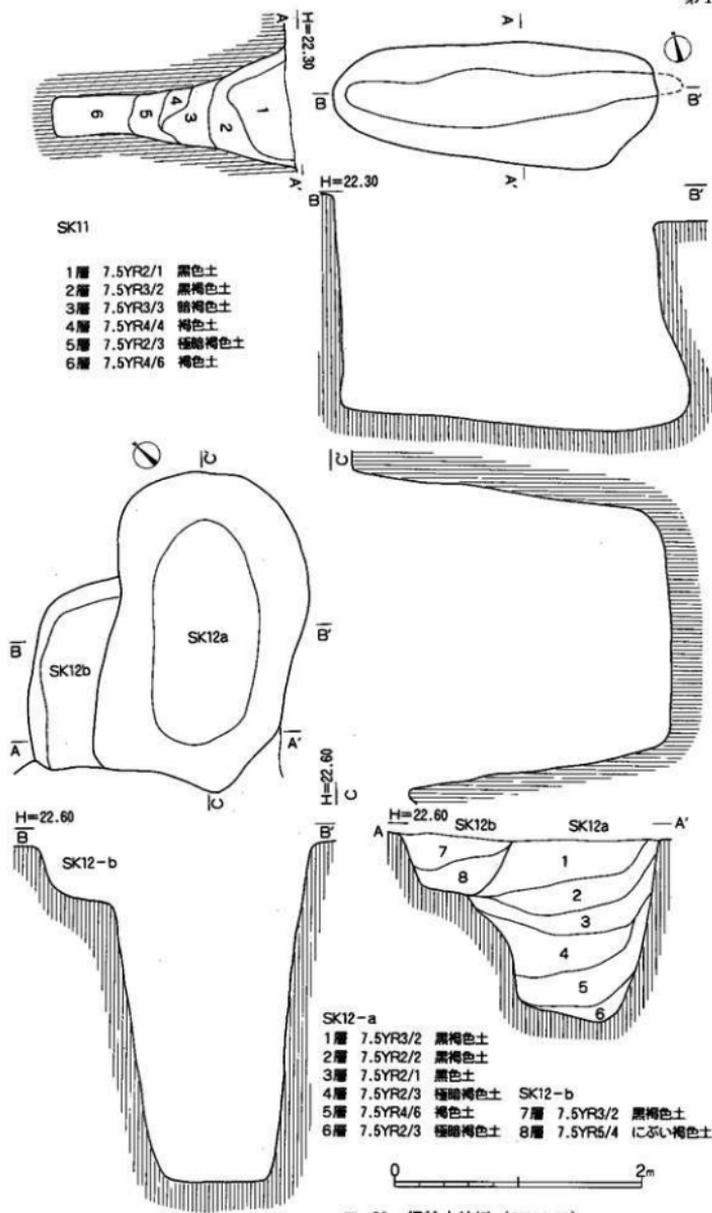


Fig.20 縄紋土坑(3) (SK11,12)

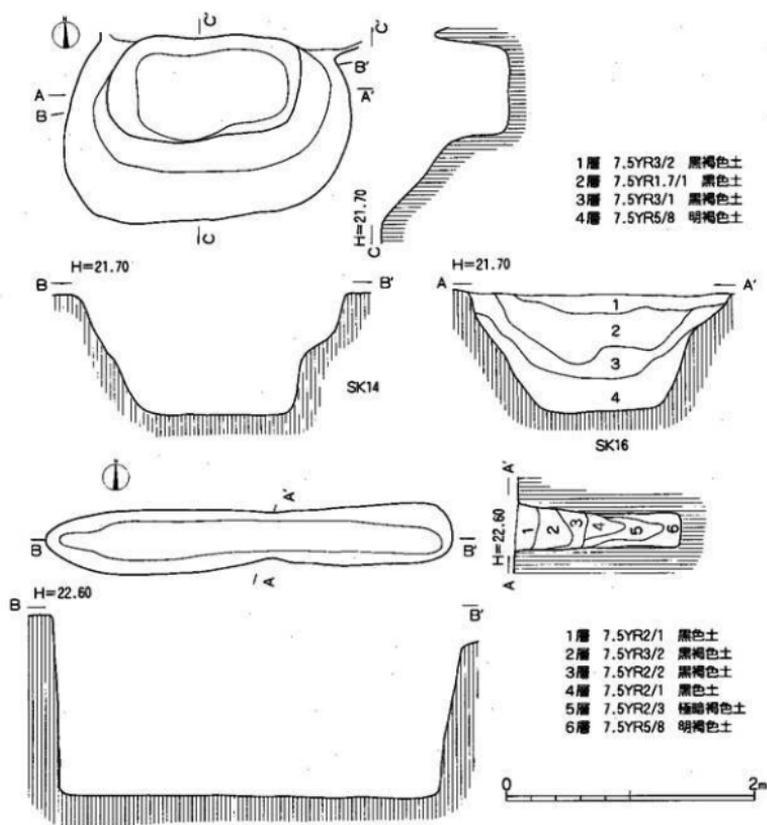


Fig.21 縄紋土坑(4) (SK14,16)

覆土は4層に分けることができる。

- 1層 7.5YR3/2 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
- 2層 7.5YR1.7/1 黒色土 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
- 3層 7.5YR3/1 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
- 4層 7.5YR5/8 明褐色土 多量のローム粒子・ロームブロックを含み、締まりがある。

覆土中より遺物の出土はなかった。

第16号土坑 (SK16) (Fig.21)

位置 本跡は、調査区東端部 10-N 区に位置する。

形態 平面形は長楕円形 B タイプである。上面長軸330cm、短軸51cm、下面長軸310cm、短軸33cm、深さ156cmを測る。長軸方向は N-77°-E を指す。床面は狭く、起伏をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は6層に分けることができる。

- | | | | |
|----|----------|-------|---------------------------|
| 1層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 2層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 3層 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 4層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 5層 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 6層 | 7.5YR5/8 | 明褐色土 | 多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |

覆土中より遺物の出土はなかった。

第17号土坑 (SK17) (Fig.22)

位置 本跡は、調査区東端部 9-P 区に位置する。

形態 平面形は長楕円形 B タイプである。上面長軸358cm、短軸(196cm)、下面長軸305cm、短軸17cm、深さ179cmを測る。長軸方向は N-73°-E を指す。床面は狭く、起伏をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、長軸東西方向が大きくオーバーハングする。なお、第29号住居跡 (SI29) によって切られている。

覆土は古墳時代の住居跡によって切られていたため、観察が不可能であった。

覆土中より遺物の出土はなかった。

第24号土坑 (SK24) (Fig.22)

位置 本跡は、調査区南西端部 12-G 区に位置する。

形態 平面形は長楕円形 B タイプである。上面長軸284cm、短軸62cm、下面長軸278cm、短軸30cm、深さ66cmを測る。長軸方向は N-16°-E を指す。床面は狭く、起伏をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は4層に分けることができる。

- | | | | |
|----|----------|-------|---------------------------|
| 1層 | 7.5YR3/1 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 2層 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色土 | 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 3層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 微量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 4層 | 7.5YR2/2 | 褐色土 | 多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |

覆土中より遺物の出土はなかった。

第25号土坑 (SK25) (Fig.23)

位置 本跡は、調査区南西部 13-H 区に位置する。

形態 平面形は隅丸長方形 A-1 タイプである。上面長軸183cm、短軸70cm、下面長軸140cm、短軸29cm、深さ308cmを測る。長軸方向は N-72°-W を指す。床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。なお、北側に新期の土坑が重複している。SK25-b は楕円形を呈し、120×140cm、深さ50cmを測る。

覆土は深度が深いため、底面まで調査ができず、上面から約2.1mまで分層し8層に分けた。したがって下層については観察していない。なお、1～4層までは新期土坑 SK25-b であり、5層以下が SK25-a 土

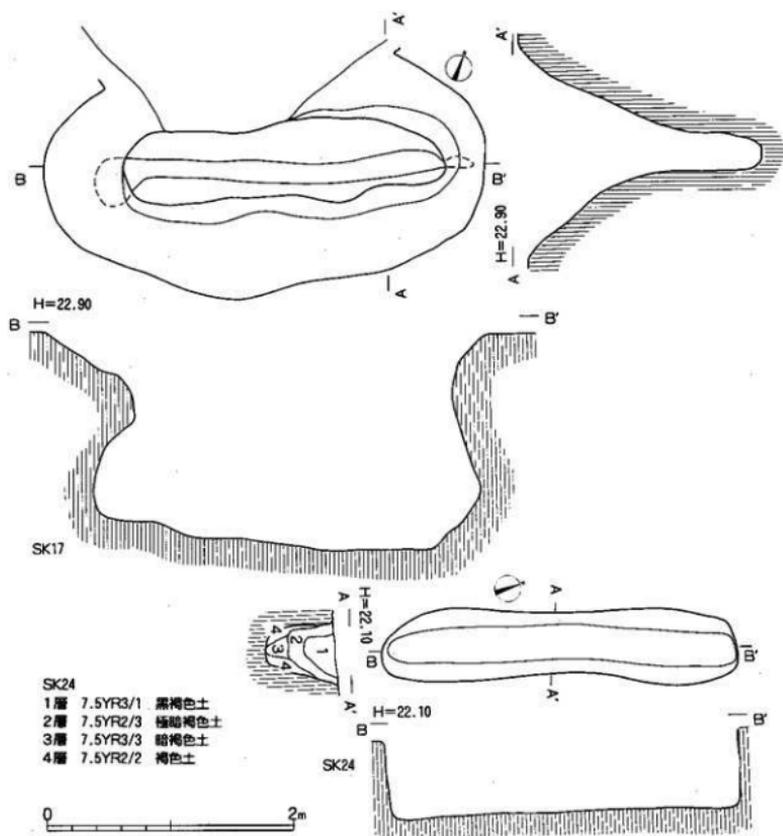


Fig.22 縄紋土坑(5) (SK17,24)

坑である。

SK25- b (新期)

- | | | | |
|----|------------|-------|---------------------------|
| 1層 | 7.5YR1.7/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 2層 | 7.5YR3/3 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 3層 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色土 | 微量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
| 4層 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |

SK25- a (古期)

- | | | | |
|----|----------|-----|---------------------------|
| 5層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。 |
|----|----------|-----|---------------------------|

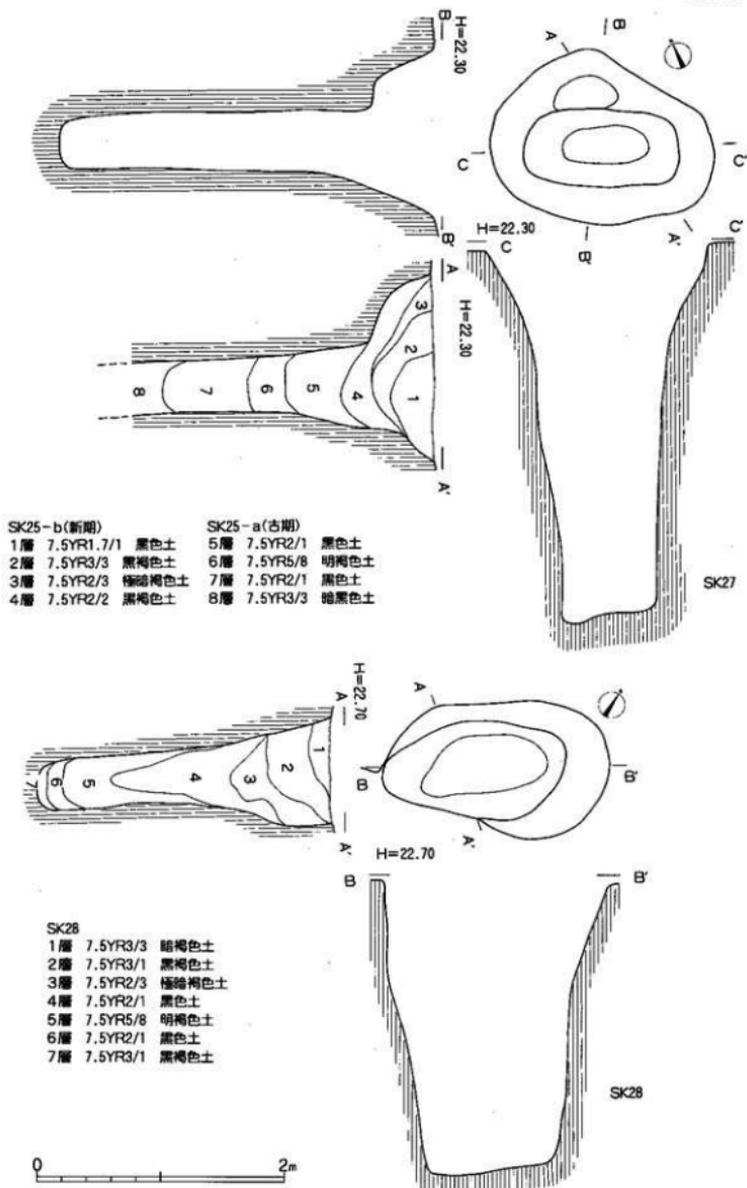


Fig.23 繩紋土坑(6) (SK25,28)

- 6層 7.5YR5/8 明褐色土 多量のローム粒子・ロームブロックを含み、締まりがある。
 7層 7.5YR2/1 黒色土 微量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
 8層 7.5YR3/3 暗黒色土 微量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。

覆土中より遺物の出土はなかった。

第28号土坑 (SK28) (Fig.23)

位置 本跡は、調査区北東部6-P区に位置する。

形態 平面形は隅丸長方形A-1タイプである。上面長軸184cm、短軸110cm、下面長軸105cm、短軸50cm、深さ240cmを測る。長軸方向はN-34°-Wを指す。床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は7層に分けることができる。

- 1層 7.5YR3/3 暗褐色土 やや多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
 2層 7.5YR3/1 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
 3層 7.5YR2/3 極暗褐色土 多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
 4層 7.5YR2/1 黒色土 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
 5層 7.5YR5/8 明褐色土 多量のローム粒子・ロームブロックを含み、締まりがある。
 6層 7.5YR2/1 黒色土 少量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。
 7層 7.5YR3/1 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、締まりがあり、粘性にとむ。

覆土中より遺物の出土はなかった。

第2節 遺物

縄紋時代の遺物としては、土器と石器がある。土器は早期前半、早期後半、前期後半、中期後半、後期後半に属するもので、総数でわずかに34点である。その内訳は早期前半7点、早期後半1点、前期後半23点、中期後半4点、後期後半1点である。これらはいずれも他時期の堅穴住居跡内の覆土中から表採資料であり、先の縄紋土坑には伴わない。また石器として石鏃と石皿がある。やはり石鏃は表採資料であり、石皿は古墳時代の住居跡覆土中から出土したものである。

1. 土器 (Fig.24・25)

早期前半の土器 (Fig.24-No 1~7)

1~7は燃糸系土器である。1は口唇部がわずかに外反し肥厚する。施文は縄紋で、口唇部外側から体部にかけて施されている。口唇部及び体部は単節LR縄紋である。口唇部及び体部上半部は横走縄紋、以下縦走縄紋の施文である。内面は横位のナデ整形。2も口唇部が肥厚して外反する。施文は縄紋で、口唇部下位にナデ整形による無文帯を配する。口唇部と体部縄紋は単節RLで、体部は斜行する。内面は器面の粗れが目立つ。3も口唇部が肥厚して外反する。やはり施文は縄紋で、口唇部上端部と口唇部下から単節LR縄紋を施し、口唇部下位部は無文である。内面はナデ整形による。4も口唇部は肥厚して外反する。施文は口唇部と口唇部直下から施され、いずれも単節LR縄紋である。5も小破片であるが、口唇部が肥厚し外反する。施文は1に酷似する。単節LR縄紋を施する。6の口唇部の形態は丸頭状で外面に肥厚し、口唇部下に凹帯が巡り、口唇部と凹帯下に縄紋の施文を施す。口唇部の原体は器面の摩耗が著しく詳細に観察できないが、体部は燃糸Rを施している。なお、施文工程は縄紋を施文し、ヘラ状工具による凹帯文の作出である。7は胴部破片である。単節RL縄紋に加えて1条の燃糸原体を圧着させる。1~5は井草Ⅱ式、6は稲荷原式、7は花輪台Ⅰ式である。

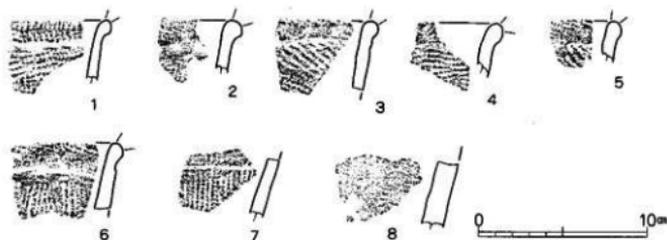


Fig.24 縄紋時代早期前半・後半の土器

早期後半の土器 (Fig. 24-No 8)

8は条痕文系土器である。胴部破片で、内外面とも無紋である。胎土に多量の繊維を含有する。茅山式である。

前期後半の土器 (Fig. 25-No 9~31)

9~24は浮島・興津式系土器である。うち9~17は浮島式系で、9は口縁部が大きく外反し、口唇部下位が肥厚する。口唇部および口縁部はアナダラ属の貝殻腹縁による刺突、押し引きおよび波状貝殻腹縁文が施されている。10~17は胴部破片であるが、やはりアナダラ属の貝殻腹縁による波状貝殻腹縁文で、12・16・17は波状の間隔を密に施している。浮島Ⅱ式である。18~24は興津式系である。18は口唇部の形状が外削状を呈し、ヘラ状工具による縦位の沈線文を巡らし、さらに細沈線を横走させる。19・20は同一個体の土器で、口唇部の形状は内削状を呈し肥厚する。口唇部はヘラ状工具による縦位の刻目が密に施され、以下同じ工具による平行沈線文を横走させる。なお地文にはアナダラ属の貝殻腹縁文による波状紋を施文している。21~23は胴部破片で、櫛歯状工具による横位の条線文を施文する。24は沈線による三角形区画文と貝殻腹縁文を施している。25~30は縄紋施文の土器である。25と26は同一個体の土器である。内湾気味に立ち上がる口縁部破片で、口唇部上に縄紋原体の側面圧痕をもち、とくに25は側面圧痕による区画文が施され、小突起を有する。口縁部は無節しにより施文されている。27は胴部破片。無節しが施文されている。28~30は同一個体である。28は口唇部の形状が外削状、口唇部はナデによって無文化され、縄紋施文後、沈線文を横走させる。31は無文の土器である。口唇部下と口縁部回到りに粘土帯の積上痕が残留している。器面は比較的凹凸が著しい。

中期後半の土器 (Fig. 25-No 32~35)

加増利E 3式土器を一括する。32~35は口縁部破片で、隆帯と沈線による渦巻、楕円区画文を有する。文様区画内は単節LR縄紋が施文され、また32・33は口縁部文様帯から磨消懸垂文が施され、単節LRが施文されている。35は波状口縁をもつ深鉢で、口唇部直下から単節RL縄紋が施文される。

後期後半の土器 (Fig. 25-No 36)

安行1式の粗製土器である。胴部下半部の破片で、横走る条線文を施す。

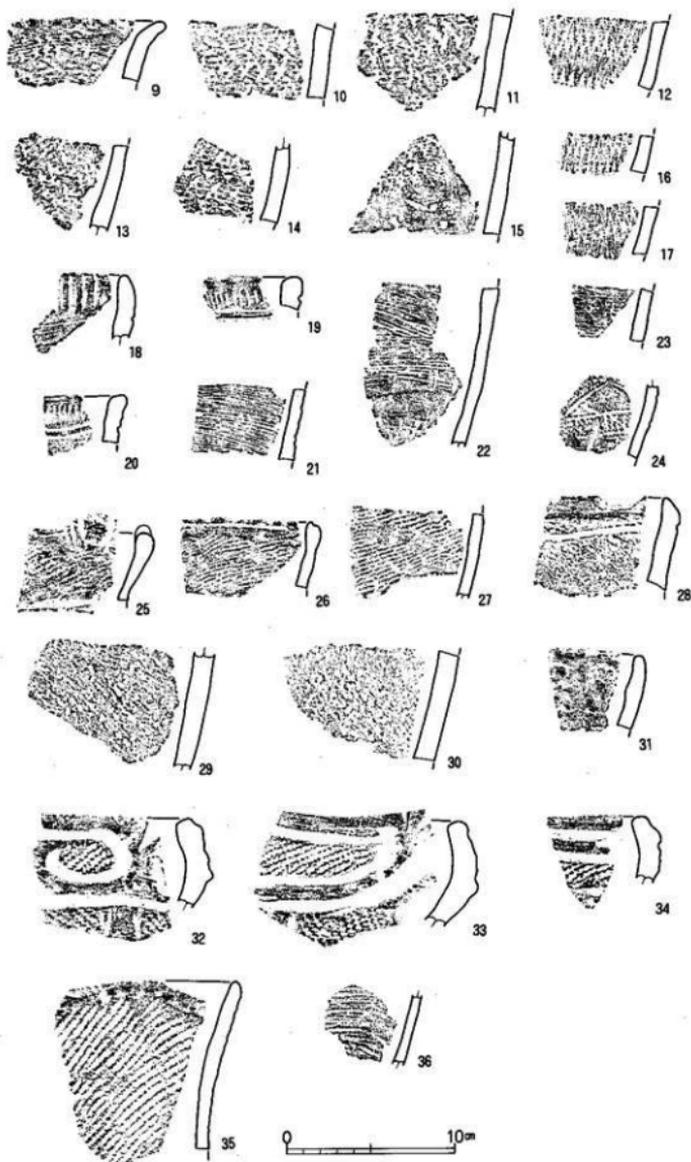


Fig.25 縄紋時代前・中・後期の土器

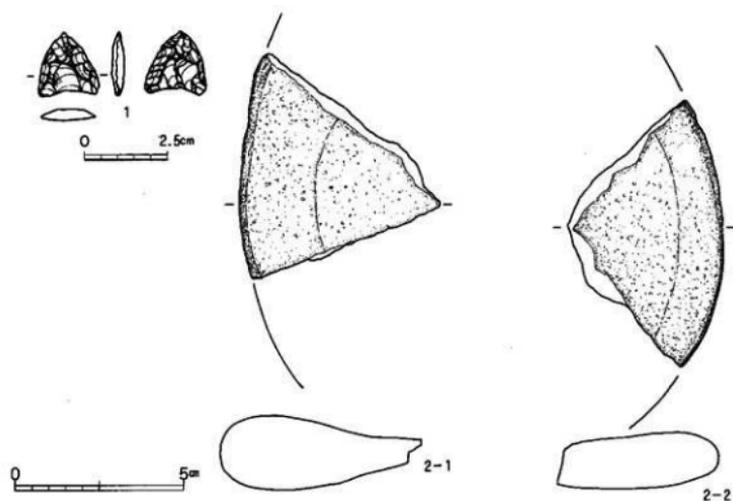


Fig.26 縄紋時代の石器

2. 石器 (Fig.26-1・2)

1はチャート製の石鏝である。素材の面を残さず全面細部加工を施す。無茎で、平面形は丸みを帯びた正三角形を呈するもので、挟りはそれほど深くはない。断面はレンズ状をなす。長さ1.83cm、幅1.85cm、厚さ0.35cm、重さ1.25gを測る。表採。2は円礫を素材とした石皿の破片。表裏面とも研磨が施されている。砂岩製である。第10号住居跡(S110)より出土。

(小川 和博)

第V章 弥生・古墳時代の調査

第1節 川崎山I期集落の遺構と遺物

1. 第I期の概要

本遺跡の集落形成第I期とされるのは、弥生時代後期からいわゆる「臼井南様式」の土器を伴う段階で、第15・23・27・30・35・36・37・38・39・42・43・45・47号住居跡13棟が検出されている。いずれも重複することなく単独住居で構築されており、調査区の北辺から東辺にかけて、つまり台地の縁辺部に沿って偏るように分布している。ここはまた既述したとおり、本調査区の北西側が都市計画街路建設工事に先立ち発掘調査され、全部で7棟検出された住居跡の内2棟が弥生時代後期の本遺跡でいう第I期に相当するもので、当地上の北西側の限界が確認されている。したがって、住居跡群は南方から西方へどう展開されるか、今後の調査に譲りたい。

この第I期住居跡群の特徴として、まず出土する土器群が附加条縄紋を主施文とする臼井南式土器を主体に、わずかながら南関東系とされる弥生町系の土器が混在している点が注目される。また住居跡の形態が、楕円形を呈することである。しかもこの楕円形でも大きく小型と中型が存在し、共通する炉址の形状はともかくとして、小型と中型の大きさによって柱穴の状況に相違があることである。すでに当遺跡の北方に位置する萱田遺跡群では多数の弥生時代の遺構を検出しているが、ここでいう第I期よりも新期に属する第II期の遺構が多いものの、その中で権現後遺跡や井戸向遺跡で確認された第I期住居跡群を考え合わせた時、集団内の居住範囲のみならず、当時の行動利用空間がより拡大していたことを物語る。ただし、萱田遺跡群の中でも相違点がいくつも指摘されていることから、この川崎山遺跡を含めた地域集団の土地利用状況の検討は十分意義あるものと考えられる。

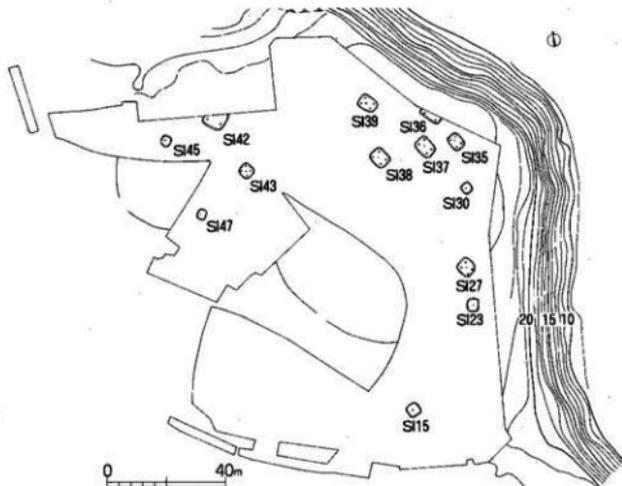


Fig.27 川崎山I期集落

2. 第I期の住居跡

第15号住居跡 (SI15) (Fig.28~32)

位置 本跡は、調査区南東部、15-M、15-N区の標高21.68m~21.78mに位置する。南東部で第14号住居跡 (SI14) によって切られ、北側に第11号住居跡 (SI11) が隣接する。

形態 平面形は、楕円形を呈する。推定長軸4.40m、短軸4.46mを測り、長軸方位はN-38°-Wを指し、中型の住居跡である。壁は東南辺、北辺ともほぼ垂直に、西辺にて緩やかに立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 5層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|---------|-------|-----------------------------|
| 1層 | 10YR3/4 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。 |
| 2層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 3層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 4層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 5層 | 10YR6/8 | 明黄褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。 |

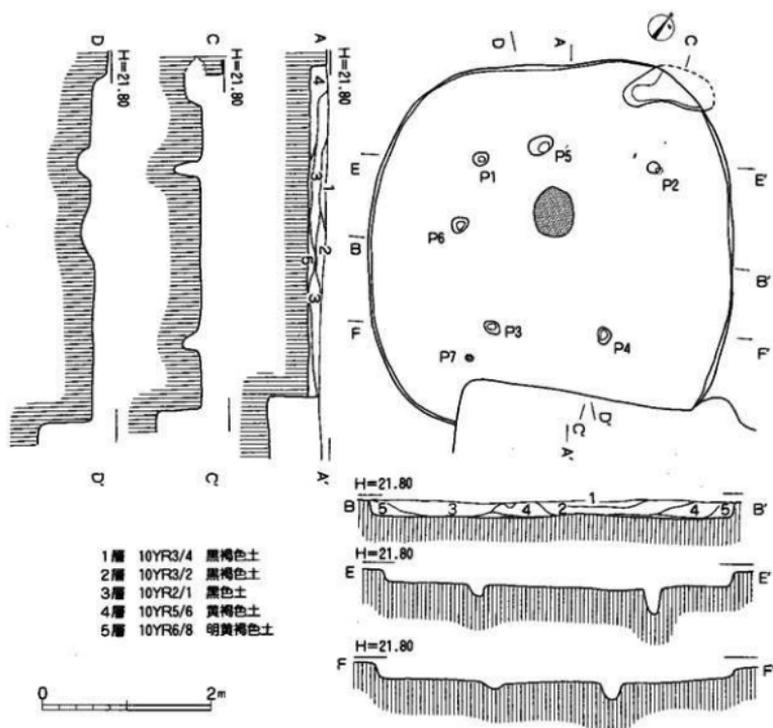


Fig.28 第15号住居跡

住居施設 住居内部の施設として柱穴4本および支柱穴3本と地床炉1基が確認された。

柱穴はP1～P4で、P1は北西部に位置し、上面が 18×18 cmのほぼ円形、深さ17cm。P2は北東部で 14×14 cmの円形で、深さ34cm。P3は南西部に位置し、上面が 22×16 cmの楕円形で、深さ7cm。P4は南東部で、 22×16 cmの楕円形、深さ19cmを測る。また炉跡や北寄りに径約 32×22 cm、深さ18cmの楕円形ピットであるP5とやはり炉跡西寄りに上面が 22×20 cmの円形で、深さ7cmと浅い深度のピットであるP6を、P3の南寄りには上面が 12×8 cm、深さ6cmの小ピットであるP7を設ける。

炉は地床炉で、住居中央から北西寄りに長径60cm、短径48cm、

深さ12cmを測る楕円形に掘り窪め、断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は2層に分層でき、第1層が焼土層で、多量の焼土粒とローム粒子を含み、締まりがある。

掘り方 掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっている。

遺物出土状況 遺物は、住居全体に散在するが、とくに南端から南東部にかけて集中する。いずれも小破片で、図示しうる資料が全てである。

遺物 出土した遺物は土器のみで、いずれも破片である。破片は底部、口縁部と胴部破片があり、壺形土器である。1は小型の壺形土器の底部破片である。底径は5.7cmを測る。底部周辺に粗いヘラナゲが、また底面にも比較的粗いヘラナゲが施されている。2は中型壺形土器の口縁部破片である。複合口縁を呈し、口縁部、口唇部とも単筋RLを施文し、口縁部下端にササラ状工具による刺突文が周回し、下端から赤彩が認められ、内面にも赤彩が施されている。焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。3も中型

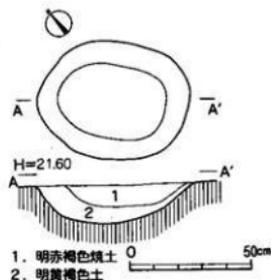


Fig.29 第15号住居跡炉

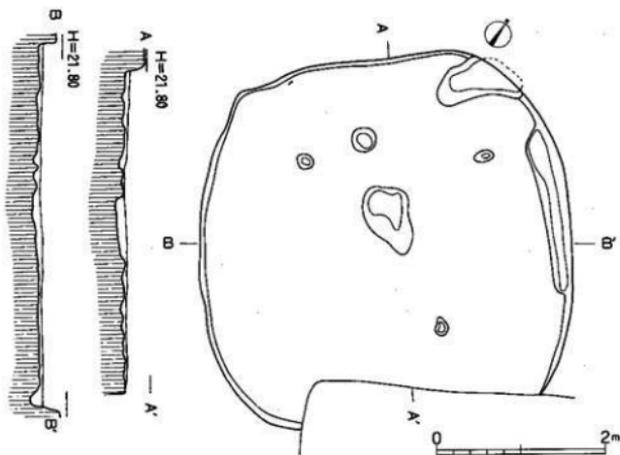


Fig.30 第15号住居跡掘り方

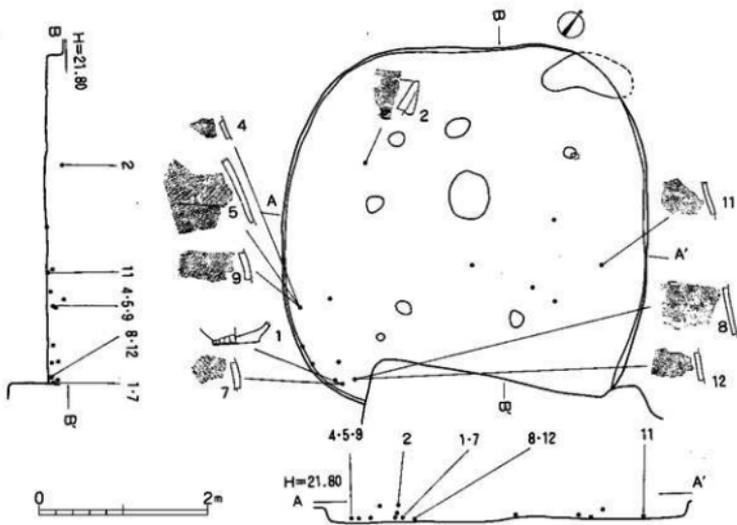


Fig.31 第15号住居跡遺物分布図

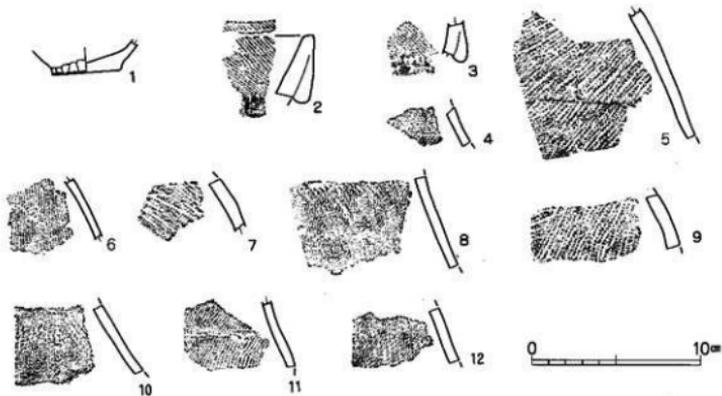


Fig.32 第15号住居跡出土遺物

の壺形土器の口縁部破片。複合口縁で、口縁部には単筋RLが施文され、口縁部下端に棒状工具による刺突文が周回する。やはり口縁下端に赤彩が施され、内面にも赤彩が認められる。焼成は良好。色調は明赤褐色を呈する。4～12は壺形土器の胴上半部の破片である。5・8・9はやや大型、他は小型もしくは中型の壺で、いずれも附加条縄紋で、附加条第1種が施文されている。4は頸部破片で、原体の末端がみられ、橙色を呈する。5・9は浅黄橙色、6・7は明赤褐色、他は黒褐色を呈する。

第23号住居跡 (SI23) (Fig.33～37)

位置 本跡は、調査区東部、11-O、11-P、12-O、12-P区の標高22.48m～22.50mに位置する。南側で第22号住居跡 (SI22)、北西側で第26号住居跡 (SI26) が隣接する。

形態 平面形は、楕円形を呈する。長軸4.12m、短軸3.98mを測り、長軸方位はN-20°-Eを指し、中型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 6層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|-----------|------|-----------------------------|
| 1層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。 |
| 2層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 3層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 4層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 5層 | 10YR6/8 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 6層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 少量のローム粒子を含み、締まりがある。 |

住居施設 住居内部の施設として、柱穴2本と地床炉1基が確認された。

柱穴はP1～P2で、P1は北側に位置し、上面が14×16cmのほぼ円形、深さ40cm。P2は西側で上面30×32cmのほぼ円形で、深さ51cmを測る。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北寄りに長径32cm、短径20cm、深さ9cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。

周溝は構築されていない。

掘り方 掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっている。

遺物出土状況 遺物は、住居の東側から南側にかけて散在するが、いずれも小破片で、図示しうる資料が全てである。

遺物 出土した遺物は土器のみで、大型と中型の壺形土器の胴部破片である。

1～5は同一個体である。大型の壺形土器で、胴上半部の破片である。附加条第1種の縄紋を施文している。内面は丁寧なナデ調整が施され、焼成は良好である。色調は黒褐色と明赤褐色である。6～12も壺形土器の胴部破片で、個体1(1～5)よりも中型である。6・8・9・11は胴上半部、他は胴下半部である。6は原体の末端がみられる。色調は黒褐色を呈する。また8～11は焼成も良好で、色調は黒褐色を呈する。12は底部に近い破片で、明赤褐色を呈し、焼成は良好である。13・14は頸部付近の破片で、横位の擦痕による器面調整が施されている。15は壺形土器の胴下半部の破片である。ナデ調整が施されている。いずれも焼成は良好で、色調は黒褐色を呈する。

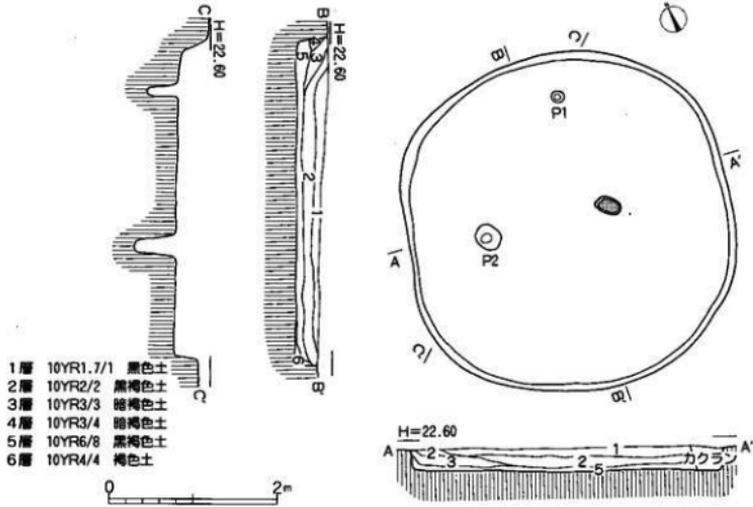


Fig.33 第23号住居跡

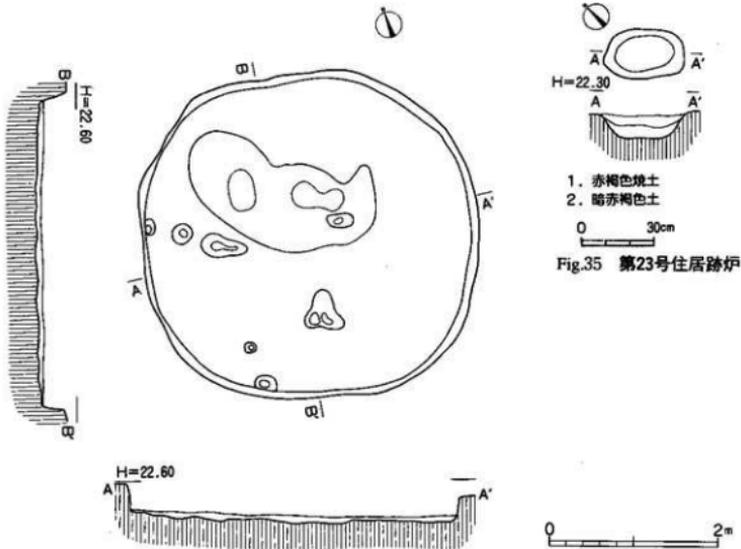


Fig.34 第23号住居跡掘り方

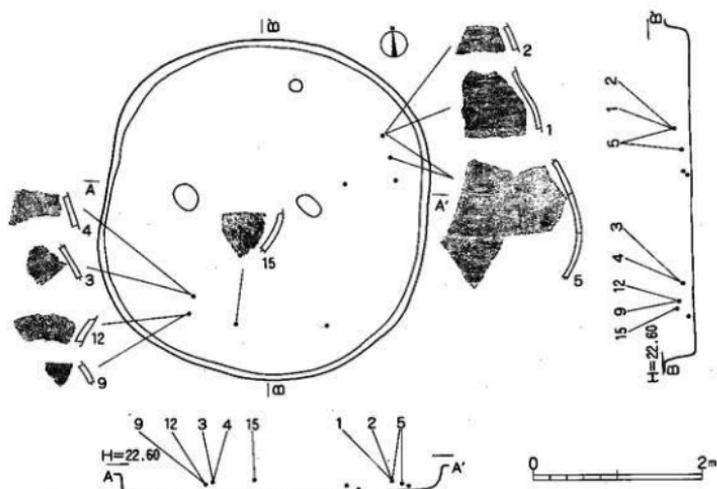


Fig.36 第23号住居跡遺物分布図

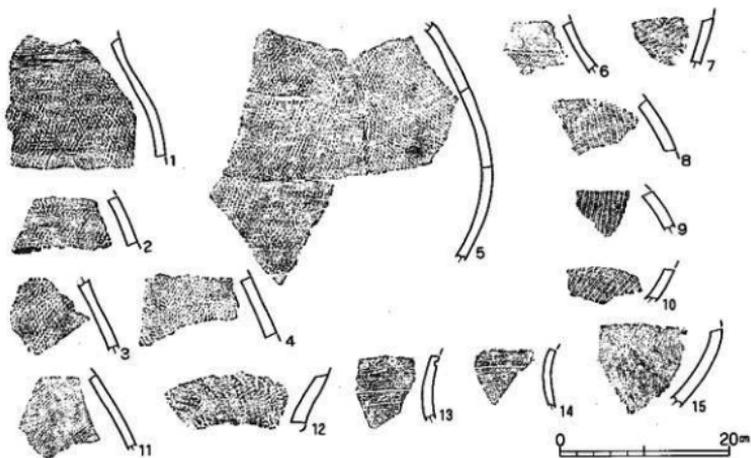


Fig.37 第23号住居跡出土遺物

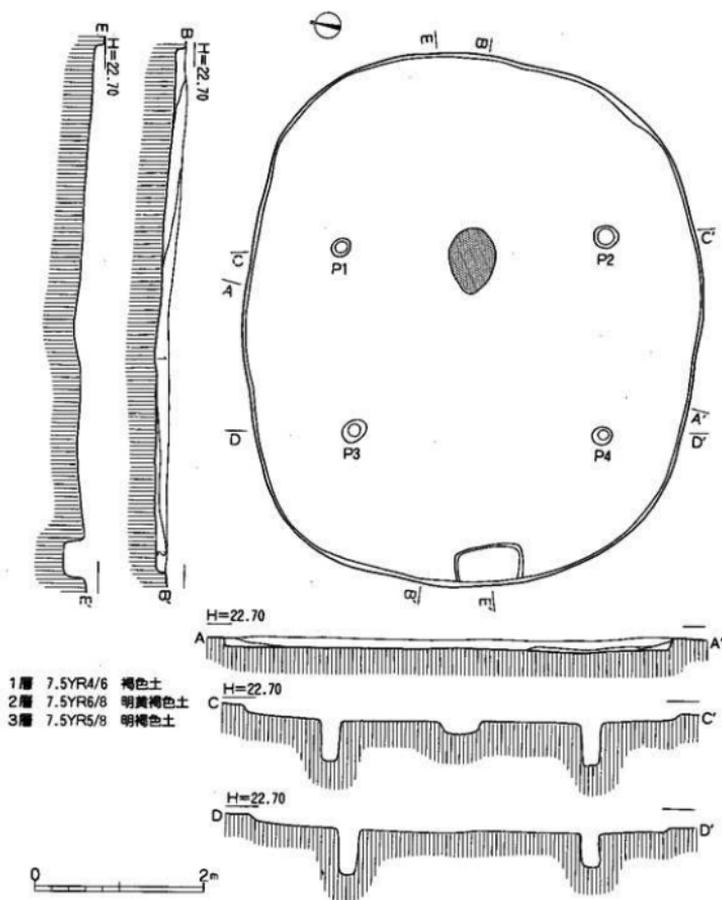


Fig.38 第27号住居跡

第27号住居跡 (SI27) (Fig.38~42)

位置 本跡は、調査区東端10-O、10-P区の標高22.24m~22.60mに位置する。北側は第28号住居跡 (SI28) が、南西側は第26号住居跡 (SI26)、南東側に第24号住居跡 (SI24) が隣接する。

形態 平面形は、楕円形を呈する。長軸6.52m、短軸5.60mを測り、長軸方位はN-80°-Eを指し、大型の住居跡である。壁は全体的に浅いが東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

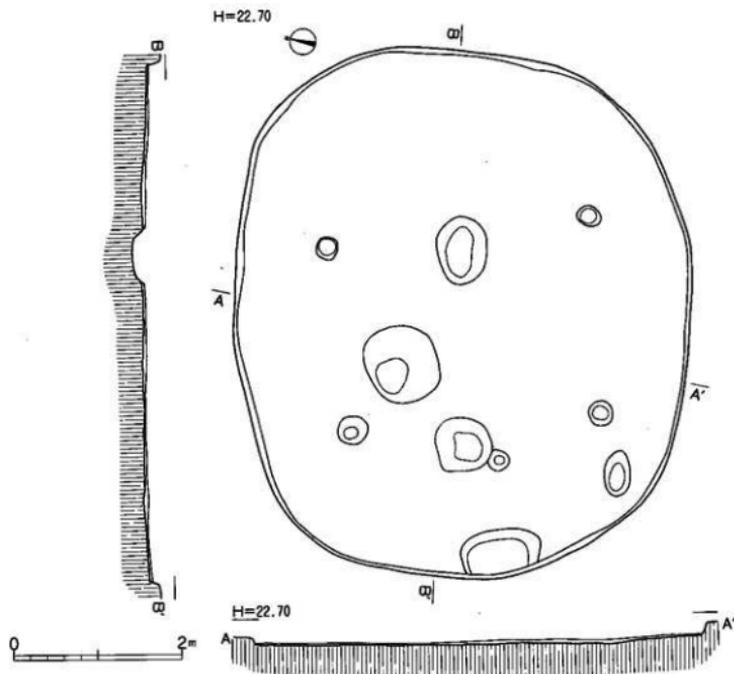


Fig.39 第27号住居跡掘り方

覆土 3層に分層可能である。自然埋没土層である。

- 1層 7.5YR4/6 褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
- 2層 7.5YR6/8 明黄褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
- 3層 7.5YR5/8 明褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として柱穴4本および入口施設と地床1基が確認された。

柱穴はP1～P4で、P1は北東部に位置し、上面が22×24cmのほぼ円形、深さ50cm。P2は南東部で26×30cmの楕円形で、深さ54cm。P3は北西部に位置し、上面が28×30cmの円形で、深さ58cm。P4は南西部で、上面が22×24cmの円形深さ41cmを測る。また入口部は西壁中央部に位置し、規模は長軸84cm、短軸48cmの長方形を呈し、深さは14cmを測る。なお、底面は平坦である。

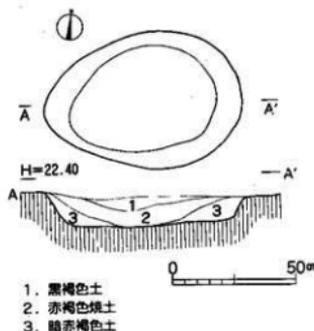


Fig.40 第27号住居跡炉

1. 黄褐色土
2. 赤褐色焼土
3. 暗赤褐色土

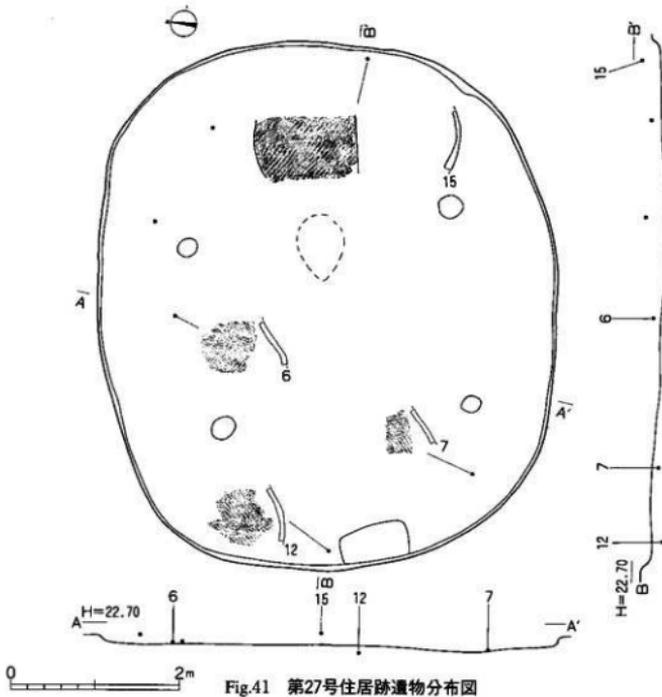


Fig.41 第27号住居跡遺物分布図

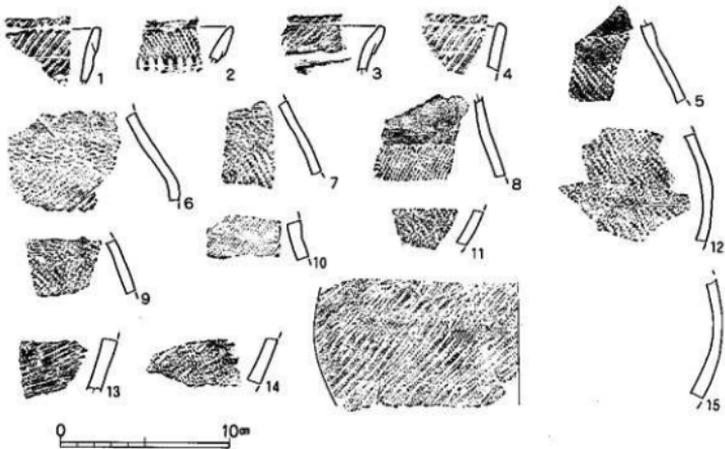


Fig.42 第27号住居跡出土遺物

炉は地床炉で、住居中央から北東寄りに楕円形に掘り窪め、長径80cm、短径60cm、深さ14cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第2層が焼土層で、多量の焼土粒を多く含み、締まりがある。

周溝は構築されていない。

掘り方 掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、西側には柱穴状の掘り込みがみられる。

遺物出土状況 遺物は、住居全体に散在するものの、とくに集中することはない。なお、いずれも小破片で、図示しうる資料が全てである。

遺物 出土した遺物は土器のみであり、大型と中型の壺形土器である。

1～4は口縁部破片である。中型の壺形土器で、1～3は複合口縁をもつ土器で、1は口縁部および口唇部に附加条第1種の縄紋を施文する。内面は丁寧なナデ調整。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。2も同様に口縁部と口唇部に附加条第1種の縄紋を施文、また口縁部下端部に棒状工具による刺突文を周回させる。内面は丁寧なナデ調整。焼成は良好。色調は赤褐色を呈する。3もやはり口縁部と口唇部に附加条第1種の縄紋を施文し、内面はナデ整形。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。4も口縁部と口唇部に附加条第1種の縄紋を施文。焼成は良好。色調は褐色を呈する。5～15は胴部の破片である。5～8は頸部付近で、いずれも原体の末端を残す。とくに6は上端に3段の結節文がみられる。なお、5・6とも器面外面にスス状炭化物の付着が認められる。色調は5・6・8は黒褐色。7は暗褐色を呈する。9～15は胴部中位付近の破片である。いずれも附加条第1種の縄紋を施文する。また15は最大径24.7cmを測る中型の壺形土器である。色調は9～12は黒褐色。13～15は明赤褐色を呈する。

第30号住居跡 (SI30) (Fig.43～46)

位置 本跡は、調査区北東部、7-P、8-P区の標高22.68m～22.80mに位置する。南側に第29号住居跡 (SI29) が隣接する。

形態 平面形は、楕円形を呈する。長軸3.70m、短軸3.44mを測り、長軸方位はN-28°-Wを指し、やや小型の住居跡である。壁は南辺がほぼ垂直に、東辺、西辺、北辺はやや緩やかに立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 5層に分層可能である。自然埋没土層である。

- 1層 7.5YR3/1 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
- 2層 7.5YR2/1 黒色土 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
- 3層 7.5YR2/2 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
- 4層 7.5YR3/3 暗褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。
- 5層 7.5YR5/6 明褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴6本および入口施設と地床炉1基が確認された。

柱穴はP1～P6で、P1は西側に位置し、上面が22×22cmの円形、深さ19cm。P2は北側で20×22cmのほぼ円形で、深さ6cm。P3は南西側に位置し、上面が16×24cmの楕円形で、深さ7cm。P4は東側で、上面が24×24cmの円形、深さ9cmを測る。またP5とP6の2本は支柱穴にあたるものと考え、P5は炉跡の北側で、上面が18×22cmの楕円形で、深さは8cm。P6は反対の入口部の北側に位置し、上面が28×28cmの円形で、深さは9cmを測る。

入口部は南壁中央部に位置し、規模は長軸78cm、短軸34cmの楕円形を呈し、深さは11cmを測る。なお、

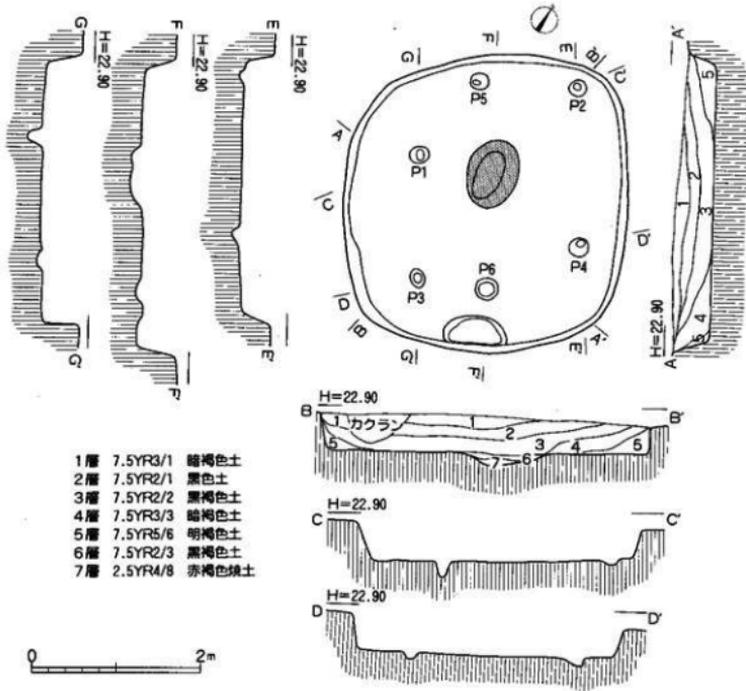


Fig.43 第30号住居跡

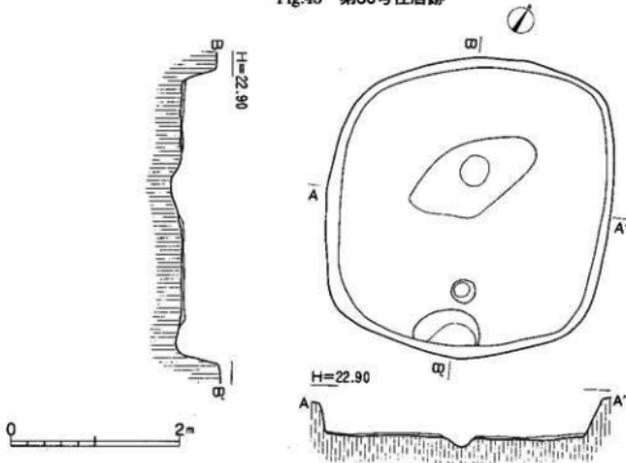


Fig.44 第30号住居跡堀り方

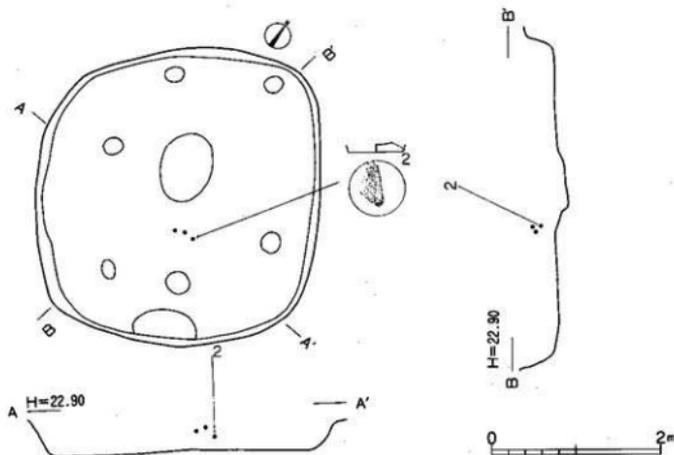


Fig.45 第30号住居跡遺物分布図

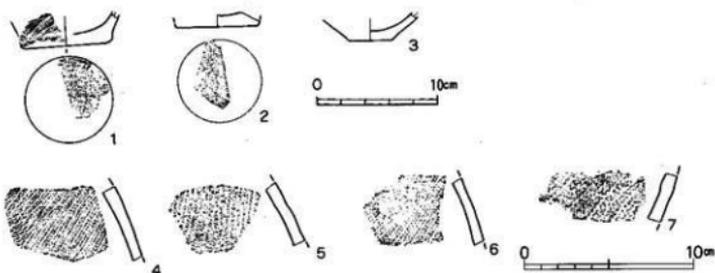


Fig.46 第30号住居跡出土遺物

壁は緩く立ち上がり、底面は平坦である。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北東寄りに長径84cm、短径64cm、深さ15cmを測る。断面はやや起伏をもつ平底で、壁は緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は2層に分層でき、本跡では第7層に相当する最下層が焼土層で、多量の焼土粒を多く含み、締まりがある。

周溝は構築しない。

掘り方 掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、炉跡周辺の掘り込みが顕著にみられる。

遺物出土状況 遺物は、炉跡の南側に散在するのみで、とくに集中することはない。なお、いずれも小破片で、図示しうる資料が全てである。

遺物 出土した遺物はすべて土器で、壺形土器の底部と胴部破片が確認されている。なおSI29で出土した4の環形土器（Fig.288-2）の半分は本住居跡の覆土精査の段階で出土したものである。1～3は底部破片である。1は底部周辺まで附加条第1種の縄紋を施文し、底部に木葉痕を残置させている。内面はナデ調整。焼成は良好。色調は橙色を呈する。2も底面に木葉痕を残置している。焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。3は小型の壺形土器で、底部周辺はヘラ削り、底面も比較的粗いヘラ削り、内面はヘラナデ調整。焼成は良好。色調はぶい褐色を呈する。4～7は壺形土器の胴部破片。いずれも附加条第1種の縄紋により施文されている。焼成は良好で、色調はいずれもぶい褐色を呈する。

第35号住居跡（SI35）（Fig.47～51）

位置 本跡は、調査区北東部、6-O、6-P区の標高22.64～22.83mに位置する。北西側に第36号住居跡（SI36）が、西側に第37号住居跡（SI37）が隣接する。

形態 平面形は、長楕円形を呈する。長軸5.74m、短軸4.26mを測り、長軸方位はN-48°-Wを指す。中型の住居跡である。壁は東辺と南辺がほぼ垂直に、西辺と北辺が緩やかに立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化した面が広がる。

覆土 6層に分層可能である。自然埋没土層である。

- 1層 7.5YR3/2 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性 ややあり、締まりがある。
- 2層 7.5YR2/1 黒色土 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
- 3層 7.5YR3/1 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
- 4層 7.5YR3/4 暗褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。
- 5層 7.5YR3/2 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。
- 6層 7.5YR4/4 褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴5本および入口施設と地床炉1基が確認された。

柱穴はP1～P5で、うちP1～P4は径は狭いが、深度もつ主柱穴である。まずP1は西側に位置し、上面が16×18cmのほぼ円形、深さ59cm。P2は北側に12×18cmの楕円形で、深さ49cm、P3は南側に位置し、上面が20×24cmの楕円形で、深さ61cm。P4は東側で、上面が14×16cmの円形、深さ56cmを測る。またP5は入口部に付随する施設のもと考えられ、入口部施設の北側で、上面が30×36cmの楕円形で、深さは33cmを測る。

入口部施設は南東壁中央部に位置し、規模は長軸110cm、短軸44cmの長方形を呈し、深さは11cmを測る。なお、壁は緩く立ち上がり、底面は平坦である。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北西寄りに長径72cm、短径56cm、深さ21cmを測る。断面はやや起伏をもつ平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第1層と第2層が焼土層で、とくに第2層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒を多く含み、締まりがある。

なお、住居跡西隅、北隅、東隅の3カ所の床面上に径50cm前後の焼土塊が堆積していた。床面には炭化物の堆積はなく、焼失家屋ではない。したがって、この焼土塊は捨て焼土であろう。

周溝は構築しない。

掘り方 掘り方は、床下全面におよび、かなり粗雑なビット状の掘り込みが全体に認められるほか、とくに北側では複雑な掘り込みが施され、入念な貼床構築が行なわれている。この貼床の床面にあたる上面は黒褐色土とローム粒子の混合土からなる貼床面を呈しているもの、とくに北側では貼床面の下層にわずかな暗褐色土を混入するロームブロック粒を充填して基礎としている。

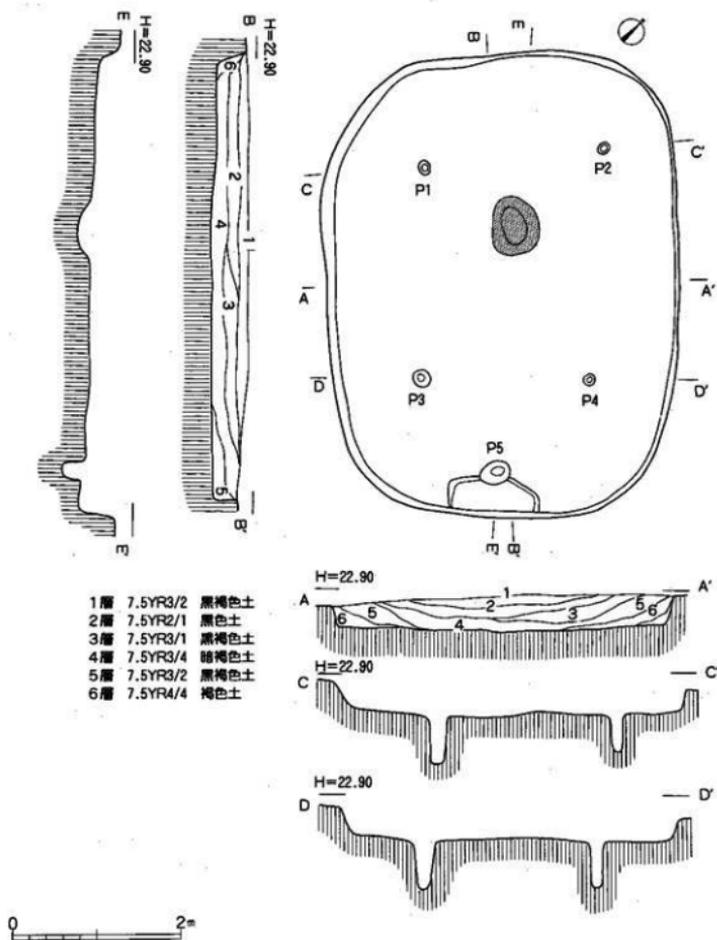


Fig.47 第35号住居跡

遺物出土状況 遺物は、炉跡の南から東側に散在し、とくに炉跡と入口付近に集中する。遺物のうち底部の出土が目立つ。

遺物 出土した遺物は土器のみである。1は壺形土器の口縁部破片、推定口径16.5cmのやや小型を呈する。口縁部は緩く外方へ開き、体部はやや影らみながら移行する。器面外面は縦位のヘラナデ整形、内面は横位のヘラナデ整形。内外面に赤彩が認められる。焼成は良好。2は壺形土器の胴部下半部を残

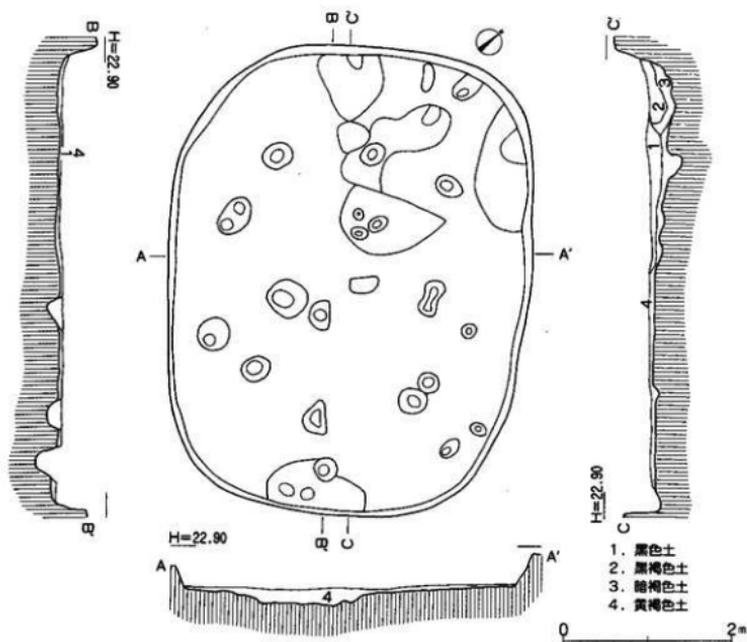


Fig.48 第35号住居跡掘り方

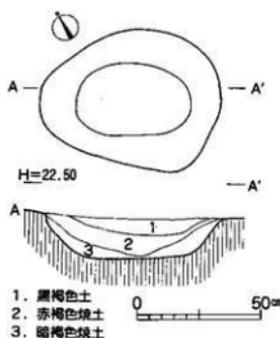


Fig.49 第35号住居跡炉

存している。底径は6.9cmを測る。外面は附加条第1種の縄紋を施文し、底面に木葉痕を残置させている。内面は丁寧なヘラナデによって仕上げられている。焼成は良好。色調は橙色を呈する。3～8は底部破片。5を除き、木葉痕を残置させている。また5～7の底部周辺には附加条第1種の縄紋を施文している。いずれも焼成は良好。色調は3・4・8が灰褐色。5が橙色。6・7は褐色を呈する。9・10は胴部破片。附加条第1種の縄紋を施文し、焼成は良好。色調は9が灰褐色、10が橙色を呈する。

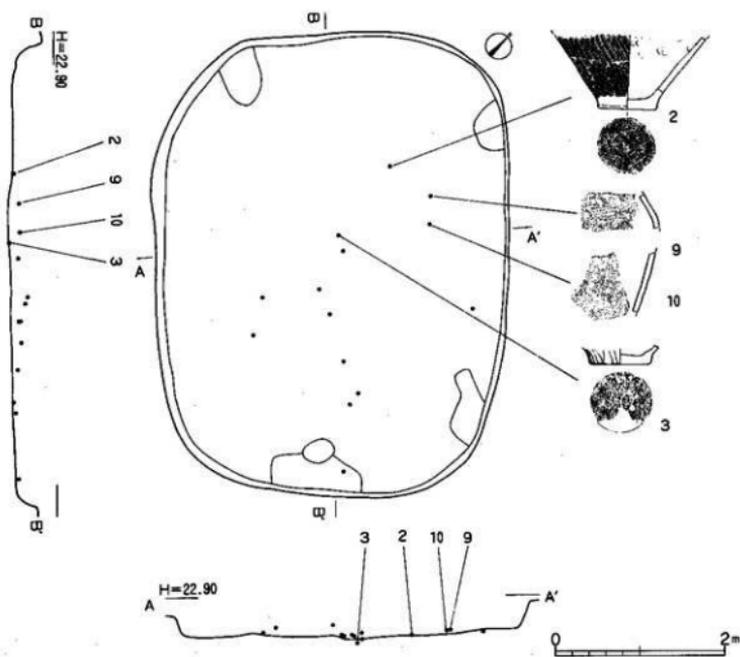


Fig.50 第35号住居跡遺物分布図

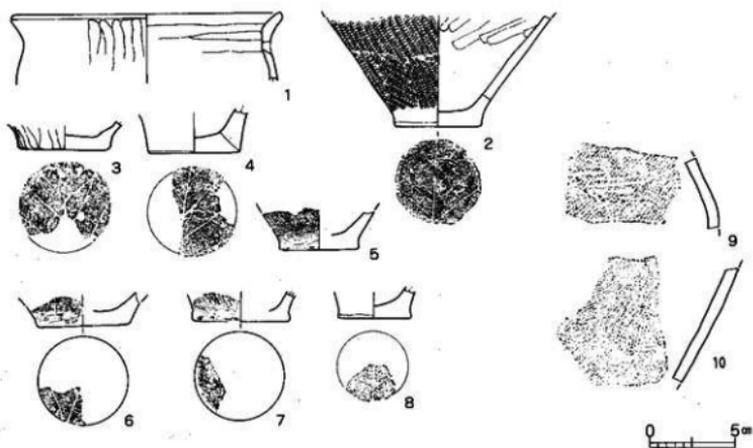


Fig.51 第35号住居跡出土遺物

第36号住居跡 (SI36) (Fig.52~55)

位置 本跡は、調査区北東部、5-N、5-O区の標高22.38~23.20mに位置し、住居跡群の北東端にあたる。なお、北東側約2/3は保存地域にあたるため調査ができず、確認された南西側1/3を発掘した。また南東側に第35号住居跡 (SI35) が、南側に第37号住居跡 (SI37) が隣接する。

形態 平面形は、長楕円形を呈する。確認された長軸7.62m、短軸2.38mを測り、長軸方位はN-53°-Wで、大型の住居跡である。壁北東辺が確認できないものの、南西辺とわずかに検出された北西辺、南東辺とも、ほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦面が広がる。床は黄褐色ロームと暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化した面が広がる。

覆土 9層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|----------|-------|-----------------------------|
| 1層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 表土層である。 |
| 2層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。 |
| 3層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 4層 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 5層 | 7.5YR3/1 | 黒褐色土 | 微量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。 |
| 6層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 微量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。 |
| 7層 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠き、締まりがある。 |
| 8層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠き、締まりがある。 |
| 9層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性に欠き、締まりがある。 |

住居施設 住居内部の施設として、柱穴2本が確認された。

柱穴はP1~P2は主柱穴である。まずP1は西側に位置し、上面が20×20cmの円形、深さ45cm。P2は南側で上面24×26cmのほぼ円形で深さ58.6cmを測る。

柱穴以外の内部施設は確認できなかった。

掘り方 掘り方は、床下全面におよび、かなり粗雑なピット状の掘り込みが確認された2本の柱穴の周辺に集中している以外、全体に起伏の浅い掘り込みが観察できる。

遺物出土状況 遺物は、南西壁際にわずか3点の土器片のみ検出されている。

遺物 土器4点が出土している。いずれも破片で、底部と胴部破片があり、壺形土器である。1・2は底部破片である。1は底径17.2cmを測る。底部下端周辺はヘラナデ、底面に木葉痕を残置している。焼成は良好。色調は浅黄橙色を呈する。2も底部で、下端周辺は指頭によるナデ、底面は木葉痕を残置している。焼成は良好。色調は橙色を呈する。3・4は胴部破片で、3は頸部付近の破片である。胴部に単筋LR縄紋を施文し、頸部は横ナデ。焼成は良好。器面外面はスス状の炭化物が付着している。色調は赤褐色を呈する。4も胴部破片で、最大径部分に位置する。附加条第1種の縄紋を施文している。焼成は良好。色調は明褐色を呈する。

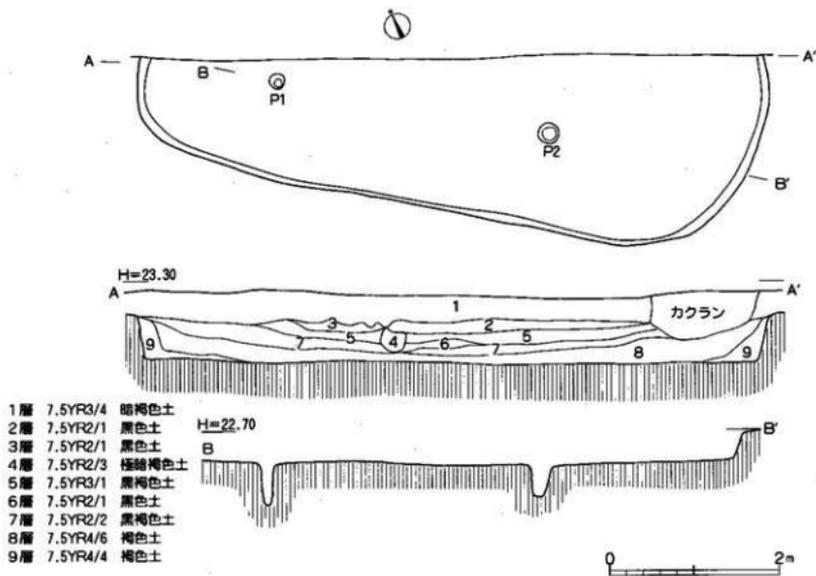


Fig.52 第36号住居跡

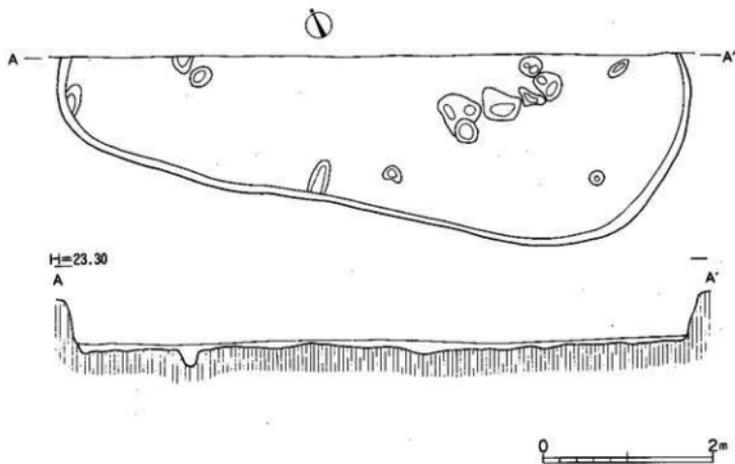


Fig.53 第36号住居跡振り方

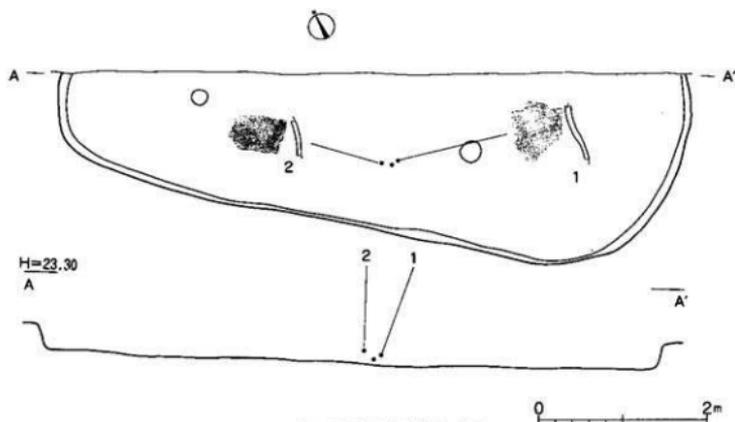


Fig.54 第36号住居跡遺物分布図

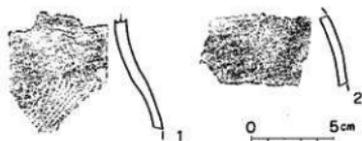


Fig.55 第36号住居跡出土遺物

第37号住居跡 (SI37) (Fig.56~60)

位置 本跡は、調査区北東部、6-N、6-O区の標高22.78~22.90mに位置する。北側に第36号住居跡 (SI36) が、東側に第35号住居跡 (SI35) が、西側に第38号住居跡 (SI38) が隣接する。

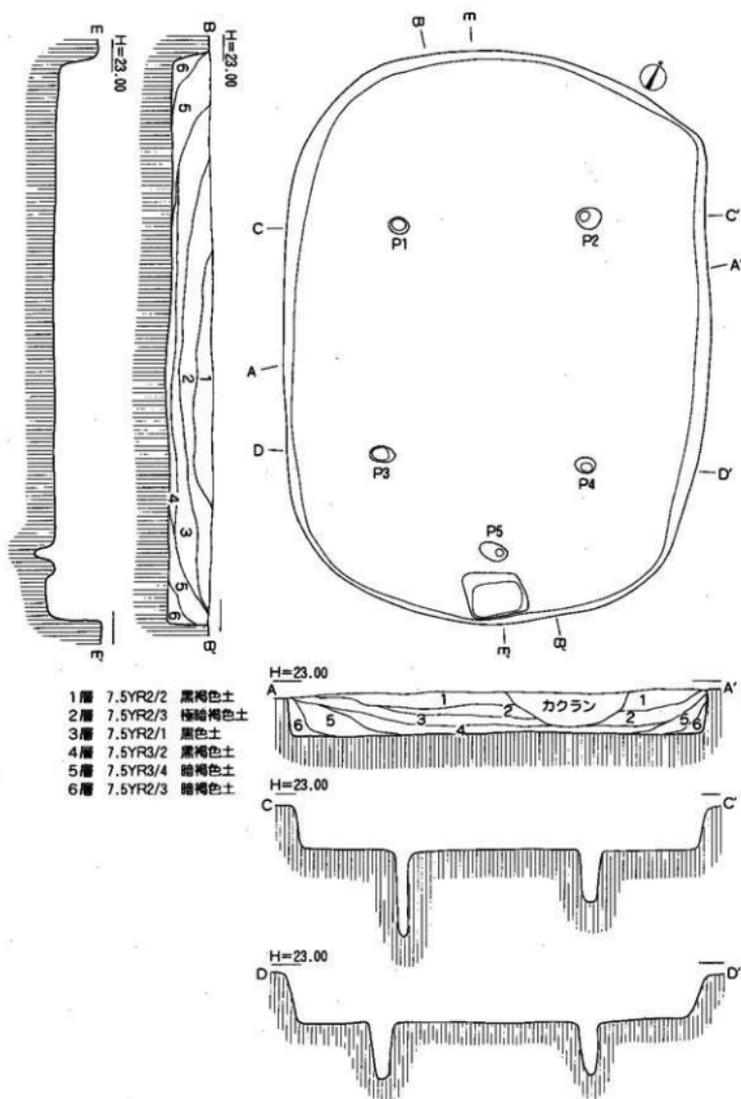
形態 平面形は、長楕円形を呈する。長軸7.06m、短軸5.18mを測り、長軸方位はN-31°-Wを指す。大型の住居跡である。壁は深く、東辺・西辺・南辺・北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化した面が広がる。

覆土 6層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|----------|-------|-----------------------------|
| 1層 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 2層 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 3層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 4層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 5層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。 |
| 6層 | 7.5YR2/3 | 暗褐色土 | 多量のロームブロックを含み、粘性に欠け、締まりがある。 |

住居施設 住居内部の施設として、柱穴5本および入口施設が確認されたものの、炉跡の検出はできなかった。

柱穴はP1~P5で、うちP1~P4は径は狭いが、深度のもつ主柱穴である。まずP1は西側に位置し、



0 2m

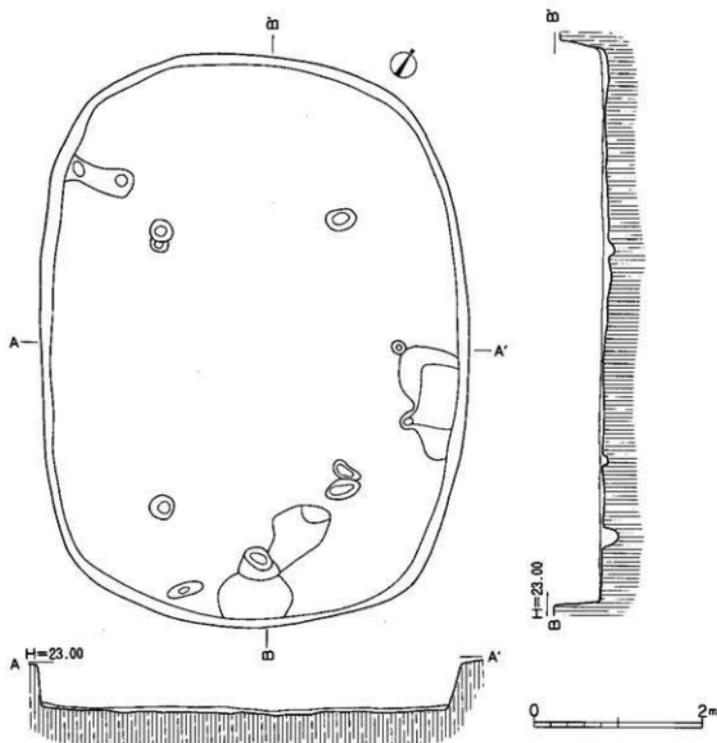


Fig.57 第37号住居跡掘り方

上面が 22×22 cmの円形、深さ68cm。P2は北側で 28×28 cmの円形で、深さ66cm。P3は南側に位置し、上面が 20×32 cmの楕円形で、深さ103cm。P4は東側で、上面が 18×28 cmの楕円形で、深さ70cmを測る。またP5は入口部に付随する施設のものと考えられ、入口部施設の北側に位置し、上面が 22×36 cmの楕円形で、深さは24cmを測る。

入口部施設は南東壁中央部に位置し、規模は長軸70cm、短軸54cmの長方形を呈し、深さ12cmを測る。なお、壁は緩く立ち上がり、底面は平坦である。

炉および周溝は構築されていない。

掘り方 掘り方は、床下全面におよぶが、とくに南東側では粗雑で複雑なピット状の掘り込みが認められる。

遺物出土状況 遺物は、住居全体に散在するものの、ややまとまりに欠けるが、壺形土器が北東壁際からまた土製紡錘車が北西壁際から、いずれも床面上から出土している。

遺物 1～4・8は口縁部破片、5～7は底部破片、9～25は胴部破片、26は土製紡錘車である。1は

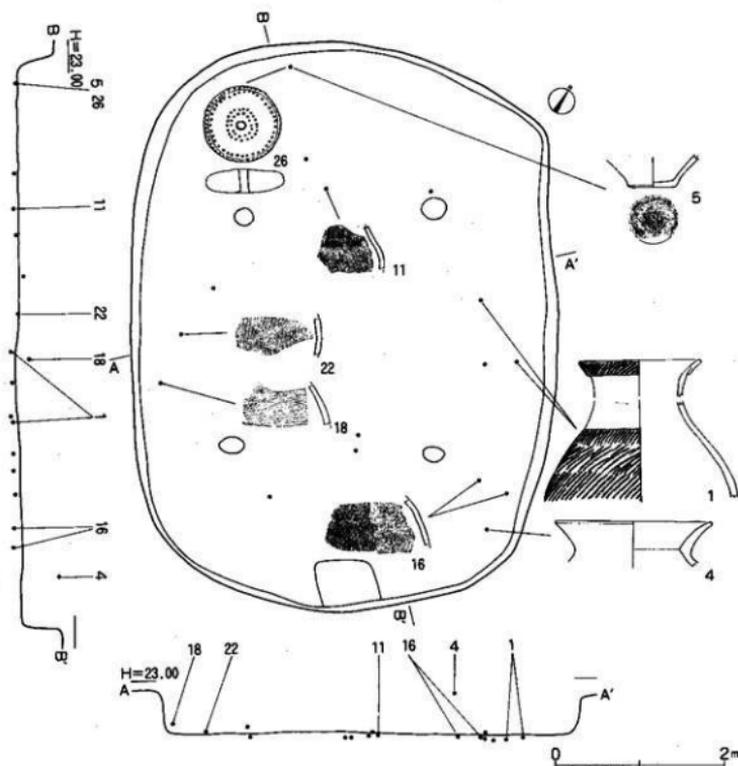


Fig.58 第37号住居跡遺物分布図

口縁部から胴部中位にかけての破片。口縁部は複合口縁で、胴部は内湾し、頸部から口縁部は小さく外反気味に立ち上がる。頸部を無文帯とし、口縁部と胴部に附加条第1種の縄紋を施文する。焼成は良好。色調は明黄褐色を呈する。2も口縁部破片で、複合口縁を呈する。口縁は小さく外反し、口唇部に附加条第1種の縄紋を施文する。焼成は良好。色調は黒褐色を呈する。3も口縁部破片。複合口縁で、外傾して開口する。口唇部に附加条第1種の縄紋を施文する。焼成は良好。色調は黒褐色を呈する。4は土師器壺形土器の口縁部破片。覆土上面の出土である。本跡には伴わないと考える。口縁は大きく外反し、焼成は良好。色調は浅黄褐色を呈する。5～7は底部破片である。5は胴部下位から底部にかけての破片である。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。底面は木葉圧痕のち、周辺はナデを施す。焼成は良好で、色調は黒褐色を呈する。6・7も底面に木葉痕を残置している。いずれも焼成は良好。色調は赤褐色を呈する。8は口縁部破片。口縁部および口唇部に附加条第1種の縄紋を施文する。9～25は胴部破片で、とくに9～15は頸部付近の破片。いずれも頸部は横ナデによる無文帯をもち、胴部は附加条第

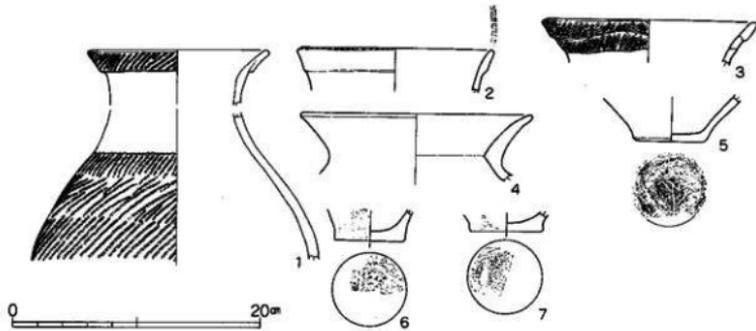


Fig.59 第37号住居跡出土遺物(1)

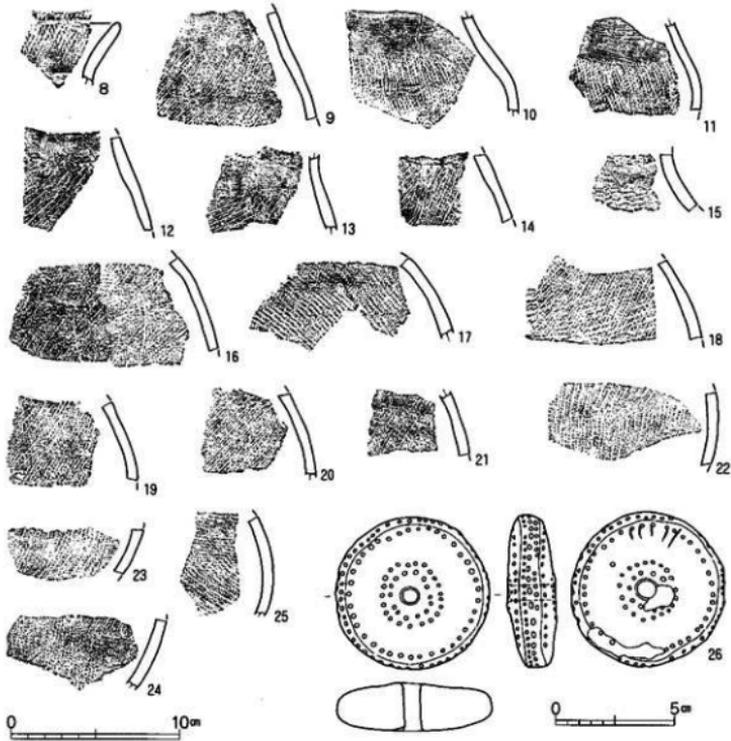


Fig.60 第37号住居跡出土遺物(2)

1種の縄紋を施文する。なお、15はS字状結節文が施文されている。16~25は胴部破片である。うち16~21は胴部上位の破片である。いずれも附加条第1種の縄紋を施文する。また22・25は胴部中位で、やはり附加条第1種の縄紋。23・24は胴部下位の破片。附加条第1種の縄紋を施文する。26は土製紡錘車である。完存品で、円盤状を呈し、最大長62.8mm、最大幅62.1mm、最大厚19.9mm、重量186gを測り、ほぼ中央に直径7.1mmの円孔を穿つ。表裏両面および側縁部に細い棒状工具による刺突文が巡る。まず中央の円孔を中心に二重に巡らし、さらに外縁部に1条、また側縁部に3列の刺突文が巡る。なお、側縁部の3列は中央がやや大きく、両側は細い刺突文列である。焼成は良好で、色調は浅黄褐色を呈する。

第38号住居跡 (SI38) (Fig.61~66)

位置 本跡は、調査区北部、6-M、7-M区の標高22.76~22.88mに位置する。北側に第39号住居跡 (SI39) が、東側に第37号住居跡 (SI37) が隣接する。

形態 平面形は、長楕円形を呈する。長軸6.58m、短軸5.48mを測り、長軸方位はN-40°-Wを指す。中型の住居跡である。壁はやや浅いものの、東辺・西辺・南辺・北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化した面が広がる。なお、本跡は焼失家屋で、とくに東側半分に比較的長くしかも太い炭化材が集中している。

覆土 5層に分層可能である。自然埋没土層である。

- 1層 7.5YR3/1 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
- 2層 7.5YR2/1 黒色土 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
- 3層 7.5YR3/2 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
- 4層 7.5YR3/4 暗褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。
- 5層 7.5YR3/3 暗褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴5本と地床炉1基が確認された。

柱穴はP1~P5で、うちP1~P4は径は狭いが、深度のもつ主柱穴である。まずP1は西側に位置し、上面が24×28cmの楕円形で、深さ91cmと最も深い。P2は北側で28×28cmの円形で、深さ81cm。P3は南側で、上面が26×28cmのほぼ円形で、深さ84cm。P4は東側で、上面が24×24cmの円形、深さ87cmを測る。またP5は入口部施設に関連するものと考えられ、南壁際の東寄りに設置され、上面が30×54cmの楕円形で、深さは7cmを測る。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北西寄りに長径60cm、短径42cm、深さ10cmを測る。断面はやや起伏をもつ平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第2層と第3層が焼土層で、とくに第2層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒を含み、締まりがある。

周溝は構築していない。

掘り方 掘り方は、北壁際は素掘り状態のまま床面とするものの、全体的に床下全面に貼床が認められとくに北側の素掘り部分を除き、北半分は粗雑で複雑な掘り窪みがみられる。

遺物出土状況 遺物は、炉跡の周辺および住居南側に散在し、とくに南西側に集中する傾向がみられる。

遺物 1は頸部から胴下半部にかけての破片で、1/6程度を遺存する。胴部最大径は胴部中部よりも上位に位置し、23.6cmを測る。胴部は胴長で、緩く内湾しながら張り、頸部は垂直気味に立ち上がりながら外反する。頸部はナデ整形による無文帯をもち、以下附加条第1種の縄紋を施文する。なお、縄紋帯上端部に二条のS字条結節文を巡らしながら区画する。焼成は良好で、黒褐色を呈する。2~6は寛

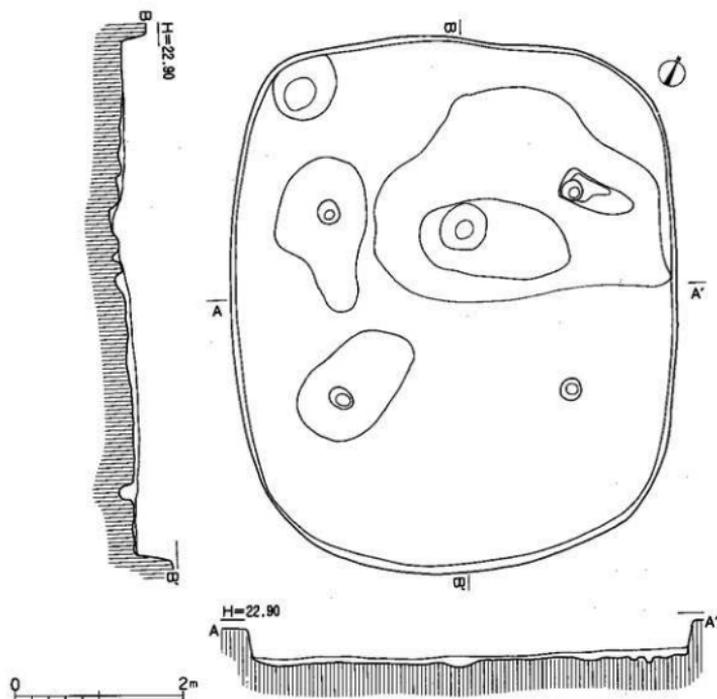
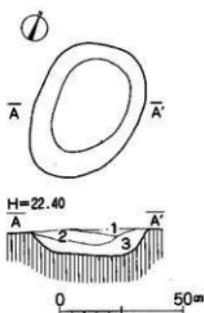


Fig.62 第38号住居跡掘り方

底部破片である。いずれも平底で、胴下半部は底部からはほぼ直線的に外傾しながら立ち上がる。6を除き底面には木葉痕を残置している。なお、2は底部の完存品である。底径8.4cmを測る。6～22は胴部破片である。7は壺の胴上半部の破片。単節RL縄紋を施文し、縄紋帯下端は三段のS字状結節紋を区画文として巡らす。無文帯は赤彩されている。8は附加条第1種の羽状縄紋が施文され、縄紋帯上端は結束端によって区切られている。9・11～19は附加条第1種の縄紋を施文する土器で、9・11～17までが胴部上半部破片。18・19は胴部下半部破片である。20～23はS字状結節文が施文されている一群。

20は三束一単位のS字状結節文が2段認められる。10・21はS字状結節文と附加条縄紋が施文されている。



1. 黒褐色土
2. 赤褐色焼土
3. 暗赤褐色焼土

Fig.63 第38号住居跡伊

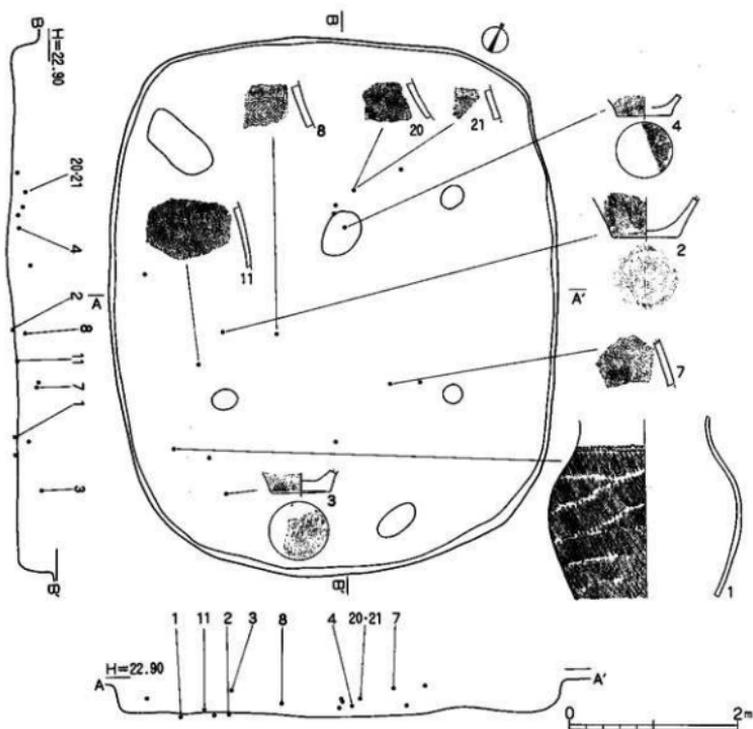


Fig.64 第38号住居跡遺物分布図

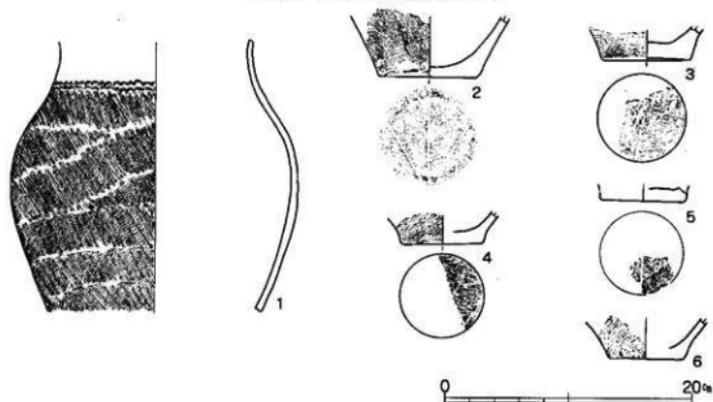


Fig.65 第38号住居跡出土遺物(1)

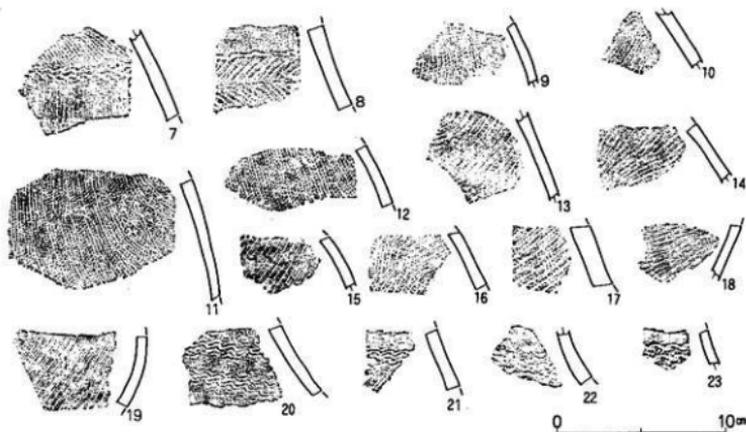


Fig.66 第38号住居跡出土遺物(2)

第39号住居跡 (SI39) (Fig.67~71)

位置 本跡は、調査区南東部、4-L、4-M、5-L、5-M区の標高22.61m~22.72mに位置する。南側に第38号住居跡 (SI38) が、南東側に第36号住居跡 (SI36) と第37号住居跡 (SI37) が隣接する。

形態 平面形は、長楕円形を呈する。長軸6.36m、短軸4.90mを測り、長軸方位はN-48°-Wを指し、中型の住居跡である。壁は南東辺、南西辺がほぼ垂直に、北西辺と北東辺が緩やかに立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床である。

覆土 4層に分層可能である。自然埋没土層である。

- 1層 7.5YR3/4 暗褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
- 2層 7.5YR3/2 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
- 3層 7.5YR4/4 褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
- 4層 7.5YR7/8 明褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基が確認された。

柱穴P1~P4は径は狭いが、やや深度のある主柱穴である。まずP1は西側に位置し、上面が18×18cmの円形で、深さ43cm。P2は北側で28×34cmの楕円形で、深さ60cm。P3は南側で、上面が22×22cmの円形で、深さ43cm。P4は東側で、上面が24×26cmのほぼ円形、深さ56cmを測る。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北西寄りに長径88cm、短径58cm、深さ16cmを測る。断面はやや起伏をもつ平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第1層~第3層まで焼土粒子を含むが、第2層と第3層が焼土層で、とくに第2層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒を多く含み、締まりがある。

周溝および入り口施設は構築していない。

掘り方 掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、炉周辺およびP3付近には柱穴状の掘り込みがみられる。

遺物出土状況 遺物は、住居全体でわずかに散在するが、西隅には口縁部の欠けた壺形土器が出土している。

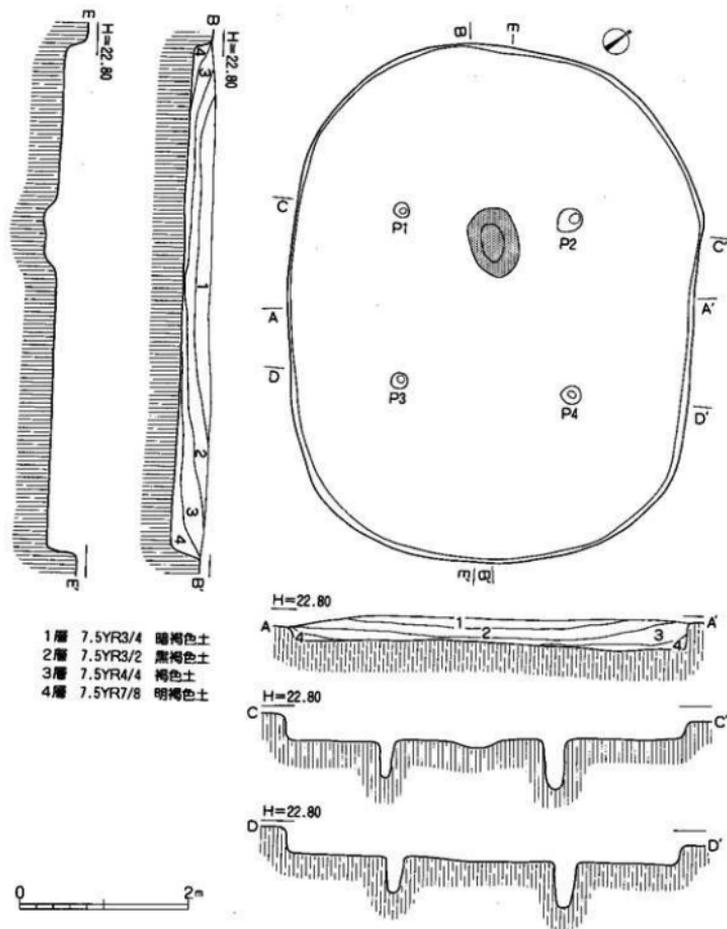


Fig.67 第39号住居跡

遺物 出土した遺物はいずれも土器のみで、壺・器台である。1は口縁部を欠損する小型の壺形土器である。最大径は胴部中位にあり、平底から胴部中位で膨らみをもちながら頸部へ移行する。外面は縦位のハケメ調整を施したのち、胴中位にヘラ状工具による細い沈線を一条巡らす。内面はナデ整形で整える。底面に木炭痕を残置させている。焼成は良好。色調はにぶい赤褐色を呈する。2は器台形土器で、脚部下位を欠損する。口径12.0 cmを測る。坏部口縁は緩く外方へ開く。口縁部は横ナデ整形。体部接合部から脚部はナデ整形を施す。内面はナデ整形によって仕上げている。焼成は良好。色調は橙色を呈

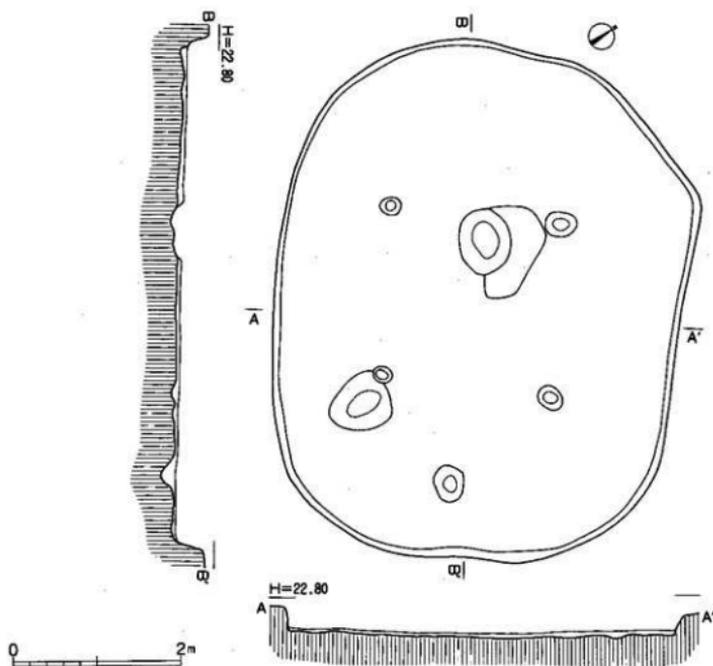


Fig.68 第39号住居跡掘り方

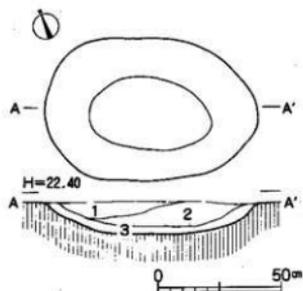


Fig.69 第39号住居跡炉

1. 明褐色土
2. 暗赤褐色焼土
3. 明褐色焼土

する。3～5は壺底部破片である。いずれも体部に附加条第1種の縄紋を施文し、底面には木葉痕を残置させている。焼成は良好である。色調は3が赤褐色、4は明赤褐色、5がにぶい褐色を呈する。

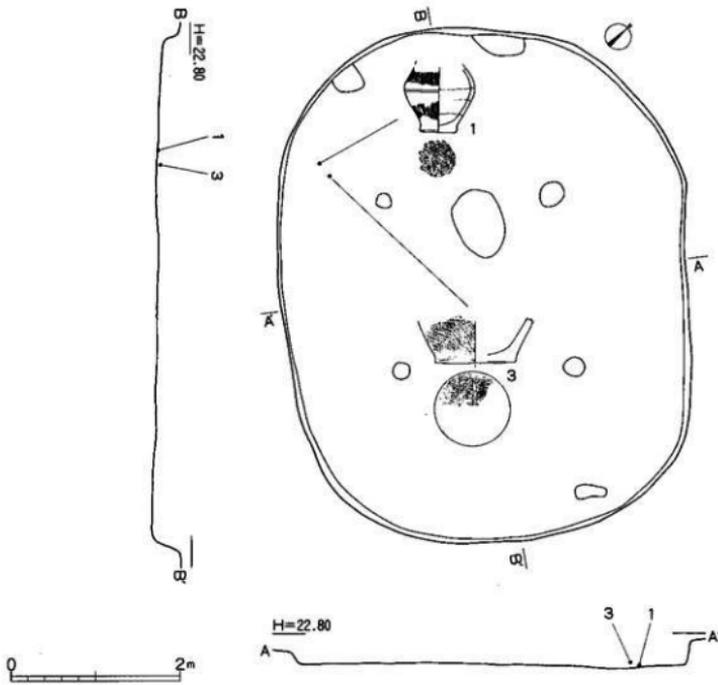


Fig.70 第39号住居跡遺物分布図

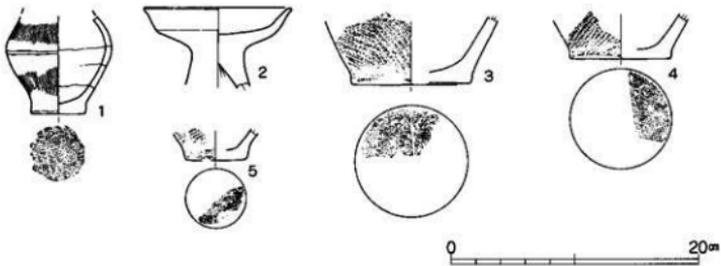


Fig.71 第39号住居跡出土遺物

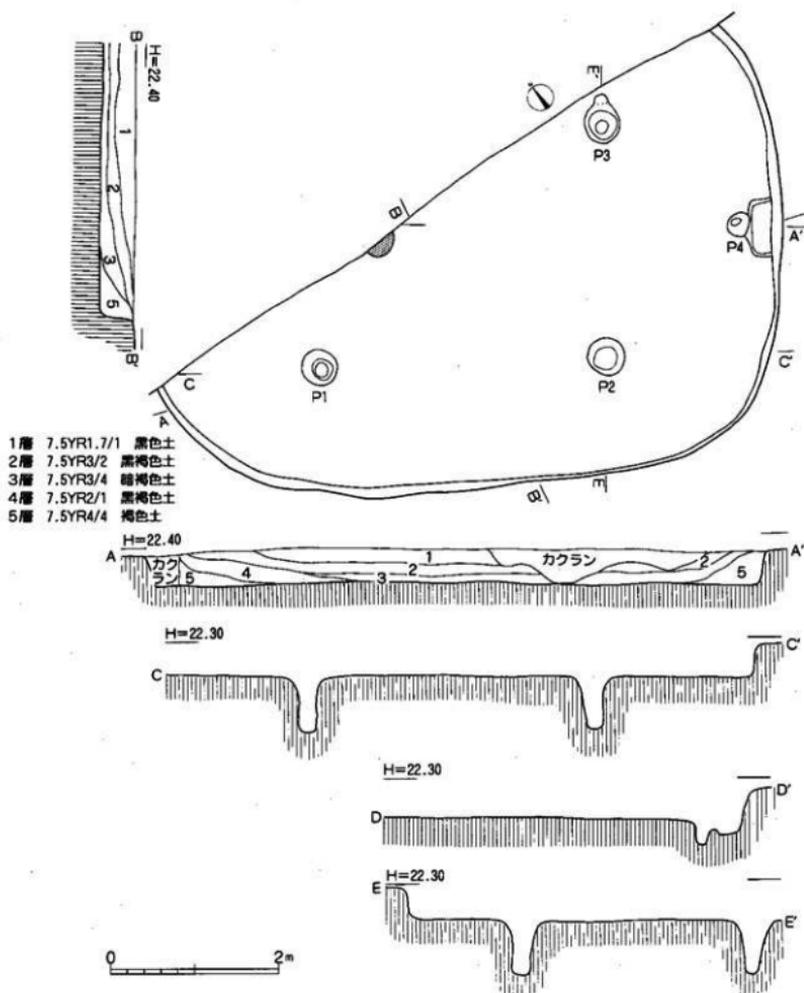


Fig.72 第42号住居跡

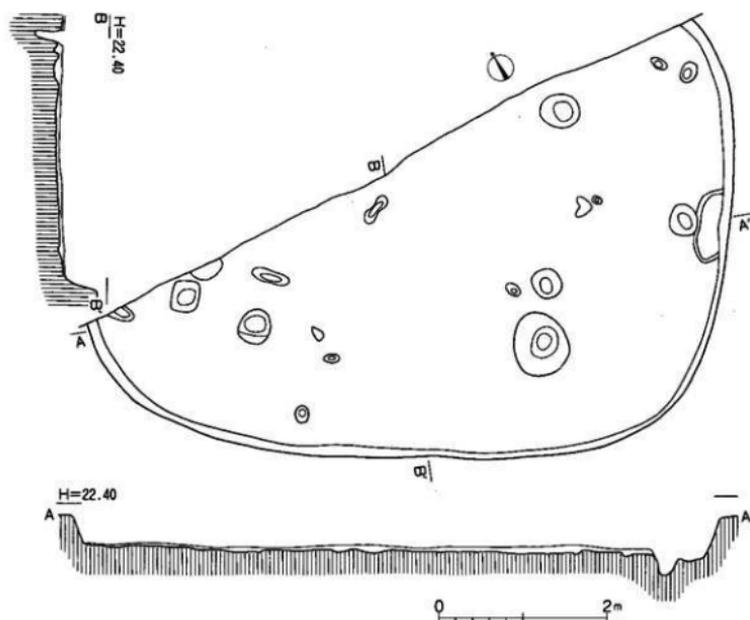


Fig.73 第42号住居跡掘り方

第42号住居跡 (SI42) (Fig.72~76)

位置 本跡は、調査区北西部、4-G、4-H、5-G、5-Hの標高23.17m~23.27mに位置する。なお本跡北半分は保存地域にあたるため調査ができず、検出された南側半分のみ発掘した。また南西側で第44号住居跡 (SI44) と第45号住居跡 (SI45) が隣接する。

形態 平面形は、楕円形を呈する。確認された推定長軸 7.58m、検出された短軸 5.50mを測り、長軸方位はN-57°-Wを指す、大型の住居跡である。確認された壁の東辺、南辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと暗褐色土の混合物からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 5層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層 7.5YR1.7/1 黒色土 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

2層 7.5YR3/2 黒褐色土 微量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

3層 7.5YR3/4 暗褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

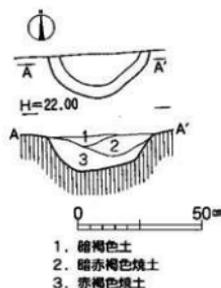


Fig.74 第42号住居跡炉

1. 暗褐色土
2. 暗赤褐色焼土
3. 赤褐色焼土

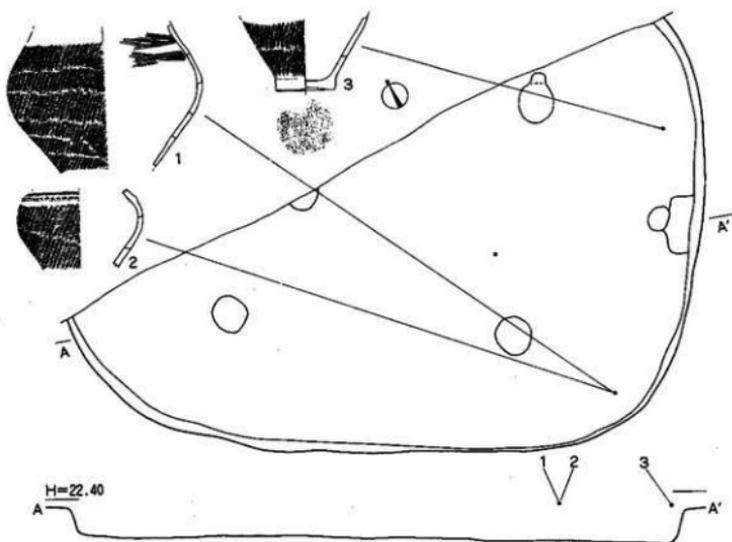


Fig.75 第42号住居跡遺物分布図

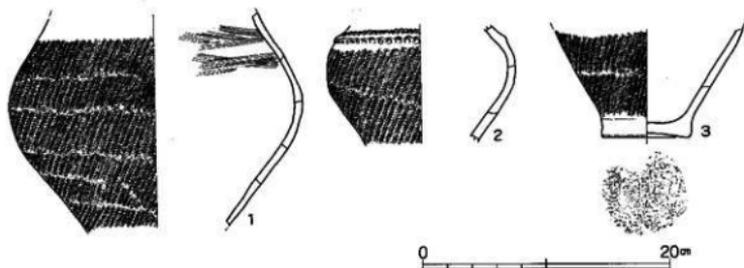


Fig.76 第42号住居跡出土遺物

4層 7.5YR2/1 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

5層 7.5YR4/4 褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴3本と入口部施設および地床炉1基が確認された。

主柱穴はP1～P3で、P1は西側に位置し、上面が40×46cmの楕円形を呈し、ほぼ中段においてさらに細く円形に掘り込まれている。深さ68cm。P2は南側でやはり2段に掘り込まれ、上面は44×48cmの楕

円形で、深さ65cmを測る。P3は東側にあたり、2段構築で、上面の規模は46×46cm、深さ64cmである。北側に位置する支柱穴は確認できない。またP4は入口部施設に付随するもので、入口部施設に接して掘り込まれている。上面は24×30cmの楕円形で、深さは28cmを測る。入口部施設は南東壁際中央に設置され、長軸70cm、短軸30cmの長方形を呈し、深さ13cmを測る。

炉は地床炉で、楕円形を呈するものの、約半分は保存区域にかかっているため、一部発掘したのみである。位置は住居中央から北寄りに長径32cm、検出された短径16cm、深さ14cmを測る。断面はやや平底で、壁は急傾して立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第1層～第3層まで焼土粒子を含むが、第2層と第3層が焼土層で、とくに第3層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒を多く含み、締まりがある。

周溝は構築されていない。

掘り方 掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもつが、小規模なピット状の掘り込みをいくつも観察できる。

遺物出土状況 遺物は、住居の南東側にわずかに散在するのみである。

遺物 壺形土器3点を図示した。1は口縁部と底部を欠損する胴部1/3程度の破片である。最大径は胴部中位にあり、24.0cmを測る。胴部は大きく内湾しながら立ち上がる。外面は附加条第1種の縄紋を施し、頸部に末端痕を残す。内面は胴上位に横位のハケメ整形、およびナデ整形を施す。焼成は良好。色調は明赤褐色を呈する。2も胴部1/6程度を遺存する壺形土器で、胴部最大径は15.6cmを測る。胴部中位で大きく張り、内湾しながら立ち上がる。外面は附加条第1種の縄紋に頸部下には縄紋原体による刺突文を巡らし、さらに3条のS字状結節文を施文する。

第43号住居跡 (S143) (Fig.77～81)

位置 本跡は、調査区東端6-H、6-I、7-H、7-I区の標高22.34m～22.44mに位置する。北西側は第42号住居跡 (S142) が、南西側は第47号住居跡 (S147) が隣接し、ほぼ中央部の東西方向に近世以降の溝状遺構 (SD01) が走っている。

形態 平面形は、楕円形を呈する。長軸4.94m、短軸4.40mを測り、長軸方位はN-65°-Wを指し、小型の住居跡である。壁は全体的に浅いが東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 5層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|----------|-------|-----------------------------|
| 1層 | 7.5YR3/1 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。 |
| 2層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 微量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 3層 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色土 | 微量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 4層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 5層 | 7.5YR4/4 | 褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。 |

住居施設 住居内部の施設として柱穴4本と地床炉1基が確認された。

柱穴はP1～P4で、P1は西側に位置し、上面が22×26cmのほぼ円形、深さ53cm。P2は北側で上面は18×28cmの楕円形で、深さ55cm。P3は南側に位置し、上面が11×12cmの円形で、深さ25cm。P4は東側で、上面が12×14cmのほぼ円形、深さ55cmを測る。

炉は地床炉で、住居中央から北西寄りに楕円形に掘り窪め、長径60cm、短径42cm、深さ16cmを測る。断面は鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第1層から第3層まで焼土粒子を多く含むが、とくに第2

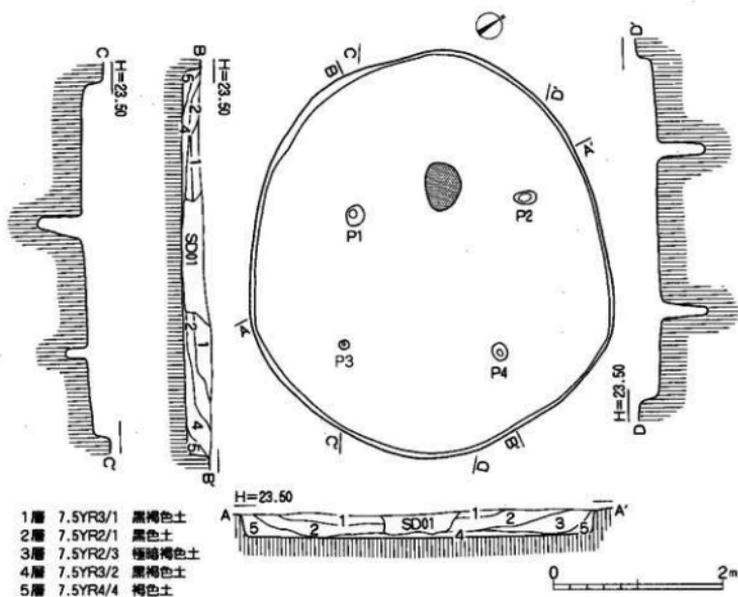


Fig.77 第43号住居跡

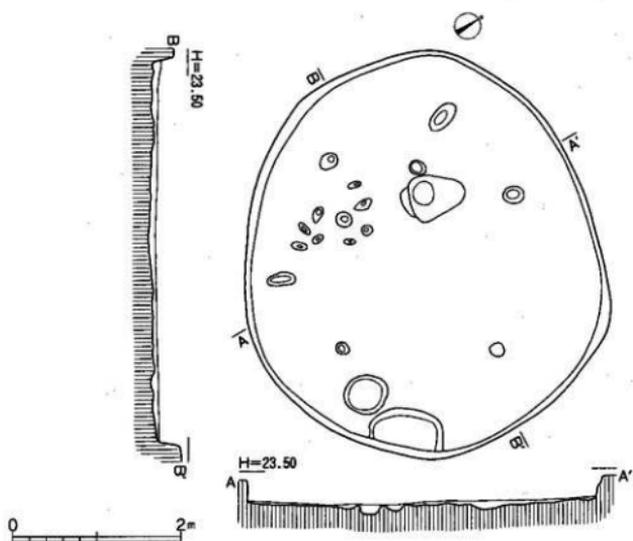


Fig.78 第43号住居跡掘り方

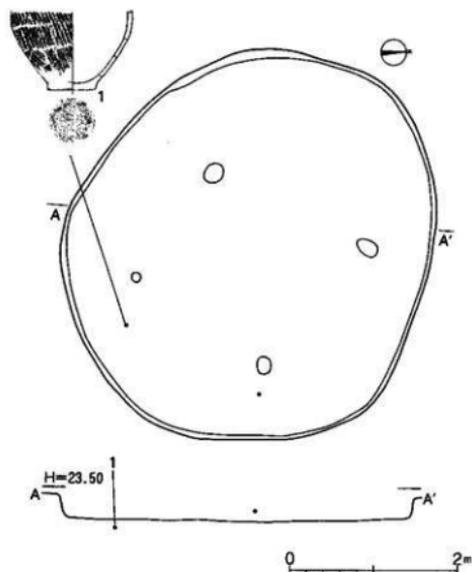
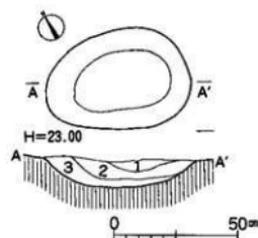


Fig.80 第43号住居跡遺物分布図



1. 暗褐色土
2. 赤褐色焼土
3. 暗赤褐色焼土

Fig.79 第43号住居跡炉

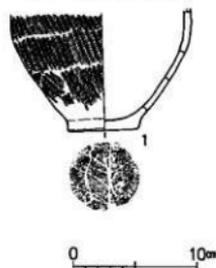


Fig.81 第43号住居跡出土遺物

層が焼土層で、多量の焼土粒を多く含み、締まりがある。

周溝および入口部は構築されていない。

掘り方 掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、西側には小規模な柱穴状の掘り込み数多くみられる。

遺物出土状況 遺物は、わずかに2点のみで、住居南東側で出土している。

遺物 図示できた遺物は壺1点である。1の壺は底部から胴下半部にかけて1/2程度遺存する。底径5.8cm、現器高9.2cmを測る。底部側面はやや垂直に短く立ち上がり、さらに内湾気味の長胴胴部へ移行する。底部側面近くまで附加条第1種の縄紋を施文し、底面には木葉痕がある。内面はナデ整形によって仕上げられている。焼成は良好で、色調は明黄褐色を呈する。

第45号住居跡 (S145) (Fig.82~86)

位置 本跡は、調査区北東部、5-F区の標高23.52m~23.60mに位置する。南東側に第44号住居跡 (S144) が、北西側に第46号住居跡 (S146) が隣接する

形態 平面形は、略円形を呈する。長軸3.72m、短軸3.60mを測り、長軸方位はN-5°-Eを指し、小型の住居跡である。壁は北壁がほぼ垂直に、東辺、西辺、北辺はやや緩やかに立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 2層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層 7.5YR3/1 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。

2層 7.5YR3/4 暗褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴5本と地床炉1基が確認された。

柱穴はP1～P4で、P1は北西側に位置し、上面が16×18cmのはほぼ円形、深さ26cm。P2は北東側で16×16cmの円形で、深さ48cm。P3は南西側に位置し、上面が16×16cmの円形で、深さ39cm。P4は南東側で、上面が16×16cmの円形、深さ25cmを測る。またP5はP4の北側に位置し、支柱穴である。炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北寄りに長径40cm、短径30cm、深さ5cmを測る。断面は鍋底状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第2層と第3層が焼土粒子を含む土層で、とくに最下層の第3層が焼土層で、多量の焼土粒を多く含み、締まりがある。

周溝および入口施設は構築しない。

掘り方 掘り方は、床下全面に及ぶが、とくに住居中央部の南北方向に溝状の掘り込みが認められるほか、南東壁際にも掘り込みが施されている。

遺物出土状況 遺物は、北東壁際に集中しているが、全体的には出土数はわずかである。

遺物 埴・壺・甕類が出土している。1は埴形土器の口縁部破片。口縁部約1/8程度遺存し、推定口径8.0cmを測る。口縁部は大きく内湾する。外面は横位のナデ整形。内面は横位のハケメ調整を施す。焼成は良好。赤褐色を呈する。2は壺底部破片で、1/8程度遺存する。推定底径6.4cmを測る。平底の底部から直線的に外方へ開く。胴部下位には附加条第1種の縄紋を施し、底面には木葉痕を残置する。焼成は良好で、褐色を呈する。3も同じく壺底部破片である。1/4程度遺存し、推定底径は6.6cmを測る。平底の底部から体部は直線的に外方へ開いて立ち上がる。胴部下位には附加条第1種の縄紋を施し、底面には木葉痕を残置する。焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。4は甕で、底部から胴下半部にかけて遺存する。底径7.0cm、現器高8.8cmを測る。平底の底部から胴長の胴部へ移行する。体部外面は横位のナデ整形。内面もナデ整形によって仕上げている。底面には木葉痕を残す。焼成は良好で、赤褐色を呈する。

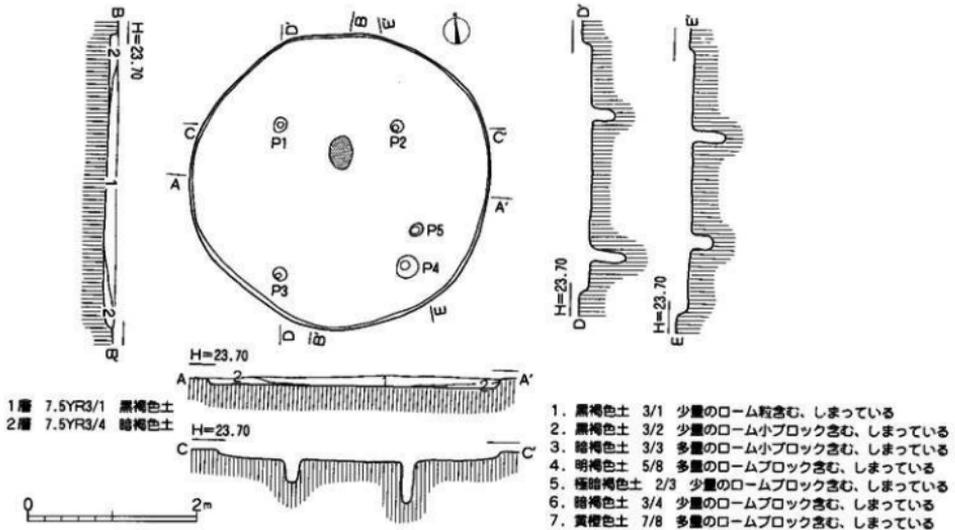


Fig.82 第45号住居跡

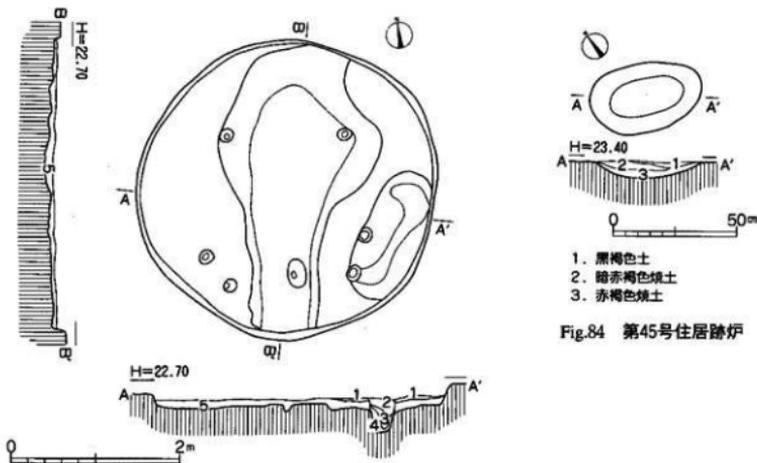


Fig.83 第45号住居跡掘り方

Fig.84 第45号住居跡炉

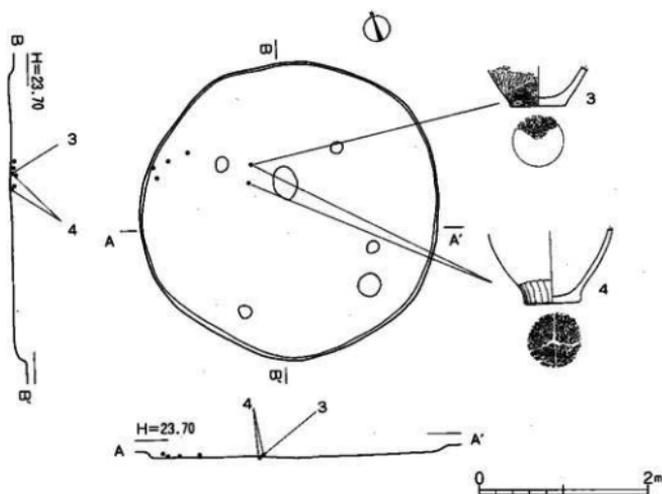


Fig.85 第45号住居跡遺物分布図

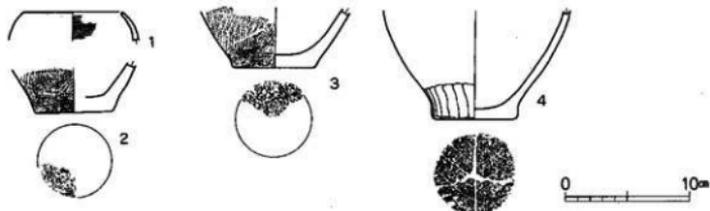


Fig.86 第45号住居跡出土遺物

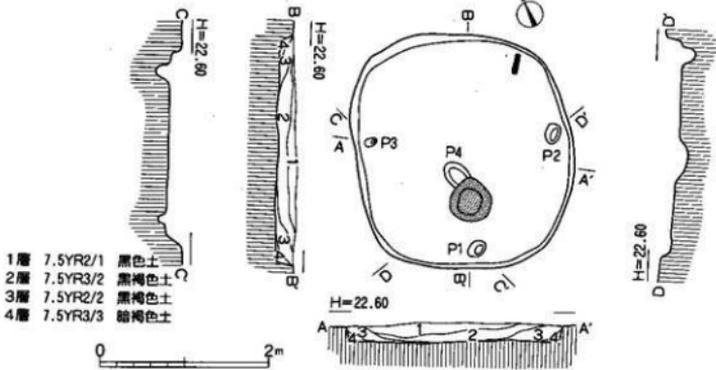
第47号住居跡 (SI47) (Fig.87~90)

位置 本跡は、調査区北西部、8-Gの標高22.36~22.40mに位置する。北東側に第43号住居跡 (SI43) が、南東側に第48号住居跡 (SI48) が隣接する。

形態 平面形は、隅丸方形を呈する。長軸2.86m、短軸2.64mを測り、長軸方位はN-20°-Eを指す。小型の住居跡である。壁は北辺がほぼ垂直に、東辺、西辺、南辺が緩やかに立ち上がる。床面は水平に広がる。

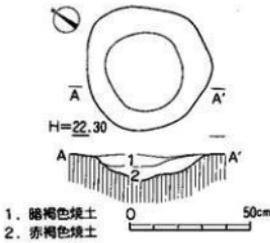
覆土 4層に分層可能である。自然埋没土層である。

- 1層 7.5YR2/1 黒色土 少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
- 2層 7.5YR3/2 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
- 3層 7.5YR2/2 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。



- 1層 7.5YR2/1 黒色土
- 2層 7.5YR3/2 黒褐色土
- 3層 7.5YR2/2 黒褐色土
- 4層 7.5YR3/3 暗褐色土

Fig.87 第47号住居跡



- 1. 暗褐色焼土
- 2. 赤褐色焼土

Fig.88 第47号住居跡炉

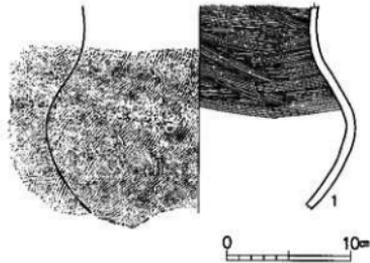


Fig.90 第47号住居跡出土遺物

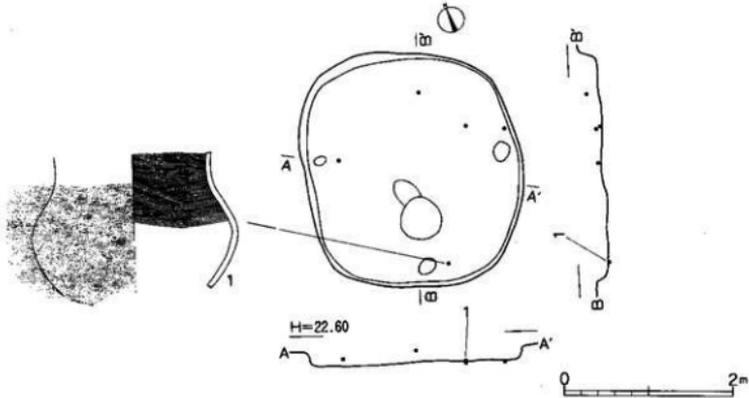


Fig.89 第47号住居跡遺物分布図

4層 7.5YR3/3 暗褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基が確認された。

柱穴はP1～P3で、それぞれ南壁際、東壁際、西壁際に設置された主柱穴と考える。まずP1は南壁際に位置し、上面が18×24cmの楕円形、深さ15cm。P2は東壁際に上面が18×26cmの楕円形で、深さ17cm。P3は西壁際に位置し、上面が10×14cmの楕円形で、深さ11cm。またP4は炉趾の北側に設置されており、炉に付随するピットと考えられ、上面が26×28cmの楕円形で、深さは7cmを測る。

炉は地床炉で、円形を呈し、住居中央から南東寄りに径52cm、深さ15cmを測る。断面はやや起伏をもつ鍋底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は2層に分層でき、第1層と第2層ともが焼土粒を含む土層で、とくに第2層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒を多く含み、締まりがある。

なお、住居跡北西側に焼土塊が堆積し、北東壁際の床面上には炭化物が検出されている。焼失家屋であった可能性が高いが、量的には少ないため炭化材や焼土塊等の場外処理が行なわれたのであろう。

周溝は構築しない。

掘り方 掘り方は、素掘り状態で床面構築されており、貼床等の床処理は認められなかった。

遺物出土状況 遺物は、壁際周囲にわずかに散在するのみである。

遺物 図示できたのは壺1のみである。1は頸部から胴下半部にかけて約1/4程度遺存する。最大径は胴部中位にもち、胴部は上下から押しつぶしたような偏球形を呈し、頸部は垂直気味に立ち上がる。胴部最大径は25.0cmを測る。文様は頸部を無文帯とし、胴部に附加条第1種の縄紋を施文し、文様帯上端が二条のS字状結節文によって区切られている。頸部無文帯はナデ整形。なお、外面には炭化状のススがほぼ全面に付着している。内面は頸部から肩部付近にかけて横位のハケム調整を施し、以下ナデ整形で仕上げている。焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する

第2節 川崎山Ⅱ期集落の遺構と遺物

1. 第Ⅱ期の概要

本遺跡の集落形成第Ⅱ期とされるのは、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかかるいわゆる「古墳時代出現期」に比定されるもので、先の萱田遺跡群で検出された権現後遺跡における「第Ⅳ群B」、ヲサル山遺跡における「Ⅱ群」に相当する。ここでは第04、05、06、08、11、22、32、40、48、51号住居跡の10軒が検出されている。この中で萱田遺跡群でもそうであったが、この時期弥生的様相と古墳的様相の住居跡に分けられているようであるが、本遺跡では住居跡の形態からみて第22号住居跡以外はとくに大きな差異はみられない。また住居群の展開は第40号を除いて調査区の南半分にとまっている。これは当該期の集落がさらに南方もしくは南西方への広がりを示唆している。というのも、本遺跡の北端の調査において当該期の住居跡が検出されていないことからそれを追認している。

なお、このⅡ期住居跡群の特徴として、まず出土する土器群が弥生的様相をもつ壺とともに口唇部に刻目をもつ台付甕を土器組成の基本としていることである。第04、06、22、48、51号住居跡がこうした土器組成をもち、とくに第04、06、22号住居跡は出土遺物も豊富で、注目されてもよい条件を備えている。また住居跡の形態は第22号住居跡のように大型の円形プランをもつものは皆無で、他はいずれも隅丸方形もしくは隅丸長方形である。概して方形は小さく、長方形は中型を呈する。

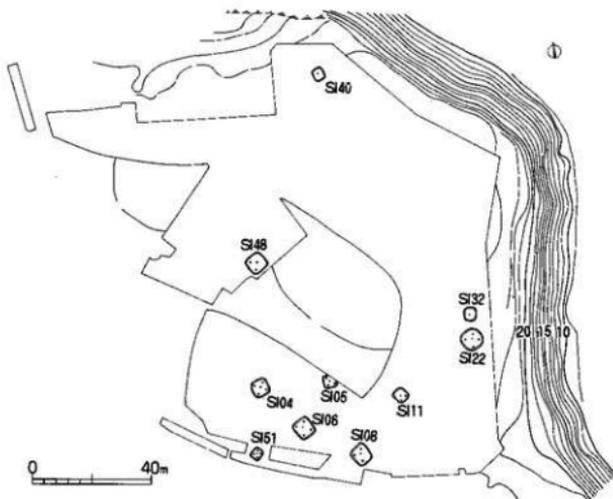


Fig.91 川崎山Ⅱ期集落

2. 第Ⅱ期の住居址

第04号住居跡 (SI04) (Fig.92~97)

位置 本跡は、調査区南東部にあたり、13-H、13-I、14-H、14-I区の標高22.26m~22.40mに位置し、住居跡群の南西端にあたる。北側に第01号住居跡(第01号)が隣接する。

形態 平面形は、隅丸方形を呈する。長軸6.50m、短軸5.40mを測り、長軸方位はN-23°-Wを指し、やや大型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 9層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|---------|-------|-----------------------------|
| 1層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。 |
| 2層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 3層 | 10YR6/8 | 明黄褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 4層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 5層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。 |
| 6層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 7層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 少量のロームブロックを含み、締まりがある。 |
| 8層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 9層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 少量のローム粒子を含み、締まりにやや欠ける。 |

住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉2基および入口施設の盛り土遺構とピット2本が確認された。

主柱穴はP1~P4で、P1は北西部に位置し、上面が20×18cmのほぼ円形、深さ48cm。P2は北東部で22×18cmの楕円形で、深さ59cm。P3は南西部に位置し、上面が22×18cmの楕円形で、深さ47cm。P4は南東部で、28×26cmの円形、深さ45cmを測る。また南壁やや東寄りに径約150cm、幅35cm、高さ8cmの土盛り遺構の入口部を設け、さらに2基のピットをもつ。P5は上面が24×18cmの楕円形で、深さ20cmと浅い深度。P6は上面が52×40cmとやや広い楕円形で、深さは60cmと深く掘り込まれている。

周溝は全周し、幅8~22cm、深さ4~11cmを測り、底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに掘り込まれている。

地床炉は住居中央から北西寄りに東西2基設置され、西側炉(炉1)の平面形は楕円形を呈し、長径112cm、短径64cm、深さ12cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。また東側炉(炉2)の平面形も楕円形を呈し、長径74cm、短径50cm、深さ10cmを測る。断面はやや鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がる。焼土層が中央部に堆積し、円形の燃焼面を形づくっている。

掘り方 掘り方は、床下全面におよぶが、とくに北壁際や南壁際周辺には粗雑で複雑な掘り窪みが認められる。

遺物出土状況 遺物は、住居全体に散在するが、とくに住居北側から南東部の炉跡周辺に集中する。その内、個体として図示しうる資料は、壺1点、鉢1点、甕12点、埴1点である。

遺物 1は1/4程度遺存する壺頸部破片である。胴中位に最大径をもつもので、外面頸部から胴上位にかけてRLの単節縄紋が施文され、さらに縄紋帯の上下端には3条のS字状結節文によって区画している。外面無文部は丁寧なミガキが施され、赤彩が加えられている。内面頸部には横位のハケメが施され、無文部にはナデ整形が加えられている。焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。2は口縁部のみ遺存する鉢である。推定口径14.0cmである。体部から外傾しながら開口する。外面には横・斜め、内面に

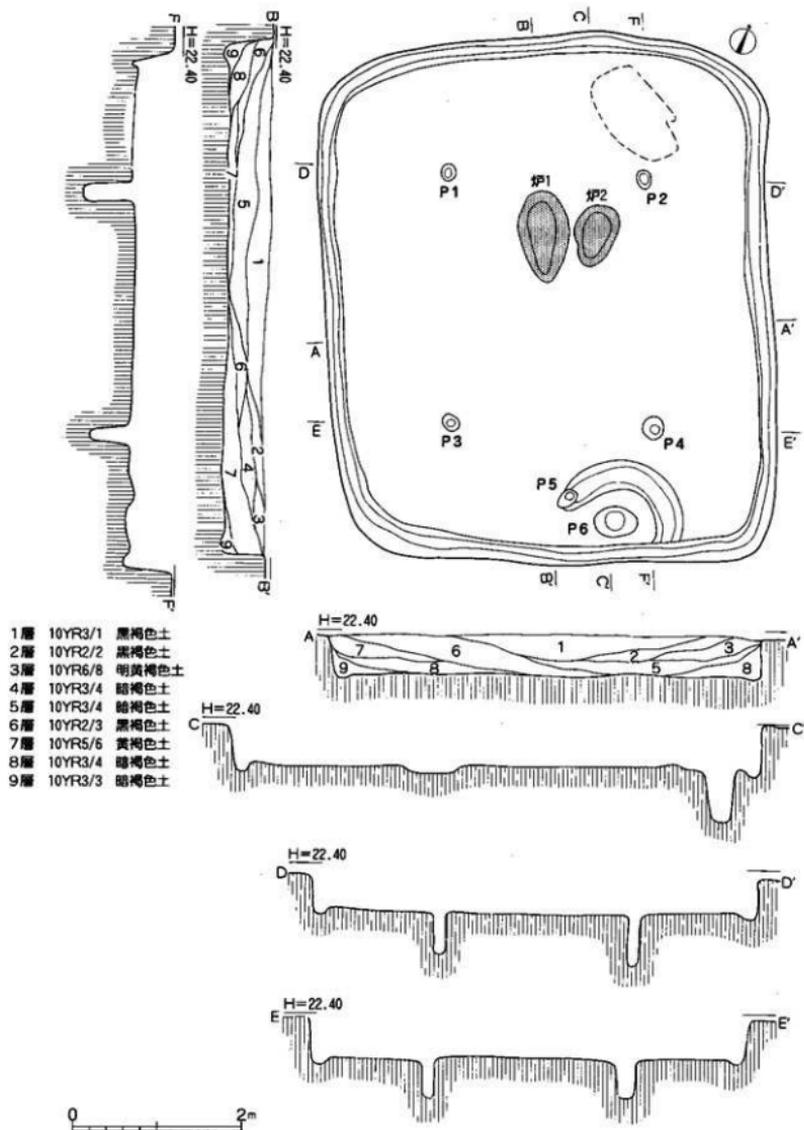


Fig.92 第04号住居跡

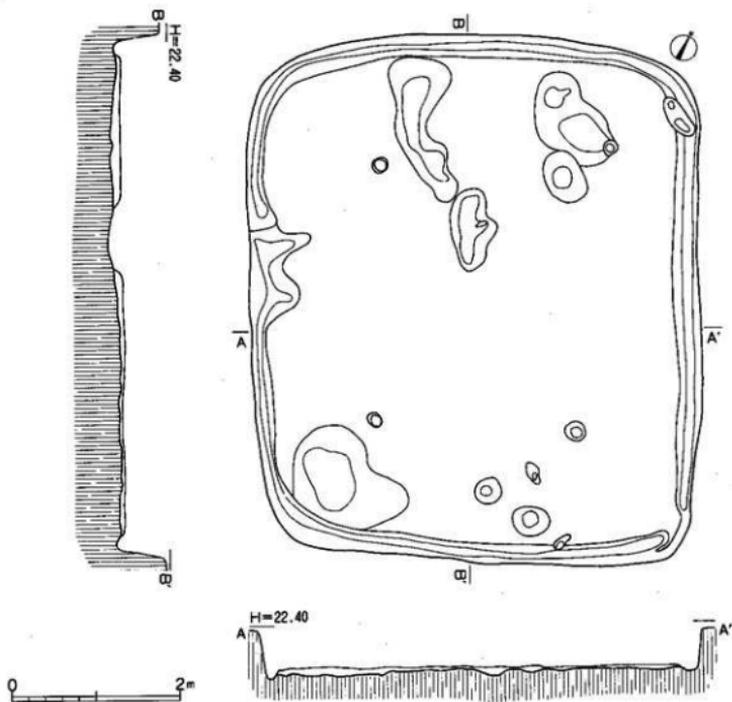


Fig.93 第04号住居跡掘り方

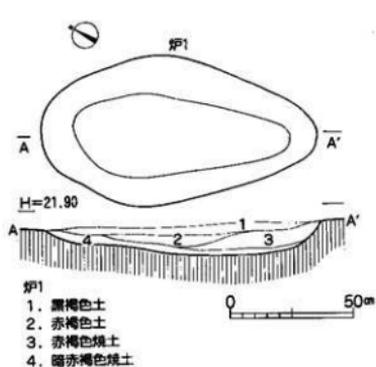


Fig.94 第04号住居跡炉 (炉1)

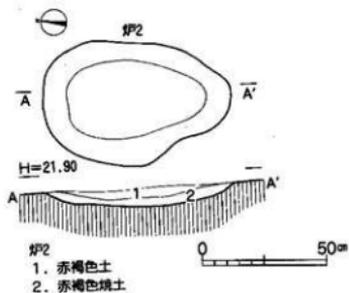


Fig.95 第04号住居跡炉 (炉2)

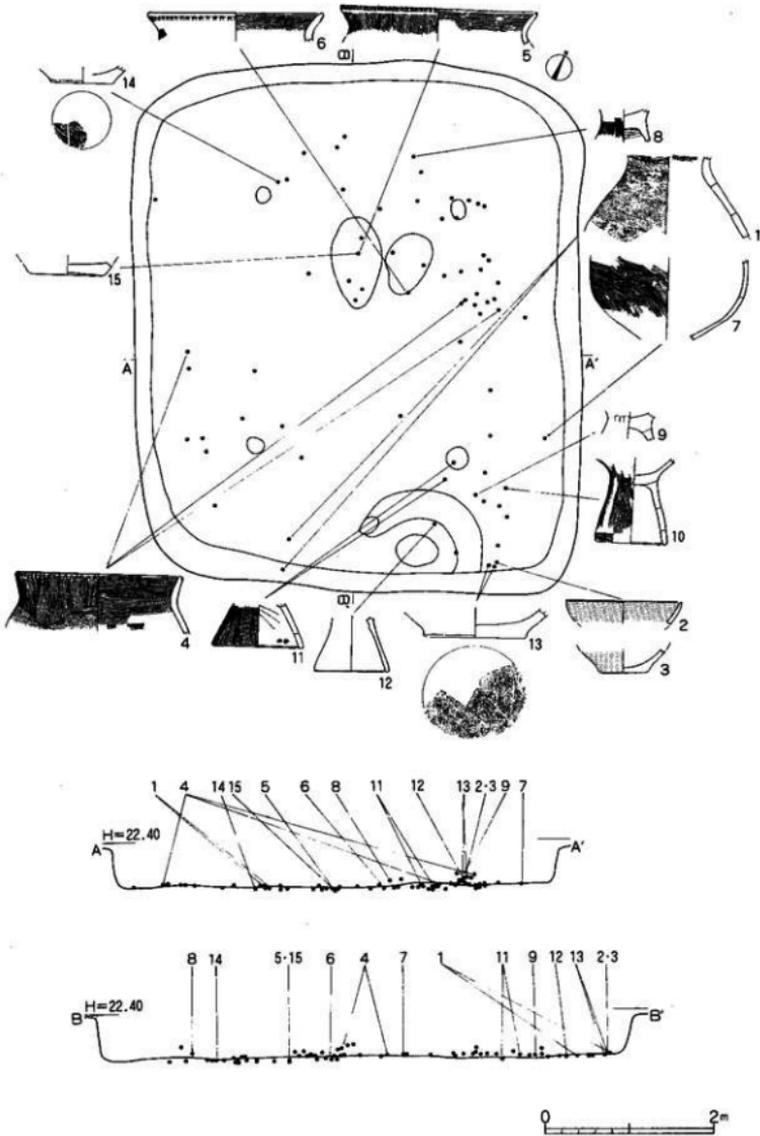


Fig.96 第04号住居跡遺物分布図

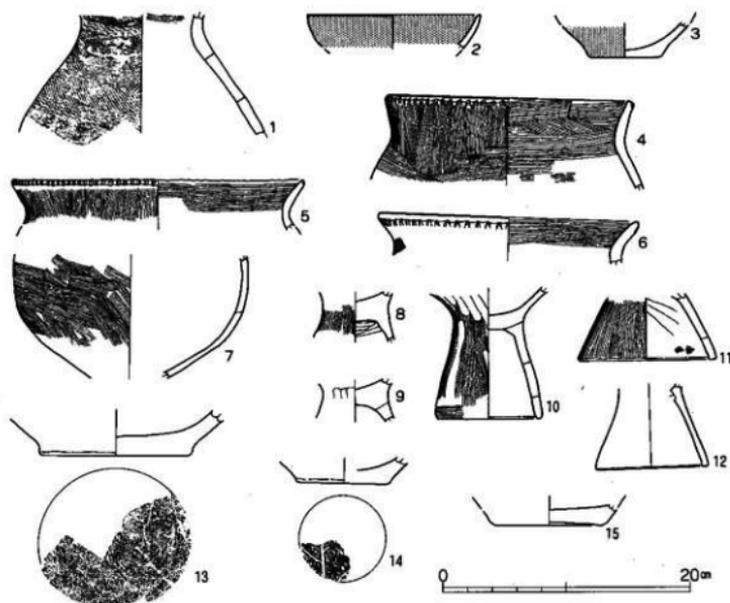


Fig.97 第04号住居跡出土遺物

は横位の入念なミガキが加えられ、内外面とも赤彩が施されている。焼成良好で、硬質の土器である。3は埴の底部破片と考える。底径5.8cmを測る。平底で、外傾して立ち上がる。外面はミガキ整形ののち、赤彩が施され、内面はナデ整形により仕上げられている。焼成は良好である。4～12は台付壺である。4～6は口縁部破片で、4は口縁部1/10程度の破片である。頸部以上が短い形態で、推定口径23.8cmを測る。外面には縦位のハケメ調整が施され、端部には押捺が加えられる。内面も口縁部のみ横ハケが施されている。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。5は口縁部1/3程度を欠損する。推定口径20.2cmで、口縁は垂直気味に立ち上がり、胴部は偏球形となる形態をもつ。端部にはハケ具の押捺による刻目が巡り、縦位および斜位のハケメが加えられている。内面も横ハケが施されている。焼成良好で、黒褐色を呈する。6は口縁部1/6程度を遺存する。口縁部はやや大きく外方へ開く。端部に押捺による刻目が施され、外面の頸部付近にハケメが残置する。内面口縁部は横ハケが加えられている。焼成は良好。色調はにぶい橙色を呈する。7は胴中位から下位にかけて約1/4を遺存する。胴部最大径が18.5cmを測り、胴部中位が球形を呈する形態の台付壺であろう。外面には横・斜めのハケメ、内面は捺痕を残す横ナデが施されている。焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。8・9は台付壺の接合部。8の外面には縦位のハケメが施されている。10～12は甕脚部片である。10は脚部がほぼ垂直に近い立ち上りをもつ。外面には縦位のハケメを施されているが、部分的にナデで消されている。11は脚部が大きく広がる。外面に縦位のハケメを施す。12の外面はナデ整形が施されている。いずれも焼成は良好で、10・12はにぶい褐色、11は褐色を呈する。13～15は底部破片。13・14は木炭痕を残置している。

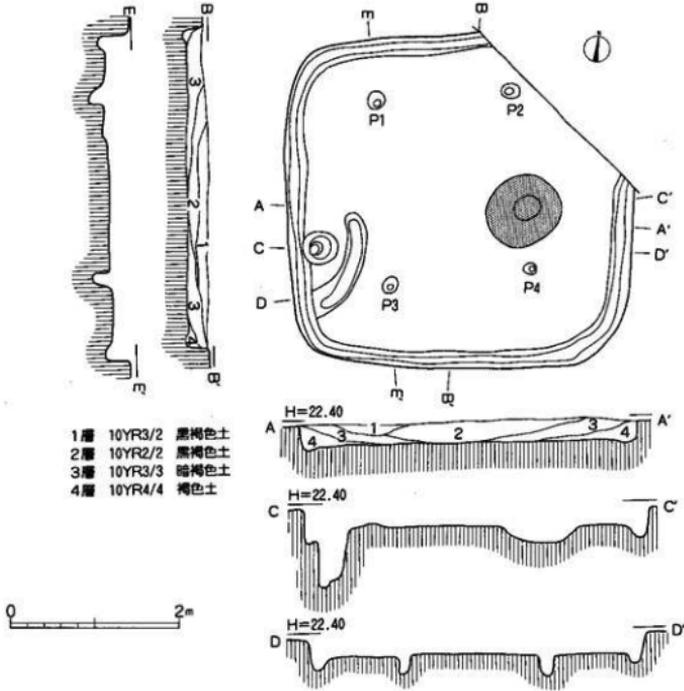


Fig.98 第05号住居跡

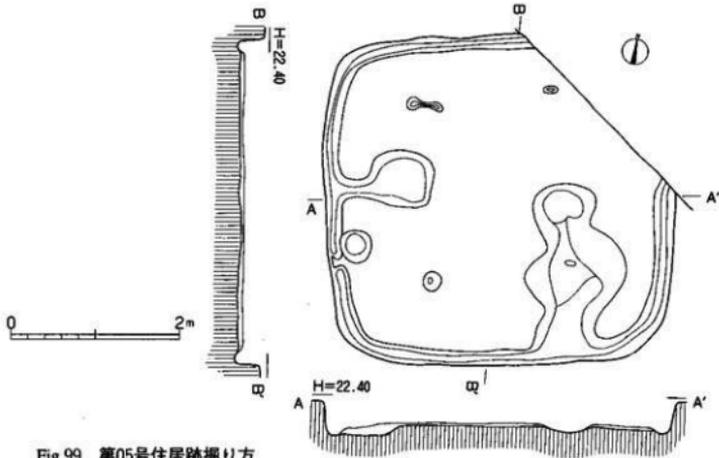


Fig.99 第05号住居跡掘り方

第05号住居跡 (SI05) (Fig.98~102)

位置 本跡は、調査区の南部、13-K、14-K区の標高22.30m~22.36mに位置し、北東隅が中央保存区域にかかるため、調査不能であった。なお、北西側に第03号住居跡 (SI03)、南西側に第06号住居跡 (SI06) が隣接する。

形態 本跡は、北東隅が保存区域にかかっているため、調査不能であるが、平面形はほぼ隅丸方形を呈する。長軸4.24m、短軸4.08mを測り、長軸方位はN-84°-Eを指し、やや小型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ直線的で垂直に立ち上がる。床面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 4層に分層可能である。自然埋没土層である。

- 1層 10YR3/2 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
- 2層 10YR2/3 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
- 3層 10YR3/3 暗褐色土 多量のローム粒子を含

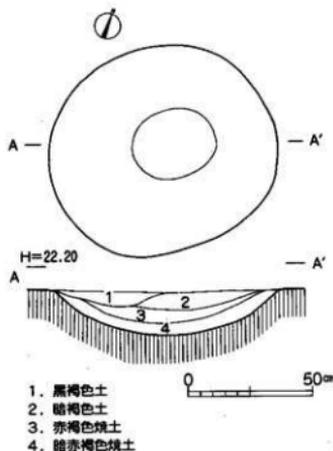


Fig.100 第05号住居跡跡

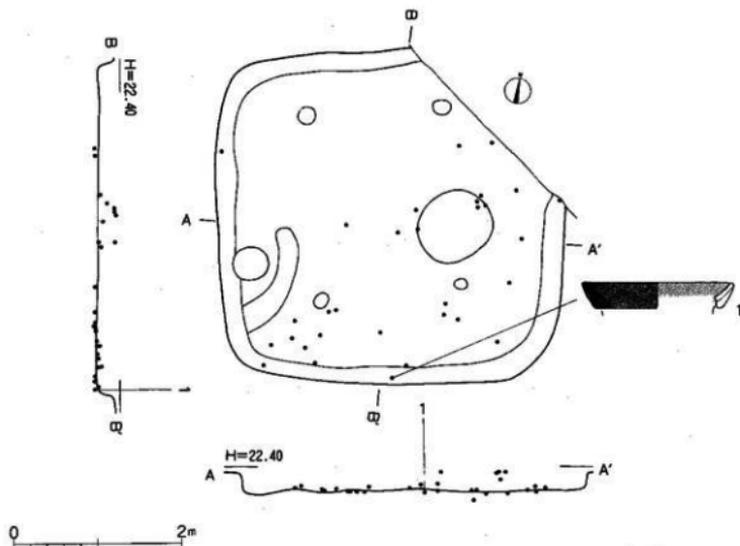


Fig.101 第05号住居跡遺物分布図



Fig.102 第05号住居跡出土遺物

み、粘性にやや欠け、締まりがある。

4層 10YR4/4 褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基および入り口施設の盛り土遺構とピット1本が確認された。

P1～P4が主柱穴で、P1は北西部に位置し、上面が22×18cmのほぼ円形、深さ19cm。P2は北東部で上面が16×14cmと小型の円形で、深さ26cm。P3は南西部に位置し、上面が22×22cmの円形で、深さ21cm。P4は南東部で上面が20×16cmの楕円形、深さ21cmを測る。また西壁やや南寄りに径約150cm、幅25cm、高さ6cmの土盛遺構と土盛遺構に囲まれるように二段掘り貯蔵穴を設置する。開口部が42×40cmの円形で、深さ47cmで、さらに上面が15×14cm、深さが60cmに掘り込まれている。

周溝は全周し、幅16～24cm、深さ8～14cmを測り、幅、深さとも均一な周溝で底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに掘り込まれている。

地床炉は住居中央から東寄りに設置され、その平面形は楕円形を呈し、長径92cm、短径84cm、深さ20cmを測る。断面は鍋底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は4層に分層でき、第3層と第4層が焼土層で、とくに第3層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒子を多く含み、締まりがある。

掘り方 掘り方は床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、とくに炉跡の南側と入口施設の周辺はさらに浅い掘り込みを呈している。

遺物出土状況 遺物は、住居南半分に散在するが、小破片が多く、実測可能な壺1点と壺破片1点のみ図示した。

遺物 1 は壺形土器の口縁部破片である。推定口径8.2cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口縁部および口管部に網目状燃糸文が施文され、内面は横位のナデが施され、赤彩が認められる。焼成は良好。硬質の土器である。2は壺頸部の破片である。6本単位の櫛歯状工具による縦位と横位の櫛歯文を施文する。焼成は良好で、にぶい黄褐色を呈する。

第06号住居跡 (SI06) (Fig.103～107)

位置 本跡は、調査区南部で、15-Gの標高22.02m～22.20mに位置する。東側に第07号住居跡 (SI07) が、北東側に第05号住居跡 (SI05) が隣接する。

形態 平面形は、隅丸方形を呈する。長軸7.00m、短軸6.25mを測り、長軸方位はN-45°-Wで、やや大型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ直線的に延び、垂直に立ち上がる。床面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土、暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。なお、床面には焼土や炭化物が散々し、とくに西隣壁下に集中していた。火災住居であろう。

覆土 8層に分層可能である。自然埋没土層である。

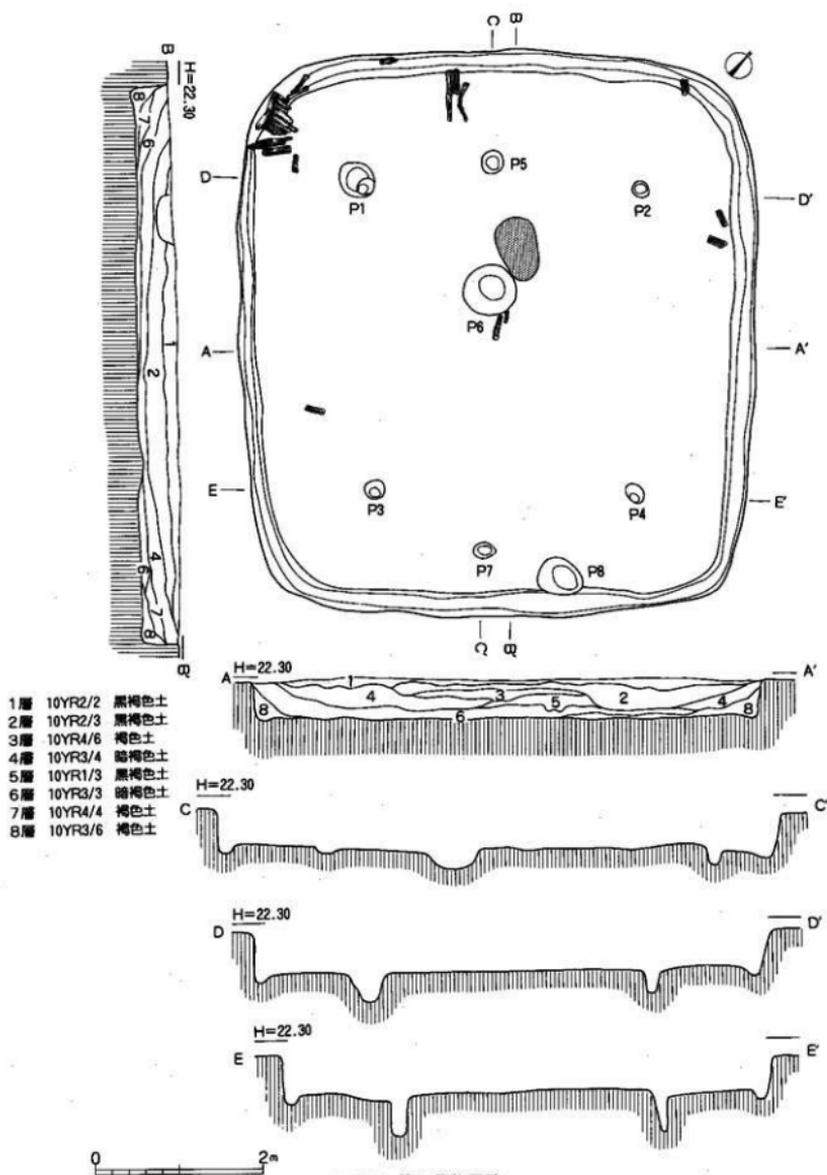


Fig.103 第06号住居跡

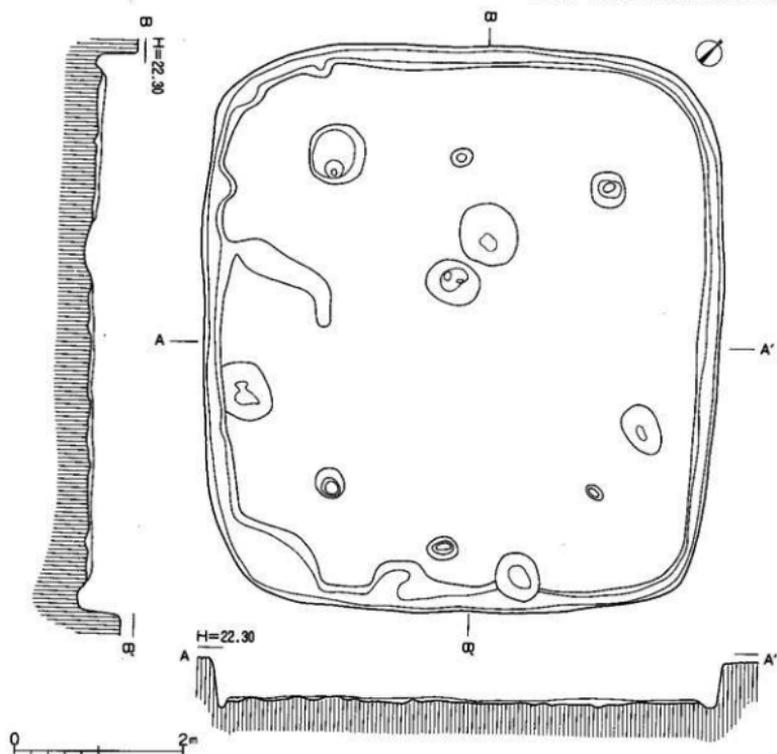


Fig.104 第06号住居跡掘り方

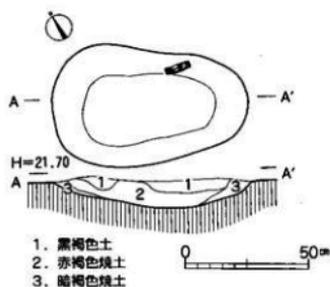


Fig.105 第06号住居跡炉

- 1層 10YR2/2 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 2層 10YR2/3 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 3層 10YR4/6 褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
- 4層 10YR3/4 暗褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 5層 10YR1/3 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。
- 6層 10YR3/3 暗褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 7層 10YR4/4 褐色土 少量のロームブロックを含み、締まりがある。

8層 10YR3/6 褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本と支柱穴1本、および貯蔵穴1基、地床炉1基ならびに入り口施設として梯子穴1本と炉脇に円形ピット1基を確認された。

P1～P4は主柱穴で、P1は北側に位置し、上面が50×40cmと大きく楕円形を呈し、さらに住居中央に向かって、径25cmのほぼ円形のピットが穿っており、2段堀りがみられ、柱の移動もしくは移し替えピットと思われる。下位段での深さは12.1cmと円形を呈する。P2は北側で上面が22×20cmの円形で、深さ30cm。P3は南側に位置し上面が25×25cmの円形で、深さ48cm。P4は東側で、上面が26×18cmの楕円形、深さ48cmを測る。また支柱穴として住居中央北西寄り、P1とP2の中間に配置されP5とする。大きさは上面が30×28cm、深さ8cmの円形ピットである。梯子穴は南東壁中央に位置し、上面が28×20cmの楕円形で、深さは19cmを測る。炉南側に径65×62cm、深さ15cmの円形ピットP6が設けている。炉施設の一部と思われる。

貯蔵穴P8は、南東壁や北東寄りに径54×44cm、深さ52cmの楕円形を呈し、底面は平坦である。

周溝は全周し、幅16～28cm、深さ8～14cmを測り、底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに掘り込まている。

炉は地床炉で、住居中央から北寄り楕円形に浅く掘り込まれている。規模は長径80cm、短径50cm、深さ3cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第2層が赤褐色焼土層で、多量の焼土粒子を含み、締まりがある。なお、西隔壁際から北西壁および炉跡周辺には炭化材が出土し、またP4周辺には焼土塊が検出されている。焼失家屋である。

掘り方 掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっている。

遺物出土状況 遺物は、住居全体に散在するが、とくに北西側と南東側に集中する。貯蔵穴周辺は甕類がまとまって廃棄されていた。その内、個体として図示しうる資料は、壺6点、甕10点、埴1点、鉢2点、土製勾玉1点である。なお、この土製勾玉は炉跡脇より出土したものである。

遺物 1～4は壺形土器の口縁部破片である。1は1/2を遺存する壺で、口径30.0cmの大型の土器である。口縁部は粘土帯を重ね合わせた複合口縁で、下端には2段の段を有する。口縁端面にはヘラ状工具による刻目が加えられている。口縁部外面には網目状然糸文が施され、8本単位の棒状貼付文が付けられている。棒状貼付文には浅い押捺が刻まれ、貼付文間には円形赤彩文が施されている。口縁部下位の頸部縦位のハケメ調整が加えられ、ミガキが施されている。内面はミガキ調整の後、赤彩が施されている。焼成は良好である。2は口縁部のみ1/2程度を遺存し、推定口径14.2cmの小型の壺である。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、外面の口縁部は棒状貼付文が等間隔で付され、貼付文間には円形赤彩文が施文されている。また頸部には縦位のハケメ調整、内面は横位のミガキが施され、赤彩されている。焼成は良好である。3は1/8程度を遺存する口縁部破片である。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口縁部は磨耗が著しく整形および施文の判読は困難であるが、口唇部および口縁部は単節RL縄紋が施文されている。また内面は横位のハケメ調整が施され、内外面とも赤彩が認められる。焼成は良好である。4は1/8程度を遺存する口縁部破片である。やや内湾する口縁部に粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、推定口径14.0cmを測る。口縁部外面は2本一単位の棒状貼付文を付し、網目状然糸文が施文されている。口唇部にはRLの単節縄紋を施文し、円形赤彩文を施す。口縁部下端部にはハケメ工具による刻目が巡る。内面は丁寧なミガキ調整され、赤彩が施されている。焼成は良好で、かなり硬質の土器である。5は壺底部破片。底径9.7cmを測り、大きく外方へ開く。内外面ともナデ整形によって下調整のハケメ痕を消している。赤彩が認められる。内面にはやや器面の粗れが目立つ。焼成は良好。

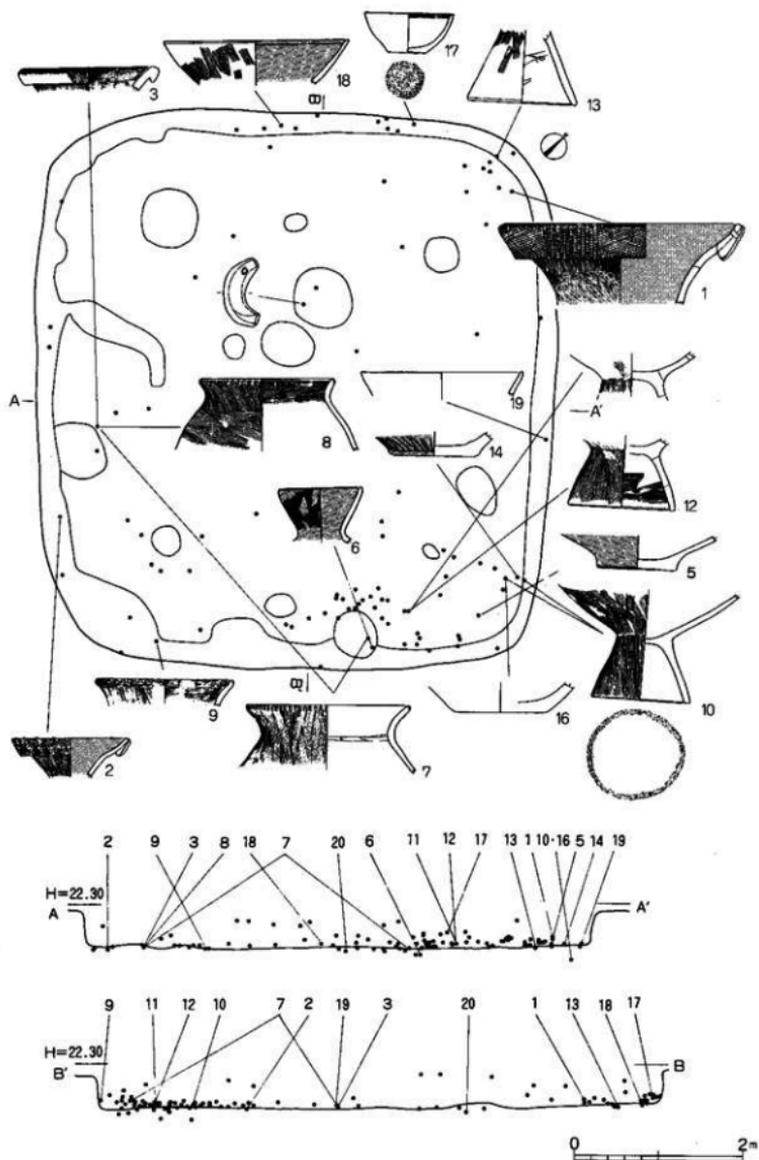


Fig.106 第06号住居跡遺物分布図

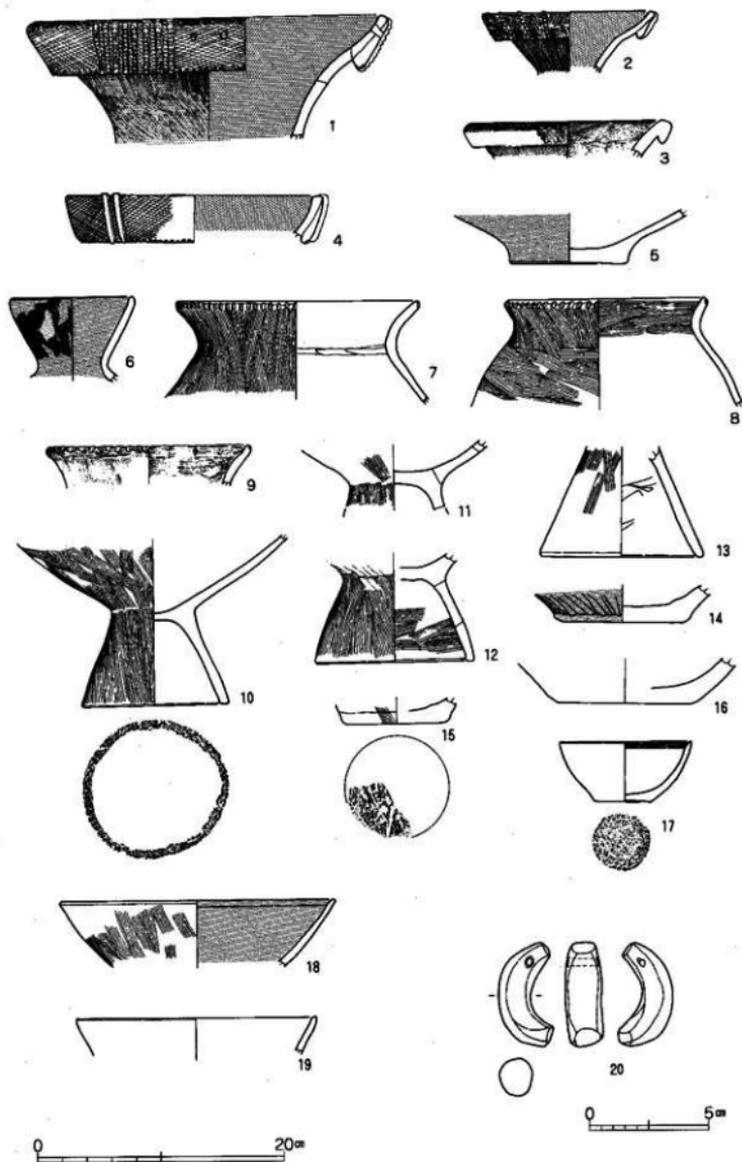


Fig.107 第06号住居跡出土遺物

色調は明赤褐色を呈する。14・16も壺の底部破片であろう。14は平底で、底径14.0cmを測る。外面がミガキ調整の後、赤彩が施されている。16も平底で、底径11.0cmを測る。底面の器面の粗れが目立つ。6は口縁部のみ遺存する。口径10.0cmを測る。口縁部直口縁に近い形態をもつ。外面にはほぼ縦位のハケメ調整が施され、内面は丁寧なミガキが施されている。内外面とも赤彩が認められる。焼成は良好である。7～13は台付甕である。7は口縁部から胴部上位にかけての2/3程度遺存する。口径19.6cmを測り、口縁部「く」の字状に大きく外反する。口唇部には外方からヘラ状工具による刻みが施されている。口縁部から胴部には縦位のハケメ調整が加えられ、内面丁寧なナデ整形が施されている。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。8は口縁部から胴部中位にかけて2/3が遺存し、口径は16.5cmを測る。頸部がかなり強く屈曲する形態で、口縁部は短く外方へ開く。口唇部はハケ具による刻みが施されている。外面は縦位のハケメ調整が加えられ、内面口縁部にも横位のハケメ調整が行なわれている。また内面胴部はナデ整形が施されている。焼成はやや良好で、橙色の色調を呈している。9は1/10以下の遺存する口縁部破片で、「く」の字状に外反する口縁部はかなり細かなハケメ調整が横位と縦位方向に施されている。また口唇部にはハケ具による刻みが巡る。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。11～13は甕接合部と脚部片である。11は接合部破片で1/2程度を遺存し、外面はハケメ調整が認められる。内面は脚部ともナデ整形が施されている。焼成は良好で、橙色を呈する。10～13は脚部が遺存している。10は脚部が完存する。脚は直立気味に立ち上がり、体部は大きく外方へ開く。脚部径は12.0cmを測る。外面は縦位および斜位のハケメ調整が加えられ、内面は脚部とも丁寧なナデ整形が施されている。焼成は良好で、灰褐色を呈する。12は脚部直立気味に立ち上がるが、脚部径が12.8cmとやや広めで脚高が6.5cmを測るのみである。外面は比較的粗いハケメ調整を縦位に調整し、内面はハケメ調整の後、ナデ整形が加えられている。焼成は良好で、赤褐色を呈する。13は脚部1/4程度を遺存する。推定脚部底径13.2cmを測る。外面には比較的粗いハケメ調整が加えられ、内面はナデ整形が施されている。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。15は平底の甕底部破片である。約1/4程度を遺存し、底面には木葉痕を残置している。焼成は良好。色調は橙色を呈する。17は埴形土器で、口唇部の一部を欠損するもの、ほぼ完存品である。口径10.6cm、底径4.5cm、器高4.9cmを測る。底部から内湾気味に外方へ開く、口唇部の形態は内削状を呈し、内外器面とも表面の剥離が目立つ。底面は周縁が輪状に高まる。外面はナデ整形、内面は口唇部が横位のハケメが加えられ、体部はナデ整形である。焼成はやや良好。色調はにぶい褐色を呈する。18・19は鉢形土器の口縁部破片である。18は口縁部のみ1/8程度を遺存する。口縁はほぼ直線的に大きく外方へ開く鉢で、推定口径22.4cmを測る。外面は縦位のハケメ調整、内面は口唇部下が横位のハケメ、体部はミガキが施されている。内面には赤彩が認められ、おそらく外面にも赤彩が施されているものと思われるが、剥離し確認できない。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。19はわずかに遺存する鉢口縁である。内外面ともナデ整形が施されている。焼成は良好。明褐色を呈する。20は土製勾玉の完存品である。C形を呈し、全長4.23cm、厚さ1.52cm、重さ13.77gを測る。孔は片側から穿たれたものである。調整は比較的丁寧で、ナデ調整で仕上げられている。焼成は良好で、暗赤褐色を呈する。

第08号住居跡 (SI08) (Fig.108～112)

位置 本跡は、調査区南部にあたり、16-K、16-L区の標高21.86m～22.00mに位置し、北西側に第07号住居跡 (SI07) が、南西側に第09号住居跡 (SI09) が、東側に第10号住居跡 (SI10) が隣接する。

形態 平面形は、隅丸方形を呈する。長軸5.64m、短軸5.44mを測り、長軸方位はN-40°-Wを指し、中形の住居跡である。壁は西辺、南辺、北辺はほぼ垂直に立ち上り、東辺はやや緩やかに立ち上がる。

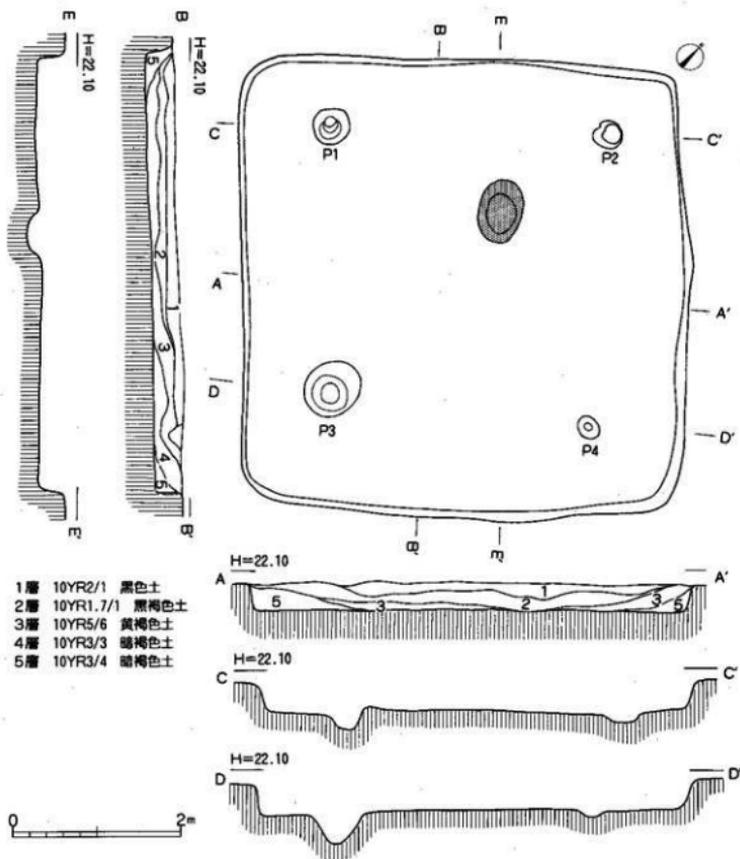


Fig.108 第08号住居跡

床面は若干の起伏を呈するが、ほぼ平坦に広がる。床は黄褐色ロームと暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 5層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|-----------|------|-----------------------------|
| 1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 2層 | 10YR1.7/1 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 3層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 4層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 5層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。 |

住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基が確認された。

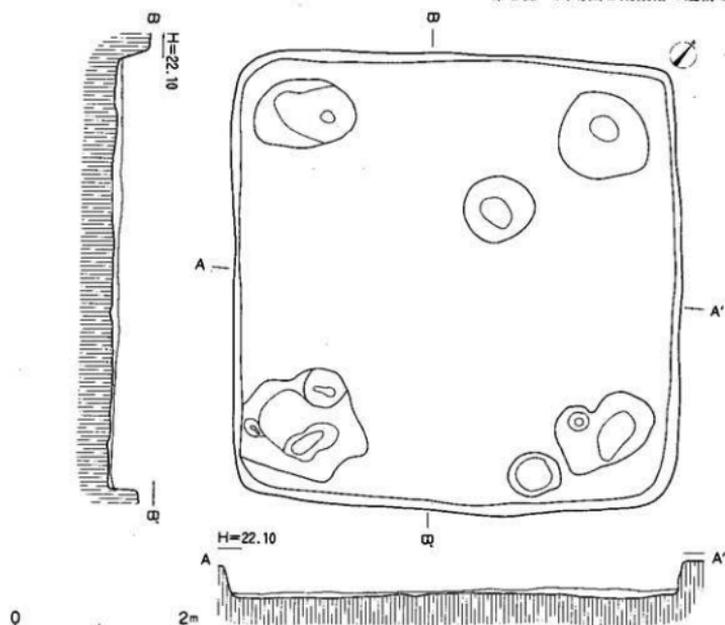


Fig.109 第8号住居跡掘り方

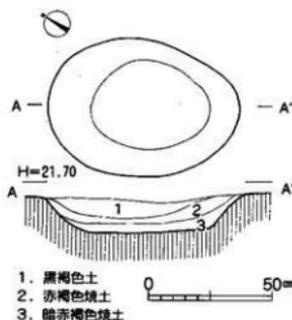


Fig.110 第8号住居跡炉

主柱穴はP1～P4で、P1は西側に位置し、上面が45×45cmのほぼ円形を呈し、さらに径20cmの掘り込みが施されている2段柱穴で、深さ22cmである。P2は北側で上面は36×35cmのほぼ円形で、深さ13cm。P3は南側に位置し、上面が64×74cmの楕円形と開口部が大きく、やはりP1と同様2段掘りの柱穴で、深さ42cm。P4は東側で、23×30cmの楕円形、深さ9cmを測る。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北西寄りに東西2基設置され、長径78cm、短径56cm、深さ16cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第2層と第3層が焼土層で、とくに第2層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

掘り方 掘り方は、床下全面におよぶが、とくに4本の主柱穴周辺には粗雑で複雑な掘り込みが認められる。

遺物出土状況 遺物は、住居全体に散在するが、とくに東側にやや集中する傾向が観察できる。その内、個体として図示

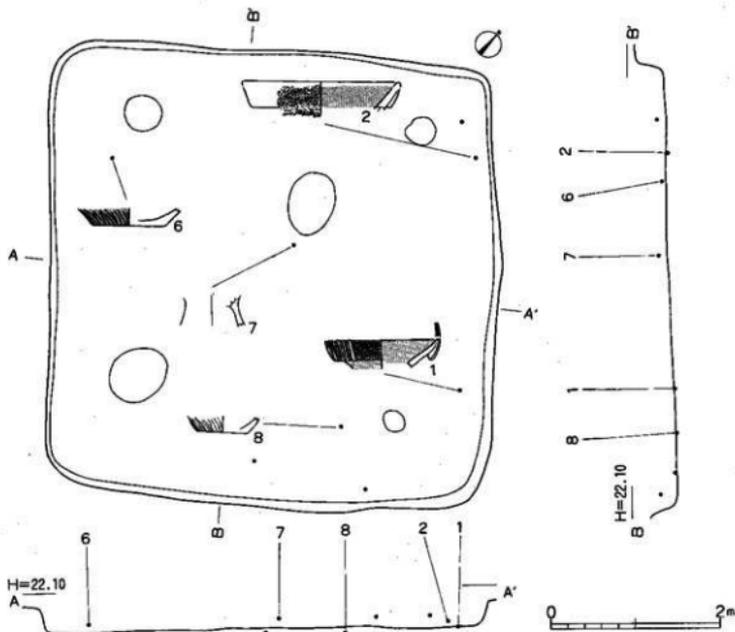


Fig.111 第08号住居跡遺物分布図

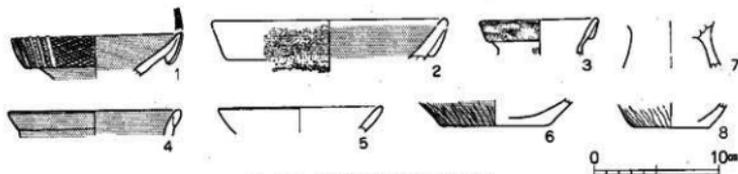


Fig.112 第08号住居跡出土遺物

しうる資料は、壺5点、甕2点、鉢1点である。

遺物 1～4は壺形土器である。1は口縁部が1/4前後遺存する。推定口径13.6 cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、屈曲のやや強い、内湾気味に立ち上がる。口唇部および口縁部には網目状撚糸文が施文され、6本を一単位とする棒状貼付文が付されている。外面無文部には縦位、内面には横位のミガキが施され、赤彩されている。焼成は良好である。2は口縁部1/8程度遺存するが、口唇部は欠損する。推定口径17.0 cmを測る。粘土帯を貼り合わせて複合口縁としている。口縁部は横位のハケメ調整のち、単節LR縄紋を施文するが、縄紋帯のほぼ中央にS字状結節文を加える。口縁部下端にはハケメ具による刻目が廻らされている。外面体部は縦位のハケメ調整、内面はミガキが施されている。口縁部を除き内外面とも赤彩されている。焼成はきわめて良好である。3は口縁部1/3程度遺存す

る。推定口径9.6cmを測る。口縁部がゆるやかに開く小型の壺である。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口縁部外面は横位のハケメ調整痕を残置させる。内面はナデ整形が施されている。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。4は口縁部1/10前後のみ遺存する。折り返し口縁で推定口径14.0cmを測る。口縁部外内面ともミガキが施され、赤彩されている。焼成は良好である。5は鉢形土器の口縁部で1/8程度を遺存する。推定口径13.4cmを測る。口縁部外内面ともナデ整形が施されている。焼成はやや良で、にぶい褐色を呈する。6は壺の底部破片で、1/4程度を遺存する。平底で、体部は大きく開く。外面は縦位のミガキが施され、赤彩され、底面もナデ整形の後、赤彩されている。しかし、周縁は磨耗が著しい。内面はナデ整形が加えられている。焼成は良好である。7は台付甕の接合部破片で、約1/3程度が欠損している。内外面ともナデ整形が施されている。焼成は良好で、にぶい黄褐色を呈する。8は甕底部の小破片で、1/10程度が遺存する。内外面ともナデ整形が施されている。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。

第11号住居跡 (SI11) (Fig.113~118)

位置 本跡は、調査区南東部にあたり、14-M区の標高20.78m~20.90mに位置し、南側に第15号住居跡 (SI15) が、北東側に第19号住居跡 (SI19) が隣接する。

形態 平面形は、隅丸方形を呈する。長軸4.12m、短軸3.90mを測り、長軸方位はN-44°-Wを指し、やや中型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は若干の起伏は呈するが、ほぼ平坦に広がる。床は黄褐色ロームと暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 8層に分層可能である。自然埋没土層である。

- 1層 10YR5/6 黄褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。
- 2層 10YR3/1 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 3層 10YR3/3 暗褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
- 4層 10YR4/6 褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 5層 10YR5/6 黄褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
- 6層 10YR2/3 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 7層 10YR4/6 褐色土 少量のロームブロックを含み、締まりがある。
- 8層 10YR7/8 黄褐色土 多量のロームブロックを含み、粘性にとみ、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴6本と地床炉1基および貯蔵穴1基を確認した。

主柱穴はP1~P4で、P1は西側に位置し、上面が30×30cmの円形、深さ14cm。P2は北側で上面が30×36cmの楕円形で、深さ11cm。P3は東側に位置し、上面が34×34cmの円形で、深さ12cm。P4は南側で、22×22cmの円形、深さ13cmを測る。また北壁中央、炉跡の北西側にP5が、また対峙するように南東壁中央部にP6を設けている。P5は上面が22×26cmの楕円形で、深さ13cmと浅い深度。P6は上面が32×32cmの円形で深さは21cmを測る。P5は支柱穴。P6は入口部施設の梯子穴と思われる。

貯蔵穴は南東壁の東寄りに構築されており、平面形は楕円形を呈し、長径66cm、短径56cm、深さ36cmを測り、底面はほぼ丸底で、壁面は緩やかに掘り込まれている。

炉は床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北西寄りに設置され、長径78cm、短径50cm、深さ11cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の北側に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は4層に分層でき、第3層と第4層が焼土粒子を多量に含む焼土層で、とくに第4層の赤褐色焼土層内では多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

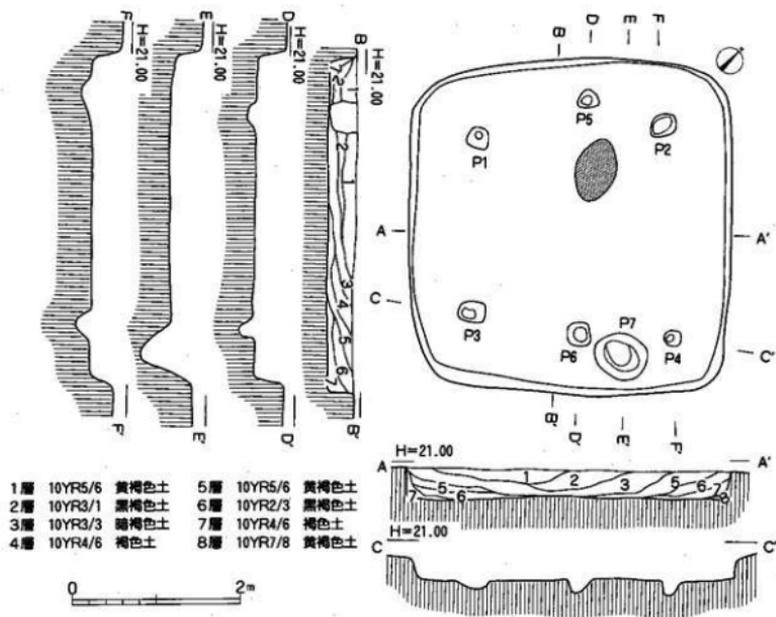


Fig.113 第11号住居跡

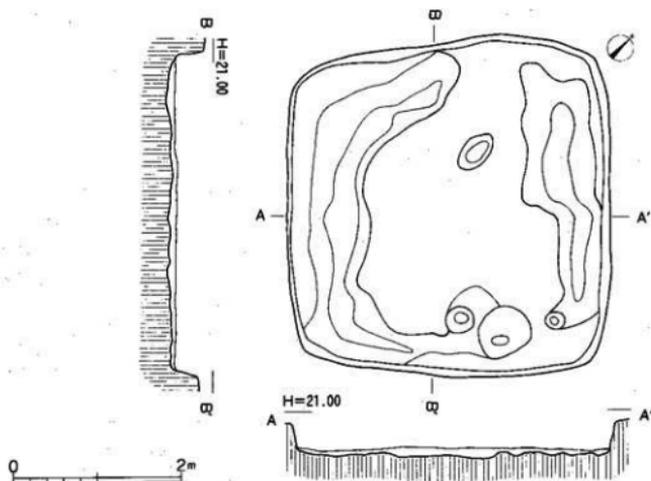


Fig.114 第11号住居跡掘り方

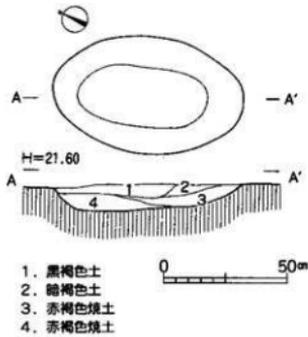


Fig.115 第11号住居跡炉

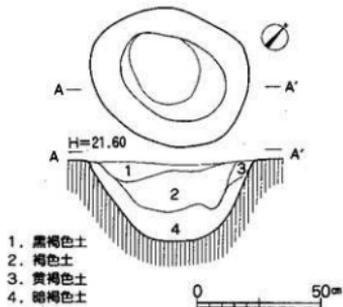


Fig.116 第11号住居跡貯蔵穴

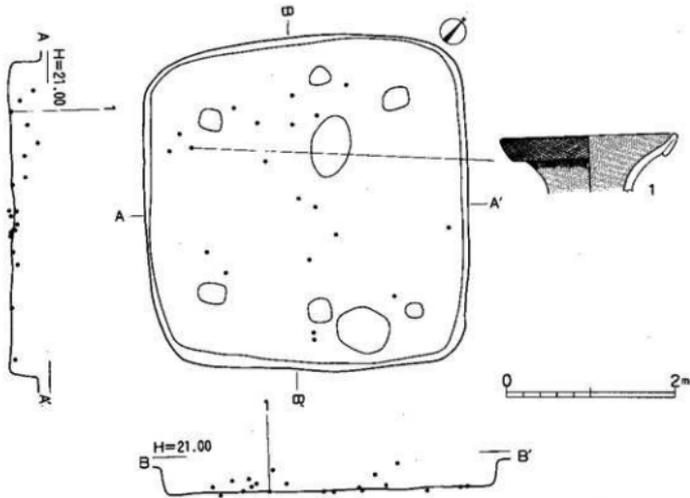


Fig.117 第11号住居跡遺物分布図

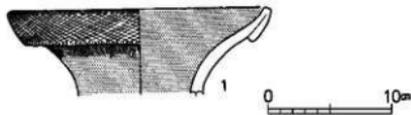


Fig.118 第11号住居跡出土遺物

掘り方 掘り方は、床下全面におよぶが、とくに東壁際や西壁際周辺には溝状を呈した掘り窪みが認められる。

遺物出土状況 遺物は、住居全体に散在するが、とくに北側の炉跡周辺に集中する。しかし、土器の破片数に比べると図示しうる資料は、壺1点のみである。

遺物 口縁部から頸部にかけて1/4程度を遺存し、推定口径21.4cmを測る。粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口縁部外面および口唇部には網目状燃糸文が施文され、口縁部下端にはハケメ具による刻みが巡る。頸部は縦位のハケメ調整の後、縦位の細かなミガキが加えられている。内面もやや斜行するミガキが施されている。口縁部外面と口唇部を除く内外面に赤彩がみられる。焼成は良好である。

第22号住居跡 (SI22) (Fig.119~124)

位置 本跡は、調査区南東部にあたり、12-O、12-P、13-O、13-P区の標高22.18m~22.50mに位置し、南西側に第21号住居跡 (SI21) が、北側に第23号住居跡 (SI23) が隣接する。

形態 平面形は、基本的には全体が丸味もつ隅丸方形である。長軸7.14m、短軸6.86mを測り、長軸方位はN-8°-Eを指し、大型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともやや緩やかな傾斜をもち立ち上がる。床面は若干の起伏は呈するが、ほぼ平坦に広がる。床は黄褐色ロームと暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 6層に分層可能である。自然埋没土層である。

- 1層 7.5YR3/3 暗褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。
- 2層 7.5YR4/6 褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 3層 7.5YR2/1 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 4層 7.5YR4/6 褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 5層 7.5YR4/4 褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
- 6層 7.5YR5/6 明褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴5本と地床炉1基を確認した。

主柱穴はP1~P4で、P1は西側に位置し、上面が16×18cmの楕円形、深さ14cm。P2は北側で上面が18×18cmの円形で、深さ14cm。P3は南側に位置し、上面が20×22cmの楕円形で、深さ26cm。P4は東側で、18×20cmの楕円形、深さ21cmを測る。また南壁中央より東寄りにP5を穿っている。上面が30×38cmの楕円形で、深さ42cmと二段掘りのピットで、炉跡に対峙する位置に設置されていることから入口部施設の梯子穴と思われる。

炉は床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北寄りに設置され、長径60cm、短径46cm、深さ11cmを測る。断面は起伏はあるものの、ほぼ平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の北側に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第2層と第3層が焼土粒子を多量に含む焼土層で、とくに第2層の赤褐色焼土層内では多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

掘り方 掘り方は、床下全面におよぶが、とくに炉周辺と壁際周辺に粗雑な掘り窪みが認められる。

遺物出土状況 遺物は、住居全体に散在するが、とくに東壁際には壺形土器を中心に比較的大型の土器片がまとまって出土していた。図示した資料は、壺11点、甕4点、高坏6点、鉢2点である。

遺物 1~7は壺形土器口縁部である。1は口縁部から頸部にかけて遺存し、口縁部のみ1/2程度欠損する。推定口径28.0cmを測る大型の壺である。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、緩く内湾気味に開く。口唇部には附加条第1種の縄紋が巡らされ、口縁部外面は横位のハケメ調整の後、上下二段縄紋帯が施文されている。上段は附加条第1種縄紋、下段にLRの単節縄紋を施し、これらを区画す

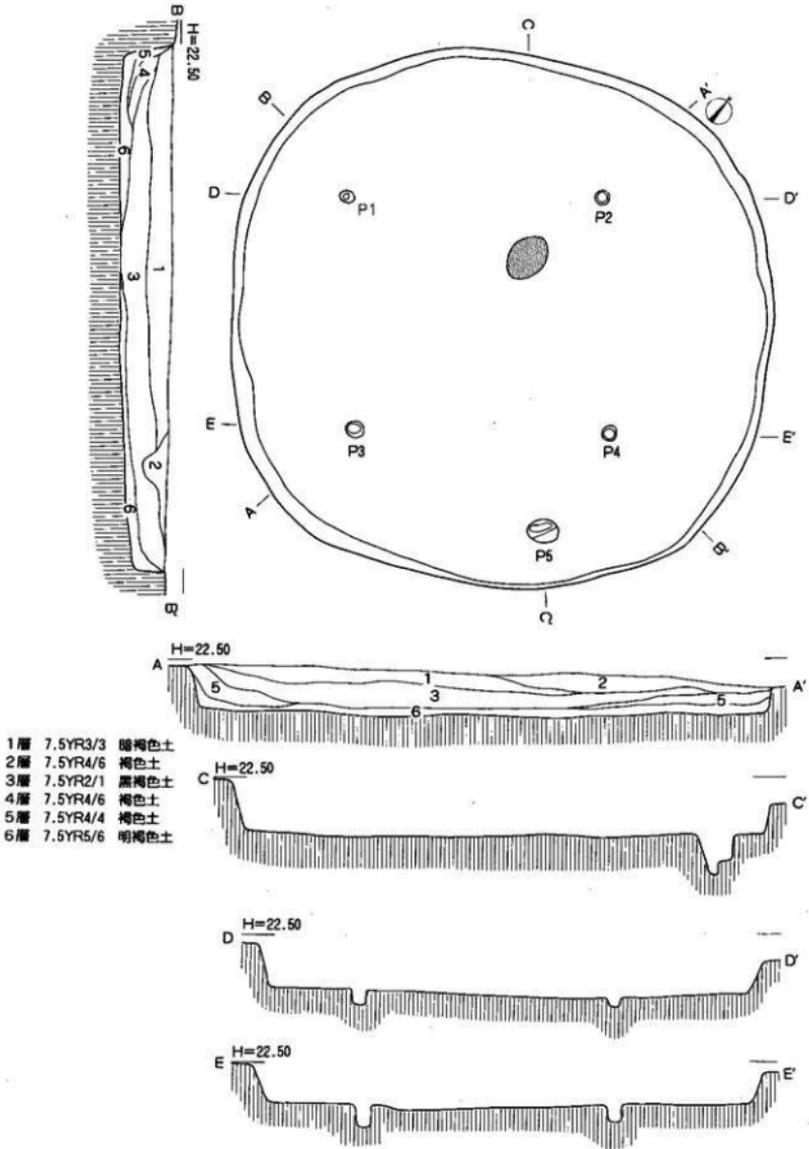


Fig.119 第22号住居跡

0 2m

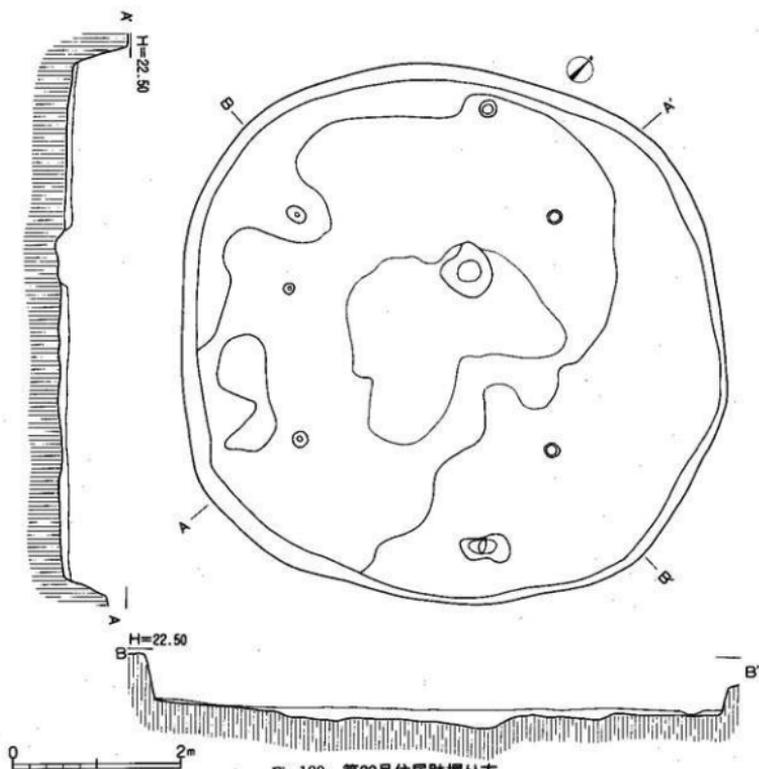


Fig.120 第22号住居跡掘り方

るようにはほぼ中央に2条のS状結節文が施文される。頸部は縦位方向の細かなミガキが加えられ、赤彩されている。肩部には単節LR縄紋を施文し、上端に2条のS状結節文がみられる。なお、このS状結節文の施文は頸部のミガキ工程より先行する。内面にはミガキが加えられており、口縁部から頸部にかけて赤彩が施されている。焼成は良好で、赤彩部分を除く色調はにぶい黄橙色を呈する。2も1と同様の壺形土器である。口縁部のみ1/6程度を遺存する。推定口径は27.0cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口唇部に附加条第1種縄紋を施文し、外面はS状結節文を区画文として附加条第1種縄紋と単節LR縄紋を施文する。頸部はミガキが加えられ、赤彩されている。内面もミガキの後、赤彩が施されている。焼成は良好である。3は口縁部のみの小破片で、広口壺の形態をもつ。口縁部は受口味に開き、推定口径24.0cmを測る。口唇部

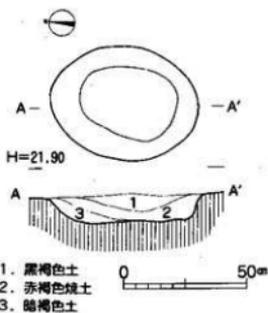


Fig.121 第22号住居跡炉

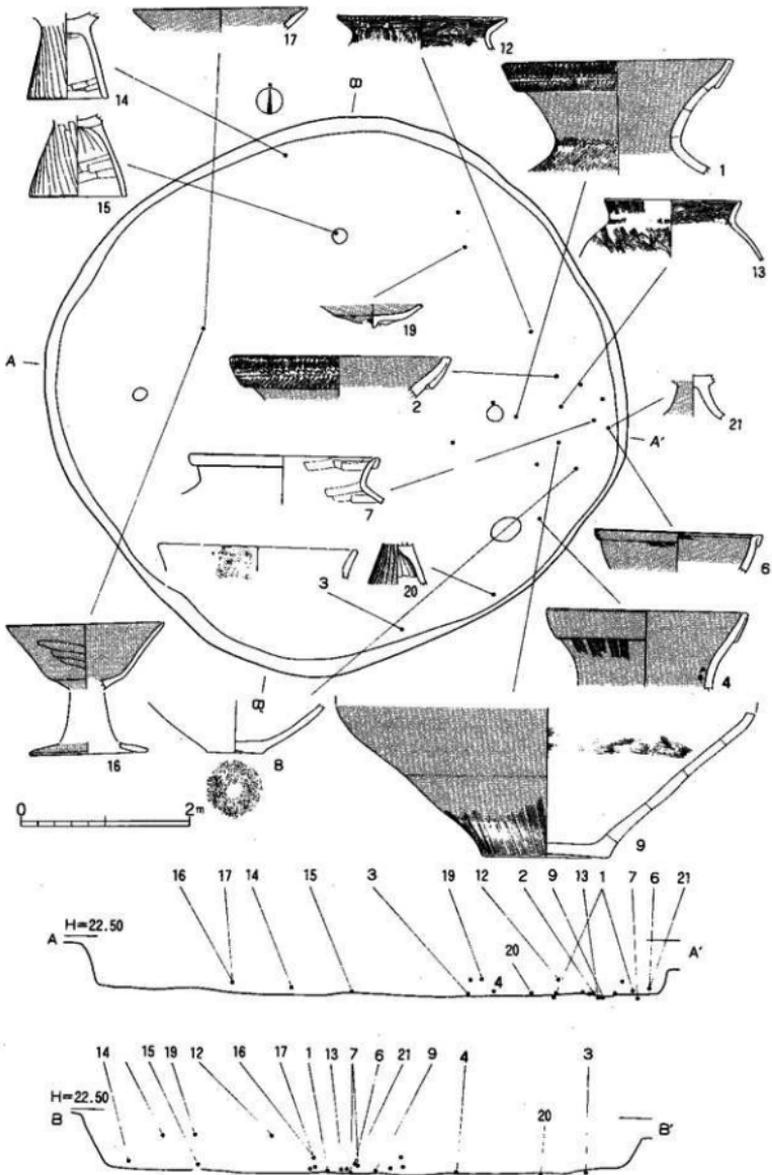


Fig.122 第22号住居跡遺物分布図

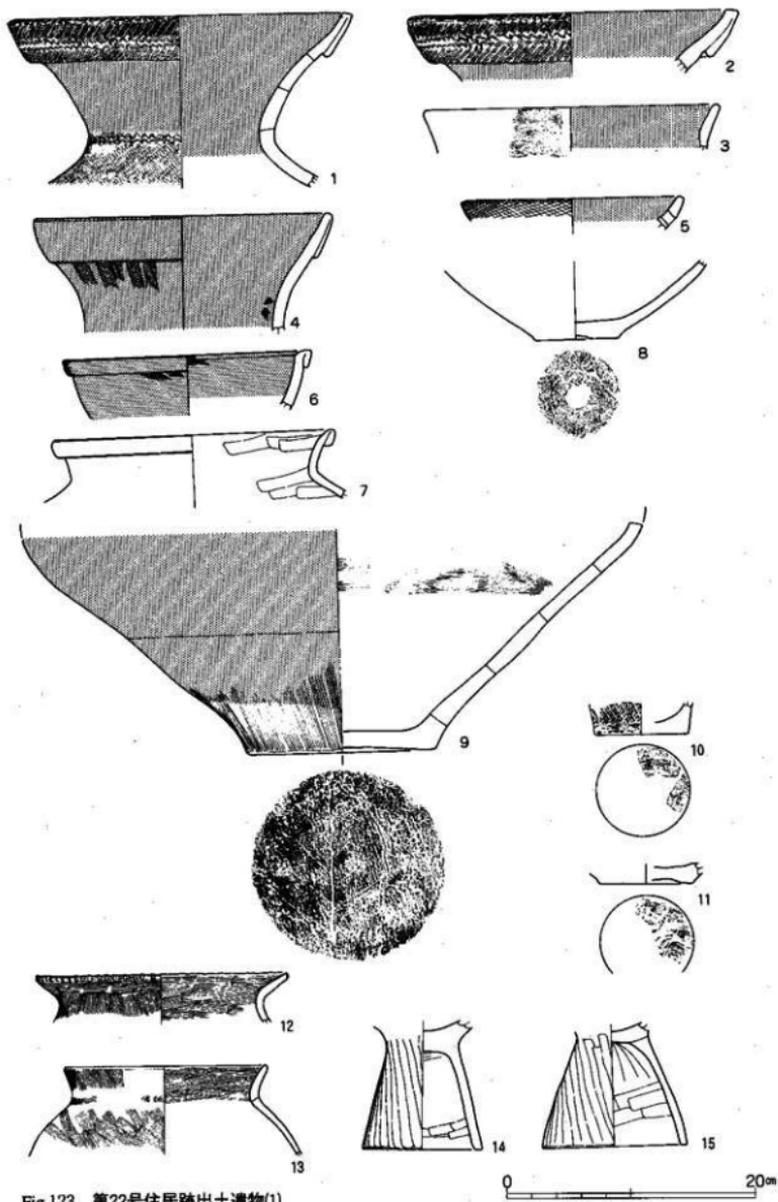


Fig.123 第22号住居跡出土遺物(1)

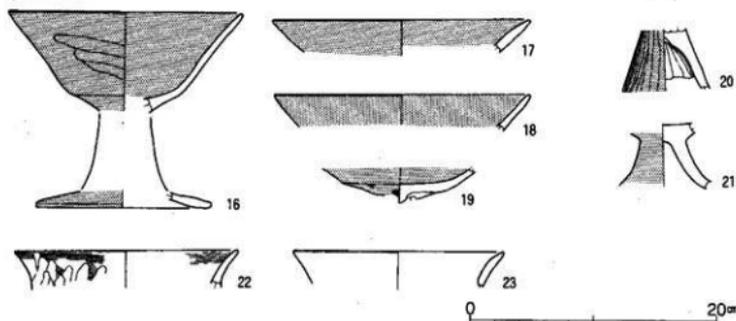


Fig.124 第22号住居跡出土遺物(2)

は単節LR縄紋を巡らし、さらに口縁部外面上部にはやはり単節LR縄紋を施文し、下位に2段のS字状結節文を施す。内面はミガキが加えられ、赤彩されている。焼成は良好で、浅黄橙色を呈する。4は口縁部1/6程度を遺存する。口縁は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、推定口径24.0cmを測る。口縁部は内湾気味に開く形態をもつ。口縁部外面は横ナデ、頸部は縦位のハケメ調整後、ナデが加えられて、赤彩されている。内面も横ナデの後、赤彩されている。焼成は良好である。5は口縁部上位のみの小破片。推定口径18.0cmを測る。口唇部および口縁部外面は網目状捺糸文が施文され、内面はナデの後、赤彩が施されている。なお、補修孔と思われる円孔が穿っている。焼成は良好である。6は口縁部のみ遺存する小破片である。甕の形態に近似しているが、ここでは広口壺に分類した。口縁は幅の狭い粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、内湾気味に外方へ開く。内外面ともナデ整形が施され、赤彩されている。焼成は良好である。7は口縁部から頸部にかけて約2/3程度遺存する。口縁部は「く」の字状に外反する甕の形態に近似する広口壺である。口縁部は細い粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口縁部外面は横ナデ、頸部もナデ整形。内面も横ナデによって仕上げられている。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。8～11は壺底部破片である。8は底径6.8cmを測り、体部は大きく外方へ開く。底面の周縁に粘土帯を貼り合わせて高まりをもつ。内外面ともナデ整形によって仕上げられている。焼成は良好。色調はにぶい赤褐色を呈する。9は大型の壺形土器の胴下半部が完存する。やや平底の底部から内湾気味に胴部中位へ移行する。底径15cm、現器高18.3cm；胴部最大径は50cmを測る。体部外面は丁寧なナデが施されているが、底部近くでは縦位のハケメ調整が残置している。全面赤彩されている。底面は木葉痕が認められる。内面は横位のハケメ調整痕がみられる。焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色を呈する。10は底部約1/2程度が遺存する。推定底径は7.8cmを測る。また底部周縁には附加条第1種の縄紋と底面には木葉痕を残置している。内面はナデ整形。焼成は良好。にぶい褐色を呈する。11は底部のみ1/2を残置する。推定底径7.8cmを測る。内外面ともナデ整形で仕上げられている。底面には木葉痕を残置している。焼成は良好で、明褐色を呈する。12～15は台付甕である。12は口縁部のみ3/4強遺存し、口径20.4cmを測る。頸部のくびれは強く、口縁部が比較的短い形態をもつ。口唇部にはハケメ具による刻みが巡り、外面には横・縦位、内面には横位のハケメ整形が施されている。焼成は良好で、赤褐色を呈する。13は口縁部から胴部上半部にかけて1/4程度遺存する。口縁部は短く外反し、胴部が球形をもつ形態の甕である。推定口径16.4cmを測る。外面は口縁部が縦位、胴部が斜めのハケメ調整痕を残し、内面は口縁部が横位のハケメ調整が施され、体部はナデ整形が施されている。焼成は良好で、明褐色を呈する。14は

脚部のみ完存する。脚底径9.8cmを測る。脚部はほぼ直線的に小さく開き、端部は平坦に仕上げられている。外面は縦位のヘラケズリ、内面はナデ整形と脚端部付近は横位のヘラケズリが施されている。焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。15も脚部のみ完存する。脚底径10.0cmを測る。脚部は内湾気味に開き、やはり端部は平坦に仕上げられている。外面は縦位のヘラケズリ、内面はナデ整形が施され、焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。16～21は高坏形土器である。16は坏部と脚の裾部約1/8程度遺存する。坏部底部と口縁部には比較的光滑な稜をもち、裾部は低く開く。坏部内外面とも丁寧なナデ整形が施された後、赤彩されている。脚部外面もナデ整形の後、赤彩が施されている。内面もナデ整形である。焼成は良好である。17・18は高坏の坏部破片である。いずれも内外面ともナデ整形で仕上げられており、赤彩されている。焼成は良好である。19は高坏の坏部底部破片である。坏部底部と口縁部との境界に稜をもつ。また脚柱部の接ぎ目にはホゾがみられる。内外面ともミガキが施され、赤彩されている。なお、坏部底部にはハケメ調整痕が残置している。焼成は良好である。20は柱状部破片。1/2程度を遺存する。外面は縦位方向のケズリで面取りされ、内面はヘラ状工具により抉りとなっている。外面は赤彩されている。焼成は良好。21は坏と脚の接合部を完存する。脚部は中空で、透孔が3個認められる。器面の粗れが著しく明瞭な整形を観察できない。焼成はやや不良。にぶい赤褐色を呈する。22・23は甕の口縁部破片と考える。しかし、いずれも1/12以下の小破片である。22の外面は横位と斜位のハケメ調整され、ナデ整形が部分的に施される。内面も横位のハケメ調整が残置する。焼成は良好で、灰褐色を呈する。23も外反する口縁部破片で、内外面ともナデ整形が施されている。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。

第32号住居跡 (SI32) (Fig.125～132)

位置 本跡は、調査区東部にあたり、9-M、9-N区の標高22.80m～22.93mに位置し、北側に第34号住居跡 (SI34) が、北東側に第33号住居跡 (SI33) が、南西側には第31号住居跡 (SI31) が隣接する。

形態 平面形は隅丸長方形を呈する。長軸6.72m、短軸6.08mを測り、長軸方位はN-31°-Wを指し、やや大型の住居跡である。壁は東辺、西辺、北辺はほぼ垂直に、南辺はやや緩やかに立ち上がる。床面は若干の起伏を伴うものの、平坦でほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 7層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|------------|------|-----------------------------|
| 1層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。 |
| 2層 | 7.5YR1.7/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 3層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 4層 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 5層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。 |
| 6層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 7層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | 多量のロームブロックを含み、締まりがある。 |

住居施設 住居内部の施設として、柱穴5本と地床炉1基および貯蔵穴1基を確認する。

主柱穴はP1～P4で、P1は西側に位置し、上面が24×32cmの楕円形、深さ60cm。P2は北側で38×48cmの楕円形で、深さ67cm。なお、本跡には径14cmの炭化した柱材が残存しており、床面上から約5cmほど突き出していたものの、柱穴内では約30cmほど炭化状態で残置されていた。この柱材の状態を観察するため、P2のみ断ち割り調査を実施した。柱穴は大きく穿り、柱材を埋めた後、まず北側（外側）からロームブロックを詰め固め、さらに柱材を固定するため黒褐色土で塗り固める。また床面上はローム

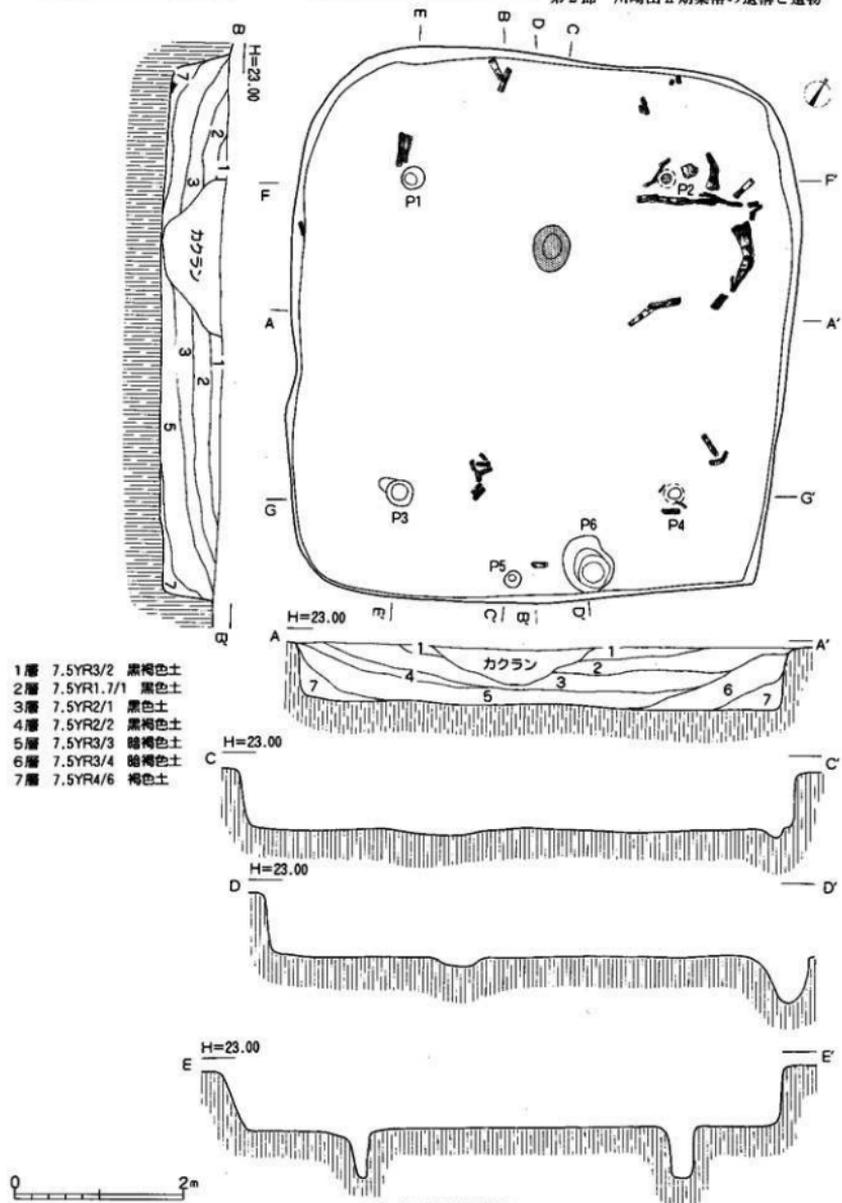


Fig.125 第32号住居跡(1)

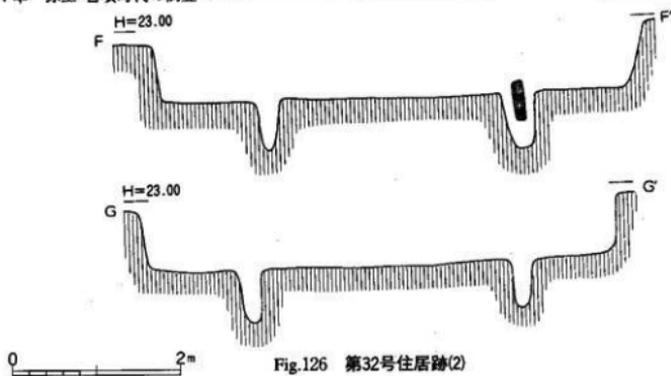


Fig.126 第32号住居跡(2)

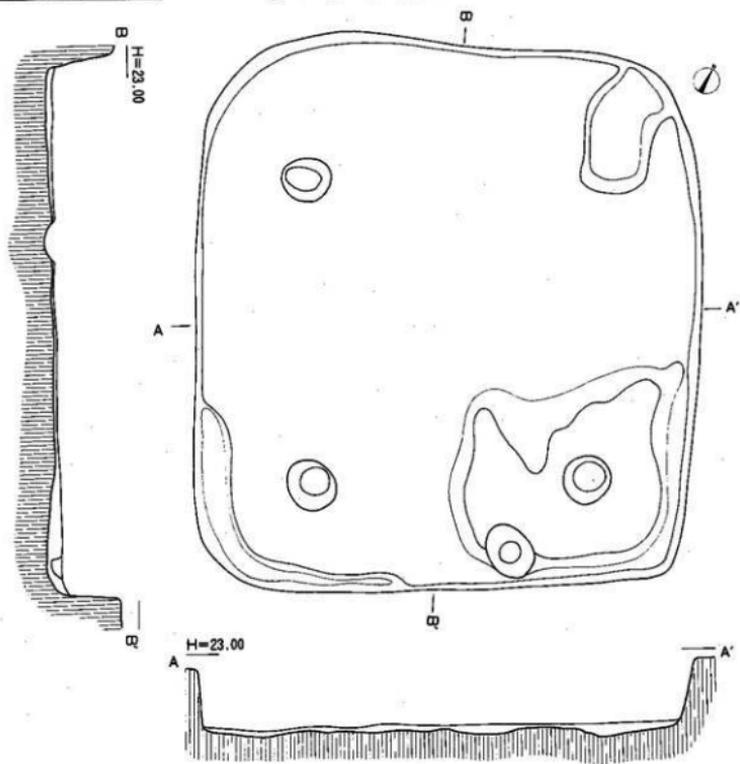


Fig.127 第32号住居跡掘り方

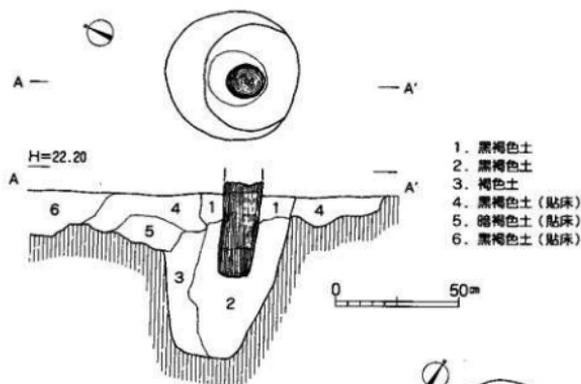


Fig.128 第32号住居跡柱穴(P2)断面図

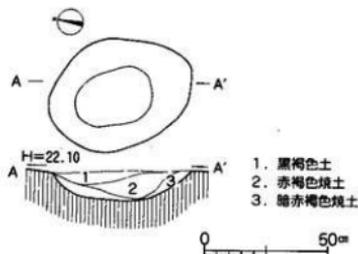


Fig.129 第32号住居跡炉

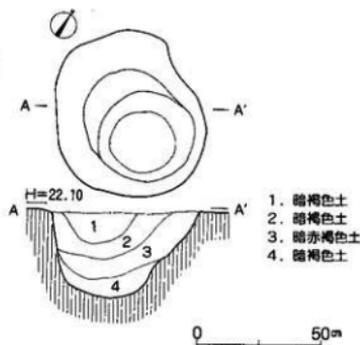


Fig.130 第32号住居跡貯蔵穴

ブロックと黒褐色土の混合土によって貼床にし、塞ぐ (Fig.128)。P3は南側に位置し、上面が32×44 cmの楕円形で、深さ64cm。P4は東側で、24×26cmのほぼ円形、深さ57cmを測る。また南壁中央部に上面が22×24cmのほぼ円形で、深さ13cmと浅い深度の入口部施設の梯子穴P5が確認された。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北西寄りに設置され、長径58cm、短径46cm、深さ11cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第2層と第3層が焼土層で、とくに第2層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒子が含み、締まりがある。

貯蔵穴は南壁際中央部からやや東寄りに構築され、楕円形を呈する。二段掘りで、上面は長径70cm、短径60cm、深さ54cmを測り、底面は丸底状をなし、壁は急傾して立ち上がる。覆土は4層に分層できる。なお、P2で炭化した柱材が検出されたように、本跡は火災住居で、P2周辺からP4にかけて、その他柱穴周辺に炭化物が検出されている。

掘り方 掘り方は、床下全面におよぶが、とくに東壁際のP4から貯蔵穴周辺や北壁際周辺には粗雑で複雑な掘り窪みが認められる。

遺物出土状況 遺物は、住居全体に散在するが、とくに貯蔵穴周辺および炉跡周辺に集中する。その内、

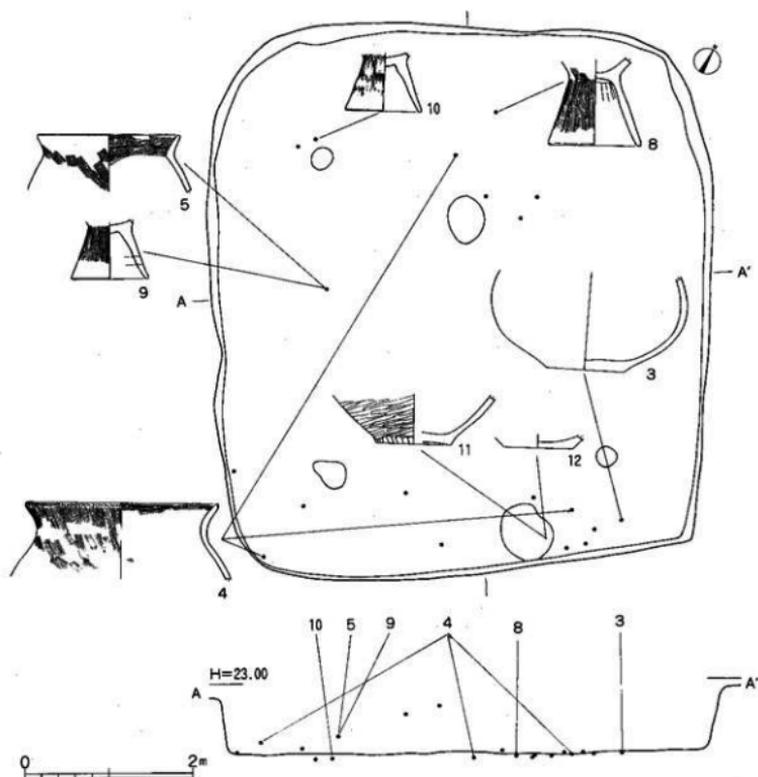


Fig.131 第32号住居跡遺物分布図

個体として図示しうる資料は、壺7点、甕10点である。

遺物 1～3は壺形土器である。1は口縁部破片1/8を遺存する。推定口径16.6 cmを測る。口縁部はやや内湾気味に開く。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口唇部は若干平坦面をもつ。口唇部外面は斜行するミガキ、頸部は縦位のミガキ整形の後、赤彩される。内面も横位のナデ整形の後、赤彩が施される。焼成は良好。2は口縁部から頸部にかけて1/8程度を遺存する。推定口径12.0 cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外方へ開く。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口唇部は平坦に成形させている。口縁部外面は横ナデ、頸部は縦位のハケメ調整の後、ナデ整形で一部ハケメ痕を消失させている。内面はナデ整形を施し、内外面とも赤彩されている。焼成は良好である。3は胴部上位を欠損し、胴部下位1/2程度を遺存する。胴部最大径は13.6 cm、底径9.6 cmを測る。胴部下位がやや脹る形態である。外面と底面は丁寧なナデ整形。内面もナデ整形によって仕上げられている。焼成は良好で、褐色を呈する。4は台付甕の口縁部破片。口縁部から頸部にかけて2/3程度を遺存する。口径は23.2 cmを測る。口

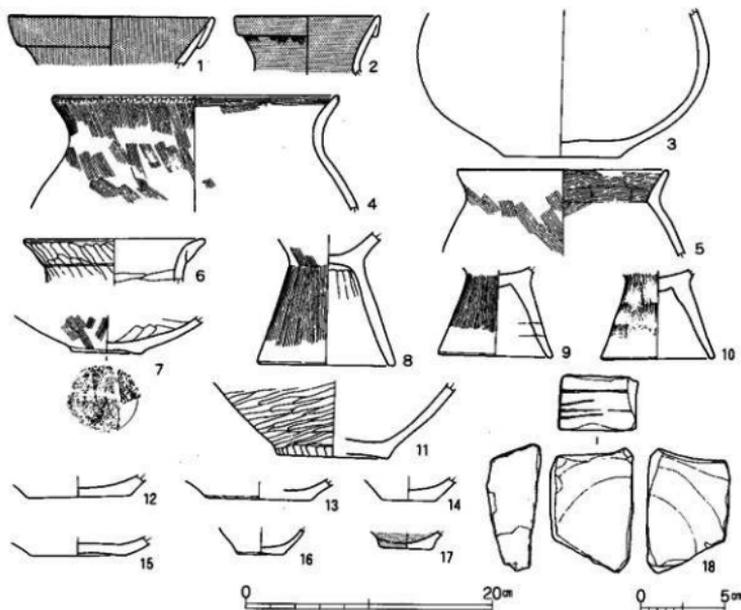


Fig.132 第32号住居跡出土遺物

縁部は「く」の字状に外反する。口唇部はハケメ具による密接した刻みが巡る。口縁部から頸部にかけての外面には縦・斜めのごく細かいハケメ調整が施され、内面は横位のナデ整形が施されているものの、口唇部付近やくびれ部の一部に横位のハケメ調整痕を残している。焼成は良好で、明褐色を呈する。5は口縁部から頸部にかけて1/6程度を遺存する。口径は17.0cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反し、外面は口縁部が横ナデ、頸部が斜行のハケメ調整を加える。内面は口縁部が横位のハケメ調整。体部がナデ整形によって仕上げている。焼成は良好。明褐色を呈する。6は口縁部から頸部にかけて約1/2程度を遺存する。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、大きく外反する。外面は指頭によるナデ整形が施され、内面は横位の丁寧なナデ整形が加えられている。焼成は良好で、赤褐色を呈する。7は甕底部破片で、底面は完存し、底径は5.7cmを測る。底面は周縁を粘土紐を貼り付け輪状に高めている。外面は縦・斜め方向のハケメ調整を施し、内面はナデ整形によって仕上げている。焼成は良好。赤褐色を呈する。8～10は台付甕である。8は脚のみ完存する。裾径11.4cm、現器高10.8cmを測る。甕の脚としては大型の部類に入るであろう。外面には縦位のハケメ調整が施され、炭化状のススが部分的に残存する。内面はヘラ状工具によるナデ整形が行なわれている。焼成は良好。明褐色を呈する。9は脚部の1/2程度を遺存する。推定裾径9.4cm、現脚器高7.3cmでやや短い脚部はほぼ直線的に開く。外面は縦位の細かいハケメ調整が施され、内面はナデ整形で仕上げられている。焼成は良好。褐色を呈する。11～17は壺・甕底部片を一括する。11は壺底部であろう。やや上げ底状で、底径9.2cmを測る。底部と外面は横位の丁寧なナデが施されているものの、内面は器面の粗れが目立ち、整形は不詳である。焼成は良好で、明褐色を呈する。12～13は底部小破片であり、平底で、外面は比較的丁寧なナデ整形、内面もナデ整形に

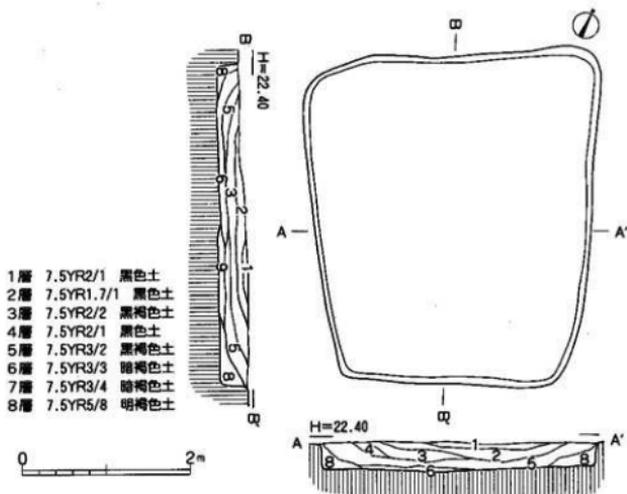


Fig.133 第40号住居跡

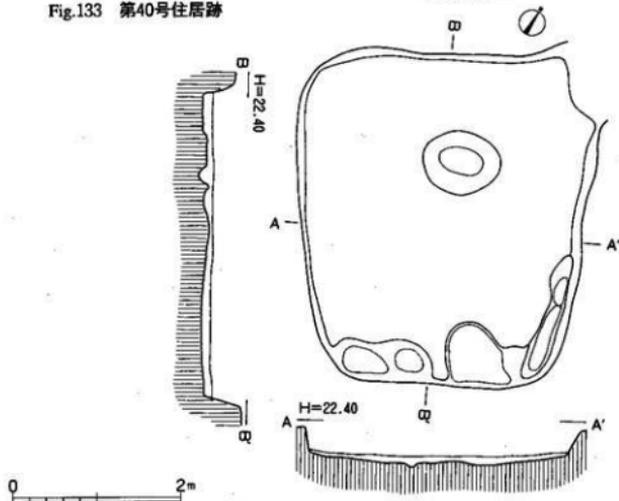


Fig.134 第40号住居跡掘り方

よって仕上げられている。15は底部が完存で、やや上げ底気味をなす。底径7.6cmを測る。外面は丁寧なナデ整形。内面は器面の粗れが著しい。暗赤褐色を呈する。16・17は小型の鉢もしくは壺の底部としてよいようである。いずれも底部のみ完存する。16は底径4.4cm、17は底径4.6cmを測る。17は内外面に赤彩されている。18は砂岩製の砥石。長さ7.58cm、幅4.70cm、厚さ3.21cmを測る。表裏側面とも磨減が

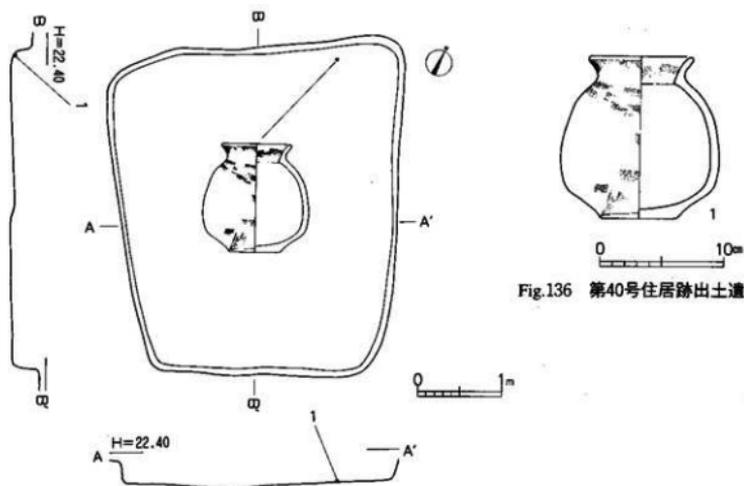


Fig.136 第40号住居跡出土遺物

Fig.135 第40号住居跡遺物分布図

顕著で、上端面には溝状の研磨筋がある。

第40号住居跡 (SI40) (Fig.133~136)

位置 本跡は、調査区北端で、3-K区の標高22.22m~22.33mに位置する。本跡は住居跡群の北端にあたる。なお東側に第41号住居跡 (SI41) が構築されている。

形態 平面形は隅丸台形を呈する。長軸4.04m、短軸3.34mを測り、長軸方位はN-29°-Wを指し、小型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともやや緩やかに立ち上がる。床面は若干の起伏を伴うものの、平坦でほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で全面にわたって硬化している。

覆土 8層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|------------|------|----------------------------|
| 1層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 2層 | 7.5YR1.7/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 3層 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 4層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 5層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にやよみ、締まりがある。 |
| 6層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にやよみ、締まりがある。 |
| 7層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 8層 | 7.5YR5/8 | 明褐色土 | 多量のロームブロックを含み、締まりがある。 |

住居施設 住居残存部に柱穴や炉、周溝等の施設は確認できなかった。

掘り方 掘り方は、床下全面におよぶが、とくに南壁際を中心に雑で複雑な掘り窪みが認められる。

遺物出土状況 遺物は、住居北壁際に壺形土器 (ほぼ完形) 1点のみ床面上より出土している。

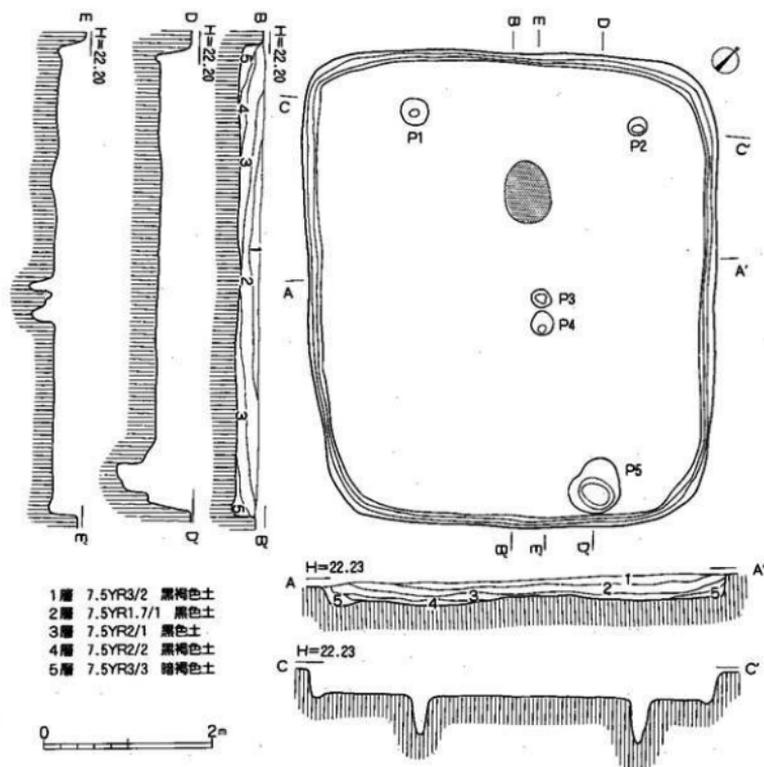


Fig.137 第48号住居跡

遺物 口唇部の二ヶ所に欠損部分がみられる他、ほぼ完存する。器高13.2cm、口径8.6cm、胴部最大径12.8cm、底径6.4cmを測る。胴部下位に最大径をもち、この最大径の境界部には明瞭な稜をもつ。胴部上位はほぼ球形を呈しているが、最大径から下位は決り状のカーブを描きながら底部へ移行する。口縁部は短く「く」字状に外方へ開く。底面は周縁を粘土紐によって貼り合わせ、輪状の高まりみせる。口唇部は丸みもちながら稜を有する。外面の口縁部は斜めのハケメ調整で、胴部は入念なナデ調整が施されているが、肩部では斜め、底部付近では横位および斜位のハケメ調整痕を残置する。内面は口縁部が斜位のハケメ調整痕がみられ、体部はナデ整形で仕上げられている。焼成は良好で、明褐色を呈する。

第48号住居跡 (SI48) (Fig.137~141)

位置 本跡は、調査区東部にあたり、9-H、9-I、10-I区の標高22.12m~22.27mに位置する。なお本跡

に隣接する住居跡はないが、北西方向に第47号住居跡（SI47）が構築されている。

形態 平面形は隅丸長方形を呈する。長軸5.82m、短軸4.94mを測り、長軸方位はN-44°-Wを指し、中型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺はほぼ垂直に、北辺はやや緩やかに立ち上がる。床面は若干の起伏を伴うものの、平坦ではほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で全面にわたって硬化している。

覆土 5層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|------------|------|-----------------------------|
| 1層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。 |
| 2層 | 7.5YR1.7/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 3層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 4層 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 5層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。 |

住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基および貯蔵穴1基を確認する。

柱穴は4本検出されているものの、主柱穴として確認できるのはP1とP2の2本である。まずP1は西側に位置し、上面が36×36cmの円形、深さ43cm。P2は北側に上面が22×24cmの楕円形で、深さ52cmを測る。またP3およびP4は炉跡の南側に位置し、しかも互いに隣接している。北側のP3は、22×22cmの円形で、深さ37cmである。P4は南側で、26×26cmの円形、深さ30cmを測る。このP3とP4は支柱穴か炉施設に伴うものか不明である。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北西寄りに設置され、長径76cm、短径54cm、深さ12cmを測る。断面は若干の起伏をもつ平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第1層と第3層が焼土層で、とくに第3層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

貯蔵穴は南壁際中央部からやや東寄りに構築され楕円形を呈する。二段掘りで、上面は長径68cm、短径54cm、深さ45cmを測り、底面は丸底状をなし、壁は急傾して立ち上がる。

周溝は全周し、幅10～16cm、深さ2～6cmを測り、底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに掘り込まている。なお、入口部施設は確認できなかった。

掘り方 掘り方は、床下全面におよぶが、とくに住居西側半分に粗雑で複雑な掘り込みが認められる。

遺物出土状況 遺物は、住居東半分に偏り、とくに貯蔵穴周辺および炉跡周辺に集中する傾向が認められる。その内、個体として図示しうる資料は、壺2点、甕2点、埴2点、高坏1点である。

遺物 1・2は壺形土器である。1は口縁部から頸部にかけて1/4強遺存する壺で、内湾気味に外方へ開く。推定口径17.8cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口唇部および口縁部外面にはRL単節縄紋を施文し、口縁部下端にはハケメ具による刻みを巡らす。頸部は縦位のハケメ調整後、入念なナデ整形によってハケメ痕を消失させ、赤彩させている。内面は横位のミガキを施し、やはり赤彩している。焼成は良好である。2は口縁部から頸部にかけて完存する。口径は16.4cmのやや小型の壺であるが、口縁部は大きく外反する。口唇部は単節RL縄紋を巡らし、口縁部外面は横位のハケメ調整の後、口唇部と同様単節RL縄紋を施文する。頸部も縦位のハケメ調整を加え、頸部下半部からミガキを施し、ハケメ痕を消失させ、赤彩している。内面も口縁部上位には横位のハケメ調整を施した後、ミガキによりハケメ痕を消失させ、赤彩している。焼成は良好である。3は埴形の壺で、口縁部の一部と胴部の1/3を欠損している。器高18.4cm、口径10.0cm、胴部最大径15.6cm、底径3.8cmを測る。胴部最大径はやや下位に位置し、最大径の境界部に稜をもつ。最大径の上位ではやや上下に押しつぶされたような偏球形で、下位では鉢り状を呈する。口縁部はやや内湾気味に外方へ立ち上がる。底部は小さく、幾

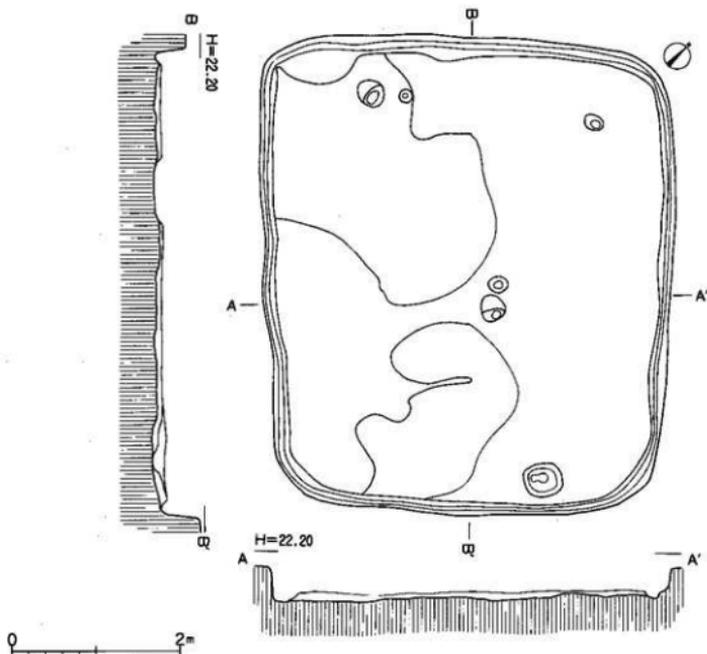


Fig.138 第48号住居跡掘り方

分上げ底状になっている。口唇部は若干内削状を呈し、口縁部および体部は全面入念なミガキが加えられ、赤彩されている。内面も口縁部では縦位方向のミガキを施し、赤彩している。体部はナデ整形が施されている。焼成は良好である。4も増形をもつ壺である。口縁部のみ完存する。口径14.2cmを測り、若干内湾気味に立ち上がる。口唇部はほぼ平坦で、口縁部外面は斜めのハケメ調整の後、縦位のミガキ整形、赤彩されている。内面も横位のナデの後、縦位のミガキが加わる。さらに赤彩が施されている。5は脚部はないが台付壺と考えたい。口縁部と胴部の一部および脚部を欠損する。口径18.6cm、胴部最大径21.2cm、現器高17.6cmを測る。最大径が胴部中位に位置し、胴部は上下で押しつぶしたような偏円形を呈する。口縁部は短く「く」の字状に外反する。口唇部はヘラ状工具により刻みを巡らし、口縁部から胴部外面は細かなハケメ具による調整した後、ハケメ痕を消失させるように丁寧なナデ整形を施す。なお、部分的

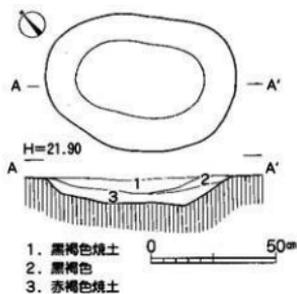


Fig.139 第48号住居跡炉

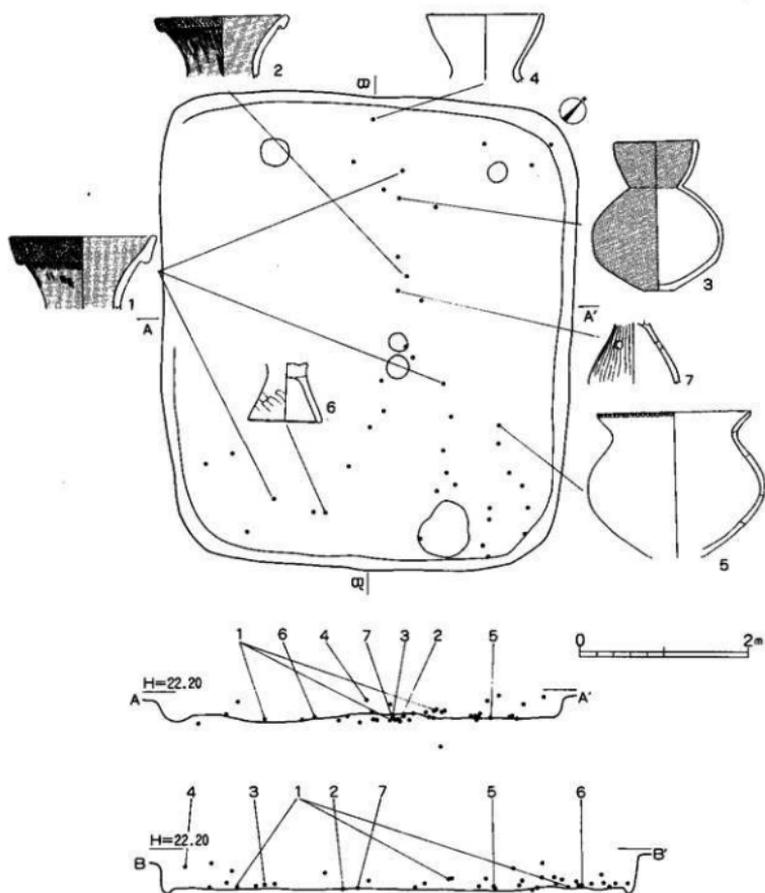


Fig.140 第48号住居跡遺物分布図

にハケメ痕を残置させている。内面は口縁部、体部とも横位のナデ整形で仕上げている。外面全体に炭化状のススの付着が認められる。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。6は脚部のみ完存する。裾径9.0cmを測る。壺の脚部としてはやや小型の部類に入る。外面はナデ整形、内面もナデ整形で仕上げている。焼成は良好。色調は赤褐色を呈する。7は高坏の脚をほぼ完存する。脚部は内湾気味に外方へ開く。透孔は3個である。外面はナデ整形の後、赤彩され、内面はナデによって仕上げられている。焼成は良好である。

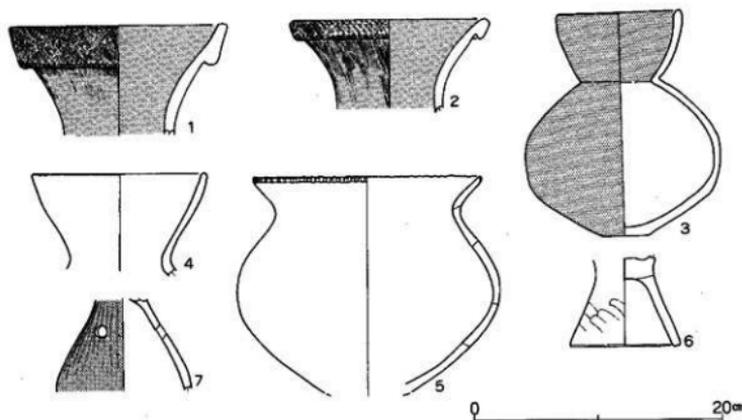


Fig.141 第48号住居跡出土遺物

第51号住居跡 (S151) (Fig.142~145)

位置 本跡は、調査区南西側にあたり、16-H区の標高22.00m~22.20mに位置し、若干離れるが、北側に第04号住居跡 (S104) が、北東側には第06号住居跡 (S106) が隣接する。

形態 平面形は隅丸方形を呈する。長軸4.82m、短軸4.80mを測り、長軸方位はN-45°-Eを指し、中型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともやや緩やかに立ち上がる。床面は若干の起伏を伴うものの、平坦ではほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 5層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|------------|------|---------------------------|
| 1層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 2層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 3層 | 7.5YR1.7/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 4層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 5層 | 7.5YR5/8 | 明褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。 |

住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基および貯蔵穴1基を確認する。

柱穴は4本検出されており、P1~P4が主柱穴である。P1は西側に位置し、上面が24×30cmの楕円形、深さ11cm。P2は北側に上面が26×26cmの円形で、深さ12cmを測る。またP3は南側に位置し、径81×61cmの楕円形ピット内に、21×19cmの柱穴が穿っている。深さは床面上より25cmである。P4は東側に位置し、上面が32×26cmの楕円形、深さ8cmを測る。

炉は地床炉で、住居中央より北西寄りに設置されている。形状は楕円形を呈するものの、北側半分が破壊されている。現存する規模は長径34cm、短径24cm、深さ8cmを測る。断面は鍋底状を呈し、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が南側に残存している。覆土は赤褐色焼土層1層のみで、多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

貯蔵穴は南壁際中央部からやや東寄りに構築され楕円形を呈する。上面では長径60cm、短径56cm、深さ40cmを測り、底面は丸底状をなし、壁は急傾して立ち上がる。

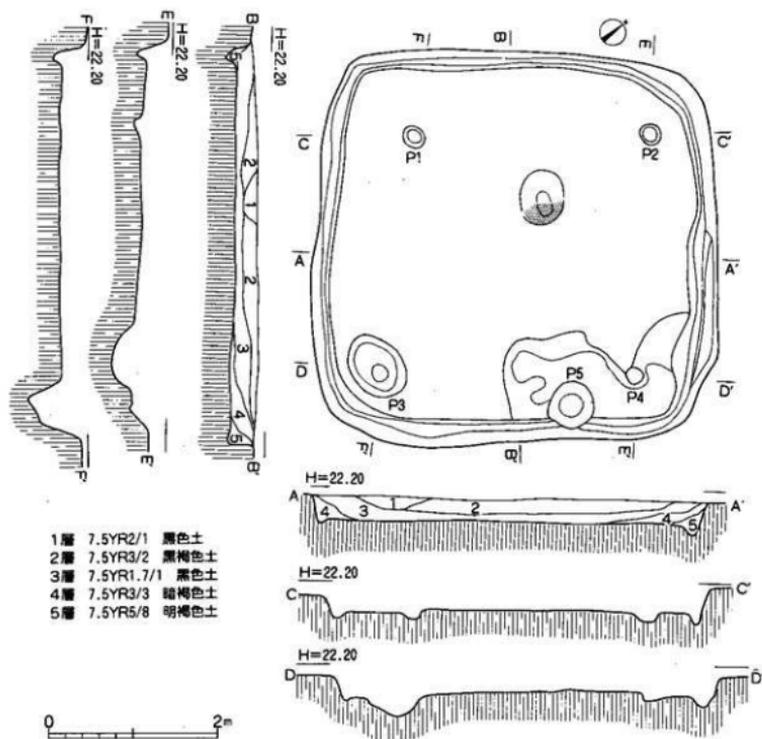


Fig.142 第51号住居跡

周溝は全周し、幅10～26cm、深さ4～12cmを測り、底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに掘り込まている。なお、入口部施設は確認できなかった。

掘り方 掘り方は、床下全面におよび、とくに東壁際は雑な掘り窪みが認められる。

遺物出土状況 遺物は、住居全面におよび、とくに偏りは認められない。個体として図示しうる資料は壺1点、甕2点、鉢5点である。

遺物 1は壺形土器口縁部破片。1/4程度を遺存している。推定口径22.0cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口唇部は磨耗が著しく調整は判別できないが、口縁部外面はRLの単節縄紋を施文し、口縁部下端はハケメ具による刻みが巡る。頸部は斜位のハケメ調整の後、縦位の丁寧なミガキが施され、複合口縁部分のみハケメ痕を残置させ、赤彩を施す。内面は横位と縦位のミガキの後、赤彩している。焼成は良好である。2は台付甕の口縁部破片である。口縁部から頸部にかけて1/6程度を遺存する。口縁部が大きく開く形態をもつ甕で、推定口径は20.6cmを測る。口唇部はハケメ具による刻みを比較的密に巡らし、口縁部外面は縦位の細かいハケメ調整、内面は比較的粗いハケメ調整を施す。焼成は良好で、橙色を呈する。3～7は小型の鉢形土器である。3は、体部の一部欠損するものの完存

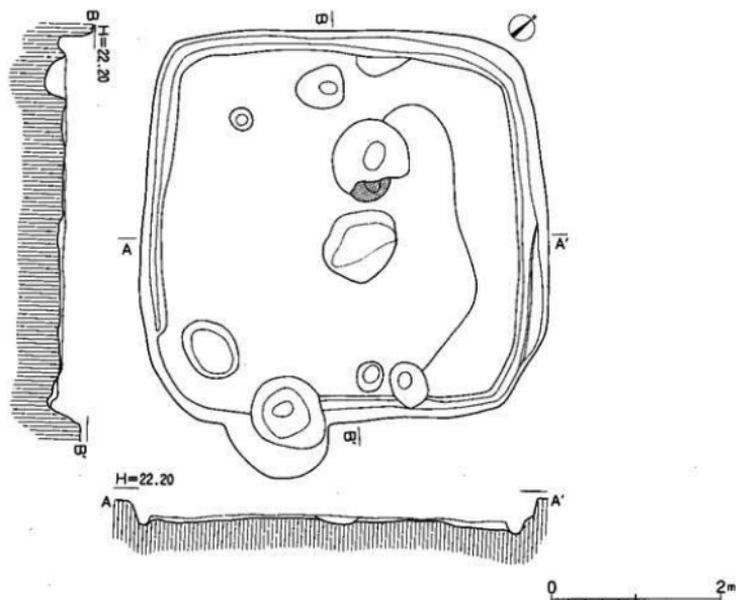


Fig.143 第51号住居跡掘り方

する。器高5.3cm、口径11.2cm、底径3.7cmを測る。底部は周縁が輪状に高まり、中央が窪む。体部はやや内湾気味に立ち上がるが、体部下半で稜をもつ。外面はナデ整形の後、赤彩され、内面は上端が横位のハケメ調整後ナデ整形が加わり、赤彩される。焼成は良好である。4は体部の約1/2程度を欠損する。器高7.2cm、口径9.8cm、底径4.2cmを測る。底部は周縁が輪状に高まる形態をもつが、器面の剥落が著しく明瞭ではない。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部付近で「く」字状に小さく外反する。したがって内面に稜をもつ。外面はナデ整形の後、赤彩され、内面は口縁部が横位のハケメ調整の後、ナデ整形。体部もナデ整形の後赤彩される。焼成は良好である。5も体部の一部を欠損する。器高5.5cm、口径11.8cm、底径4.0cmを測る。底部は平底で、体部はやや内湾気味に立ち上がり、中位から外方へ大きく開く。外面はナデ整形の後、赤彩され、内面は上位が横位のハケメ調整の後、ナデ整形を施し、ハケメ痕を消失させる。さらに赤彩されている。焼成は良好である。6は底部破片で、底部のみ完存。底径3.7cmを測る。平底で、外面はナデ整形、内面もナデ整形を施している。焼成は良好で、橙色を呈する。7も同様、底径3.6cmを測る。外面・内面ともナデ整形で仕上げられている。8は甕の底部破片で、底部のみ完存する。底径8.1cmを測る。底面はナデ整形が施され、内面も細かなナデによって仕上げられている。焼成は良好。赤褐色を呈する。

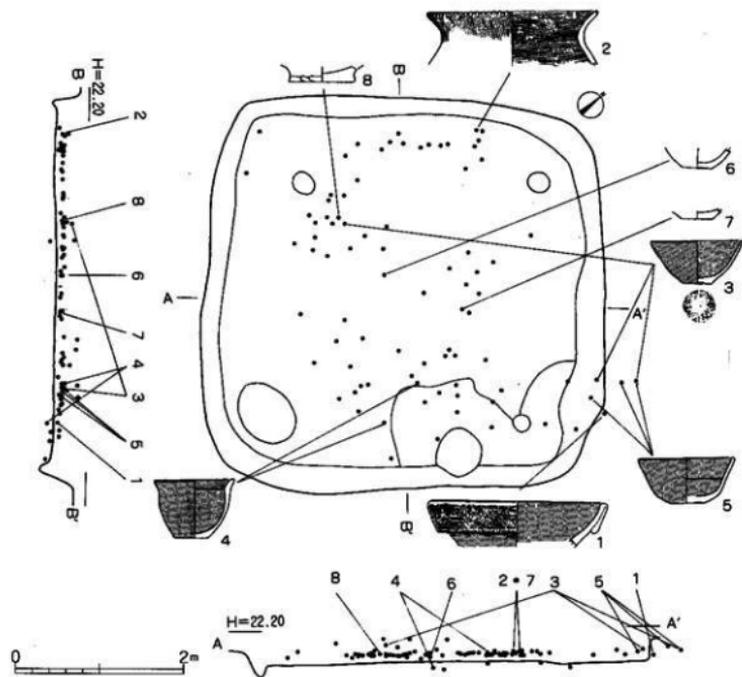


Fig.144 第51号住居跡遺物分布図

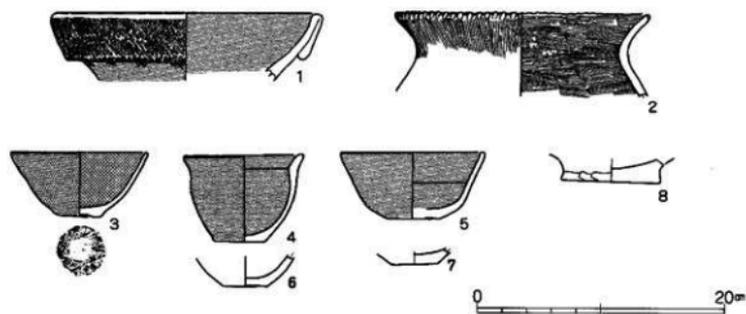


Fig.145 第51号住居跡出土遺物

第3節 川崎山Ⅲ期集落の遺構と遺物

1. 第Ⅲ期の概要 (Fig.146)

本遺跡の集落形成第Ⅲ期とされるのは、古墳時代中期のいわゆる「和泉式土器」に属する段階で、本遺跡において最もまとまりを表す住居跡群である。第01、02、03、07、09、10、12、13、16、18、19、20、21、24、26、28、31、33、34、41、44、46、49、50号住居跡の24軒が検出されている。ここで第01号住居跡と第10号住居跡には重複の痕跡が認められる。第01号住居跡は若干方位を振って拡張し、旧住居を貼床によって塞いでいる。また逆に第10号住居跡は北西側を埋め戻し、一方向に縮小させている。これら住居群の配置はⅠ期およびⅡ期よりも拡張して構築している。以前の北側の調査でも当該期の住居跡が確認されており、当遺跡の中核をなす時期であることに誤りない。今回の調査から判断しても住居群は東側と北側の限界を把握したもの、さらに西および南方に広がることだけは確かである。なお、この第Ⅲ期の特徴として、高坏と埴形土器が目立つ。とくに第33号住居跡や第34号住居跡では貯蔵穴周辺を中心に多量の完形土器の廃棄が行なわれている。また住居跡の形態は方形もしくは長方形を呈し、第19号住居跡は南西側約1/3程度床面の高まりをみせるいわゆる「ベッド状遺構」である。規模もバラツキがみられ、大きく2期に分けることも可能である。いずれも五世紀前半に比定される。

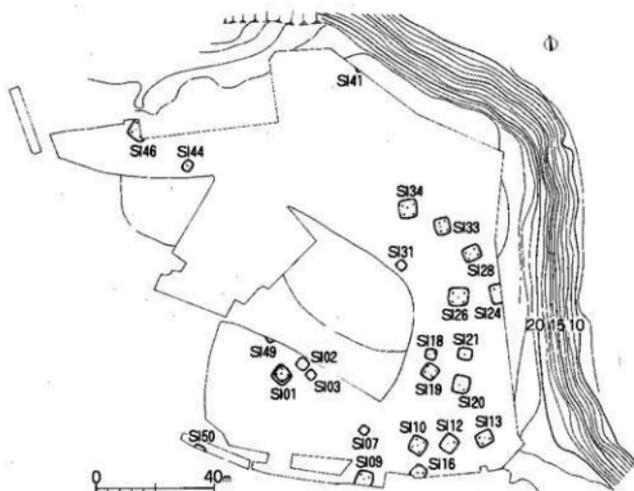


Fig.146 川崎山Ⅲ期集落

2. 第Ⅲ期の住居跡

第01号AおよびB住居跡 (SI01-A・B) (Fig.147~158)

位置 本跡は、調査区南西部、12-1、13-1区の標高22.32m~22.50mに位置する。南側に第04号住居跡 (SI04) が、北東側に第02号住居跡 (SI02) が隣接する。重複した住居跡である。当初表土層除去段階では1軒のみ単独で存在するものと考えていた。しかし、調査をすすめていく段階で、北東壁がわずかに膨らみ、さらに床面検出時では北東張り出し部に連続するような周溝がまわり、2軒重複住居跡であることが判明した。床面の高さはほぼ同じレベルであるが、新时期住居跡は火災住居であり、炭化物や焼土の出土状態からみて、外側の大きな住居跡が新しく、北東側がわずかに突出する小さい住居が古期に相当する。したがって、古期住居跡 (SI01-B) は北東壁の張り出し部と周溝のみ残存し、大半は新規住居跡 (SI01-A) によって切られ、覆土を観察することはできなかった。

第01号A住居跡 (SI01-A) (新时期住居跡)

形態 平面形は、隅丸長方形を呈する。長軸5.84m、短軸5.30mを測り、長軸方位はN-43°-Wを指す中型の住居跡である。壁は南東辺、南西辺、北西辺、北東辺がともにほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。火災住居で、とくに北西壁隅や北壁隅には焼土塊や炭化物が集中して検出されている。なお、北西壁中央付近では大きな擾乱を受けている。

覆土 11層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|-----|------------|-------|----------------------------------|
| 1層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。 |
| 2層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 3層 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 4層 | 2.5YR5/8 | 明赤褐色土 | 多量の焼土粒子、ローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 5層 | 7.5YR1.7/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。 |
| 6層 | .5YR3/1 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 7層 | .5YR3/4 | 暗褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 8層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 9層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。 |
| 10層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 11層 | 7.5YR3/1 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |

住居施設 住居内部の施設として、柱穴3本と入口部施設1本、地床炉1基および貯蔵穴1基が確認された。

柱穴P1~P3は貼床されていない新时期住居跡の主柱穴で、北側は未確認である。まずP1は西側に位置し、上面が13×14cmのほぼ円形で、深さ32cm。P2は南側で26×28cmの楕円形で、深さ38cm。P3は東側で、上面が12×14cmの円形で、深さ11cmをはかる。入口部施設として梯子穴が南東壁中央から東寄りに乗っている。P4では上面が30×34cmの楕円形、深さ45cmを測る。

炉は2基検出されているが、新时期の炉跡は西側にある大型の地床炉 (炉1) で、不整楕円形を呈し、住居中央から北西寄りに長径100cm、短径60cm、深さ16cmを測る。断面はやや起伏をもつ平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第1層~第3層まで焼土粒子を含むが、第2層と第3層が焼土層で、とくに第2層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒を含み、締まりがある。

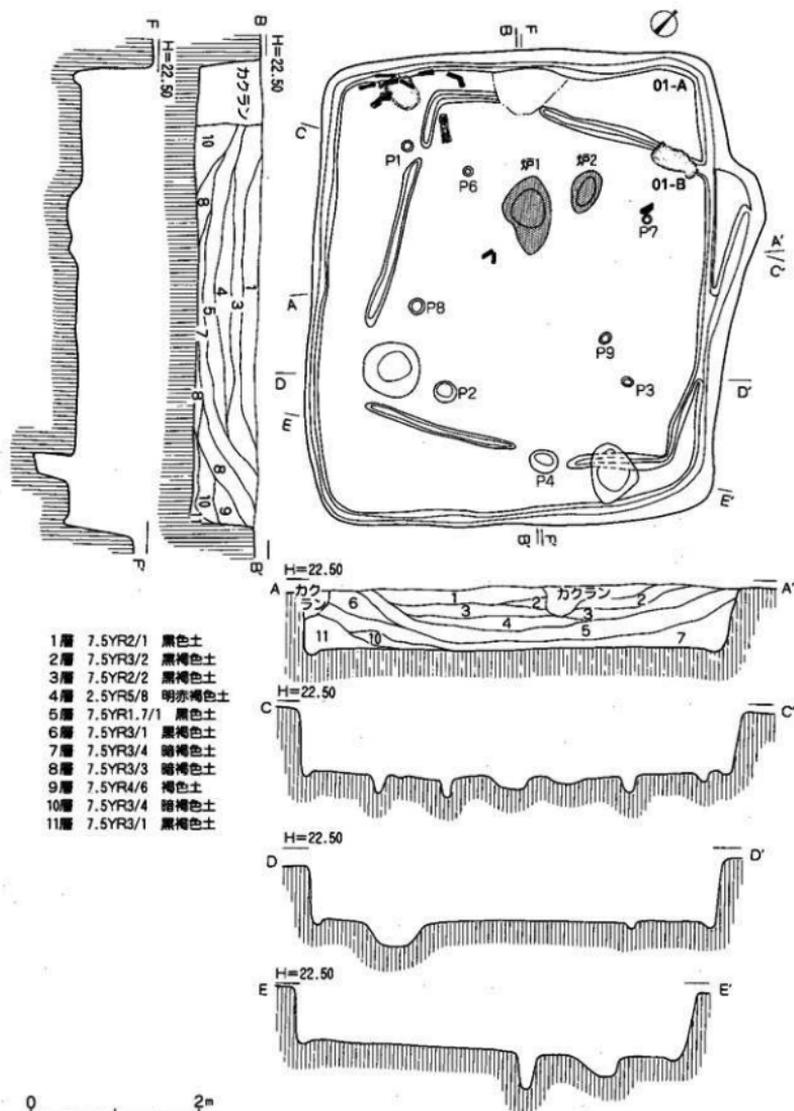


Fig.147 第01号A・B住居跡

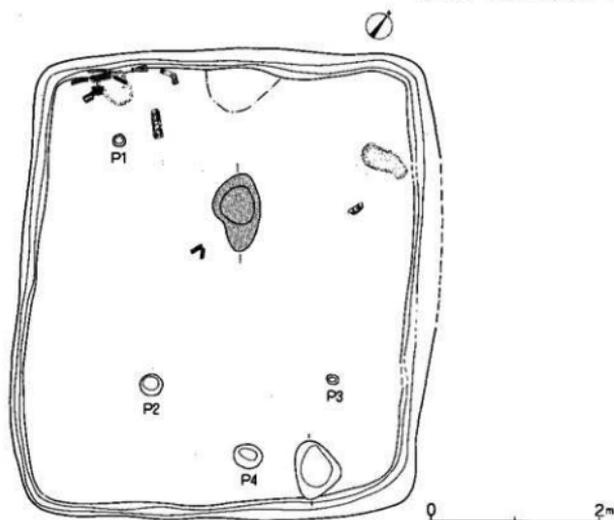


Fig. 148 第01号A住居跡

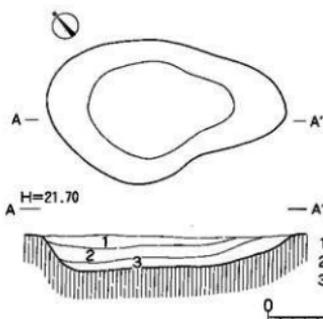


Fig. 149 第01号A住居跡炉

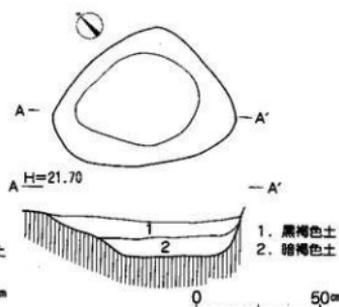


Fig. 150 第01号A住居跡貯蔵穴

貯蔵穴は南東壁隅奇りに位置する。長径76cm、短径54cm、深さ30cmを測り、略三角形を呈する。覆土は2層に分層でき、1層黒色土(7.5YR2/1)少量のローム粒子を含み、締まりがある。2層暗褐色土(7.5YR3/3)少量のローム粒子を含み、締まりがある。

周溝は全周し、幅8~12cm、深さ4~10cmを測る。11層黒褐色土の単層である。

掘り方 掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、炉周辺およびP1付近には不整形や柱穴状の掘り込みがみられる。

遺物出土状況 遺物は、住居内の西側に集中するが、南西から西側にかけて、および貯蔵穴周辺にまわって出土している。壺1点、甕5点、高坏5点、埴4点、石製模造品1点がある。

遺物 1は甕の口縁部破片。口縁部1/8程度を遺存するのみである。推定口径17.2cmを測る。口縁部は

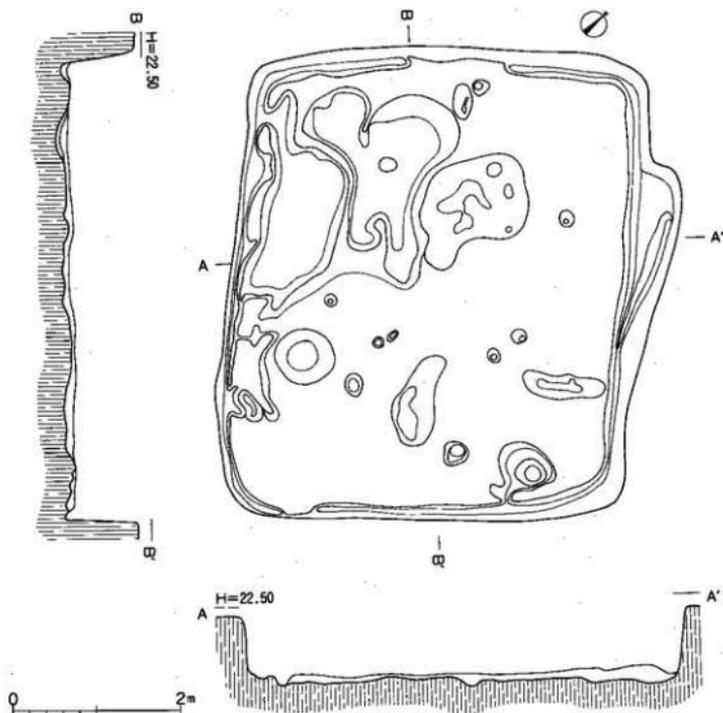


Fig.151 第01号A住居跡掘り方

「く」の字状に外反する。外面は木板状の木口部分を利用し、斜行するナデ整形。内面は横ナデを施す。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。2も口縁部破片。口縁部約1/10以下を遺存する。推定口径16.8cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反し、くびれ部は肉厚になっている。外面口縁部は横ナデ、頸部から肩部にかけて縦位のハケメ調整を施す。内面は口縁部上端は横ナデ、下位は横位のハケメ調整。肩部は横位のヘラナデ整形。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。3は壺の肩部から胴部上半部の破片。ほぼ球形の胴部を呈するものと思われる。外面は縦位の丁寧なヘラミガキの後、赤彩される。内面はナデ整形で、肩部付近に粘土帯の積み上痕が1段残る。焼成は良好である。4は台付甕の接合部破片。脚部は直線的に開く。現器高3.8cmを測る。外面は縦位のハケメ調整。内面はナデ整形を施す。焼成は良好で、にぶい黄褐色を呈する。5も台付甕の脚部破片。脚部は完存する。裾径12.0cm、現器高8.8cmを測る。甕底部は丸みもち、脚部はやや中膨らみで外方へ開く。甕との接合部は粘土帯を貼付け指頭による圧痕を巡らす。脚部は木板状の木口によるナデを縦位に施し、裾底面はナデ整形。内面は上半部がナデ、下半部がヘラナデによって仕上げられている。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。6～9は高坏である。6は裾部の一部が欠損するもの、口縁部から脚部にかけて完存する高坏で、器高12.1cm、口径14.2cm、裾径21.7cmを測る。坏部はほぼ直線的に外方へ開き、口縁部上部でさらに小さく外方へ屈曲する。脚部

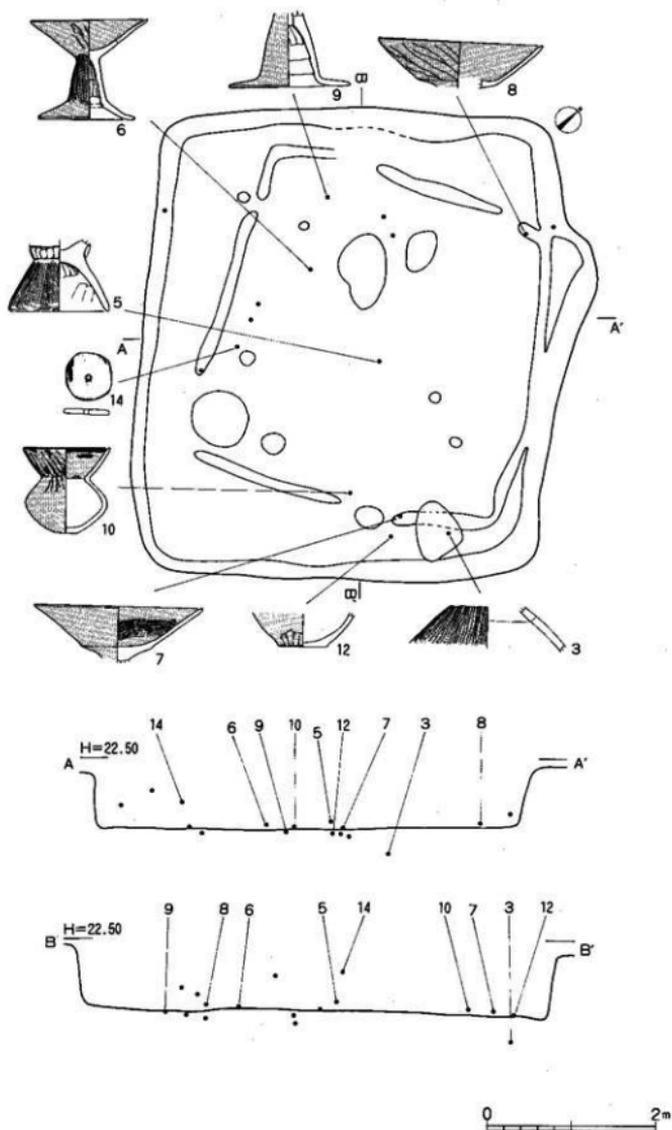


Fig.152 第01号A住居跡遺物分布図

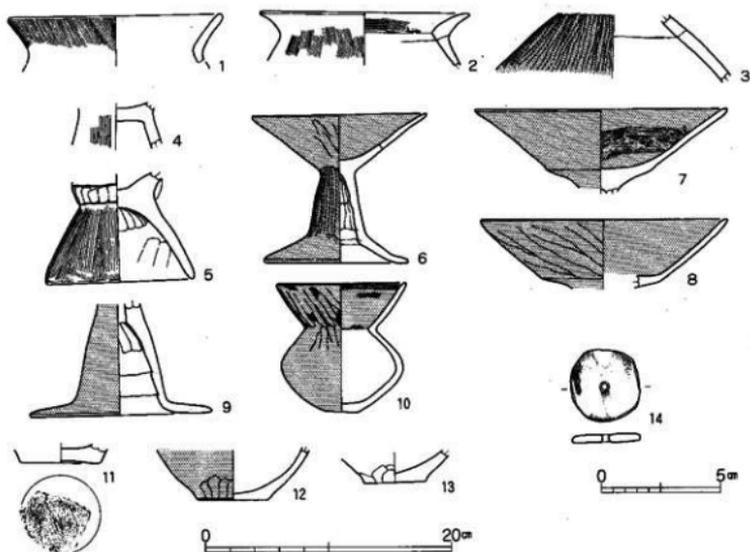


Fig.153 第01号A住居跡出土遺物

は柱状部がやや中膨らみを呈し、裾部は直線的に外方へ張り出す。外面は坏部口縁部上端が横ナデ。体部がヘラナデ。胴部は柱状部が縦位のヘラナデ。裾部がナデ。内面は坏部が入念なナデ、脚部は上部がシボリ目を残し、粘土帯の接ぎ目を残置する。裾部は横ナデ。外面と内面坏部が赤彩され、焼成は良好である。7は坏部の1/3程度を欠損する。口径20.2cm、現器高6.8cmを測る。坏部は口縁部と底部の境界に明瞭な段をもち、口縁部は外反気味に外方へ開く。外面は口縁部上端は横ナデ、下半部はナデ整形を加え、底面もナデ。内面は口縁部は横ナデ。体部はハケメ調整、底部はナデ整形で仕上げている。赤彩され、焼成は良好である。8は坏部の一部を欠損する。口径19.8cm、現器高5.7cmを測る。坏部は口縁部と底部の境界に明瞭な段をもち、口縁部は外反気味に外方へ開く。底面にはほぞ穴がみられ、抜けている。外面はケズリ成形の後、入念なナデ整形を加え、内面も入念なミガキが施され、底部はナデ整形で仕上げている。赤彩され、焼成は良好である。9は脚部破片で、柱状部は完存し、裾部が1/10以下の遺存である。推定裾径14.6cm、現器高8.1cmを測る。柱状部は中膨らみで、裾部はほぼ底面に接するように外方へ張り出す。外面は柱状部は縦位のヘラナデ、裾部はナデ。内面は上部がシボリ目を残し、粘土帯の接ぎ目が残置する。裾部は横位のナデ成形を施す。10は口縁部と胴部の一部を欠損するものの、口縁部から底部まで完存する埴形土器。器高10.4cm、口径10.6cm、底径2.4cm、胴部最大径9.2cm測る。小さな底部から扁球形の胴部へ移行し、口縁部はやや内湾気味に外方へ立ち上がる。外面は口縁部がハケメ調整の後、ミガキ整形。胴部はナデ整形。内面は口縁部が横位のハケメ調整の後、ナデ整形。胴部もナデ整形。外面と内面口縁部に赤彩される。11は甕底部破片。底径6.4cmを測る。底面はやや上げ底気味を呈し、外面はナデ、底面はヘラケズリ。内面はナデ整形を施す。焼成は良好、にぶい赤褐色を呈

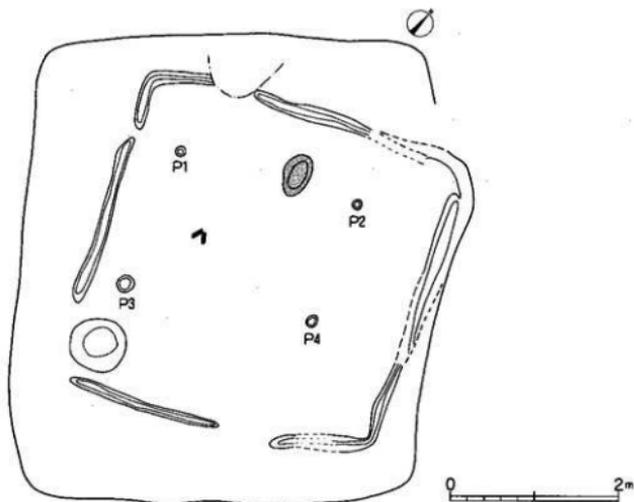


Fig.154 第01号B住居跡

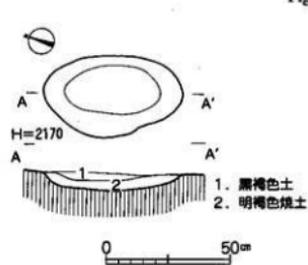


Fig.155 第01号B住居跡炉

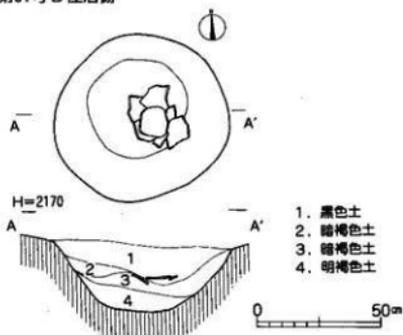


Fig.156 第01号B住居跡貯蔵穴

する。12は埴の胴下半部を完存する。底径5.8cm、現器高4.3cmを測る。平底の底部から胴部は内湾気味に立ち上がる。外面はナデ、内面もナデ整形。焼成は良好で、赤褐色を呈する。13は壺底部破片。約1/4程度を遺存する。底径5.0cmを測る。平底から胴部が外方へ立ち上がる。外面ヘラケズリ、底面もヘラケズリ。内面はナデ整形。焼成は良好で、褐色を呈する。14は円盤形の石製模造品である。ほぼ円形を呈し、扁平に磨き上げられている。中央に1箇所穿孔され、側縁部も研磨されている。長径2.90cm、短径2.86cm、厚さ0.28cm、中央孔径0.30cm、重量10.6gを測る。滑石製である。

第01号住居跡 (SI01-B) (古期住居跡)

形態 平面形は、隅丸長方形を呈する。長軸4.22m、短軸4.14mを測り、長軸方位はN-28°-Wを指す

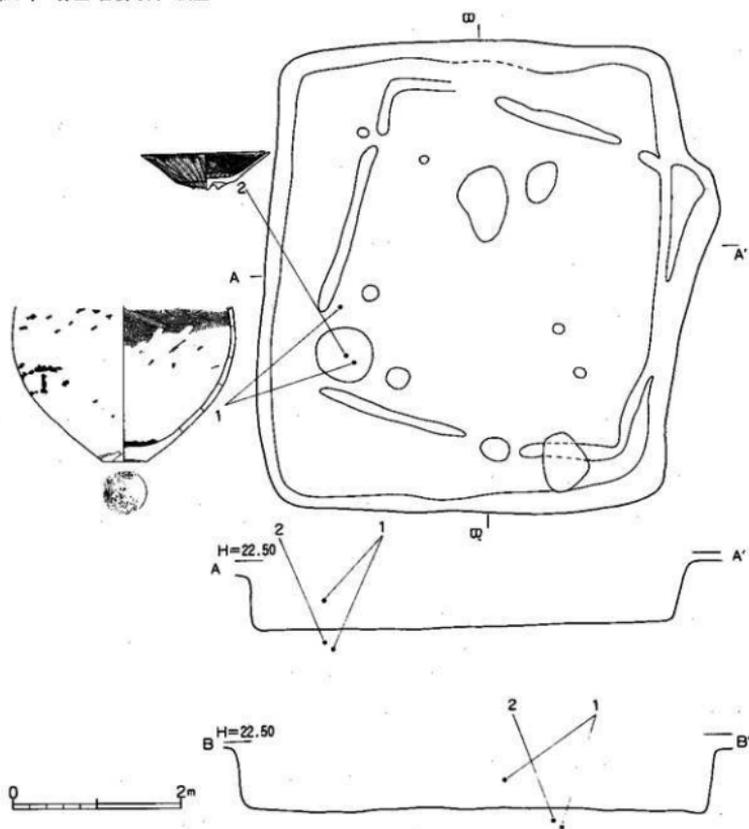


Fig.157 第01号B住居跡遺物分布図

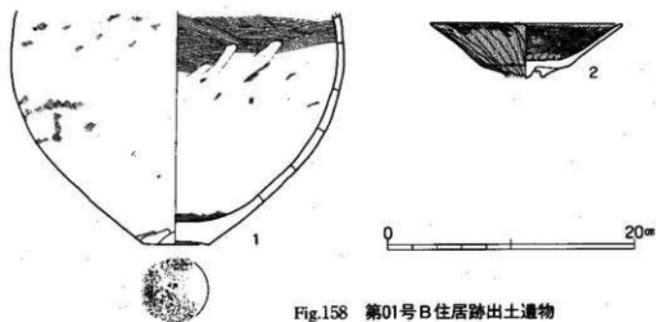


Fig.158 第01号B住居跡出土遺物

やや小型の住居跡である。壁は東辺を除き、周溝のみ検出であるが、東辺はほぼ垂直に立ち上がる。床面はSI01-A住居跡によって既に削平され、往時の状態は不明である。

覆土 覆土は北東壁隅で確認できたはずであったが、層位を確認しないまま発掘調査を実施したため、不明である。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基および貯蔵穴1基が確認された。

柱穴P6～P9は新时期住居跡によって貼床されており、SI01-A住居跡の掘り方調査の際検出したものである。主柱穴はP6～P9が相当する。まずP6は西側に位置し、上面が12×12cmの円形で、深さ23cm。P7は北側で10×10cmの円形で、深さ23cm。P8は南側で、上面が10×10cmの円形で、深さ23cmを測る。P9は東側で上面が12×12cmの楕円形、深さ22cmを測る。

炉は2基検出されているが、古期の炉跡は北側にあるやや小型の地床炉(炉2)で、楕円形を呈し住居中央から北寄り長径56cm、短径36cm、深さ9cmを測る。断面はやや起伏をもつ平底で、壁は緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は2層に分層でき、いずれも焼土粒子を含むが、第2層赤褐色焼土層には多量の焼土粒を含み、締まりがある。

貯蔵穴は南壁隅寄りに位置する。上層は明褐色ロームによって貼床されている。長径70cm、短径68cm、深さ29cmを測り、円形を呈し、覆土は5層に分層でき、1層明褐色ローム層(7.5YR5/8)貼床で締まりがある。2層黒色土(7.5YR2/1)少量のローム粒子を含み、締まりがある。3層暗褐色土(7.5YR3/3)少量のローム粒子を含み、締まりがある。4層暗褐色土(7.5YR3/4)少量のローム粒子や炭化物や焼土粒を含み、壺と高坏を包含していた。5層明褐色土(7.5YR5/8)ローム粒子を多量に含み、締まりがある。周溝は全周し、幅8～19cm、深さ3～8cmを測る。黒褐色土(7.5YR3/1)で覆われている。

遺物出土状況 遺物は、住居内の南壁隅に構築された貯蔵穴から壺と高坏が出土している。

遺物 1は壺の胴部下半部の破片である。底部は完存し、胴部が約1/3程度遺存する。底径5.4cm、現器高18.7cm、胴部最大径26.9cmを測る。外面は横位のヘラナデ。底部もナデ整形。内面は胴部中位が横位のハケメ調整。以下ナデ整形によって仕上げられている。焼成は良好で、におい赤褐色を呈する。2は坏部のみ完存する。口径15.6cm、現器高4.4cmを測る。坏部は口縁部と底部の境界に明瞭な稜をもち、口縁部は外反気味に外方へ開く。底面にはほぞの突出部が残置する。外面はハケメ調整の後、ナデ整形を加え、内面は口縁部は横位のハケメ調整し、底部はナデ整形で仕上げている。赤彩され、焼成は良好である。

第02号住居跡(SI02)(Fig.159～162)

位置 本跡は、調査区南西部、12-I、12-G、13-I、13-G区の標高22.32m～22.40mに位置する。なお、南西側に第01号住居跡(SI01)が、南東側には第03号住居跡(SI03)が隣接する。

形態 平面形は、隅丸方形を呈する。長軸3.56m、短軸3.36mを測り、長軸方位はN-46°-Wを指す、小型の住居跡である。壁は浅く、東辺、西辺、南辺、北辺とも緩やかに立ち上がる。床面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 5層に分層可能である。自然埋没土層である。

- 1層 7.5YR3/1 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 2層 7.5YR2/2 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 3層 7.5YR6/8 明黄褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
- 4層 7.5YR4/4 褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

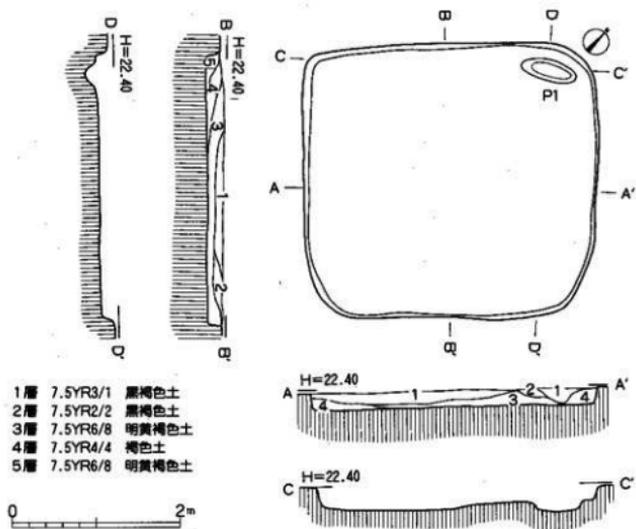


Fig.159 第02号住居跡

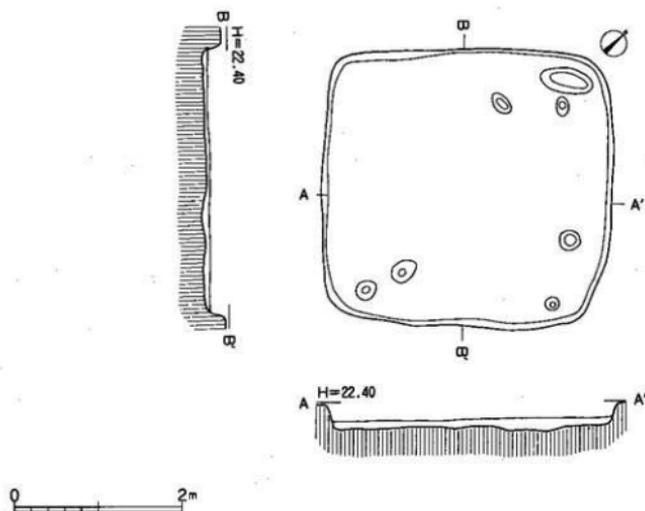


Fig.160 第02号住居跡掘り方

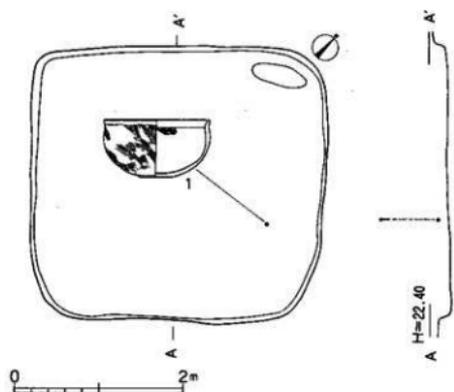


Fig.161 第02号住居跡遺物分布図

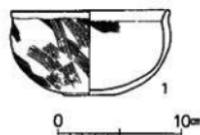


Fig.162 第02号住居跡出土遺物

5層 7.5YR6/8 明黄褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、長楕円形ビット1基のみ確認された。

主柱穴は確認できず、北隅壁際に楕円形を呈するビット1基が穿ってある。規模は、上面が 26×68 cm 深さ68cmを測る。機能は不明である。

掘り方 掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもつが、小規模なビット状の掘り込みをいくつも観察できる。

遺物出土状況 遺物は、住居の南東隅、床面上より若干浮いて碗形土器1点のみ出土している。

遺物 1は碗で口縁部から底部にかけて1/4程度を遺存する。器高7.0cm、口径12.8cm、底径4.0cmを測る。体部最大径と口径がほぼ等しく、口縁端部が短くわずかに外反する。内面にわずかな稜がみられる。体部はやや上位に最大径をもち、内湾気味に立ち上がる。底部は小さく、平底である。短い口縁部は横ナデ、体部は斜行するハケメ調整。底面はナデ。内面は口縁部が横ナデ、肩部付近は斜行するハケメ調整が施され、それを消失させるようにナデ整形を施す。焼成は良好。色調は橙色を呈する。

第03号住居跡 (SI03) (Fig.163~166)

位置 本跡は、調査区南西部で、13-G区の標高22.32m~22.38mに位置する。北西側は第02号住居跡 (SI02) が、南東側は第05号住居跡 (SI05) が隣接する。

形態 平面形は、楕円形を呈する。長軸3.40m、短軸2.68mを測り、長軸方位は $N-43^{\circ}-W$ を指し、小型の住居跡である。壁は全体的に浅く、東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ緩やかに立ち上がる。床面は若干起伏にとむが、ほぼ水平に平坦面が広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 4層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層 10YR2/1 黒色土 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。

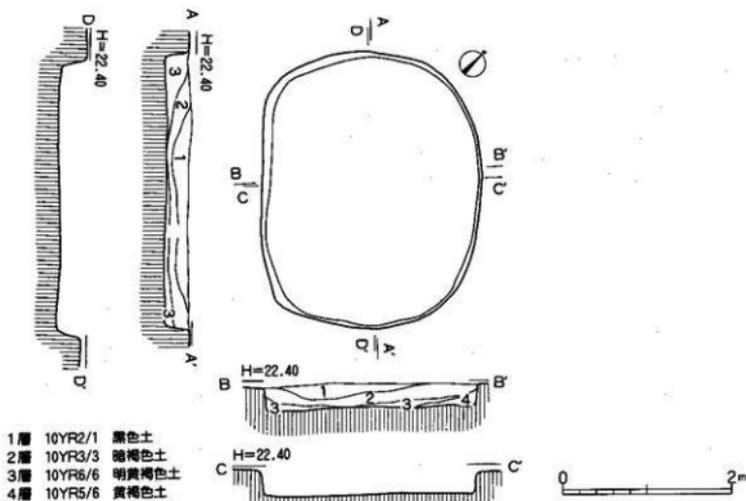


Fig.163 第03号住居跡

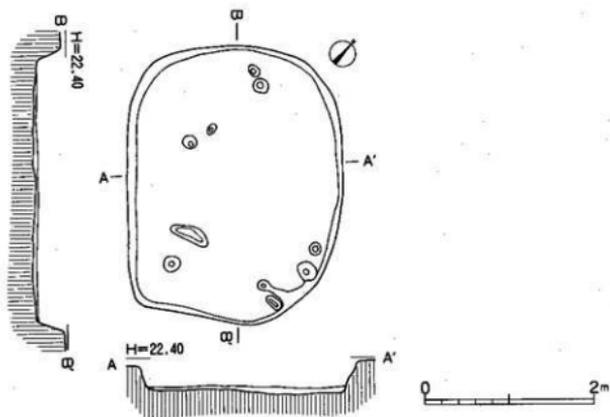


Fig.164 第03号住居跡掘り方

- | | | | |
|----|---------|-------|-----------------------------|
| 2層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 3層 | 10YR6/6 | 明黄褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 4層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠き、締まりがある。 |

住居施設 住居内部には施設としてなにも確認されなかった。

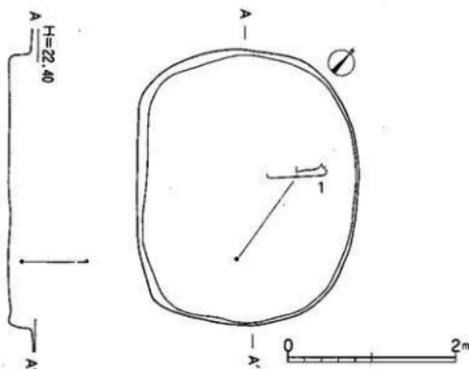


Fig.165 第03号住居跡遺物分布図

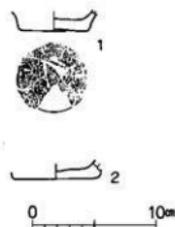


Fig.166 第03号住居跡出土遺物

掘り方 掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、とくに全体的に柱穴にはならない規模のピット状の掘り込みが数多くみられる。

遺物出土状況 遺物は、わずかに2点のみ出土している。

遺物 1・2とも底部破片である。1はやや上げ底状を呈する壘形土器の底部破片。底面で約1/4程度を欠損する。底部側面は緩く開きながら外傾する。底部側面は内外面ともナデ整形。底面は木葉痕を残す。焼成は良好。にぶい黄褐色を呈する。2は1/4程度を遺存する壘の底部破片。底面ともナデ整形で仕上げられている。焼成は良好で、にぶい黄褐色を呈する。

第07号住居跡 (SI07) (Fig.167~171)

位置 本跡は、調査区南部にあたり、15-K区の標高21.94m~21.98mに位置し、西側に第06号住居跡 (SI06) が、南東側に第08号住居跡 (SI08) が隣接する。

形態 平面形は、隅丸方形を呈する。長軸3.00m、短軸2.96mを測り、長軸方位はN-31°-Wを指し、小型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺とも垂直気味に立上がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 9層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層 10YR4/4 褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

2層 10YR5/8 黄褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。

3層 10YR3/4 暗褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりもある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴2本と地床炉1基を確認した。P1は西部に位置し、上面が30×36cmの楕円形、深さ15cm。P2は東南部に26×40cmの楕円形で、深さ32cm。P1とP2の2本は開口部が広く、深度は浅いため主柱穴としての機能を果たしていたかは疑問の残るところである。住居そのものが小型のことから柱以外の用途をもっていたものと考えられる。地床炉は住居中央から北西寄りに設置され、楕円形を呈し、長径56cm、短径38cm、深さ9cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。

覆土は3層に分層でき、第2層と第3層が焼土粒子を含む焼土層で、とくに第3層は赤褐色焼土層で、

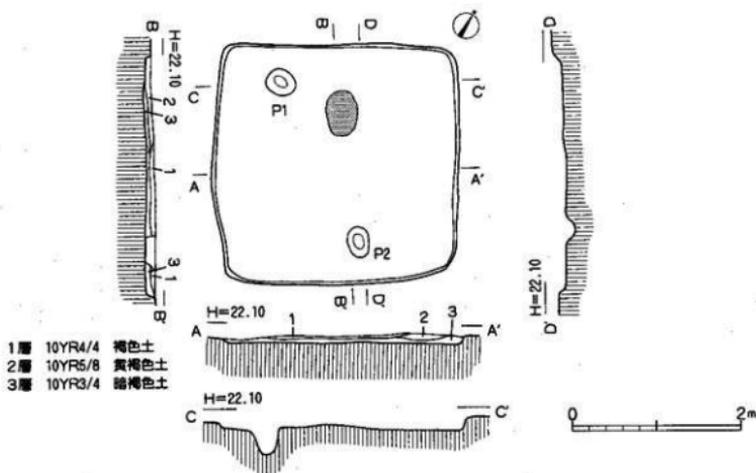


Fig.167 第07号住居跡

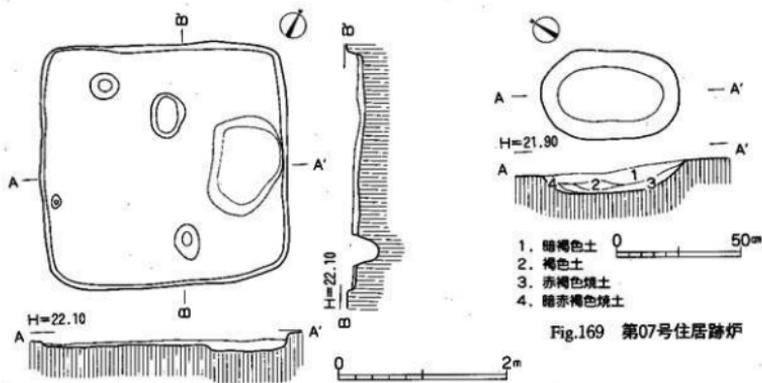


Fig.169 第07号住居跡炉

Fig.168 第07号住居跡掘り方

多量の焼土粒を含み、締まりがある。

周溝は構築されていない。

掘り方 掘り方は床下全面におよぶが、とくに東壁際には粗雑で複雑な掘り窪みが認められる。

遺物出土状況 遺物は、住居南側に集中するものの、大半は小破片のみで、とくに1個体の高坏形土器が小破片となって散在していた。個体として図示しうる資料は、高坏1点、壺底部1点である。

遺物 高坏は脚部1/3程度遺存する。坏部底面から接合部下に短い柱状部分があり、そこから中だるみのカーブを描いて外へ張り出し、端部が短く水平方向に伸びる。坏部内面および脚外面は入念なミガキ

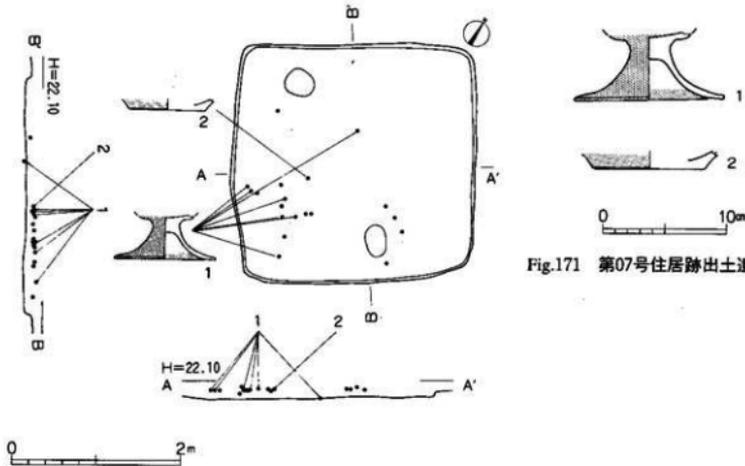


Fig.170 第07号住居跡遺物分布図

が施され、脚部は縦位方向のミガキが行なわれている。脚内面はナデ調整が施されている。また坏部、脚部および脚内面裾部には赤彩が施されている。焼成は良好である。2は壺の底部でわずか1/10程度を遺存するのみである。外面はハケメ調整が施され、赤彩が認められる。内面はナデ調整が施されている。焼成は良好である。

第09号住居跡 (SI09) (Fig.172~177)

位置 本跡は、調査区南端部、16-K、17-K区の標高21.54m~22.02mに位置する。住居跡群の南端に位置する。北東側に第08号住居跡 (SI08) が隣接する。

形態 平面形は、隅丸方形を呈するが、南側約1/3は調査区域外にあたるため、2/3の検出を行なった。したがって、長軸は5.34mであるものの、短軸は現存で3.60mを測る。住居の向きとして、長軸方位はN-62°-Wを指し、中型の住居跡である。確認された壁は南辺が全面観察できなかった以外東辺および西辺とも部分確認である。いずれも確認された3辺ともやや緩やかに立ち上がる。床面は若干の起伏が認められるが、ほぼ水平に平坦面が広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 7層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|---------|------|-----------------------------|
| 1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。 |
| 2層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。 |
| 3層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 4層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 5層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 6層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |

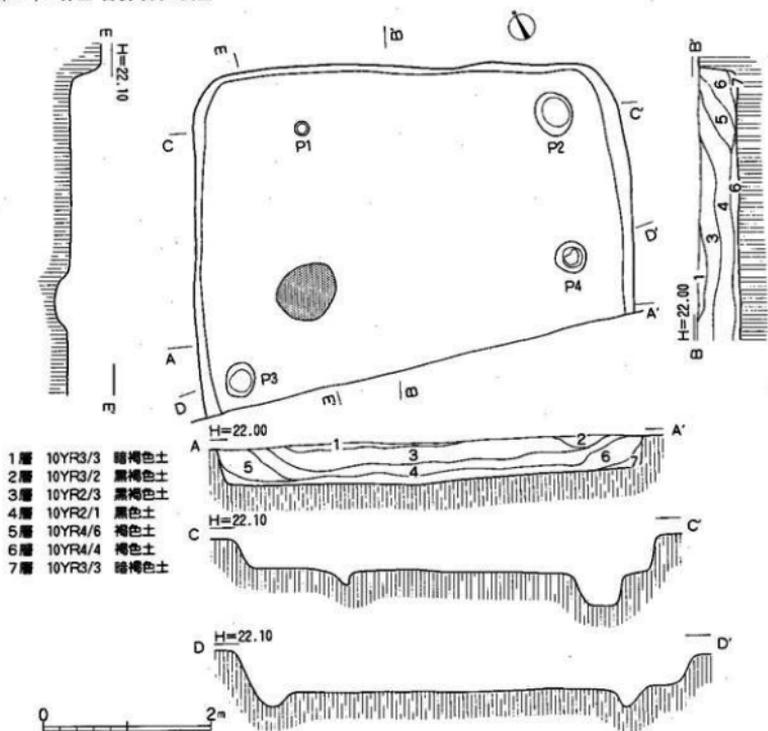


Fig.172 第09号住居跡

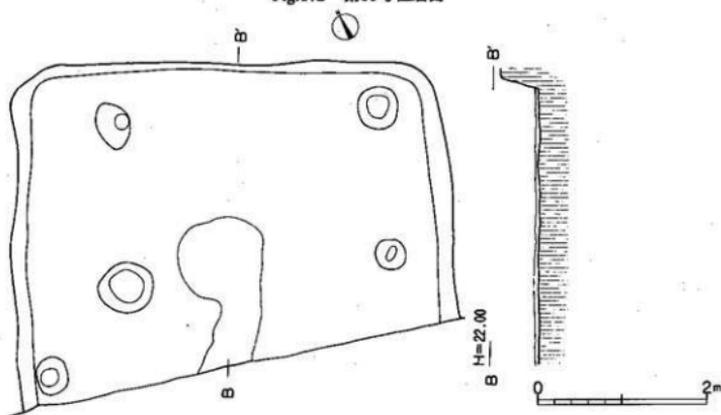


Fig.173 第09号住居跡掘り方

7層 10YR3/3 暗褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠き、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基が確認された。

柱穴はP1～P4であるが、主柱穴はP1とP2の2本確認できる。P1は北側に位置し、上面が18×18cmの円形、深さ13cm。P2は東側で46×54cmの楕円形で、深さ43cm。P3は炉の西側に位置し、上面が38×42cmの楕円形で、深さ25cmを測り、支柱穴かどうかわ用途は不明。P4は南東壁中央に配置され、上面が38×38cmの円形、深さ25cmを測る入口部施設の梯子穴と考えられる。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北西寄りに長径78cm、短径64cm、深さ19cmを測る。断面は若干の起伏はあるものの、ほぼ平坦な平底状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は4層に分層でき、第2層と第3層が焼土粒子を含む土層で、とくに第3層が焼土層で、多量の焼土粒を含み、締まりがある。

周溝は構築しない。

掘り方 掘り方は、床下全面におよぶが、とくに住居中央部の南北方向に細く浅い溝状の掘り窪みが認められる。

遺物出土状況 遺物は、住居全体に広がっているが、とくに埴形土器は北西壁際集中している。

遺物 1は壺の口縁部破片で、1/4程を遺存する。推定口径15.6cmを測る。口縁部は緩く外方へ開く。内外面ともナデ整形の後、赤彩される。焼成は良好。2は壺の口縁部から頸部にかけての破片で、1/3程度欠損する。口径16.6cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反する。内外面ともナデ整形で仕上げられている。焼成は良好。にぶい褐色を呈する。3は壺の胴部破片で1/6程を遺存する。ほぼ球形の形態をもち、最大径が胴部中位にあり、23.0cmを測る。内外面ともナデ整形が施され、外面の中位および内面下位にスズ状の炭化物を付着する。焼成は良好で、外面は暗褐色、内面は赤褐色を呈する。4～10は高坏である。4は坏部2/3程を遺存する。口径19.6cm、坏部現器高6.3cmを測る。坏部底部と口縁部との境界に明瞭な稜をもつ。口縁部はほぼ直線的に立ち上がる。内面の底部は平坦である。外面口縁部はナデ整形。底部はハケメ調整の後、ケズリを加える。全面赤彩される。内面は口縁部上端でハケメ調整を残置し、下位はナデ整形を施す。赤彩されている。焼成は良好である。5も同じく坏部破片で、1/3程欠損する。口径17.6cm、坏部現器高7.5cmを測る。坏部底部と口縁部の境界に明瞭な稜をもち、口縁部とは若干内湾気味に立ち上がる。また脚部との接合のため坏部にほぞが付けられている。外面はナデ整形。底部はハケメ調整の後、ケズリが施されている。全面赤彩されている。内面はナデ整形の後、赤彩されている。焼成は良好である。6～8はいずれも脚部のみ完存。6は裾径14.5cmを測る。脚部はやや中彫らみの柱状部と外方へ直線的に張り出す裾部とからなる。外面柱状部は縦方向のナデ、内面は上端にしほり目が残り、また下位は横位のナデ、裾部は横ナデで仕上げられている。焼成は良好で、赤褐色を呈する。7も裾径14.4cmを測る。脚部はほぼ直線的な柱部と外方へ短く張り出す裾部とからなる。脚柱状部は縦位のナデ整形。裾部もナデ整形後、赤彩されている。内面は上位はシボリ目、下位は縦位のナデ整形。裾部は横ナデ整形を施す。焼成は良好。8は裾径15.4cmを測る。脚部はやや中彫らみの柱状部

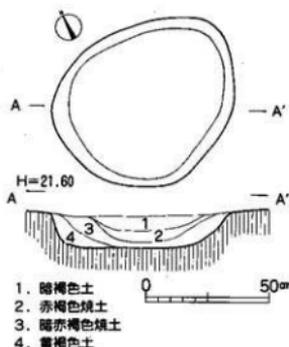


Fig.174 第09号住居跡炉

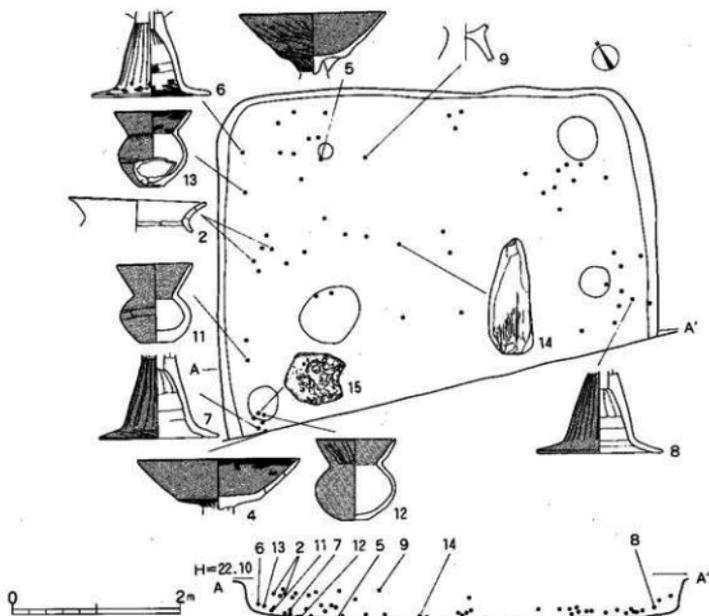


Fig.175 第09号住居跡遺物分布図

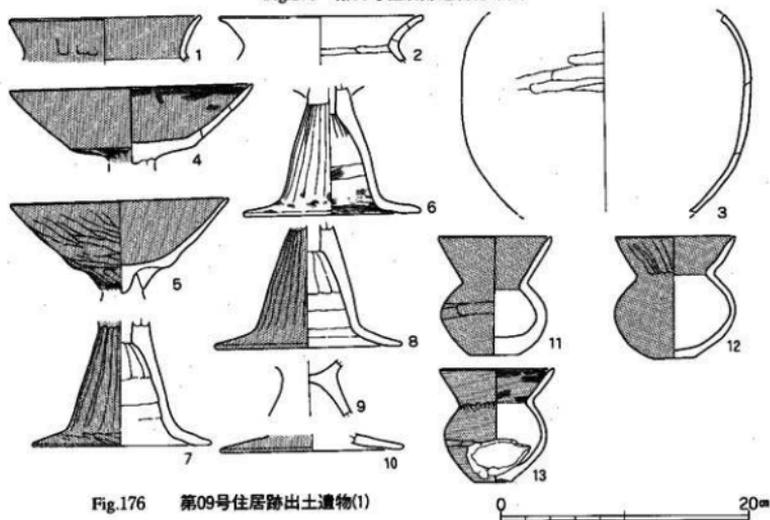


Fig.176 第09号住居跡出土遺物(1)

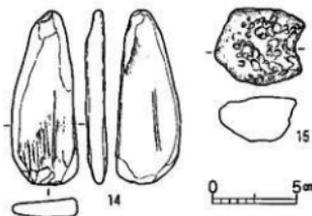


Fig.177 第09号住居跡出土遺物(2)

と外方へ直線的に張りだす裾部とからなる。外面柱状部は縦方向のナデ整形の後、赤彩されている。内面は上端にしほり目が残し、また下位は横位のナデ、裾部は横ナデで仕上げられている。焼成は良好である。9は高坏の柱状部破片。1/5程度の遺存である。中実で、坏部と脚部の接合部の薄い柱状部である。外面は縦位のヘラケズリされ、ケズリ面を残置している。10は高坏裾部破片。1/4程度を遺存し、推定裾径15.0cmを測る。内外面ともナデ整形によって仕上げられている。外面に赤彩される。焼成は良好である。11~13は埴形土器である。11は口縁部を1/2程を欠損する。器高9.7cm、口径9.2cm、底径4.2cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外方へ大きく開き、体部は最大径を中位に位置し、球形を呈している。外面は全面入念にミガキが施され、赤彩される。内面はナデ調整され、口縁部に赤彩している。焼成は良好である。12は口縁部から底部にかけて1/3程度欠損する。器高9.9cm、口径9.6cm、底径3.2cmを測る。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、体部は球形を呈する。底面は平底である。外面は全面入念なミガキが施され、赤彩されている。内面はナデ整形され、口縁部は赤彩されている。焼成は良好である。13は完存品である。器高9.3cm、口径9.4cm、底径3.0cmを測る。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、体部はほぼ球形を呈する。外面は全面入念なミガキが施されている。口縁部は横位に、体部は縦位に仕上げられている。内面口縁部は横位のハケメ調整され、体部はナデ整形で、外面全体と口縁部内面は赤彩されている。なお、体部下半部には人為的な穿孔が認められる。この穿孔行為は焼成後行なわれている。焼成は良好である。

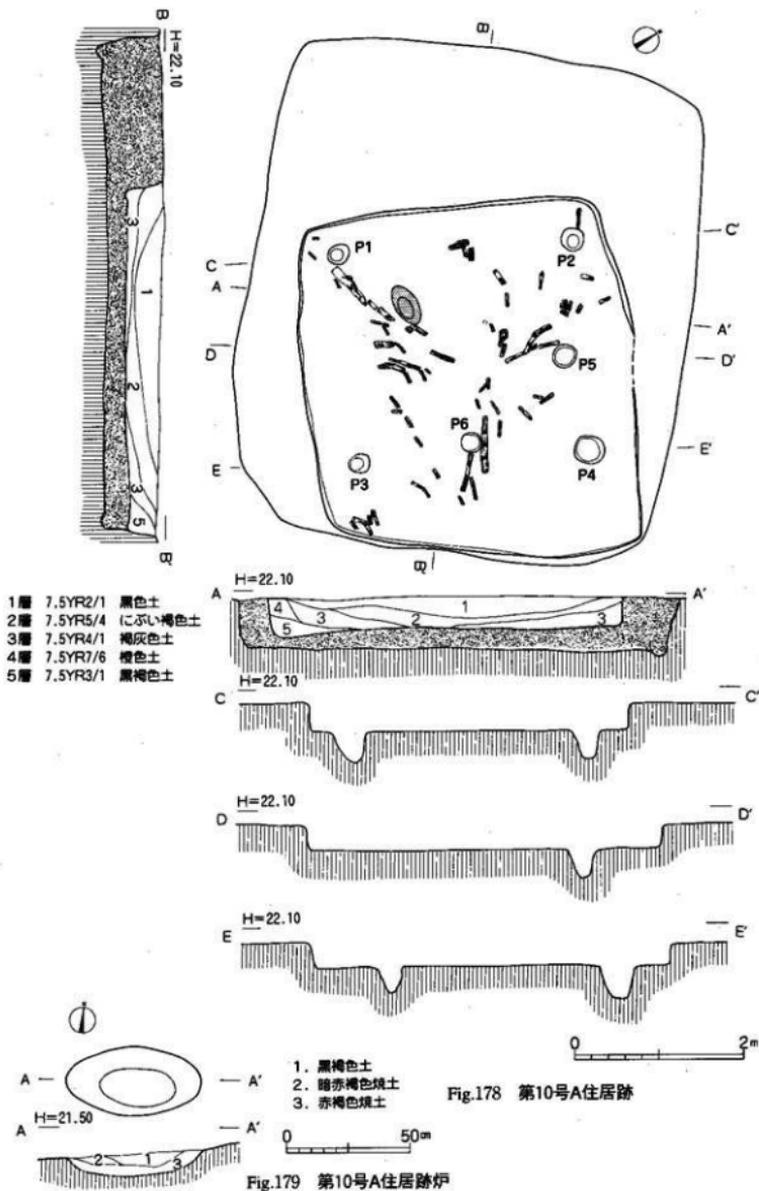
14は滑石製の砥石である。完存で手持ち砥石と考えられる。長さ10.58cm、幅3.65cm、厚さ1.02cm、重さ89.5gを測る。長楕円形を呈し、表裏面と側面に顕著な磨耗痕が認められ、表面は凹面をなし、下半部には細かな筋状の研磨痕が一方に集中し、裏面には右上端部に同様の筋状の研磨痕が残置している。また溝状の研磨痕もみられる。15は軽石である。一部を欠損しているものの、扁平な楕円形を呈している。表面はきわめて滑らかに磨滅している。研磨具ないし磨石であろう。長さ4.84cm、幅5.47cm、厚さ2.80cm、重さ18.7gを測る。

第10号AおよびB住居跡 (SI10-A、B) (Fig.178~186)

位置 本跡は、調査区東南部、15-M、16-M区の標高21.75~21.88mに位置する。北東側に第14号住居跡 (SI14) が、東側に第12号住居跡 (SI12) が、南側に第16号住居跡 (SI16) が隣接する。相重複した住居跡で一方向 (東方向) に縮小している。当初表土層除去段階では1号住居跡と同じく1軒のみの単独住居として調査をすすめていたため、部分的に掘り過ぎた箇所もあるが、埋め戻し土が比較的堅緻であったため、縮小住居であることは、容易に判断することができた。とくに新期 (SI10-A) の床面は貼床であることから柱穴や炉跡の位置は明瞭であった。しかし、壁については西壁が堅緻であった以外3辺ともやや軟弱でとくに北壁から東壁にかけて不明確で、正確な壁として把握できず、不十分であったことは否めない。なお旧住居 (SI10-B) を埋め戻し、新住居 (SI10-A) に建て替えた縮小率はおよそ半分の52%であった。

第10号A住居跡 (SI10-A) (新期住居跡) (Fig.178~181)

形態 古期住居跡 (SI10-B) の東壁を共有する平面形は、隅丸方形を呈する。長軸4.34m、短軸4.00mを測り、長軸方位はN-68°-Wを指す。中型の住居跡である。壁は東辺が古期住居とはほぼ共有する以外



3辺とも貼壁で、明褐色ロームを主とする土によって堅く築き固められている。とくに西壁は堅緻で、地山であるハードローム層そのものであった。したがって、全辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がるが、全面貼壁で、旧住居全面に20~24cm程度均一に埋め戻した上、さらに壁を構築したものと考える。火災住居で、床面全体に炭化物和焼土の堆積がみられるが、とくに住居西寄りに集中するようである。

覆土 5層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|----------|--------|---------------------------|
| 1層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 2層 | 7.5YR5/4 | にほい褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 3層 | 7.5YR4/1 | 褐灰色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 4層 | 7.5YR7/6 | 橙褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 5層 | 7.5YR3/1 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |

住居施設 住居内部の施設として、柱穴6本と地床炉1基が確認された。

柱穴はP1~P6のうち、P1~P4が主柱穴と考える。まずP1は南西隅に位置し、上面が24×30cmの楕円形、深さ24cm。P2は北西隅で上面が26×26cmの円形で、深さ26cm。P3は南東隅に位置し、上面が24×26cmの楕円形で、深さ19cm。P4は北東隅に位置し、上面が38×38cmの円形で、深さ27cmを測る。またP5はP2とP4のほぼ中央に設置されており、支柱穴と考えられ、上面が26×30cmの楕円形で、深さは23cm。P6もP3とP4のほぼ中央に設置された支柱穴であろう。上面が24×26cmの楕円形で、深さは18cmを測る。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から西寄りに長径54cm、短径28cm、深さ14cmを測る。断面はやや起伏をもつ鍋底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第2層と第3層が焼土粒を含む土層で、とくに第3層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒を含み、締まりがある。

周溝は構築しない。

掘り方 埋め戻し土によって壁・床面が構築されており、貼壁・貼床構築処理である。

遺物出土状況 遺物は、住居全体にまぎらまぎら出土している。とくに炉跡東側に集中している。図示できた遺物はすべて土器で、壺1点、高坏4点、埴3点、甕1点である。

遺物 1は壺口縁部破片。口縁部1/4程度遺存する。推定口径14.6cmを測る。口縁部は外反しながら立ち上がる。外面縦位のヘラナデ、内面横ナデ。赤彩され、焼成は良好である。2は高坏で、口縁部から脚部にかけて2/3程度遺存する。現器高15.1cm、推定口径17.4cmを測る。坏部は口縁部と底部との境界は明瞭な稜をもち、脚部は中膨らみで、裾部で強く屈曲し、外方へ張り出す。外面は全面ナデ整形で仕上げられ、赤彩される。内面坏部はナデ整形され、赤彩が施される。脚部は柱状部上半部はシボリ目が残り、下半部は横位のナデ。粘土帯の積み上痕が2段残置している。裾部はヘラナデ。焼成は良好である。3は高坏の坏部が完存する。口径19.8cm、現器高6.3cmを測る。口縁部と底部の境界に明瞭な稜をもち、口縁部は外反気味に立ち上がる。外面口縁部は横位のハケメ調整の後、入念なナデ整形。底部もナデ整形。内面は横位のハケメ調整の後、ナデが加わる。全面赤彩され、焼成は良好である。4は高坏の脚部破片。脚部の柱状部のみ完存する。柱状部の中膨らみは弱く、ほぼ直線的に外方へ開く。外面は縦位のヘラナデ整形の後、赤彩される。内面は上半部にシボリ目が残置する。焼成は良好である。5は高坏の脚部破片。裾部のみ1/8程度遺存する。推定裾径13.6cmを測る。裾部全体が低く、底面に接する。内外面ともナデ整形。外面に赤彩される。焼成は良好である。6は口縁部と胴部の一部を欠損するものの、口縁部から底部まではほぼ完存する埴形土器。器高11.2cm、口径10.4cm、底径2.6cm、胴部最大径9.6cm測

る。平底の小さな底部から球形の胴部へ移行し、口縁部は内湾気味に大きく開く。外面口縁部上端は横ナデ、口縁部下半部から底部にかけて入念なナデ整形し、全面赤彩される。内面はナデ整形によって仕上げられている。口縁部のみ赤彩される。焼成は良好である。7も口縁部の一部を欠損するものの、口縁部から底部にかけて完存する小型壺。器高8.9cm、口径9.0cm、底径3.0cm、最大径が胴部中位に位置し9.4cmを測る。上げ底の小さな底部から球形の胴部へ移行し、口縁部は短く「く」の字状に外反する。外面は口縁部上端が横位のヘラケズリ、口縁部下半部から底部は斜行するヘラケズリ。内面は口縁部が斜行のヘラナデ。胴部もナデ整形で仕上げられている。外面と内面口縁部に赤彩され、焼成は良好である。8は甕底部破片。底部約1/4程度遺存する。推定底径7.8cmを測る。平底の底部から外反気味に胴部が立ち上がる。全面ナデ整形。焼成は良好。にぶい黄褐色を呈する。9は埴の底部破片。底部のみ完存する。底径2.6cmを測る。やや上げ底気味の底部から球形の胴部へ移行する。全面ナデ整形。焼成は良好。明褐色を呈する。

10は軽石である。略球形を呈し、全面滑らかに磨耗しているが、気孔のある面はやや起伏がはげしい。長さ7.93cm、幅7.28cm、厚さ6.89cm、重さ21.0gを測る。

第10号B住居跡 (SI10-B) (Fig.182~186)

形態 SI10-Aの下層で検出された住居跡で、平面形は隅丸長方形を呈する。長軸6.25m、短軸5.34mを測り、長軸方位はN-38°-Eを指す。中型の住居跡である。壁は北西辺・南西辺・南東辺がほぼ垂直に、北東辺が緩やかに立ち上がる。床面は水平に広がる。

覆土 7層に分層可能である。すべて埋め戻し土層である。

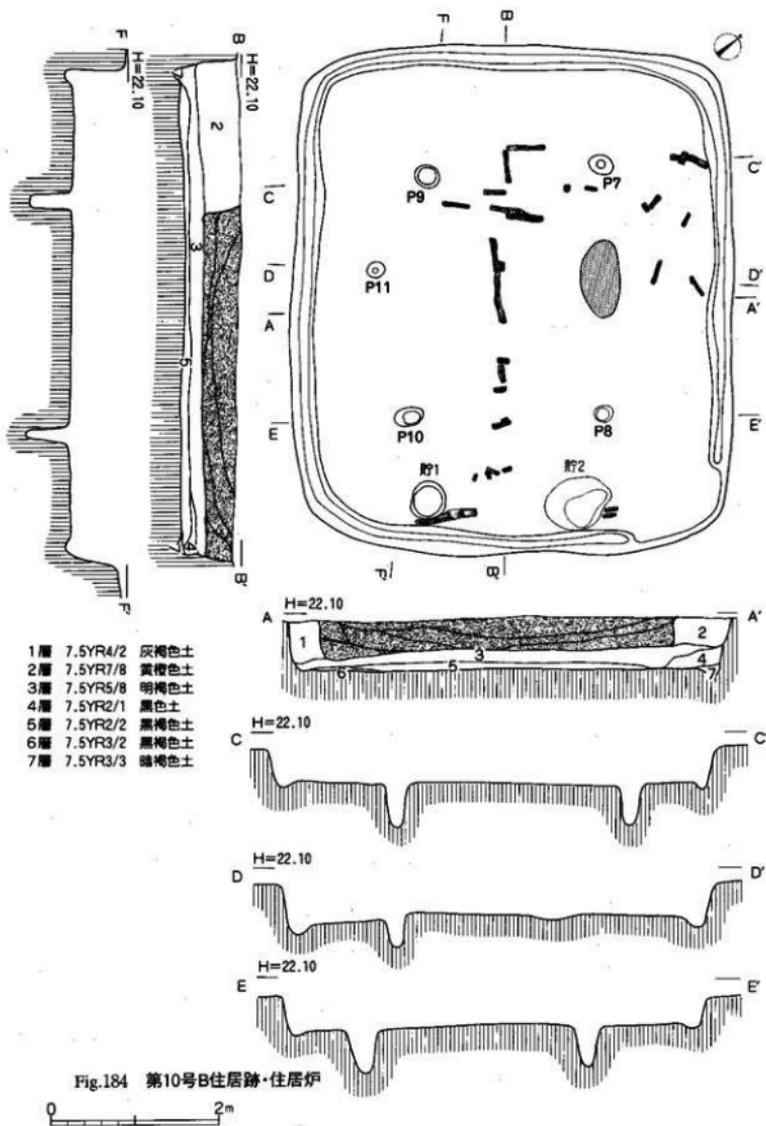
- | | | | |
|----|----------|------|----------------------------------|
| 1層 | 7.5YR4/2 | 灰褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。堅緻である。 |
| 2層 | 7.5YR7/8 | 黄褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。堅緻である。 |
| 3層 | 7.5YR5/8 | 明褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。堅緻である。 |
| 4層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。堅緻である。 |
| 5層 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。堅緻である。 |
| 6層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。堅緻である。 |
| 7層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |

住居内部の施設として、柱穴5本と地床炉1基および貯蔵穴2基が確認された。

柱穴はP7~P11で、P7~P10が主柱穴と考える。まずP7は北隅側に位置し、上面が22×26cmの楕円形、深さ48cm。P8は東隅側で上面が18×24cmの楕円形で、深さ49cm。P9は西隅側に位置し、上面が26×32cmの楕円形で、深さ51cm。P10は南隅側に位置し、上面は20×38cm、深さ53cmを測る。またP11はP9とP10の中間に位置する支柱穴と考えられ、上面が19×22cmの楕円形で、深さは15cmを測る。炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北東寄りの北東壁よりに構築されている。長径96cm、短軸48cm、深さ4cmを測る。断面はやや起伏をもつ鍋底で、壁は緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は単層で、第1層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒を含み、締まりがある。

貯蔵穴と思われるピットが2カ所確認される。貯蔵穴1は南東壁際の南寄りに構築されている楕円形のピットで、長径50cm、短径42cm、深さ21cmを測る。覆土中より鉢1点が出土している。貯蔵穴2はやはり南東壁際北寄り、不整形楕円形を呈する。長径82cm、短径66cm、深さ21cmを測る。遺物の出土はみられなかった。なお、住居跡長軸線上には炭化物が堆積し、周辺には焼土塊が検出されている。焼失家屋である。

周溝は幅10~20cm、深さ4~12cmを測る。7層暗褐色土が堆積している。



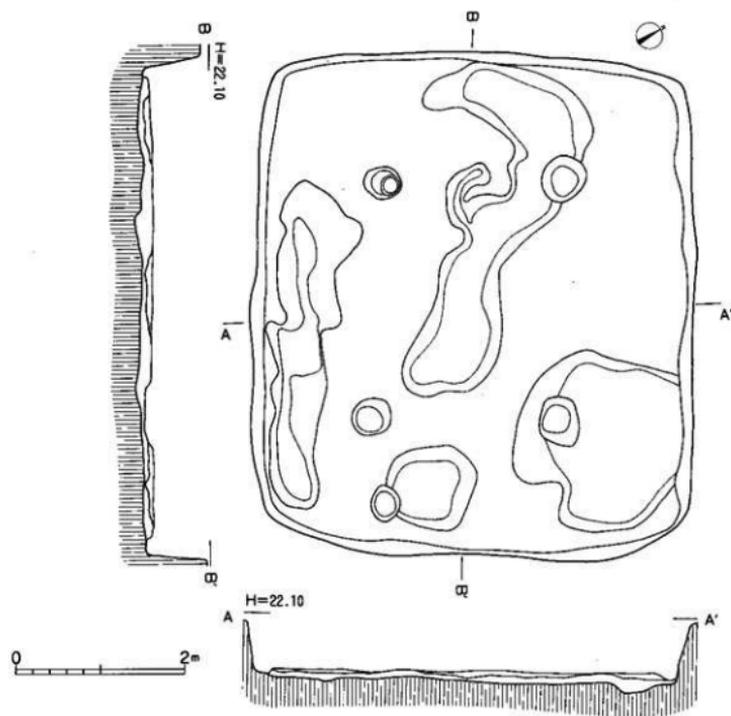


Fig.183 第10号B住居跡掘り方

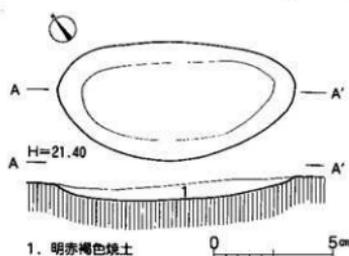


Fig.184 第10号B住居跡炉

掘り方 掘り方は、素掘り状態で床面構築されており、全面貼床処理が施されている。

遺物出土状況 遺物は、貯蔵穴および北東壁際周囲にわずかに散在するのみである。ただし、床面上より土製垂飾が2点出土している。

遺物 1は壺口縁部破片である。口縁部から肩部にかけてはほぼ遺存する。推定口径19.6cmを測る。口縁部は短く垂直気味に立ち上がる。肩部の張りは弱い。外面は口縁部上端は横位のハケメ調整、口縁部下半部は縦位のハケメ調整の後、ナデ整形され、さらに赤彩される。内面はナデ整形によって仕上げられている。焼成は良好である。2は壺口縁部破片。口縁部約1/2程度遺存する。推定口径19.0cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反する。外面口縁部は縦位と横位のハケメ調整の後、ナデ整形。内面もナデ整形。焼成は良好で、におい赤褐色を呈する。3は壺の口縁部破片。口縁部1/6程度遺存する。推定口径11.2cmを測る。口縁部はやや内湾気味に

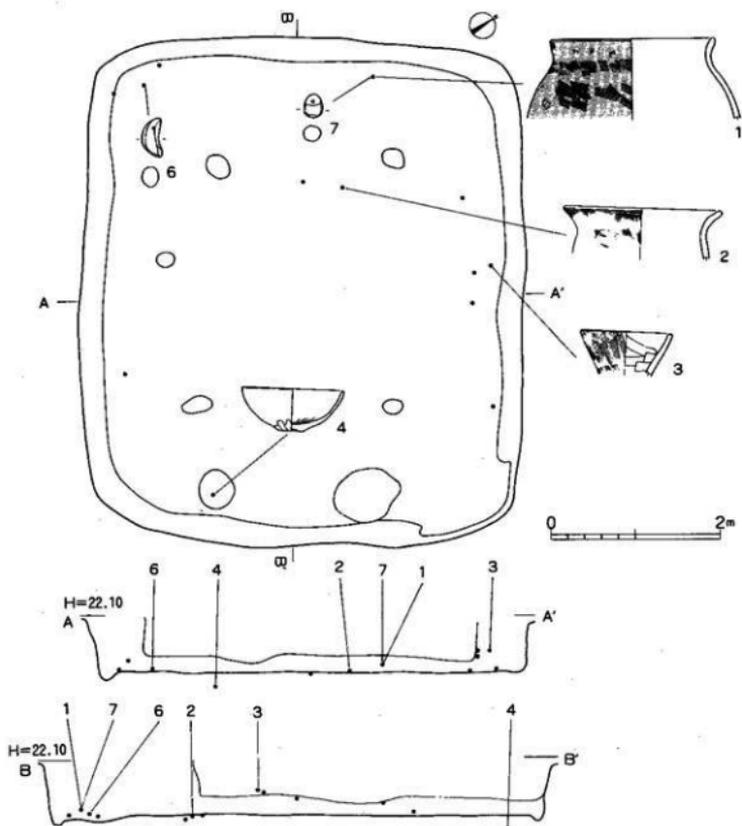


Fig.185 第10号B住居跡遺物分布図

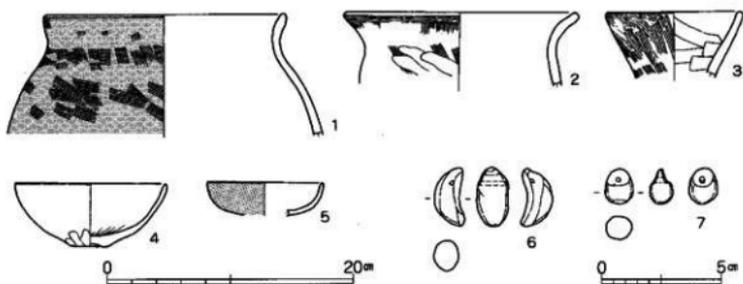


Fig.186 第10号B住居跡出土遺物

上方へ立ち上がる。外面は縦位のハケメ調整。内面はナデ整形を丁寧に施す。焼成は良好で、明褐色を呈する。4は埴形土器で、口縁部から底部にかけて約1/2程度遺存する。器高5.1cm、推定口径12.4cm、底径2.8cmを測る。上げ底状の小さな底部から体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は多少の歪みが見られる。外面体部上半部はナデ、下半部はケズリが加えられ、内面入念なナデ整形で仕上げている。5は坏形土器で、体部約1/4程度の遺存である。体部は内湾気味に立ち上がる。内外面とも丁寧なナデ整形を施す。外面は赤彩され、焼成は良好である。

6・7は土製垂飾である。6は小型の勾玉状を呈し、長さ2.41cm、幅1.03cm、厚さ1.27cm、重さ7.15gを測る。緩いC形を呈し、全体に丸みをもつ。頭部に径0.20cmの穿孔がみられ、一方から穿孔されているようである。焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈する。7は小型の土球状を呈し、長さ1.41cm、幅1.07cm、厚さ0.94cm、重さ2.50gを測る。球状の丸玉の上端を指頭で押し潰し扁平にし、そこに径0.18cmの円孔を一方から穿つ。焼成は良好で、赤褐色を呈する。

第12号住居跡 (SI12) (Fig.187~192)

位置 本跡は、調査区南東部、15-N、16-N区の標高21.64~21.72mに位置する。東側に第13号住居跡 (SI13) が、西側に第10号住居跡 (SI10)、北側に第14号住居跡 (SI14) が隣接する。

形態 平面形は、隅丸方形を呈する。長軸5.72m、短軸5.16mを測り、長軸方位はN-42°-Wを指す。中型の住居跡である。壁は北辺および東辺、西辺、南辺ともが緩やかに立ち上がる。床面は若干起伏を伴うが、ほぼ平坦で水平に広がる。床はロームを主体とする貼床で、硬化面が壁際を除き全体に広がる。

覆土 6層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|----------|------|------------------------------|
| 1層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 2層 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 3層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |
| 4層 | 7.5YR4/3 | 褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。 |
| 5層 | 7.5YR5/8 | 明褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりにやや欠ける。 |
| 6層 | 7.5YR4/2 | 灰褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。 |

住居施設 住居内部の施設として、柱穴1本と地床炉1基、貯蔵穴1基が確認された。

柱穴はP1のみで、西壁際に設置されている。上面が20×28cmの楕円形、深さ15cmを測る。

炉は地床炉で、ほぼ円形を呈し、住居中央から北西寄りに径52×54cm、深さ12cmを測る。断面はやや起伏をもつ鍋底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は2層に分層でき、第1層と第2層ともが焼土粒を含む土層で、とくに第1層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒を含み、締まりがある。

貯蔵穴は東壁壁際に設置され、楕円形を呈する。規模は長径72cm、短径68cmで、深さは52cmを測り、二段構築である。底面はやや鍋底で、壁は直線的に外方へ開口する。覆土は5層に分層でき、1層黒褐色土 (7.5YR3/2) 少量のローム粒子を含み、締まりがある。2層暗褐色土 (7.5YR3/4) 多量のローム粒子を含み、締まりがある。3層褐色土 (7.5YR4/4) 少量のローム粒子を含み、締まりがある。4層極暗褐色土 (7.5YR2/3) 少量のローム粒子を含み、締まりがある。5層褐色土 (7.5YR4/6) 多量のローム粒子を含み、締まりがある。覆土中より埴形土器が出土している。

周溝として北隔壁を中心に北西辺、北東辺と南隔壁を中心に北西辺と南東辺に幅が広く周溝を構築している。ただし、通常みられる周溝の形態をもたず、住居の拡張等改築に伴う施設の残存とも考えられる。

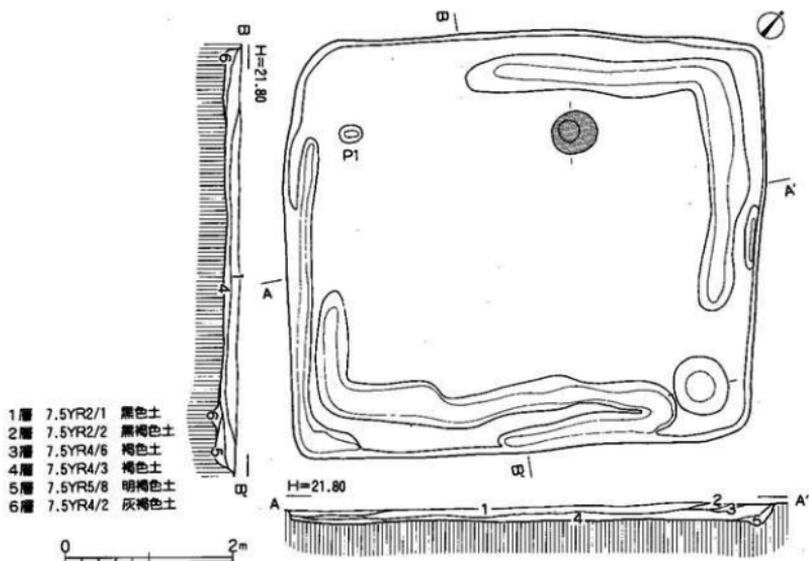


Fig.187 第12号住居跡

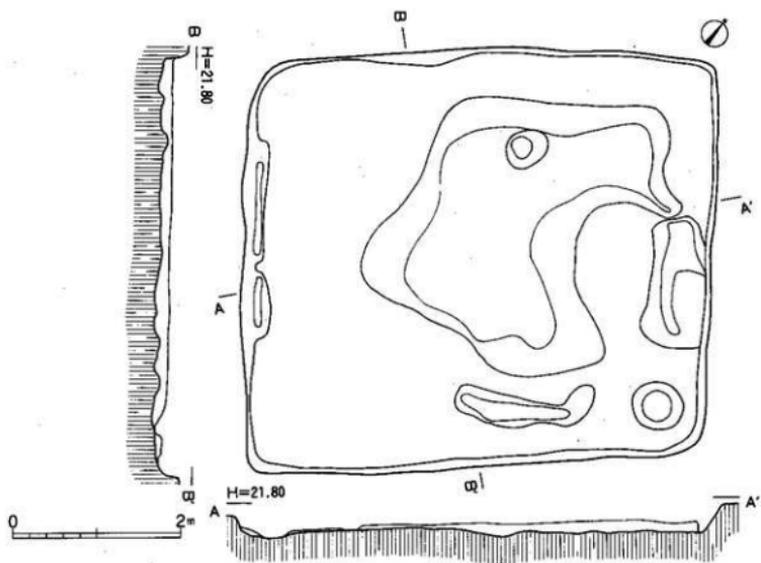


Fig.188 第12号住居跡掘り方

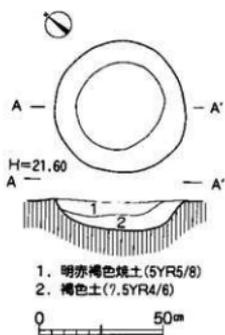


Fig.189 第12号住居跡炉

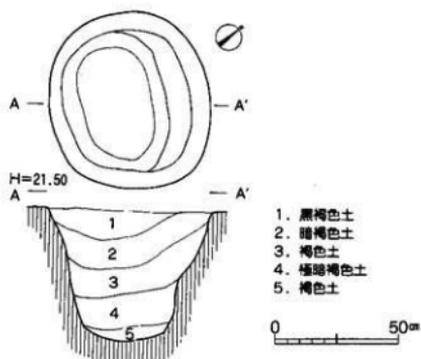


Fig.190 第12号住居跡貯蔵穴

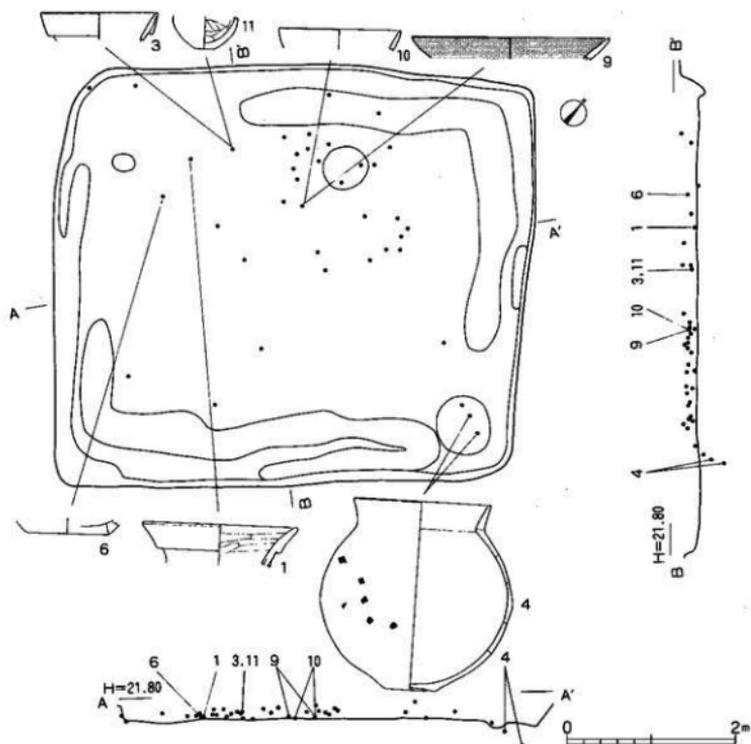


Fig.191 第12号住居跡遺物分布図

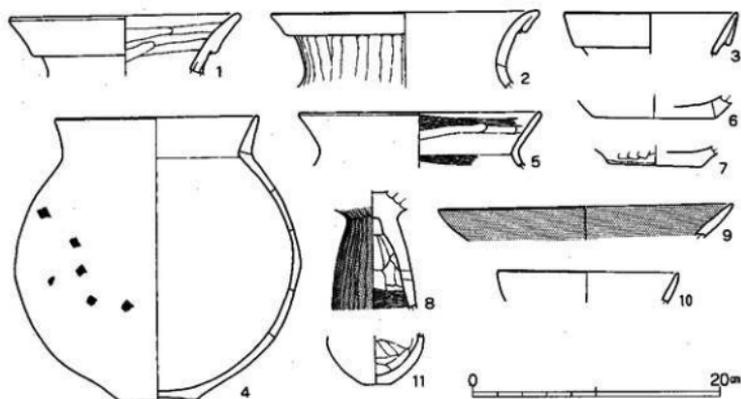


Fig.192 第12号住居跡出土遺物

掘り方 掘り方は、住居中心部に浅い広い掘り込みが認められる。

遺物出土状況 遺物は、住居全体に散在するが、とくに炉跡を中心にまとまって出土している。図示した資料は壺3点、甕4点、高坏2点、埴2点である。

遺物 1～3は壺形土器である。1は壺の口縁部破片。口縁部約1/4程度を遺存する。推定口径18.8cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、ゆるやかに外反する。外面口縁部は縦位の入念なヘラミガキ。頸部は横位のナデ整形。内面は横位のミガキが施されている。明瞭ではないが赤彩されている。焼成は良好である。2も口縁部から頸部にかけて約1/5程度を遺存する。口径は21.8cmを測る。口縁部は幅狭い粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口縁部は大きく外反気味に外方へ開く。外面口縁部は横ナデ、頸部は縦位のヘラナデ。内面は入念な横位のナデ。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。3も口縁部破片で、1/10以下の小破片である。推定口径14.0cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、直線的に外方へ開く。外面口縁部は横位のナデ。内面も横位のナデ。焼成は良好で、橙色を呈する。4は口縁部から底部にかけて約1/2程度遺存する壺形土器である。器高24.0cm、口径16.6cm、底径6.2cm、最大径が胴部中位に位置し23.0cmを測る。やや上げ底気味の底部から球形の胴部へ移行し、口縁部は短く直線的に上方へ立ち上がる。外面口縁部から底部にかけてナデ整形。内面も口縁部は横ナデ。胴部はナデ整形で仕上げている。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。5は甕の口縁部破片。口縁部約1/10以下の遺存である。口径19.2cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反する。外面口縁部はハケメ調整の後、ナデ整形。内面は横位のハケメ調整を施す。焼成は良好で黒褐色を呈する。6は甕底部破片。底部約1/10以下の遺存である。推定底径10.2cmを測る。平底の底部で、ナデ整形で仕上げている。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。7も甕底部破片。底部約1/3程の遺存である。推定底径7.8cmを測る。平底の底部で、ナデ整形で仕上げている。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。8は高坏の脚部破片。柱状部のみ2/3程度遺存し、現器高9.5cmを測る。柱状部は中膨らみし、下半部付近に透孔がある。外面は縦位のナデ整形。内面は上半部はシボリ目が残り、指頭による粗いナデが施され、下半部は横位のハケメ調整。焼成は良好でにぶい赤褐色を呈する。9は高坏もしくは鉢形土器の口縁部破片。口縁部のみ1/16

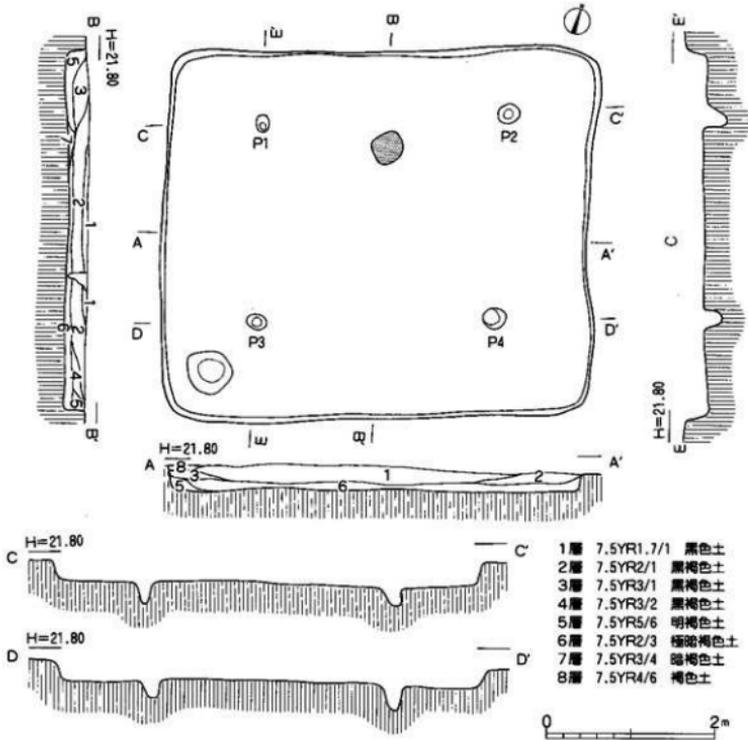


Fig.193 第13号住居跡

以下の小破片。推定口径23.8cmを測る。口縁部は直線的に外方へ開く。内外面も入念なナデ整形後、赤彩される。焼成は良好である。10は埴の口縁部破片。口縁部は1/16以下の小破片。推定口径14.6cmを測る。口縁部は直線的に外方へ開く。内外面ともナデ整形。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。12は埴の底部破片。胴下半部1/3程度を遺存する。底径2.0cm、現器高4.0cmを測る。平底で小さな底部から球形の胴部へ移行する。内外面とも比較的粗いヘラナデが施されている。焼成は良好で橙色を呈する。

第13号住居跡 (SI13) (Fig.193~199)

位置 本跡は、調査区南東部にあたり、15-O、16-O区の標高21.56m~21.72mに位置し、住居跡群の南東端にあたる。西側に第12号住居跡 (SI12) が隣接する。

形態 平面形は、隅丸方形を呈する。長軸5.18m、短軸4.50mを測り、長軸方位はN-12°-Wを指し、中型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともやや緩やかな傾斜をもって立ち上がる。床面は

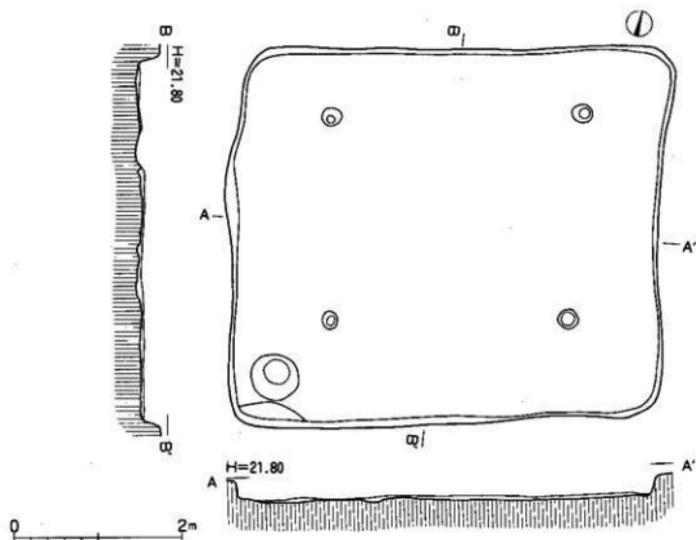


Fig.194 第13号住居跡掘り方

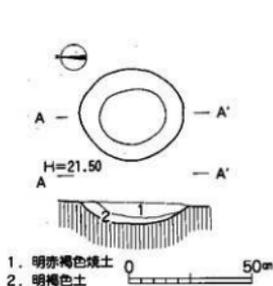


Fig.195 第13号住居跡炉

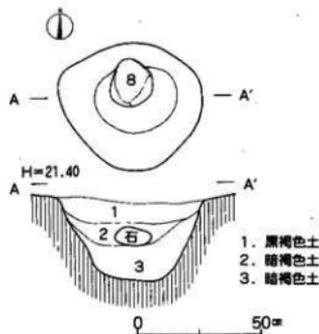


Fig.196 第13号住居跡貯蔵穴

若干の起伏をもつが、平坦面がほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 8層に分層可能である。自然埋没土層である。

- 1層 7.5YR1.7/1 黒色土 少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
- 2層 7.5YR2/1 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 3層 7.5YR3/1 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

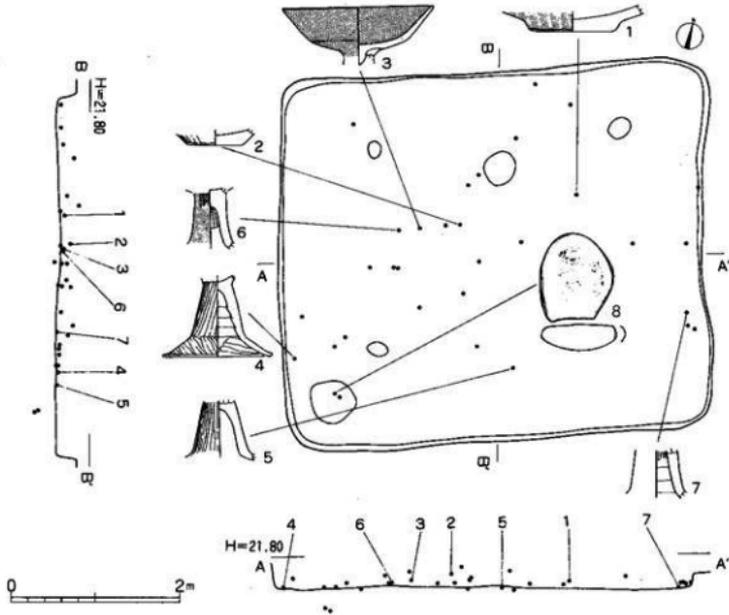


Fig.197 第13号住居跡遺物分布図

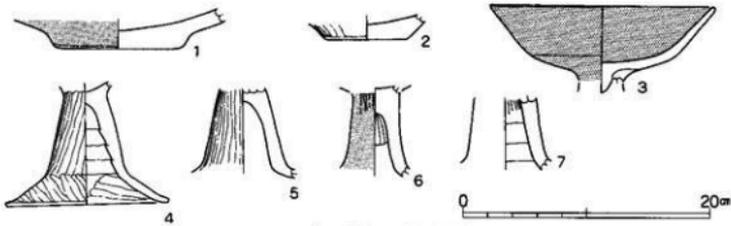


Fig.198 第13号住居跡出土遺物(1)

- | | | | |
|----|----------|-------|-----------------------------|
| 4層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 5層 | 7.5YR5/6 | 明褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。 |
| 6層 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 7層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 多量のロームブロックを含み、締まりがある。 |
| 8層 | 7.5YR4/6 | 褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
- 住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基および貯蔵穴1基確認された。
 主柱穴はP1～P4で、P1は北西部に位置し、上面が16×22cmの楕円形、深さ26cm。P2は北東部で

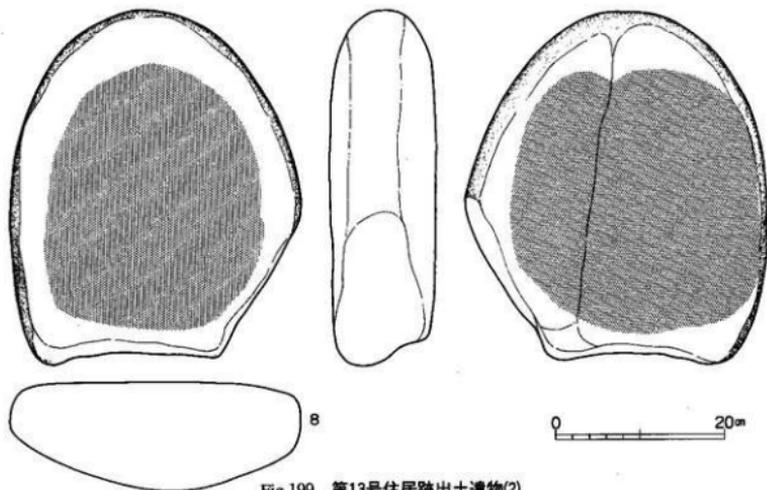


Fig.199 第13号住居跡出土遺物(2)

26×26cmの円形で、深さ24cm。P3は南西部に位置し、上面が18×28cmの楕円形で、深さ20cm。P4は南東部で、28×28cmの円形、深さ33cmを測る。

炉は地床炉で、住居中央から北寄りに設置され、平面形は楕円形を呈し、長径44cm、短径38cm、深さ10cmを測る。断面は鍋底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は2層に分層でき、第1層が焼土層で、多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

貯蔵穴は南西隔壁際に設置、形状は楕円形を呈し、上面は長径58cm、短径52cm、深さ37cmを測る。底面はやや鍋底状をなし、壁は緩やかな傾斜をもって外方へ開口する。覆土は3層に分層でき、第1層黒褐色土(7.5YR3/1)少量のローム粒子を含み、締まりがある。第2層暗褐色土(7.5YR3/4)多量のローム粒子を含み、締まりがあり、河原石が包含されていた。第3層暗褐色土(7.5YR2/3)少量のロームを含み、締まりがある。

掘り方 掘り方は、床下全面におよび、平坦面が広がる。

遺物出土状況 遺物は、住居全体に散在するが、とくに住居西側に集中する傾向がある。その中で個体として図示しうる資料は、壺及び甕底部各1点、高坏5点である。

遺物 1は壺底部破片。底部完存する。底径11.0cmを測る。平底の底部から体部は大きく開く。内外面ともナデ整形によって仕上げている。焼成は良好。明赤褐色を呈する。2は甕底部破片。底部1/2程度を遺存する。推定底径6.6cmを測る。平底で、底部側面は縦位のヘラケズリが施され、内面はナデ整形である。焼成は良好で、褐色を呈する。3～7は高坏である。3は坏部1/3程度を遺存する。推定口径18.2cm、現器高7.0cmを測る。底部と口縁部の境界は比較的光明瞭で、口縁部の立ち上がりはほぼ直線的である。外面はナデ整形に加えミガキが施され、さらに底部にあたる後より下位にはヘラケズリ痕がわずかに残る。内面はナデ整形に、やはりミガキが加わる。焼成は良好。全面赤彩されている。4は高坏柱状部から裾部にかけて完存する。裾径13.2cm、現器高9.6cmを測る。柱状部はほぼ直線的に開き、裾部は高く外方へ広がる。外面はヘラケズリの後、ナデ整形によって仕上げられ、内面上端はシボリ目痕

を指頭によるナデで整形し、中位には4段の粘土帯の積み上げによる接ぎ目が明瞭に残り、裾部はナデ整形される。焼成は良好で、橙色を呈する。5は柱状部のみ完存する。現器高7.3cmを測る。柱状部は直線的に広がる。外面は縦位のナデ。内面上端はシボリ痕を指頭によりナデによって整形し、中位もナデ整形によって仕上げられている。焼成は良好で、にぶい橙色を呈する。6も柱状部のみ完存。柱状部は中膨らみの弱い細長い円筒形で、外面は縦位のナデ、内面上位はシボリ目がみられ、下位はナデ整形で仕上げている。焼成は良好。色調は明赤褐色を呈する。7は柱状部約1/2程を遺存する。中膨らみが弱く、やや太め柱状部で、外面は縦位のナデ、内面上位はシボリ目残り、下位は粘土帯の積み上げによる接ぎ目がみられる。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。

8は砂岩製の台石である。河原石をそのまま使用している。略楕円形を呈し、表面はほぼ平坦で、起伏は全くみらず、滑らかに磨耗している。また裏面も中央左側に稜をもつが、磨耗痕がみられる。長さ20.7cm、幅18.4cm、厚さ6.5cm、重さ287.5gを測る。

第16号住居跡 (SI16) (Fig. 200~205)

位置 本跡は、調査区の南部、16-M、17-M区の標高22.06m~22.15mに位置し、南側約1/3が保存区域にかかるため、調査不能であった。なお、北側に第10号住居跡 (SI10) が、北東側に第12号住居跡 (SI12) が隣接する。

形態 本跡は、南側が保存区域にかかっているため、住居全体の調査は不能であるが、平面形は三壁隅から判断して隅丸方形である。規模は長軸4.64m、短軸4.12mを測り、長軸方位はN-32°-Wを指し、やや中型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ直線的で垂直に立ち上がる。床面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。覆土 3層に分層可能である。自然埋没土層である。

- 1層 10YR2/1 黒色土 少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。
- 2層 10YR3/3 暗褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
- 3層 10YR3/3 明黄褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴1本と地床炉1基および貯蔵穴1基が確認された。

主柱穴はP1のみで、P1は北隔壁際に位置し、上面が22×24cmのほぼ円形、深さ29cmを測る。

炉は地床炉で、住居中央から北西寄りに配され、その平面形は楕円形を呈し、長径52cm、短径40cm、深さ13cmを測る。断面は鍋底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は2層に分層でき、第1層が焼土層にあたる赤褐色焼土層には多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

貯蔵穴は西隔壁際に設置され、楕円形を呈し、上面は長径68cm、短径64cm、深さ42cmを測る。二段構架で、底面はほぼ平坦で、壁はやや緩やかな傾斜をもって外方へ開口する。覆土は3層に分層でき、第1層黒褐色土 (7.5YR3/1) ローム粒子をわずかに含み、締まりがある。2層暗褐色土 (7.5YR3/3) ローム粒子をわずかに含み、締まりがある。3層褐色土 (7.5YR4/6) ローム粒子をわずかに含み、締まりがある。

掘り方 掘り方は床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、東壁際や西壁際側に浅いピット状の掘り込みを呈している。

遺物出土状況 遺物は、住居全体に散在するが、とくに炉跡周辺と東壁周辺にまとまりをみせている。図示した資料は、壺1点、甕3点、埴1点、高坏3点である。

遺物 1は壺口縁部破片。約1/5程を遺存する。推定口径19.8cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外傾し

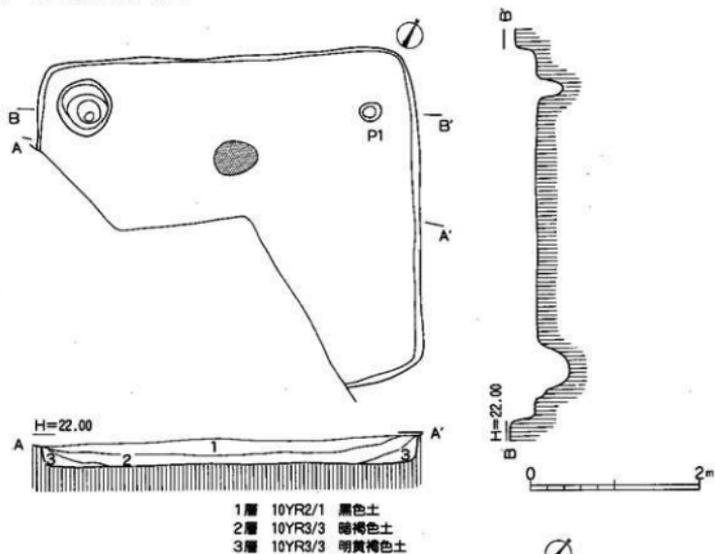


Fig.200 第16号住居跡

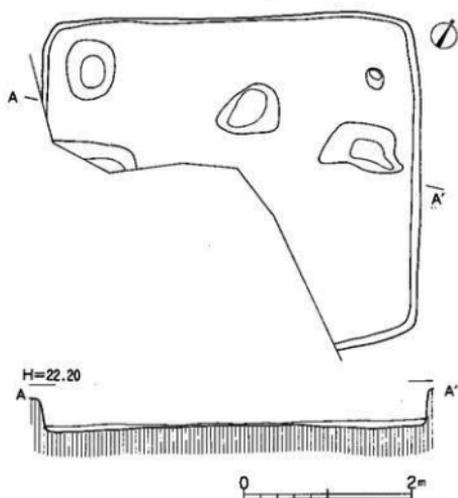


Fig.201 第16号住居跡掘り方

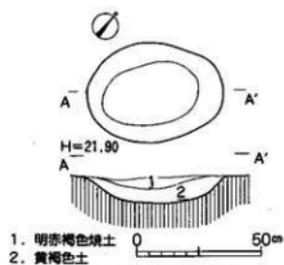


Fig.202 第16号住居跡炉

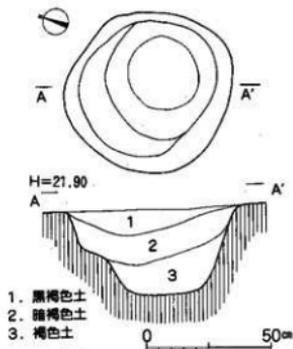


Fig.203 第16号住居跡貯蔵穴

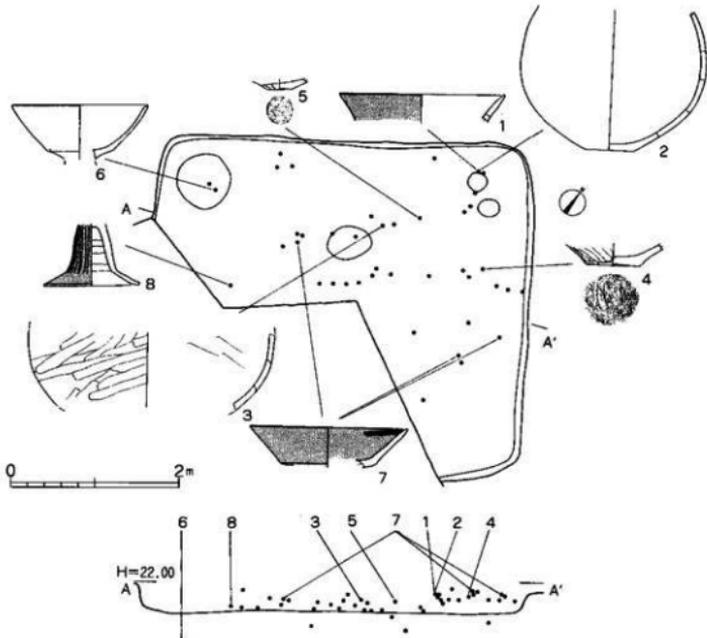


Fig.204 第16号住居跡遺物分布図

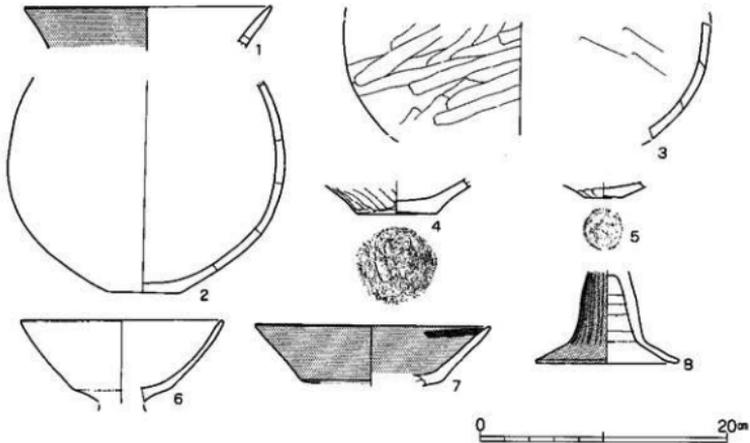


Fig.205 第16号住居跡出土遺物

で立ち上がる。内外面とも横位のナデ整形が施され、外面のみ赤彩されている。焼成は良好である。2は甕の胴部破片で、肩部から口縁部にかけて欠損している。現器高17.3cm、底径5.8cm、胴部最大径22.0cmを測る。小さく平底の底部から球形の胴部をもつ。外面はナデ整形で、下半部にはスス状の炭化物が付着している。内面はナデ整形によって仕上げられている。焼成は良好で、褐色を呈する。3は甕の胴部破片。胴部下半部1/2程度遺存している。胴部最大径は29.4cmを測る。外面は横位、斜めのヘラナデ、内面は斜行ナデ整形で、下半部にはスス状の炭化物が付着している。焼成は良好で、黒褐色を呈する。4は甕底部破片。底部のみ完存する。底径は6.4cmを測る。やや上げ底気味の底面から緩く外方へ開く。外面は縦位のヘラケズリ、底面はナデ、内面もナデ整形によって仕上げている。5は埴形土器の底部破片。底部のみ完存する。底径は3.2cmを測る。外面は縦位のナデ、内面もナデ調整である。底面は周縁が輪状に高まる底部をもつ。焼成は良好で褐色を呈する。6～8は高坏である。6は坏部のみ1/3程度欠損する。口径16.2cm、現器高6.8cmを測る。口縁部と底部の境界は明瞭で、口縁部はやや内湾気味に大きく開く。底部は短く脚部へ接合する。内外面ともナデ整形で、外面底部にはケズリ痕をわずかに残す。焼成は良好で、にぶい黄褐色を呈する。7は坏部のみ1/6程度遺存するのみである。推定口径19.0cm、現器高4.3cmを測る。口縁部と底部の境界には明瞭な稜をもち、口縁部はほぼ直線的に外方へ開く。外面の口縁部はナデ整形。底部はケズリ痕をわずかに残す。内面は口縁部上位に横位のハケメ調整が施され、下位はナデ整形によって仕上げられる。焼成は良好。全面赤彩が認められる。8は脚部のみ1/4程を欠損する。裾径11.6cm、現器高7.5cmを測る。柱状部は中彫らみが弱く、裾部はほぼ直線的に張り出す。外面の柱状部は縦位のナデ整形、内面は粘土の積み上げによる5段の接ぎ目がみれる。焼成は良好である。

第18号住居跡 (SI18) (Fig. 206～210)

位置 本跡は、調査区東部で、13-Nの標高22.24m～22.38mに位置する。南側に第19号住居跡 (SI19) が、南西側に第17号住居跡 (SI17) が、東側に第21号住居跡 (SI21) が隣接する。

形態 平面形は、隅丸方形を呈する。長軸3.60m、短軸3.26mを測り、長軸方位はN-73°-Wで、小型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ直線的に延び、垂直に立ち上がる。床面は若干の起伏はみられるが、平坦面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土、暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。なお、床面には焼土や炭化物が散在しており、とくに南壁付近に集中していた。火災住居であろう。

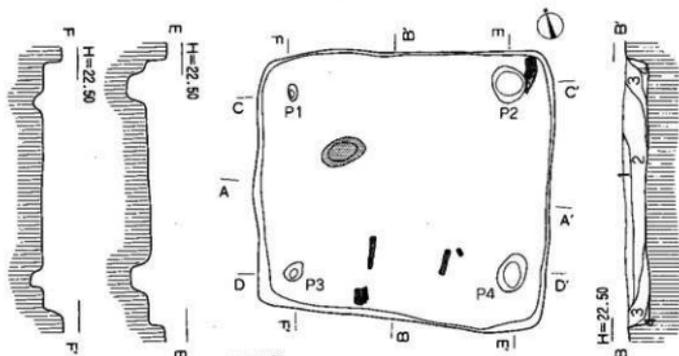
覆土 4層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|-----------|------|-----------------------------|
| 1層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 2層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 3層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 4層 | 10YR3/2 | 褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |

住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基を確認された。

P1～P4は主柱穴であるが、いずれも各壁隅際に配されている。P1は北西側に位置し、上面が12×20cmと楕円形を呈し、深さは12cm。P2は北東側で上面が44×44cmの円形で、深さ24cm。P3は南西側に位置し上面が20×26cmの楕円形で、深さ23cm。P4は南東側で、上面が34×46cmの楕円形、深さ25cmを測る。

炉は地床炉で、住居中央から北西寄り楕円形に浅く掘り込まれている。規模は長径56cm、短径32cm、深さ8cmを測る。断面は鍋底状を呈し、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央



- 1層 10YR1.7/1 黒色土
- 2層 10YR4/6 褐色土
- 3層 10YR3/4 暗褐色土
- 4層 10YR3/2 褐色土

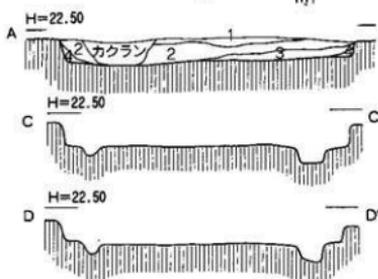


Fig.206 第18号住居跡

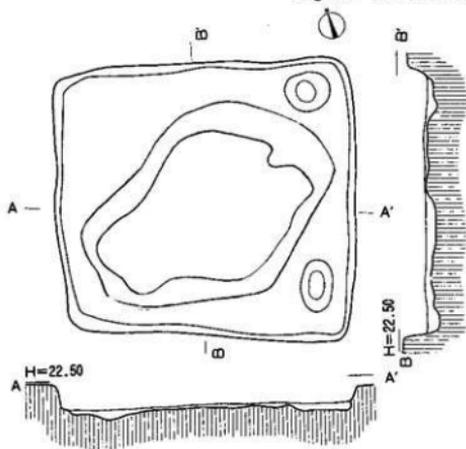
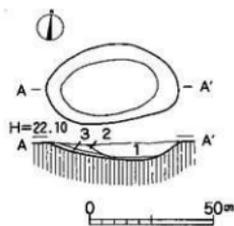


Fig.207 第18号住居跡掘り方



- 1. 明赤褐色焼土
- 2. 黒褐色土
- 3. 明褐色土

Fig.208 第18号住居跡炉



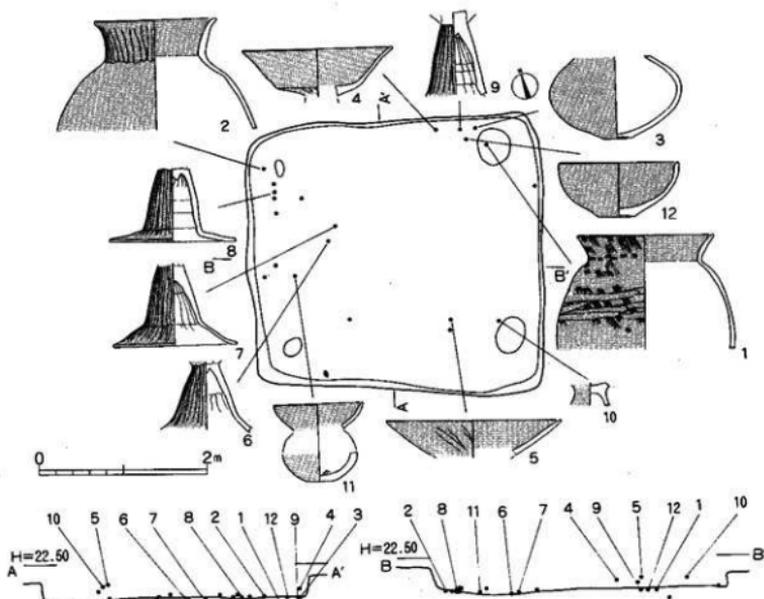


Fig.209 第18号住居跡遺物分布図

部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第1層が赤褐色焼土層で、多量の焼土粒子を含み、締まりがある。なお、北西隅壁際および南壁周辺には炭化材が出土しており、焼失家屋である。

掘り方 掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、壁際はとくに浅い掘り方がみられる。

遺物出土状況 遺物は、住居全体に散在するが、とくに西壁側と北東隅の貯蔵穴付近に集中する。その内、個体として図示しうる資料は、壺3点、高坏7点、埴1点、塊1点である。

遺物 1は壺で、胴部下半部と上半部1/2程を欠損し、口縁部は全周する。口径16.4cm、現器高14.0cm、胴部最大径21.2cmを測る。胴部は胴長を呈し、口縁部は外反気味に立ち上がる。外面の口縁部は縦位のハケメ調整。胴部はハケメ調整の後、ナデ整形によってハケメ痕を消失させている。全面赤彩している。内面は口縁部が横ナデ、胴部もナデ整形によって仕上げている。焼成は良好である。2も壺で、口縁部から胴部中位にかけて1/3程を遺存する。推定口径14.6cm、現器高13.6cm、胴部最大径23.8cmを測る。ほぼ球形の胴部から垂直気味に立ち上がる口縁部は、さらに端部において小さく外反する。外面は口縁部上端部が横ナデ、以下縦位のナデ整形。胴部もナデの後、全面赤彩している。内面は口縁部が横ナデ、胴部もナデ整形で仕上げている。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。3は壺で、口縁部を欠損する。胴部はやや上下に押しつけたような扁球形を呈し、小さな底部をもつ。底部は上げ底状をなす。外面はナデ、内面もナデ整形を施す。焼成は良好。外面に赤彩されている。4～10は高坏である。4は坏部のみ完存し、口径18.2cm、現器高5.9cmを測る。口縁部と底部の境界には明瞭な稜をもち、口縁部は

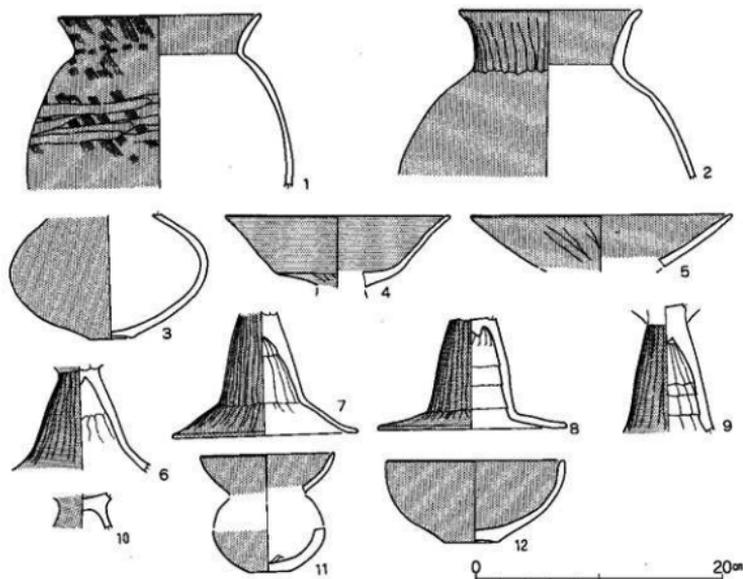


Fig.210 第18号住居跡出土遺物

やや反しながらかく。外面の口縁部はミガキ、底部はケズリの痕が残る。内面もミガキが施されている。内外面とも赤彩されている。焼成は良好である。5も坏部のみ1/6程度を遺存する。推定口径は11.2cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外傾して開く。内外面ともナデが施され、赤彩されている。焼成は良好である。6は脚柱状部のみ完存する。現器高8.5cmを測る。柱状部はほぼ直線的に開き、裾部でさらに広がりを見せる。外面は縦位のナデ。内面はヘラの回転によるケズリがみられる。外面全面赤彩される。焼成は良好である。7は脚部のみ完存する。裾径15.9cm、現器高10.0cmを測る。柱状部は中膨らみが弱く、裾部はほぼ直線的に高く張り出し、端部で折れる。外面の柱状部は縦位のナデ整形し、赤彩している。内面は上位にはシボリ目残り、下半はヘラの回転によるケズリを施している。裾部はナデ整形。焼成は良好である。8は脚部のみ完存する。裾径15.3cm、現器高9.3cmを測る。柱状部は中膨らみが弱く、裾部はほぼ直線的に低く張り出す。外面の柱状部は縦位のナデ整形し、赤彩している。内面は上位にシボリ目を残し、以下粘土の積み上げによる3段の接ぎ目がみられる。焼成は良好である。9は脚柱状部のみ完存する。現器高15.5cmを測る。筒状の柱状部はほぼ直線的に細長く開く。外面は縦位のナデ整形の後、赤彩している。内面は上位はシボリ目を残し、以下粘土の積み上げによる3段の接ぎ目がみられる。焼成は良好である。10は坏部脚部の接合部破片で、1/6程度を遺存する。内外面ともナデ整形が施され、坏部底部と脚部には赤彩している。焼成は良好である。11は埴形土器である。口縁部1/8、胴下半部1/4程度を遺存する。推定口径10.8cm、底径3.4cm、胴部最大径9.0cmを測る。平底の底部から球形の胴部へ移行し、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。外面は全面ミガキが加えられ、赤彩する。内面はナデ整形の後、口縁部に赤彩を施す。焼成は良好である。12は埴形土器。完存品である。器高6.8

cm、口径14.4cm、底径4.2cmを測る。やや上げ底状の底部から大きく内湾気味に立ち上がり、口唇部は内削状を呈する。内外面とも丁寧なナデ整形を施し、赤彩している。焼成は良好である。

第19号住居跡 (SI19) (Fig.211~216)

位置 本跡は、調査区東部で、13-M、13-N、14-Nの標高22.00m~22.22mに位置する。南西側に第11号住居跡 (SI11) が、北西側に第14号住居跡 (SI14) が、北側に第18号住居跡 (SI18) が隣接する。
形態 平面形は、隅丸方形を呈する。長軸5.24m、短軸5.18mを測り、長軸方位はN-48°-Wで、中型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ直線的に延び、垂直に立ち上がる。床面は北西側約1/4が高床状となるいわゆる「ベット」状を呈し、全体に若干の起伏はみられるが、平坦面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土、暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。なお、床面には焼土や炭化物が散在しており、とくに炉跡から西側にかけて集中していた。焼失家屋である。

覆土 4層に分層可能である。自然埋没土層である。

- 1層 10YR3/3 暗褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 2層 10YR3/2 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 3層 10YR5/6 黄褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
- 4層 10YR4/4 褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基、入口部施設および高床施設が確認された。

主柱穴はP1~P4の4本である。P1は高床部上で西側に位置し、上面が11×12cmの楕円形を呈し、深さは13cm。P2は北側で上面が10×22cmの楕円形で、深さ45cm。P3は高床部上の南側に位置し上面が12×14cmの楕円形で、深さ13cm。P4は東側で、上面が16×16cmの円形、深さ19cmを測る。

P5は南東壁際のほぼ中央に位置し、長径52cm、短径24cmの長楕円形を呈し、深さは6cmを測る。底面はほぼ平坦で、入口部施設と考えられる。

炉は地床炉で、住居中央から西寄り楕円形に掘り込まれている。規模は長径68cm、短径56cm、深さ15cmを測る。断面は鍋底状を呈し、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼き締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は2層に分層でき、第2層が赤褐色焼土層で、多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

貯蔵穴は南東壁際に位置し、主柱穴P4および入口部施設P5に接して構築されている。楕円形を呈し、規模は長径80cm、短径63cm、深さ28cmを測る。断面底部は鍋底状を呈し、壁は緩やかに外方へ開口する。覆土は3層に分層でき、第1層黒褐色土 (10YR3/1) 多量のローム粒子を含み、締まりがある。第2層黒褐色土 (10YR3/2) 少量のローム粒子を含み、締まりがある。第3層黒色土 (10YR2/1) 多量の炭化物、少量のローム粒子を含み、締まりがある。ここより埴形土器1点が出土している。

本跡はいわゆる「ベッド状遺構」と呼称されている高床部を伴う住居跡で、高床面は住居北西側約1/4ほどを平均10cm前後高く床を削り出している。貼床はこの削り出しの調整を行いながら、高くしている。

周溝は高床部の北西壁の南西寄りから南西壁の北側半分構築されている。幅10~20cm、深さ6~8cmを測り、底面は平坦で、壁はやや急傾して開口する。

掘り方 掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、北隅壁際とはとくに浅く複雑な掘り方がみられる。

遺物出土状況 遺物は、住居東隅壁際と西側の低位床面上付近に集中する。その内、個体として図示し

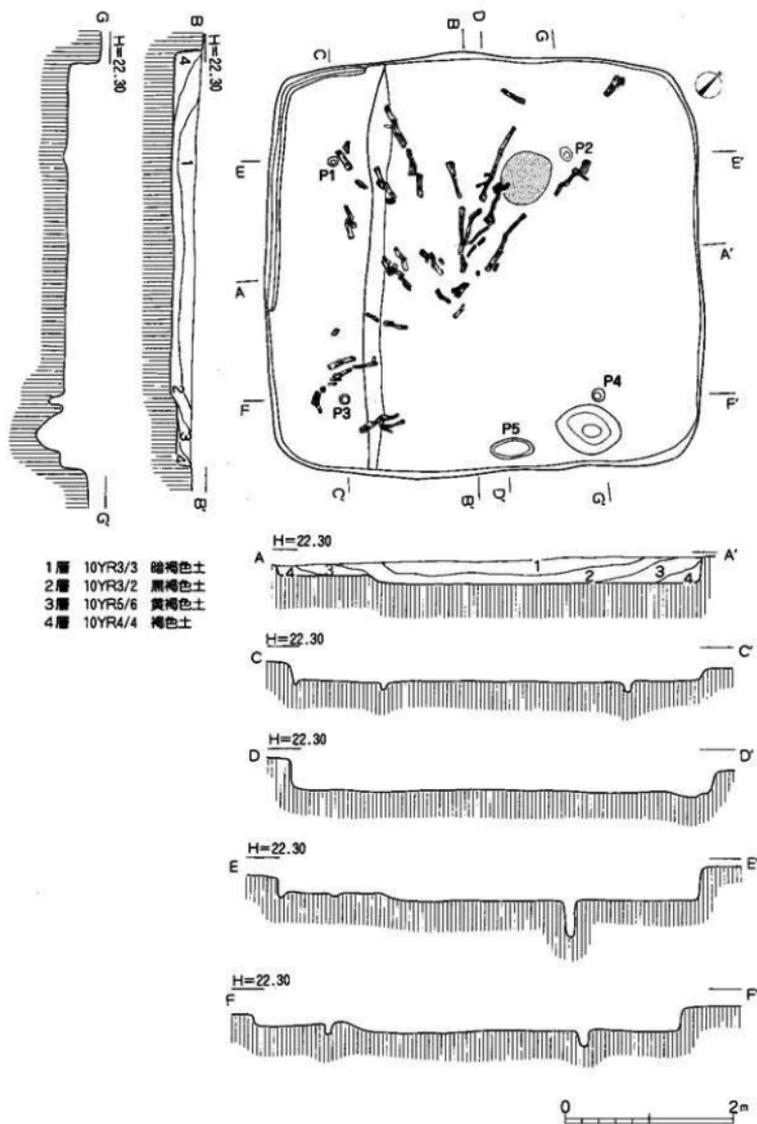


Fig.211 第19号住居跡

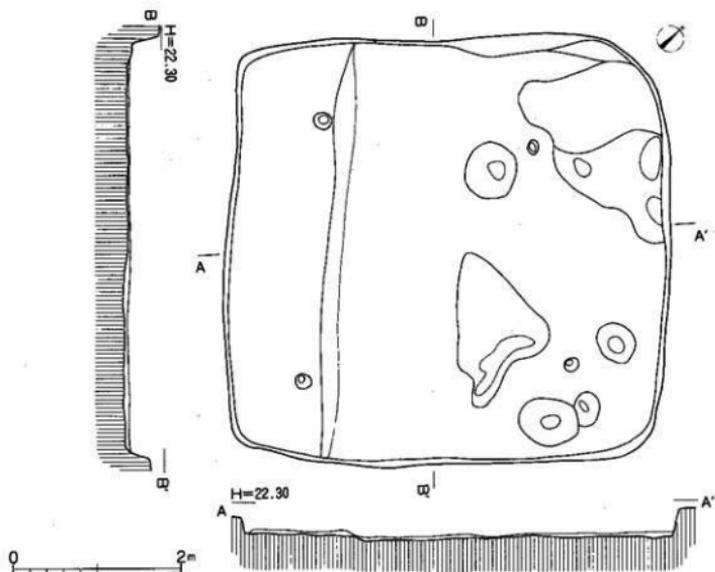


Fig.212 第19号住居跡掘り方

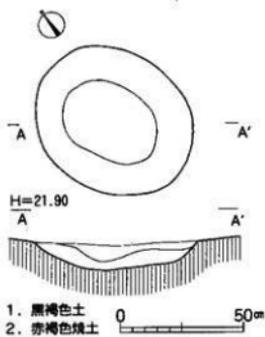


Fig.213 第19号住居跡炉

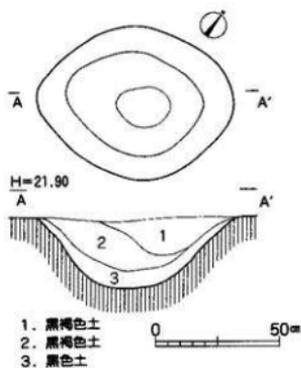


Fig.214 第19号住居跡貯蔵穴

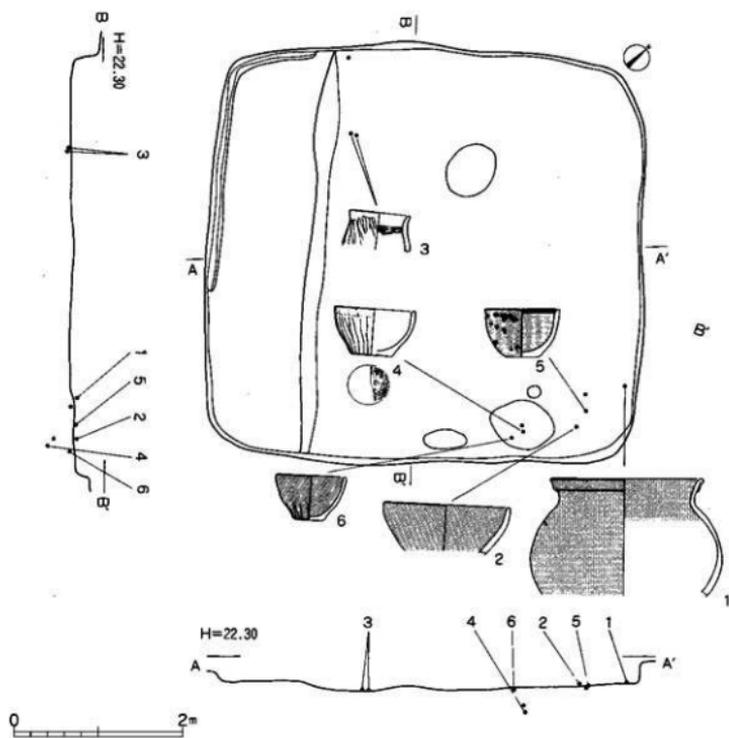


Fig.215 第19号住居跡遺物分布図

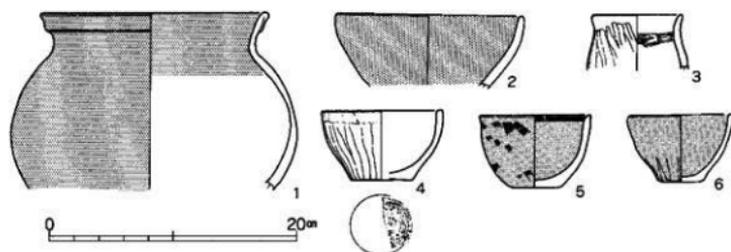


Fig.216 第19号住居跡出土遺物

うる資料は、壺3点、埴2点である。

遺物 1は壺で、胴部下半部から口縁部にかけて約1/4程を遺存する。推定口径18.4cm、現器高14.5cm、胴部最大径23.0cmを測る。胴部は上下押しつぶされた球形を呈し、口縁部は緩く外反する。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口唇部は微妙な丸みをもつ。外面口縁部は横ナデ、頸部から胴部下半部は丁寧なミガキが施され、赤彩されている。内面は口縁部がミガキ、体部はナデ整形で、口縁部から肩部にかけて赤彩されている。焼成は良好である。2は埴の口縁部破片。1/6程度の遺存で、推定口径は15.2cmを測る。口縁部は内湾気味に立ち上がる。内外面ともナデ整形後、全面赤彩されている。焼成は良好である。3は小型壺の胴部中位から口縁部にかけての破片。約1/3程を欠損しており、口径7.3cm、現器高3.5cmを測る。胴部はやや長めで、頸部の括れは浅く、短く外反する口縁部がつく。口縁部上位横ナデ、頸部から胴部はナデ整形。内面は口縁部が横ナデ、肩部付近は横位のハケメ調整し、以下ナデによって仕上げている。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。4は埴で、1/2程を欠損する。推定口径9.8cm、器高5.7cm、底径5.0cmを測る。底面は周縁が高まる輪状の底部で、体部はやや内湾気味に立ち上がる。外面は縦位のナデ整形。内面もナデ整形によって仕上げられている。焼成は良好。褐色を呈する。5もほぼ同様の形態をもつ埴で完存する。器高5.4cm、口径8.6cm、底径4.0cmを測る。平底の底部からやや内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸みをもつ。外面は縦位のナデ整形の後、赤彩を施し、内面もナデ整形の後、赤彩している。焼成は良好である。6も埴の完存品である。器高6.0cm、口径9.0cm、底径4.0cmを測る。平底の底部からやや内湾気味に体部が立ち上がり、口唇部は内削状を呈する。外面はハケメ調整の後、ナデ整形されている。内面は口縁部上端部が横位のハケメ調整を施し、以下体部はナデ整形。焼成は良好である。

第20号住居跡 (SI20) (Fig. 218~222)

位置 本跡は、調査区南東部にあたり、14-N、14-O区の標高21.86m~22.2mに位置し、西側に第11号住居跡 (SI11) が、北西側に第19号住居跡 (SI19) が、北側に第21号住居跡 (SI21) が隣接する。

形態 平面形は、隅丸方形を呈する。長軸5.48m、短軸5.22mを測り、長軸方位はN-73°-Wを指し、中型の住居跡である。壁は低いが、東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 4層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|------------|-------|---------------------------|
| 1層 | 7.5YR1.7/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 2層 | 7.5YR3/1 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性に欠け、締まりがある。 |
| 3層 | 10YR6/8 | 明黄褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりもある。 |
| 4層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりもある。 |

住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基および貯蔵穴1基を確認した。

P1は南西部に位置し、上面が24×26cmの楕円形、深さ61cm。P2は北西部で18×26cmの楕円形で、深さ58cm。P3は南東部で上面が32×32cmの円形で、深さ81cm。P4は北東側で、上面が30×32cmの楕円形、深さ60cmを測る。

炉は地床炉で、住居中央から西寄りに設置され、楕円形を呈し、長径66cm、短径48cm、深さ11cmを測る。断面は鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は2層に分層でき、第2層が赤褐色焼土層で、多量の焼土粒子を含み、締まりがある。貯蔵穴は南東隅壁際に設置され、楕円形を呈し、長径76cm、短径64cm、深さ52cmを測り、断面は丸底で、壁は緩やかに立ち上がり、大きく開口する。覆土は5層に分層でき、第1層黒褐色土

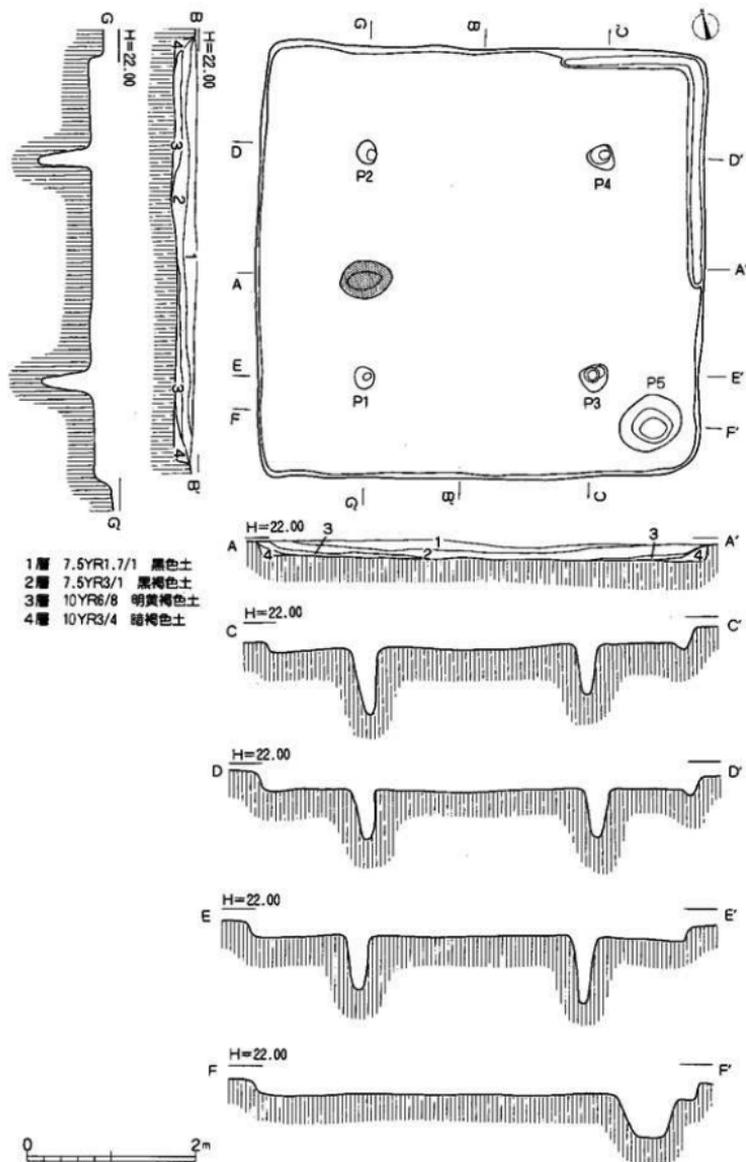


Fig.217 第20号住居跡

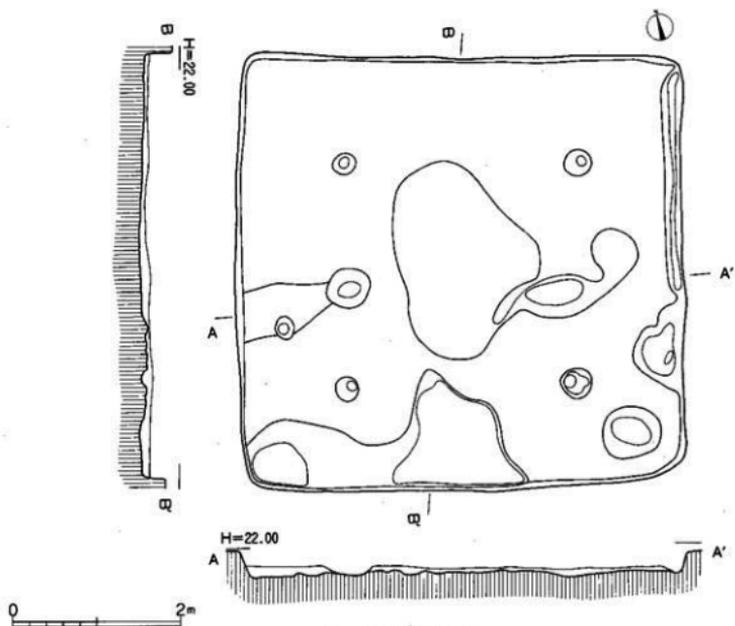
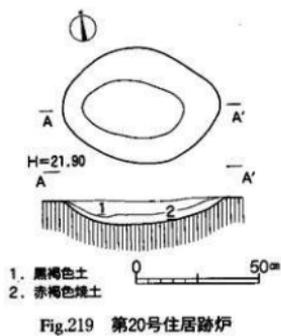
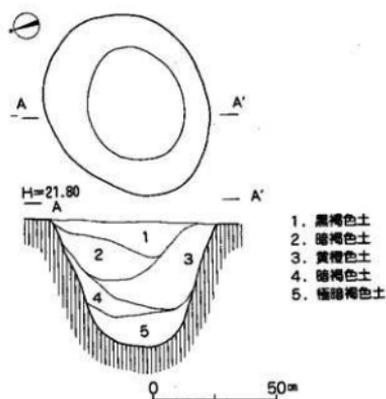


Fig.218 第20号住居跡掘り方



1. 黒褐色土
2. 赤褐色埴土

Fig.219 第20号住居跡炉



1. 黒褐色土
2. 暗褐色土
3. 黄褐色土
4. 磁褐色土
5. 極暗褐色土

Fig.220 第20号住居跡貯蔵穴

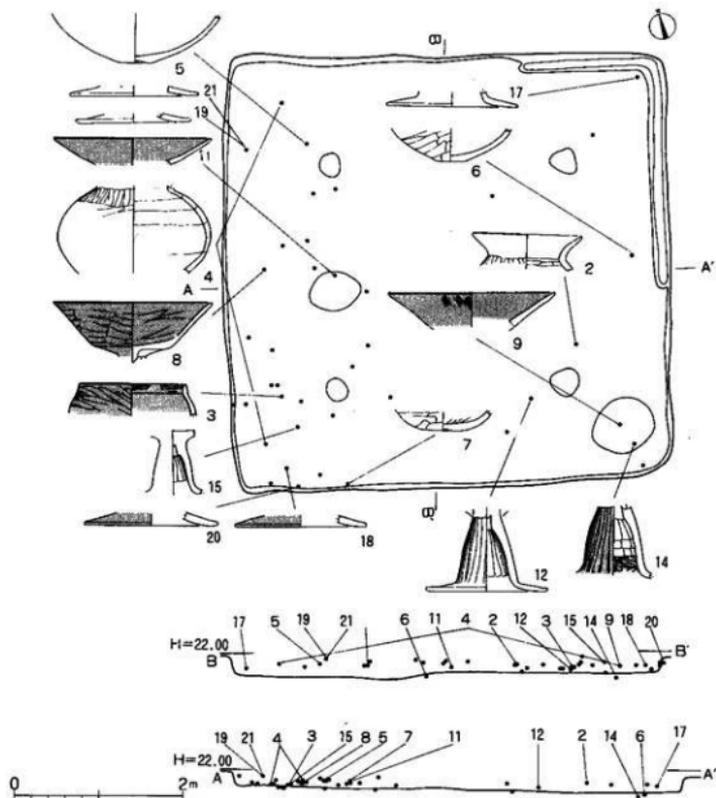


Fig.221 第20号住居跡遺物分布図

(7.5YR3/2) 多量のローム粒子を含み、締まりがある。第2層暗褐色土 (7.5YR3/3) 多量のローム粒子を含む、締まりにやや欠ける。第3層黄褐色土 (10YR6/8) ロームブロックを多量に含み、締まりにやや欠ける。第4層暗褐色土 (7.5YR3/4) 多量のローム粒子を含み、締まりがある。第5層極暗褐色土 (7.5YR2/3) 少量のローム粒子を含み、締まりがある。

周溝は北壁東寄りから東壁南寄りにかけてのみ、構築されている。幅14~16cm、深さ6cmを測る。

掘り方 掘り方は、床下全面におよぶが、とくに南側半分は複雑な掘り込みが認められる。

遺物出土状況 遺物は高環を中心に、住居全体に分布しているが、とくに西側半分に集中している。個体として図示する資料は、壺7点、高環16点である。

遺物 1は壺で、頸部から口縁部にかけて1/4程度遺存する。推定口径16.0cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、「く」の字状に大きく外反する。外面口縁部は横ナデ、頸部は斜めハケメ調

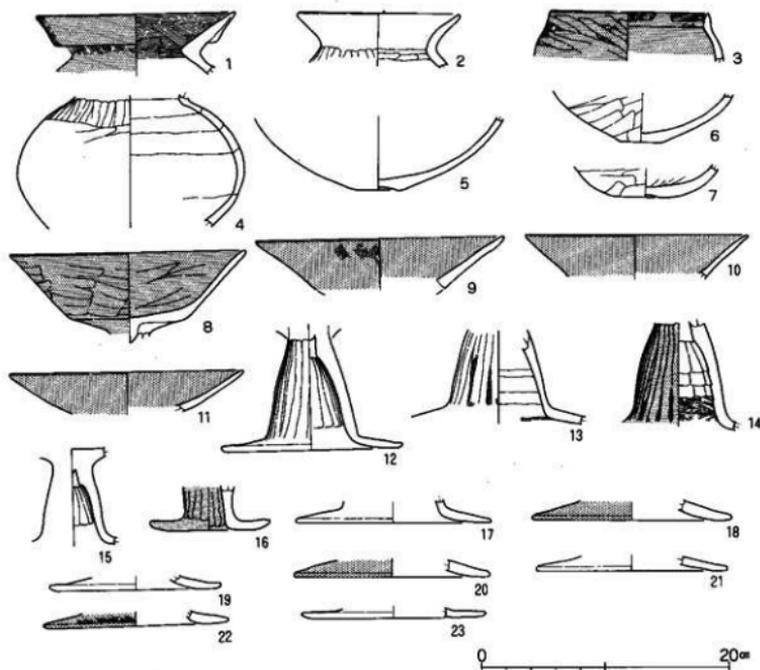


Fig.222 第20号住居跡出土遺物

整を施し、赤彩されている。内面は横位、斜位のハケメ調整が加わる。焼成は良好。2は口縁部から頸部にかけて1/6程遺存。推定口径13.2cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反する。外面口縁部は横ナデ、頸部は縦位のケズリが施され、内面口縁部は横ナデ、頸部は横位のナデ整形で仕上げられている。焼成は良好。黒褐色を呈する。3は広口壺。口縁部から肩部にかけて約1/4程を遺存する。推定口径12.6cmを測る。球形の体部から短い口縁部が垂直気味に立ち上がる。外面は斜行のハケメ調整の後、ナデ整形が部分的に施され、内面は口縁部が横ナデ、体部はナデ整形である。全面に赤彩されている。焼成は良好である。4は壺の胴部破片で、1/3程度を遺存する。扁球形の形態をもつもので、最大径18.4cmを測る。外面は縦位もしくは横位のナデ整形。内面もナデが施され、粘土帯の接ぎ目が見える。焼成は良好で、赤褐色を呈する。5は壺で、底部のみ完存する。底径3.2cmを測る。底部は上げ底気味で、球形に近い胴部をもつ。外面はナデ整形で、全面にスス状の炭化物が付着している。内面もナデ整形。焼成は良好で、黒褐色を呈する。6も壺で、底部のみ完存する。底径3.4cmを測る。底部は平底で、球形の胴部をもつ。外面はナデ整形で、内面もナデ整形。焼成は良好で、赤褐色を呈する。7は埴で、底部のみ完存する。底径3.2cmを測る。底部は上げ底気味で、球形に近い胴部をもつ。外面はナデ整形で、内面もナデ整形。焼成は良好で、赤褐色を呈する。8～23は高坏である。8～11は坏部破片。8は坏部1/2程を遺存する。口径19.0cm、現器高7.4cmを測る。底部と口縁部の境界

に明瞭な稜をもち、口縁部は若干反気味に外方へ開く。外面背部は横位のナデ整形。内面もナデ整形後、赤彩されている。焼成は良好である。9は口縁部1/4程度を遺存する。推定口径20.0cmを測る。外面はハケメ調整の後、ナデ整形を施し、内面はナデ整形し、全面赤彩される。10は口縁部が1/10以下遺存の小破片。推定口径17.8cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外方へ開く。内外面ともナデ整形後、赤彩される。11は口縁部1/8程度遺存。推定口径19.1cmを測る。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面もナデ整形後、赤彩される。焼成は良好。12~23は高坏脚部破片である。12は脚部完存である。裾径14.8cm、現器高10.3cmを測る。中膨らみの比較的弱い柱状部に低い裾部が広がる。外面は縦位のナデ整形。内面は横方向のナデで、ナデ痕が残る。焼成は良好。褐色を呈する。13は柱状部と裾部の一部が約1/3程度遺存する。柱状部はやや太めで、中膨らみがあり、裾部は大きく屈曲する。外面は縦位ナデ整形。内面は粘土帯の接ぎ目が4段残る。焼成は良好。にぶい黄褐色を呈する。14も同様、柱状部のみ完存する。柱部はやや太めで、中膨らみを呈する。外面は縦位のナデ、内面はシボリ目が残る、粘土帯の接ぎ目が4段残置する。柱状部下半部に横位のハケメ調整が施されている。外面に赤彩されている。焼成は良好。15は坏部底部と柱状部が完存する。柱状部はやや中膨らみを呈する。外面は縦位のナデ、内面はシボリ目が残る、横位のナデがみられる。焼成は良好で、明褐色を呈する。16は柱状部下半部から裾部にかけて1/4程度遺存する。裾径は9.8cmを測る。裾部は90°に近い角度で屈曲して延びる。外面は縦位のナデ整形後、赤彩される。内面もナデ整形で仕上げている。焼成は良好。17~23は裾部破片。いずれも遺存度が1/4以下の小破片で、大半は1/6程度である。18・20・22は赤彩されている。

第21号住居跡 (SI21) (Fig. 223~226)

位置 本跡は、調査区南西部にあたり、13-O区の標高21.16m~22.22mに位置し、北東側に第22号住居跡 (SI22) が、南西側に第20号住居跡 (SI20) が、西側に第18号住居跡 (SI18) と第19号住居跡 (SI19) が隣接する。

形態 平面形は、隅丸方形を呈する。長軸4.22m、短軸4.20mを測り、長軸方位はN-13°-Eを指し、中形の住居跡である。壁は全体的に低く、東辺、西辺、南辺、北辺とも緩やかに立ち上る。床面は若干の起伏を呈するが、ほぼ平坦に広がる。床は黄褐色ロームと暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 4層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|------------|-------|---------------------------|
| 1層 | 7.5YR1.7/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 2層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 3層 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 4層 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |

住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本が確認された。

P1~P4は不規則な配列をもつピット群であるが、P2とP3はそれぞれ北東隅壁際と南西隅壁際と対峙する位置関係をもつ柱穴である。他の2本は支柱穴もしくはは入口部構築ピットである可能性が高い。まず柱穴と思われるP2とP3のうち、まずP2は北東隅に位置し、上面は26×28cmの楕円形を呈し、深さは12cm。P3は南西隅に位置し、上面は34×38cmで、深さ8cmである。P1は西側で上面は22×22cmの円形で、深さ71cmを測る。P4は南壁際やや西寄りに位置し、上面が22×24cmの楕円形で深さは6cmを測る。

炉および周溝は確認できなかった。

掘り方 掘り方は、床下全面におよぶが、住居の北東約半分は粗雑で複雑な掘り窪みが認められる。

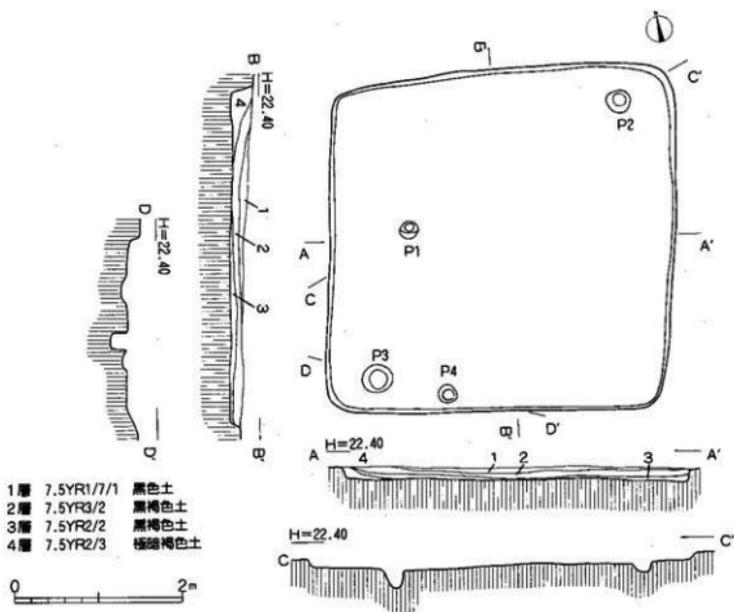


Fig.223 第21号住居跡

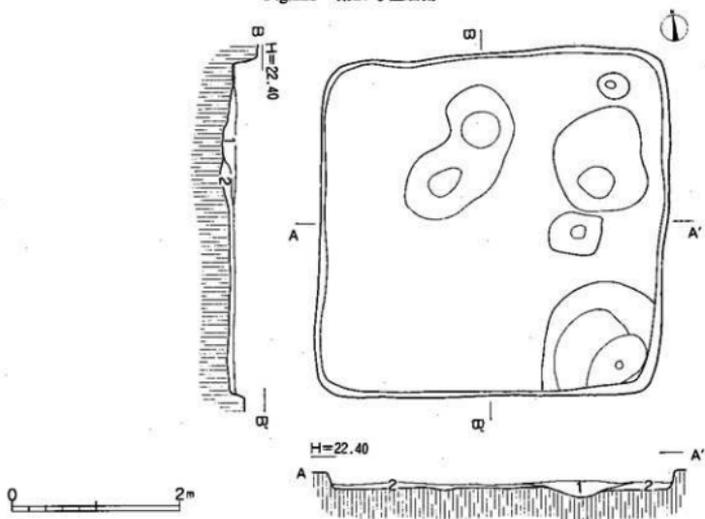


Fig.224 第21号住居跡掘り方

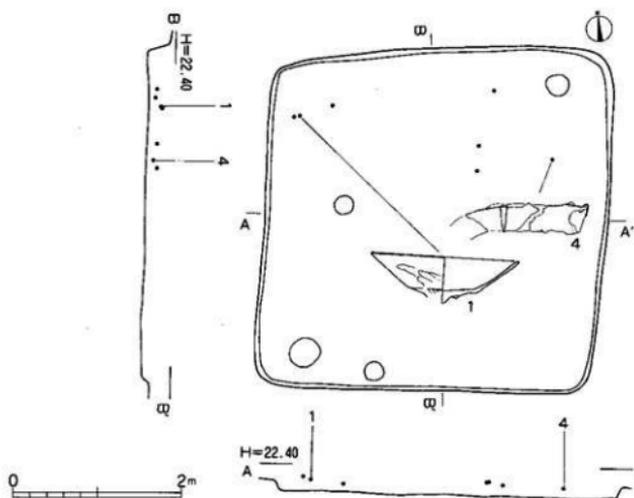


Fig.225 第21号住居跡遺物分布図



Fig.226 第21号住居跡出土遺物

遺物出土状況 遺物は、住居北側の半分に散在するが、出土数は少ない。

遺物 1は高坏の坏部破片。約1/2程を遺存する。推定口径18.0cm、現器高5.8cmを測る。底部と口縁部との境界に明瞭な稜をもち、口縁部は直線的に外方へ開く。外面口縁部はナデ整形。底部はケズリあとを部分的に残す。内面はナデ整形で仕上げている。焼成は良好。橙色を呈する。2は碗で、口縁部から底部にかけて1/3程を遺存する。器高8.2cm、口径11.6cm、底径3.2cmを測る。最大径は胴部のやや上位に位置し、上げ底の小さい底部から扁球形の胴部をもち、口縁部は短く「く」の字状に外反する。外面はナデ整形。内面は頸部付近に斜めのハケメ調整の後、ナデ整形が施される。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。3は広口壺。口縁部のみ1/8程度の遺存。口縁部は小さく「く」の字状に外反する。外面は口縁部が横ナデ、頸部はナデ整形。内面は口縁部が横ナデ、体部が斜めのハケメ調整の後、ナデが加わる。焼成は良好。色調は赤褐色を呈する。4は鉄製の鎌破片である。錆が著しく詳細な観察は不可能であるが、柄部付近を残置している。残存している刃部の幅は最大2.25cm、背の厚さ0.48cm、現存部の長さ9.7cmを測る。床面より若干浮いて出土した。

第24号住居跡 (SI24) (Fig. 227~231)

位置 本跡は、調査区東部にあたり、11-P区の標高21.90m~22.32mに位置し、南東側に第23号住居跡 (SI23) が、北東側に第27号住居跡 (SI27) が、また北側には第25号住居跡 (SI25) が隣接する。

形態 本跡は東側約1/2が保存区域にあたるため、調査は西側約半分を実施したのみである。まず平面形は、隅丸方形を呈する。長軸6.70m、調査した現存短軸3.80mを測り、長軸方位はN-11°-Wを指し、中型の住居跡である。壁は確認された西辺、北辺、南辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は若干の起伏は呈するが、ほぼ平坦に広がる。床は黄褐色ロームと暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 住居内は4層に分層可能である。自然埋没土層である。

- 1層 10YR3/4 暗褐色土 表土層
- 2層 10YR2/1 黒色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 3層 10YR3/3 暗褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
- 4層 10YR4/6 褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 5層 10YR5/6 黄褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴2本と地床炉1基を確認した。

主柱穴は確認できず、わずかに柱穴状のビット2本を検出したのみである。P1とP2とも南西側に位置し、まずP1は上面が18×18cmの円形、深さ14cm。P2は東寄りで上面が18×20cmの楕円形で、深さ17cmを測る。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北寄りに設置され、長径70cm、短径40cm、深さ8cmを測る。断面は起伏をもちやや凸凹している底部で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の北側に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第1層が赤褐色焼土層で多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

掘り方 掘り方は、床下全面におよぶが、南西壁際でビット状の掘り窪みが認められる。

遺物出土状況 遺物は、炉跡を中心にした周辺にまとも出土している。また滑石製模造品 (剣形) が住居中央南側から検出された。その他に図示しうる資料は、壺2点、甕4点、高坏1点である。

遺物 1は壺で、口縁部から胴部中位にかけて約1/2程を遺存する。推定口径14.0cm、現器高18.3cm、胴部最大径23.6cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、胴部は胴長の細身を呈する。外面の口縁部は斜めのナデ、頸部は横ナデ、胴部は縦位の細かなナデ整形を施す。内面は口縁部の上位は横位のハケメ調整。頸部は横ナデ、肩部はハケメ調整の後、ナデ調整で仕上げる。焼成は良好。赤色を呈する。2は壺で、口縁部から肩部にかけて1/8程を遺存する。推定口径15.5cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口縁部は緩く「く」の字状に外反する。外面はミガキの後、赤彩され、内面はナデ整形の後、赤彩される。焼成は良好。3は甕で、口縁部から肩部にかけて完存する。口径23.2cm、現器高6.7cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部はハケメ具による刻みが巡り、口縁部外面から肩部はハケメ調整の後、ナデ整形が加わる。内面はナデ整形が施されている。焼成は良好で、褐色を呈する。4は台付甕の胴部底部と脚部2/3程遺存する。裾径12.6cm、現器高14.3cmを測る。大型の台付甕の部類に入る。脚部はほぼ直線的に開く。外面は縦位方向のハケメ痕がそのまま残る。裾端面のみ横ナデ、内面はナデが施されている。焼成は良好。明赤褐色を呈する。5は甕底部で1/3程を遺存する。推定底径は10.2cmを測る。平底から外方へ体部が開く。内外面ともナデ整形。焼成は良好で、暗赤色を呈する。6も甕底部破片で、底部は完存する。底径は8.4cmを測る。平底から体部は外方へ開く。内外面ともナデ整形。焼成は良好で、黒褐色を呈する。7は坏口縁部破片で、口縁部は1/6

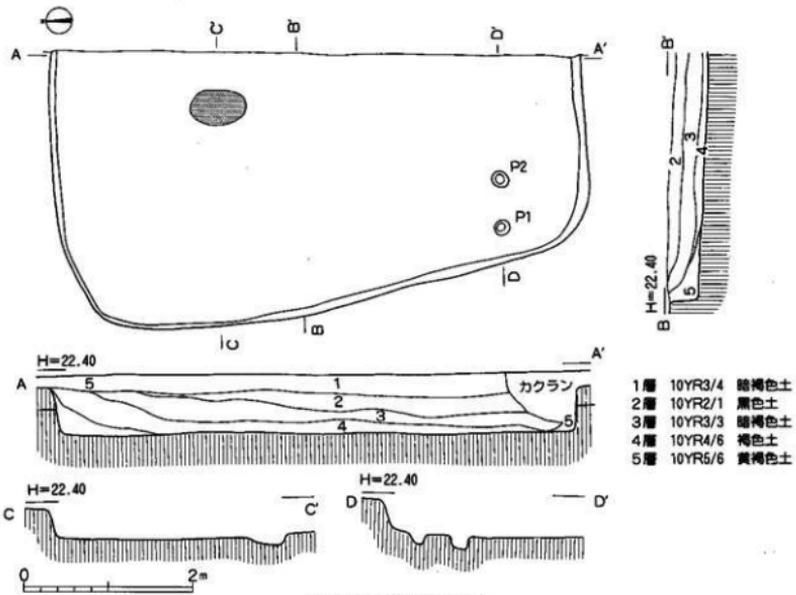


Fig.227 第24号住居跡

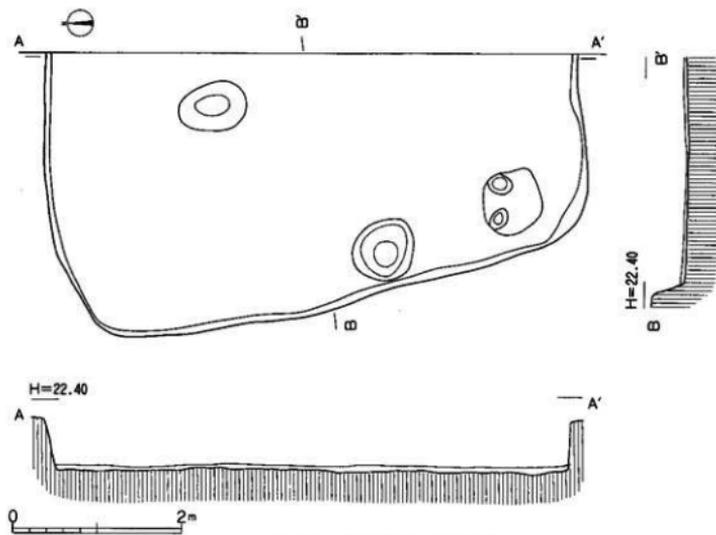


Fig.228 第24号住居跡掘り方

程遺存する。口径は18.0cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外方へ開く。内外面ともナデ整形。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。8は剣形模造品である。滑石製で、表裏面および側面に明瞭な研磨調整痕を残す。また表面の中央に稜をもち、上半部に1孔を穿つ。この穿孔は表面より一方向から施されている。長さ4.36cm、幅1.65cm、厚さ0.41cm、孔径0.32cm、重さ5.10gを測る。

第26号住居跡 (SI26) (Fig. 232~236)

位置 本跡は、調査区東部にあたり、11-O区の標高22.52m~22.66mに位置し、北東側に第27号住居跡(SI27)が、南東側に第23号住居跡(SI23)が隣接する。

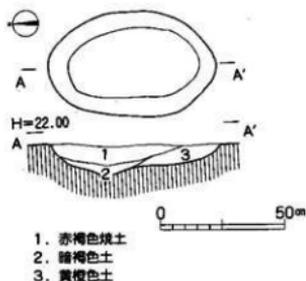


Fig.229 第24号住居跡炉

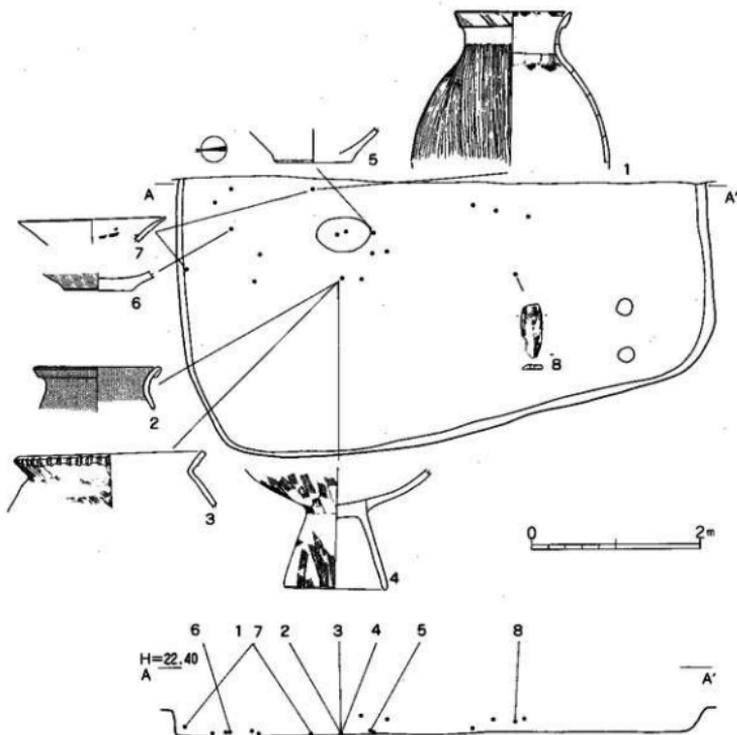


Fig.230 第24号住居跡遺物分布図

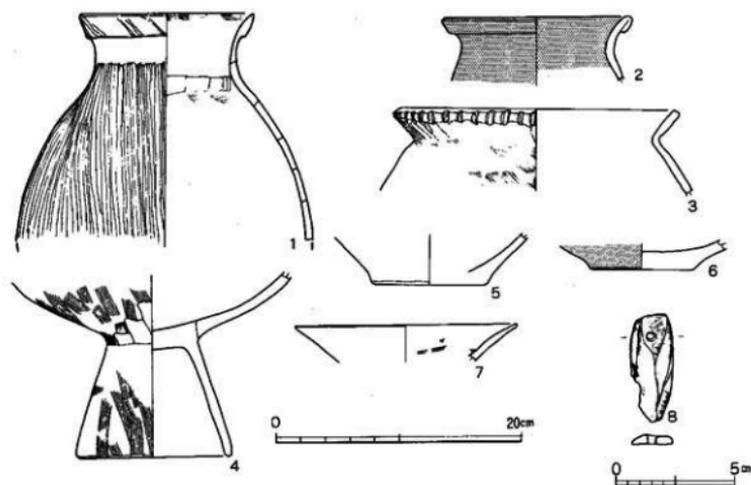


Fig.231 第24号住居跡出土遺物

形態 平面形は、隅丸長方形を呈する。長軸6.60m、短軸5.30mを測り、長軸方位はN-9°-Eを指し、やや大型の住居跡である。壁は各壁浅いが、東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 2層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層 7.5YR2/2 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。

2層 7.5YR5/6 明褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴3本と貯蔵穴1基が確認された。

主柱穴はP1～P3に相当するものと考えられる。まずP1は北西部に位置し、上面が22×24cmの楕円形、深さ38cm。P2は北東部に12×14cmの楕円形で、深さ6cm。P3は南西部に位置し、上面が36×46cmの楕円形で、深さ21cmを測る。

貯蔵穴P4は南東隅壁際に設置されており、円形を呈し、深さは27cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ直線的外方へ開口する。覆土は2層に分層でき、第1層極暗褐色土(7.5YR2/3)多量のローム粒子を含み、締まりがある。第2層黒褐色土(7.5YR3/2)少量のローム粒子を含み、締まりがある。

炬および周溝は確認できなかった。

掘り方 掘り方は、床下全面におよぶが、とくに各壁際に粗雑で複雑なピット状の掘り窪みが認められる。

遺物出土状況 遺物は、住居全体に散在するが、とくに住居西壁際とP4の貯蔵穴周辺に集中する。その内、個体として図示しうる資料は、壺4点、甕1点、高坏5点、埴3点、塊1点である。

遺物 1～4は壺形土器の口縁部破片である。1は口縁部1/4程度遺存する。推定口径21.5cmを測る。い

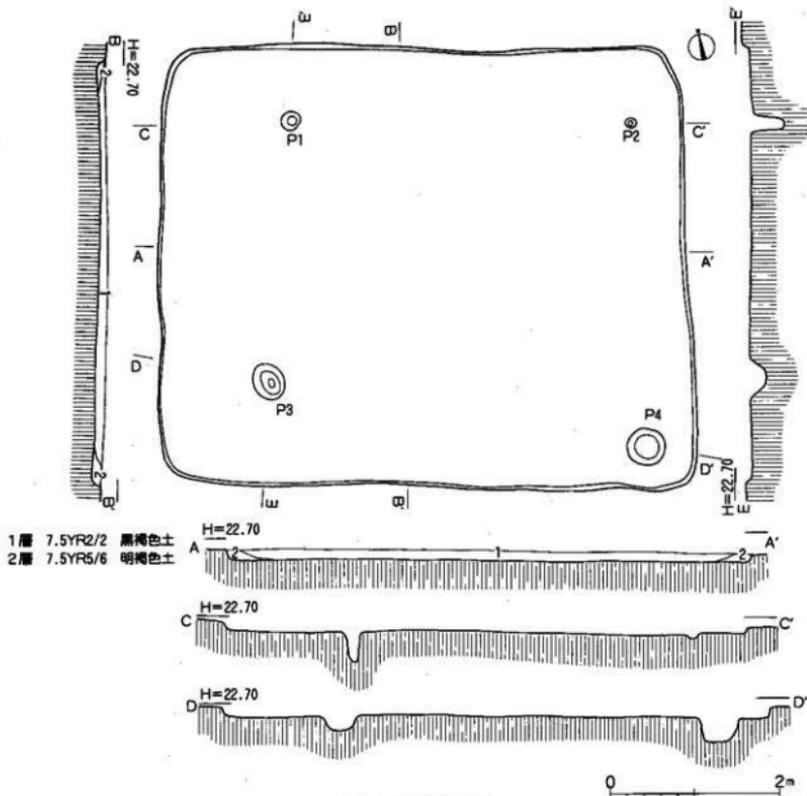


Fig.232 第26号住居跡

わゆる有段（二重）口縁をもつ壺である。内外面とも入念なナデ整形が施されている。焼成は良好で、全面赤彩される。2は口縁部から頸部にかけて1/6程度遺存する。推定口径17.8cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、「く」の字状に大きく外反する。外面口縁部は横ナデ、頸部は斜行のハケメ調整を施し、赤彩される。内面は横位、斜位のハケメが顕著である。焼成は良好である。3は口縁部が1/6程度の遺存である。推定口径15.6cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、ほぼ直線的に外方へ開く。外面口縁部は横ナデ。頸部はハケメ調整後、ナデ整形を施す。内面は横位、斜位のハケメ調整を施す。焼成は良好。明赤褐色を呈する。4は口縁部が1/4程度の遺存である。推定口径15.6cmを測る。口縁部は粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、「く」の字状に外反する。外面口縁部は横ナデ。頸部はハケメ調整後、ナデ整形を施す。内面は横位、斜位のハケメ調整を施す。焼成は良好。明赤褐色を呈する。5は壺。口縁部から胴部下半部にかけて1/3程度遺存する。口径14.2cm、現器高13.9cm、胴部最大径18.2cmを測る。胴部は球形を呈し、口縁部は「く」の字状に外反する。外面口縁部上端

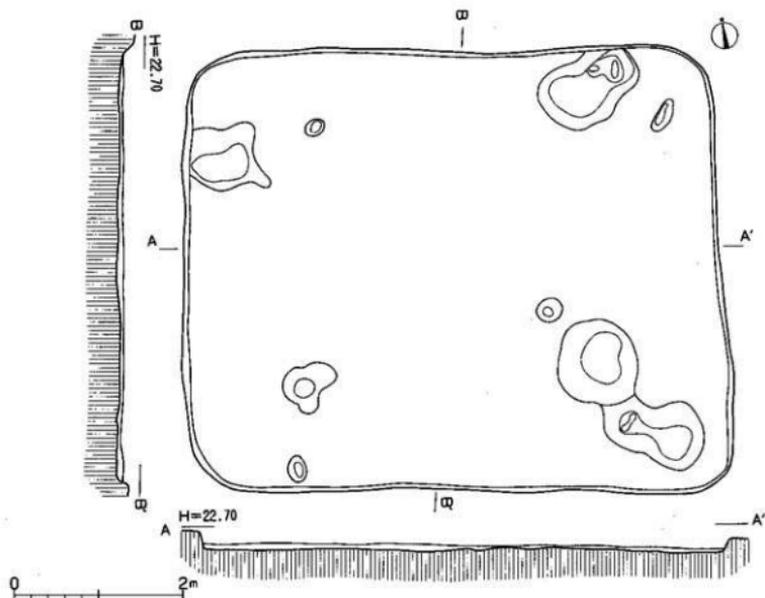
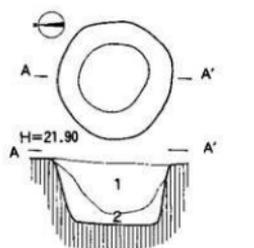


Fig.233 第26号住居跡掘り方



1. 極暗褐色土
2. 黒褐色土

Fig.234 第26号住居跡貯蔵穴

は横ナデ、胴部上半部は縦位のハケメ調整、胴部下半部はナデ整形。内面はナデ整形。焼成は良好。赤褐色を呈する。6～10は高坏である。6は坏部のみ1/4程を欠損する。口径18.0cm、現器高6.6cmを測る。口縁部と底部との境界に張り出しがある。口縁部は緩いカーブを描きながら外反する。外面はナデ、内面はハケメ調整の後、ナデ整形。全面赤彩される。7は脚部破片。脚1/3程欠損する。中膨らみの柱状部から裾部は低く広がる。裾径13.4cm、現器高11.5cmを測る外面は縦位のナデ整形後、赤彩される。内面は上端はシボリ目が残り、下端部はハケメ調整後、ナデ整形を施す。焼成は良好。8は坏部は完存する。口径21.0cmを測る。口縁部と底部との境界に明瞭な稜をもつ。外面はナデ整形後、赤彩される。内面はナデ整形後、赤彩される。焼成は良好である。9は

坏部は完存する。口径19.6cmを測る。口縁部と底部との境界に明瞭な稜をもつ。外面はハケメ調整し、ナデ整形後、赤彩される。内面もやはりハケメ調整し、ナデ整形後、赤彩される。焼成は良好である。10は裾部破片で、1/4程度を遺存する、推定裾径13.0cmを測る。外面はハケメ調整。内面は横ナデが施されている。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。11は完存する埴形土器である。器高10.4cm、口径9.9cm、底径2.8cmを測る。胴部最大径は中位にあり、若干上げ底気味の底部から球形の胴部へ移行し、口縁部はほぼ直線的に外方へ開く。外面は丁寧なヘラミガキの後、赤彩され、内面は口縁部はミガキ、

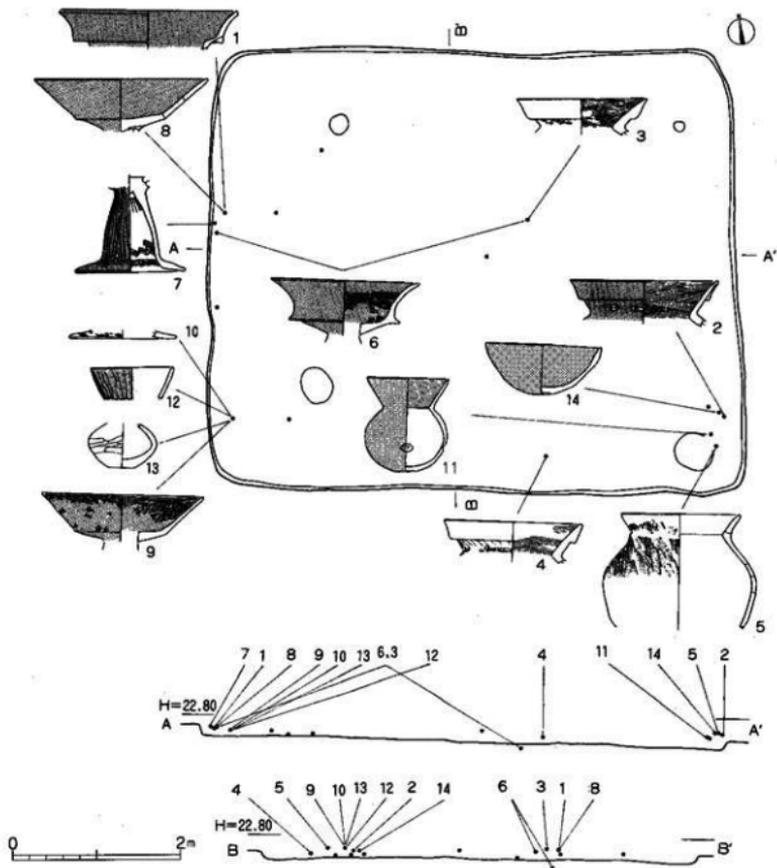


Fig.235 第26号住居跡遺物分布図

体部はナデによって仕上げられている。なお、胴部中位よりやや下方に下斜めより鋭利な器物により刺突孔がみられ(b)、また底部にも外方から同様な工具により穿孔されている(a)。12は口縁部約1/4を遺存する罎。推定口径10.2cmを測る。口縁部はやや内湾気味に外方へ開く。外面は縦位のミガキの後、赤彩される。内面も同様。焼成は良好である。13は罎の胴部破片。約1/2程度を遺存する。平底の底部からやや上下に押しつぶしたような扁球形を呈する。外面は横位のナデ整形。内面はナデによって仕上げている。焼成は良好。14は完存の埴形土器である。器高6.2cm、口径13.8cm、底径2.8cmを測る。上げ底状の底部から球形を呈する体部をもつ。口唇部は鋭い。内外面ともナデ整形。焼成は良好。明褐色を呈する。

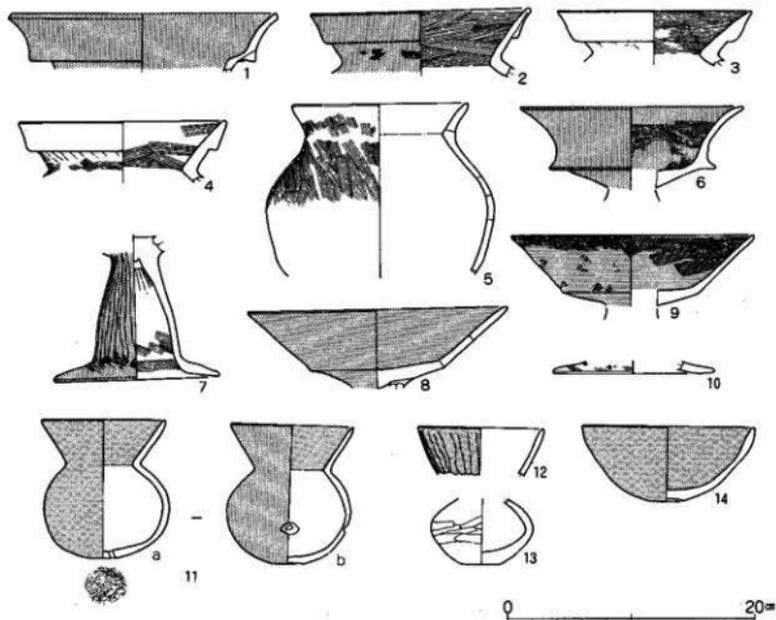


Fig.236 第26号住居跡出土遺物

第28号住居跡 (Fig. 237~242)

位置 本跡は、調査区の東部、9-O、9-P、10-O、10-P区の標高22.00m~22.66mに位置する。南側に第27号住居跡 (SI27) が、北側に第29号住居跡 (SI29) が、北西側に第33号住居跡 (SI33) が隣接する。

形態 平面形はほぼ隅丸方形を呈する。長軸5.44m、短軸5.44mを測り、長軸方位はN-62°-Eを指し、中型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともやや緩やかに立ち上がる。床面は起伏も認められるが、ほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 4層に分層可能である。自然埋没土層である。

- 1層 7.5YR3/1 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 2層 7.5YR3/4 暗褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。
- 3層 7.5YR2/3 極暗褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。
- 4層 7.5YR4/4 褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴5本と地床炉1基および貯蔵穴1基が確認された。

P1~P4が主柱穴である。P1は西部に位置し、上面が20×26cmの楕円形、深さ13cm。P2は北部で上面が20×28cmの楕円形で、深さ14cm。P3は南部に位置し上面が22×35cmの楕円形で、深さ14cm。P4は東部で上面が35×40cmの楕円形、深さ14cmを測る。また南東壁やや南寄りに上面が20×24cmの楕円形を呈した深さ9cmの支柱穴もしくは入口部施設の梯子穴を検出している。

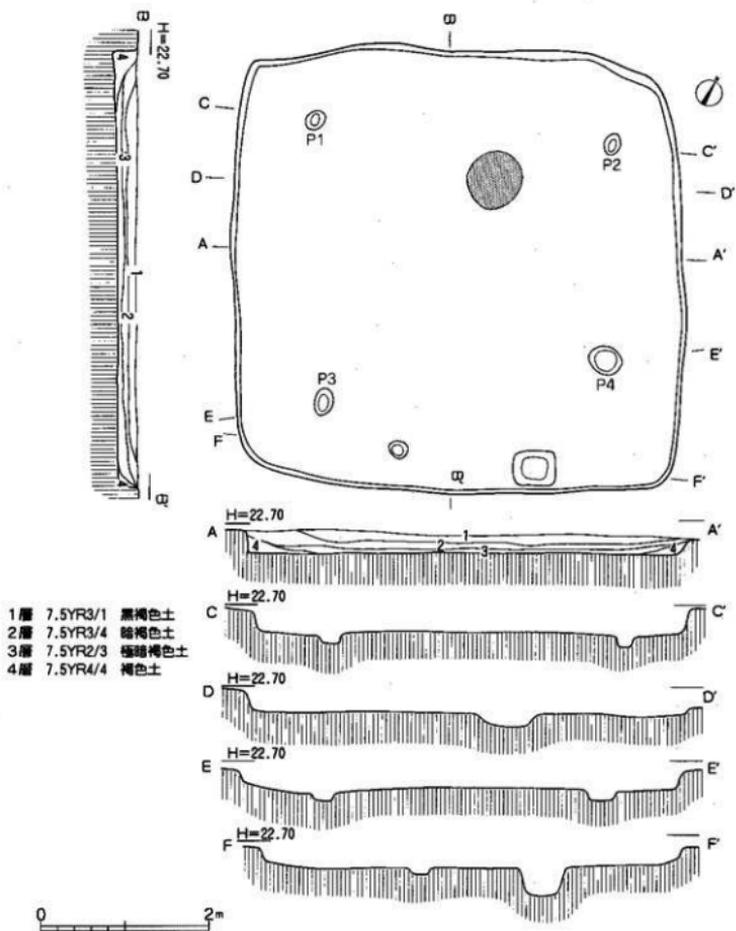


Fig.237 第28号住居跡

炉は地床炉で、住居中央から東寄りに設置され、その平面形は楕円形を呈し、長径74cm、短径64cm、深さ18cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第1層と第2層が焼土層で、とくに第2層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

貯蔵穴は南東壁際中央よりやや北寄りに構築されている。形状は長方形を呈し、規模は長軸52cm、短軸40cmで、深さは35cmを測る。断面は平底で、壁は急傾して外方へ開口する。覆土は2層に分層でき、

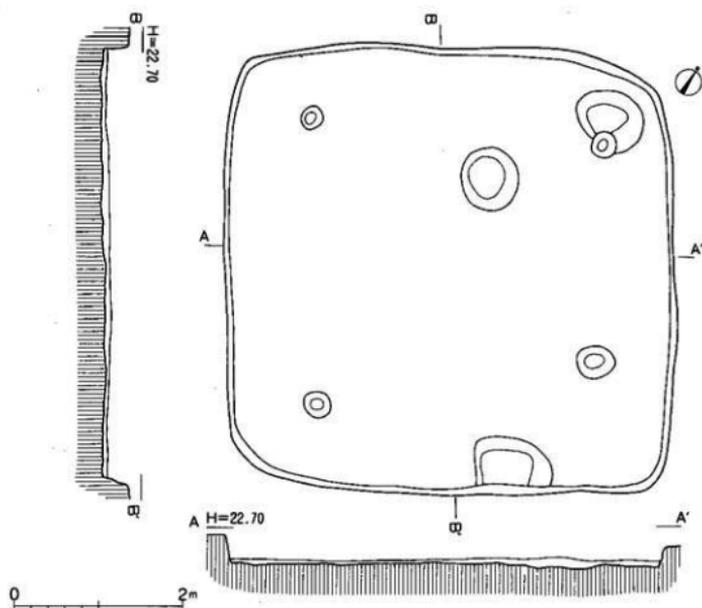


Fig.238 第28号住居跡掘り方

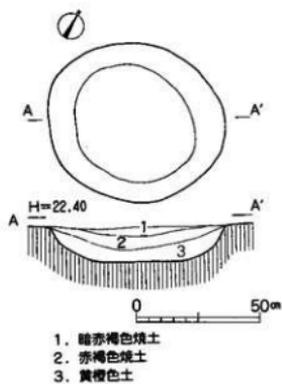


Fig.239 第28号住居跡炉

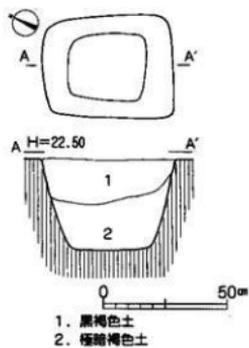


Fig.240 第28号住居跡貯蔵穴

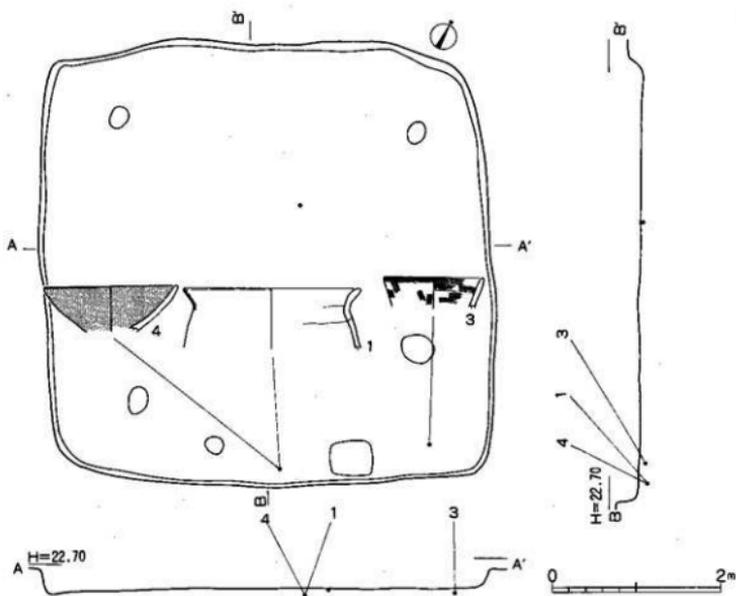


Fig.241 第28号住居跡遺物分布図

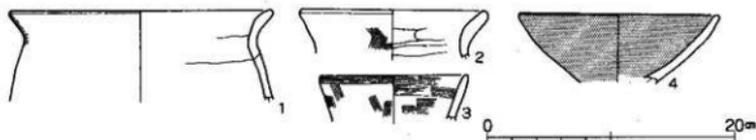


Fig.242 第28号住居跡出土遺物

第1層は黒褐色土(7.5YR3/2)少量のローム粒子を含み、締まりがある。第2層極暗褐色土(7.5YR2/3)少量のローム粒子を含み、締まりがある。

掘り方 掘り方は床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっている。

遺物出土状況 遺物は、わずか4点のみで、南壁際で出土している。壺2点、埴2点である。

遺物 1は壺口縁部破片。口縁部1/4程度を遺存する。推定口径21.2cmを測る。胴長の胴部から口縁部は「く」の字状に外反する。外面口縁部は横ナデ、胴部は肩部から縦位のヘラケズリを施す。内面では口縁部は横ナデ、体部は横位のナデ整形。焼成は良好。黒褐色を呈する。2も壺の口縁部破片。1/10以下の小破片。推定口径15.4cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反する。外面は口縁部は横ナデ、頸部は縦位のハケメ調整を施す。内面は口縁部上端に横位のハケメ調整後、ナデ整形。焼成は良好。にぶい褐色を呈する。3は小型壺の口縁部破片。口縁部1/6度遺存する。推定口径12.0cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外方へ開く。外面は口縁部上端は横位、下位は斜めのハケメ調整後、ナデ整形。内面は横位

のハケメ調整を施す。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。4は高坏の口縁部で、1/2程を遺存する。口径16.4cm、現器高5.6cmを測る。口縁部はやや内湾気味に外方へ開く。内外面ともミガキ調整の後赤彩がされる。焼成は良好である。

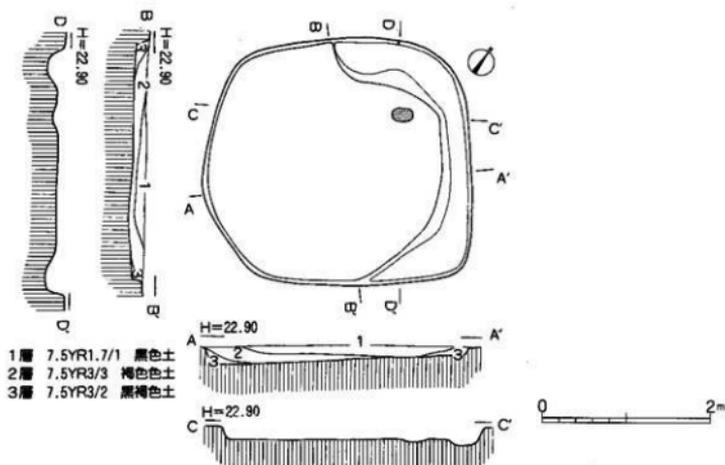


Fig.243 第31号住居跡

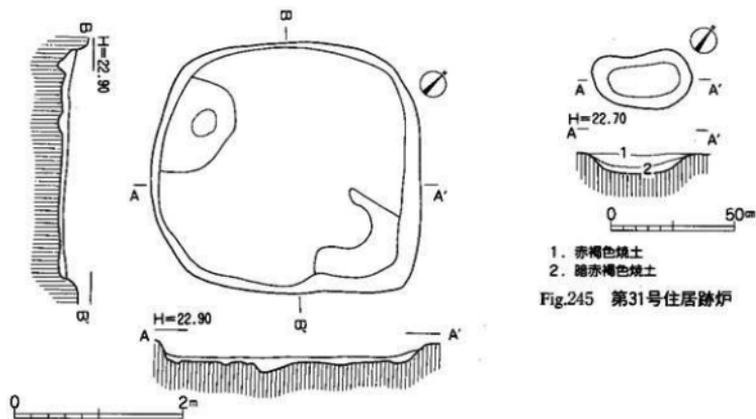


Fig.245 第31号住居跡炉

Fig.244 第31号住居掘り方

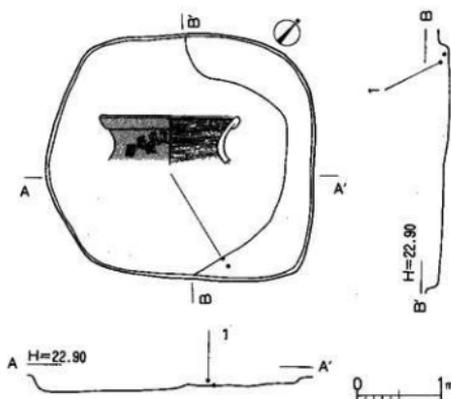


Fig.246 第31号住居跡遺物分布図

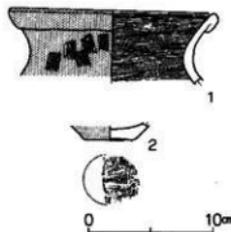


Fig.247 第31号住居跡出土遺物

第31号住居跡 (SI31) (Fig. 243~247)

位置 本跡は、調査区中央東側で、9-M、10-M区の標高22.76m~22.80mに位置する。北東側に第32号住居跡 (SI32) が隣接する。

形態 平面形は、隅丸方形を呈する。長軸3.23m、短軸3.03mを測り、長軸方位はN-48°-Eで、やや大型の住居跡である。壁は全体に低く、東辺、西辺、南辺、北辺ともやや緩やかな立ち上がりをもせている。床面は若干の起伏はあるものの、ほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土、暗褐色土の混合土からなる貼床である。

覆土 3層に分層可能である。自然埋没土層である。

- 1層 7.5YR1.7/1 黒色土 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 2層 7.5YR3/3 褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。
- 3層 7.5YR3/2 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、地床炉1基を確認した。

炉は地床炉で、住居中央から北側に位置している。形状は楕円形を呈し、規模は長径39cm、短径22cm、深さ9cmを測る。断面は鍋底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は2層に分層でき、第2層が赤褐色焼土層で、多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

また北東壁際から北西壁および南東壁の一部にかけて、幅30~50cm、高さ2~10cmの床の高まりであるいわゆる「ベット」状遺構の一種とも考えられる遺構が存在する。ただし、明瞭な形状を呈しておらず、性格は不詳である。

掘り方 掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっているが、西壁際および東壁際に浅く雑な掘り込みがある。

遺物出土状況 遺物は、わずかに2点のみで、南東壁際に出土している。壺と埴である。

遺物 1は壺の口縁部から頸部にかけての破片。1/8程度遺存する。口縁部は細い粘土帯を貼り合わせ

た複合口縁で、「く」の字状に外反する。外面口縁部は横位のハケメ調整後、ナデによって部分的にハケメ痕を消失させる。頸部は縦位のハケメ調整を施す。赤彩されている。内面も横位の木板様工具の木口部分によるナデ整形を施す。焼成は良好である。2は埴の底部破片。1/2程度の遺存。底径は4.0cmを測る。やや上げ底気味の底部から外方へ体部が開く。外面は縦位のハケメ調整の後、ナデが施され、赤彩される。内面はナデ整形。焼成は良好。

第33号住居跡 (SI33) (Fig. 248~254)

位置 本跡は、調査区北東部にあたり、8-N、8-O、9-N、9-O区の標高22.78m~22.94mに位置し、西壁の一部が樹木保存区域にあたるため、調査を途中で終了している。なお、東側に第29号住居跡 (SI29) が、南西側に第32号住居跡 (SI32) が、北西側に第34号住居跡 (SI34) が隣接する。

形態 平面形は、隅丸方形を呈する。長軸5.08m、短軸4.60mを測り、長軸方位はN-83°-Eを指し、中型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は若干の起伏はあるものの、平坦面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 5層に分層可能である。自然埋没土層である。

- 1層 7.5YR2/1 黒色土 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
- 2層 7.5YR3/1 黒褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。
- 3層 7.5YR3/3 暗褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりもある。
- 4層 7.5YR6/8 黄褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性が欠け、締まりがある。
- 5層 7.5YR4/4 褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性があり、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基および貯蔵穴1基を確認した。

P1~P4は主柱穴で、P1は南西部に位置し、上面が20×22cmの楕円形、深さ20cm。P2は北西部で24×26cmの楕円形で、深さ19cm。P3は南東部に位置し、上面が24×32cmの楕円形、深さ19cm。P4は北東部で30×30cmの円形で、深さ21cmを測る。

炉は地床炉で、住居中央から西寄りに設置され、ほぼ円形を呈し、長径52cm、短径50cm、深さ11cmを測る。断面は鍋底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第1層と第2層が焼土粒子を含む焼土層で、とくに第1層は赤褐色焼土層で、多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

貯蔵穴は南東隅壁際に位置し、形状は楕円形を呈し、規模は長径74cm、短径68cm、深さ38cmを測る。断面は平底で、壁は緩やかな傾斜をもって外方へ開口する。覆土は3層に分層でき、第1層黒褐色土 (7.5YR3/1) 多量のローム粒子を含み、締まりがある。第2層黒褐色土 (7.5YR3/2) 多量のローム粒子を含み、締まりがある。第3層暗褐色土 (7.5YR3/3) 少量のローム粒子を含み、締まりがある。

周溝は構築されていない。

掘り方 掘り方は、細かな起伏をもちながら、床下全面におよぶ。

遺物出土状況 遺物は、住居全体から多量の土器類が出土している。とくに南東部に構築された貯蔵穴とその周辺、および南西隅壁際、さらに炉跡周辺にそれぞれまとまって検出されている。個体として図示しうる資料は、壺5点、甕7点、高坏19点、埴4点である。

遺物 1は壺で、口縁部から肩部にかけて1/2程度を遺存する。口径21.4cm、現器高10.0cmを測る。いわゆる有段(二重)口縁をもつもので、肩部が強く張り、球形の胴部へ移行する。頸部はほぼ直線的に延び、口縁部は円弧を描きながら外反する。外面は入念なナデ整形が施され、口縁部は横方向、頸部で

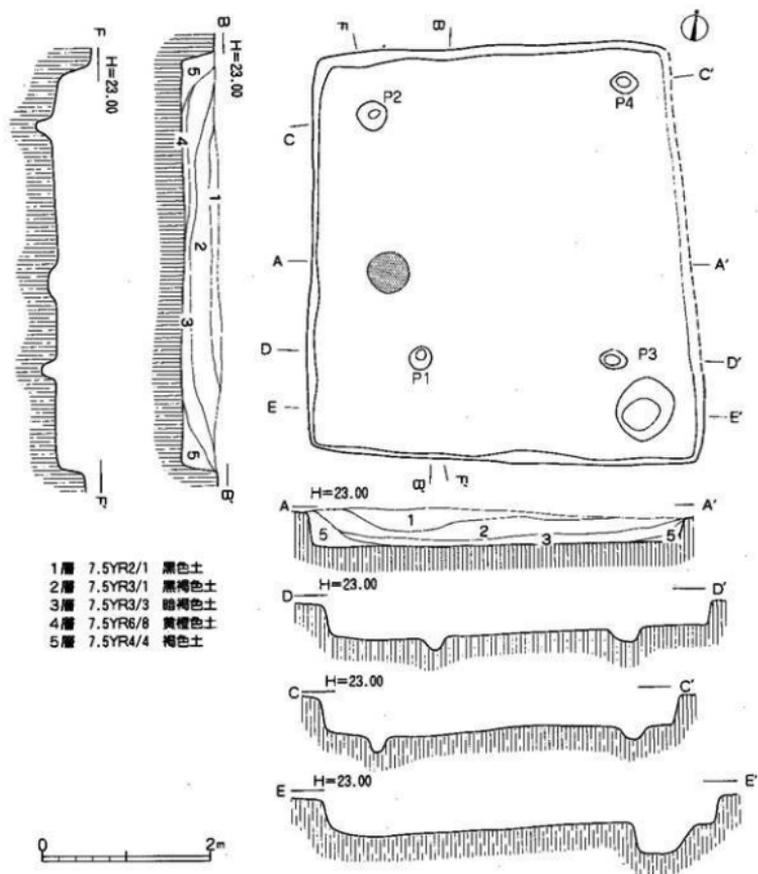


Fig.248 第33号住居跡

は縦方向に調整されている。内面は口縁部は横ナデ、肩部は横方向のハケメ調整が残る。全面赤彩され、焼成は良好である。2は口縁部のみ的小破片で、約1/8程度を遺存する。推定口径12.6cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反する。内外面ともナデ整形され、赤彩される。焼成は良好。3も壺の口縁部小破片。推定口径15.0cmを測る。口縁部は外方へ開く。内外面ともナデ整形で、赤彩される。4は甕の大型口縁部破片。約1/8程度遺存するのみ。推定口径29.0cmを測る。口縁部は大きく外方へ開く。内外面ともナデ整形。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。5は大型の壺形土器の胴部破片。約1/10程度を遺存するのみである。最大径は胴部下方部に位置し、最大径42.2cm、現器高33.5cmを測る。内外面とも丁寧なナデ整形を施す。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。6は甕で、口縁部は完存。胴部は約1/2程

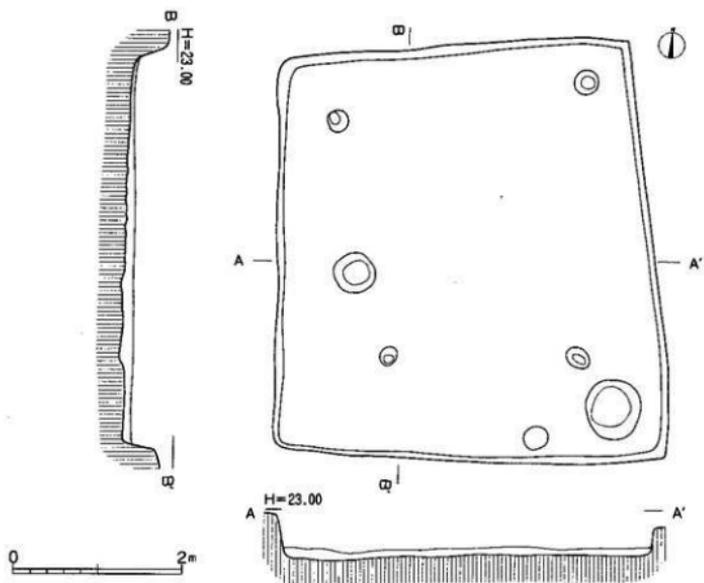


Fig.249 第33号住居跡掘り方

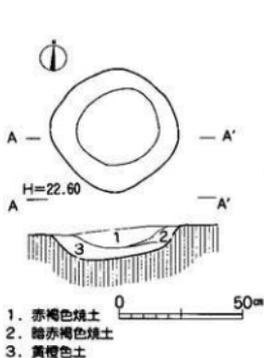


Fig.250 第33号住居跡炉

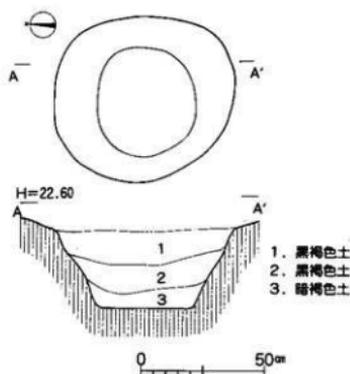


Fig.251 第33号住居跡貯蔵穴

度を遺存する。口径15.8cm、推定器高27.5cm、底径7.0cm、最大径が胴部中位に位置し、27.3cmを測る。球形の胴部から口縁部は短く「く」の字状に外方へ開く。外面口縁部はハケメ調整の後、ナデによって部分的にハケメ痕を消失させている。胴部はやはりハケメ調整の後、ナデ整形によって調整している。底部もナデ。内面は口縁部が横位のハケメ調整の後、ナデを施す。焼成は良好で、

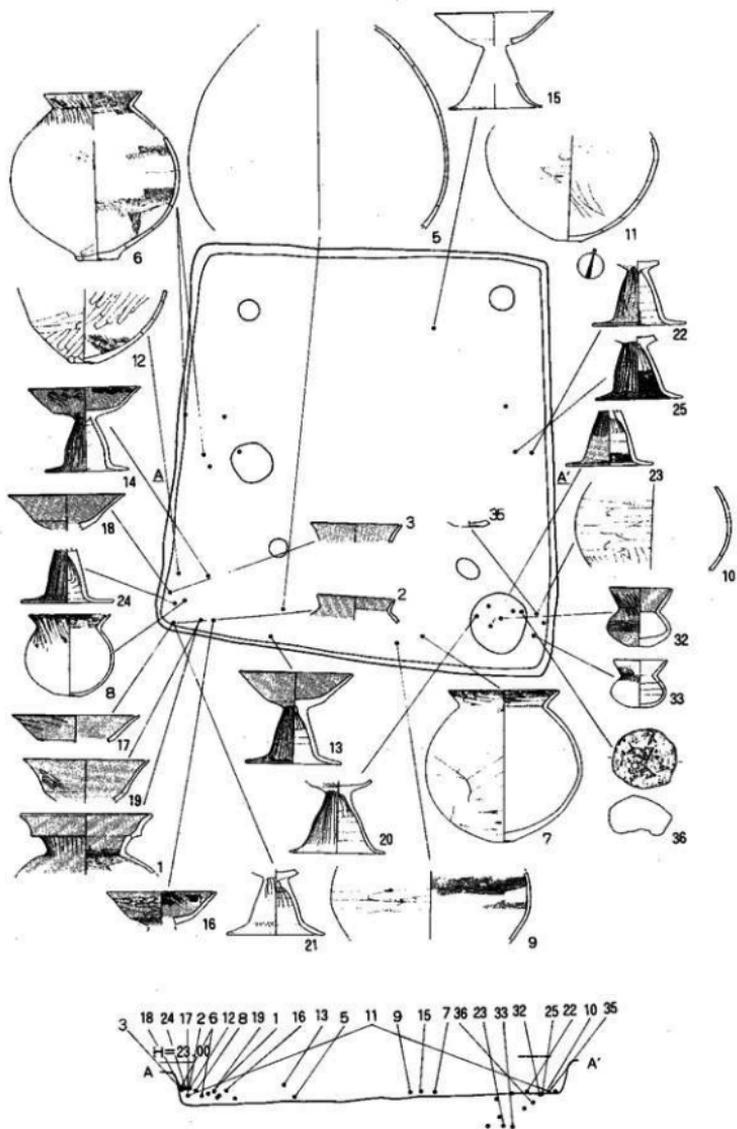


Fig.252 第33号住居跡遺物分布図

赤褐色を呈する。7は完存する甕である。器高25.0cm、口径18.0cm、底径3.2cm、最大径を胴部中位にもち25.2cmを測る。ほぼ球形の胴部から口縁部は「く」の字状に短く外反する。底部は小さく上げ底状を呈する。外面は斜行するハケメ調整の後、ナデ整形。内面は口縁部がハケメ調整。胴部はナデ整形によって仕上げられている。焼成は良好で、赤褐色を呈する。8は小型の甕で完存する。器高13.3cm、口径13.2cm、底径3.6cm、最大径は胴部中位に位置し、14.2cmを測る。ほぼ球形の胴部から口縁部は大きく「く」の字状に外反し、底部は小さく上げ底気味である。外面は斜行のハケメ調整の後、ナデ整形。内面は口縁部が横位のハケメ調整。胴部がナデ整形。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。9は大型の甕の胴部破片。約1/8程度を遺存する。最大径が胴部中位に位置し、32.0cmを測る。ほぼ球形の胴部を呈する。外面はハケメ調整の後、ナデ整形が施され、内面も横位のハケメ調整の後、ナデ整形が加えられる。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。10も甕胴部破片。胴部約1/4程度を遺存する。球形の胴部の最大径はほぼ中位に位置し、25.0cmを測る。外面は中位付近は横位。下位は縦位のヘラナデ。下半はスス状の炭化物が付着する。内面はナデ整形で、上半部にスス状の炭化物が付着する。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。11は甕底部から胴上半部の1/2程度を遺存する。底径5.4cm、現器高15.5cm、胴部最大径が上位にあり28.0cmを測る。外面は横位のヘラナデ、内面は横位、縦位のヘラナデで仕上げている。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。12も甕底部から胴部中位にかけて1/2程度を遺存する。ほぼ球形の胴部は、最大径が中位にあり24.0cmで、底径4.4cm、現器高12.2cmを測る。底面は上げ底気味である。外面は横位、斜位のヘラナデ、内面は底面付近が木板の木口付近のナデを施す。焼成は良好で、赤褐色を呈する。13~28は高坏である。13は坏部から裾部にかけて約3/4程度遺存する。器高15.3cm、口径18.6cm、裾径15.6cmを測る。坏部は口縁部と底部の境界に明瞭な稜をもち、脚部は柱状部が中膨らみで、裾部は低く、ほぼ直線的に外方へ張りだす。外面坏部はナデ整形。脚部は柱状部は縦位のヘラミガキされ、裾部は横方向のナデ。内面坏部はナデ。脚部柱状部上部にシボリ目が残し、下半は横方向のナデ。さらに粘土帯の積み上げ痕が3段残る。裾部はナデ整形。外面と内面坏部に赤彩される。14も坏部から裾部にかけて約3/4程度遺存する。器高13.9cm、口径18.6cm、裾径13.6cmを測る。坏部は口縁部と底部の境界に明瞭な稜をもち、脚部は柱状部が中膨らみで、裾部は低く、ほぼ直線的に外方へ張りだす。外面坏部はハケメ調整の後、ナデ整形。脚部は柱状部は縦位のヘラミガキされ、裾部は横方向のナデ。内面坏口端部は斜行するナデ。脚部柱状部は横方向のナデ。更に粘土帯の積み上げ痕が3段残る。裾部はナデ整形。外面と内面坏部に赤彩される。15は坏部と脚部の一部にかけて約1/3程度遺存する。推定器高16.0cm、口径19.4cm、裾径15.4cmを測る。坏部は口縁部と底部の境界にわずかに稜をもち、脚部は柱状部の下半部が残し、中膨らみで、裾部は明瞭な稜をもち、緩いカーブを描きながら外方へ開く。外面坏部はナデ整形。脚部は柱状部は縦位のヘラミガキされ、裾部は横方向のナデ。内面坏口端部は斜行するナデ。脚部柱状部は横方向のナデ。裾部はナデ整形。焼成は良好。にぶい赤褐色を呈する。16は坏部で1/8程度を欠損する。口径17.8cm、現器高5.5cmを測る。口縁部と底部の境界に明瞭な稜をもち、口縁部はほぼ直線的に外方へ大きく開く。外面口縁部上端は横ナデ。口縁部は横位のヘラナデ、底部はハケメ調整の後、斜行するヘラナデによってハケメ痕を消失させている。内面もハケメ痕が残置する。内外面とも赤彩される。焼成は良好である。17も坏部で1/6程度を遺存する。推定口径20.0cm、現器高4.4cmを測る。口縁部と底部の境界に明瞭な稜をもつ。口縁部は外反気味に外方へ大きく開く。外面口縁部上端は横ナデ。体部は斜位のヘラナデ、内面はハケメ痕が残置する。内外面とも赤彩される。焼成は良好である。18は坏部で2/3程度を遺存する。口径19.0cm、現器高5.8cmを測る。口縁部と底部との境にはわずかな稜をもつ。口縁部は外反気味に外方へ大きく開く。外面口縁部上端は横ナデ。体部は横位のヘラナデ、内面もナデ整形。内外面とも赤彩される。焼成は良好である。19は坏部で1/6程度を遺存

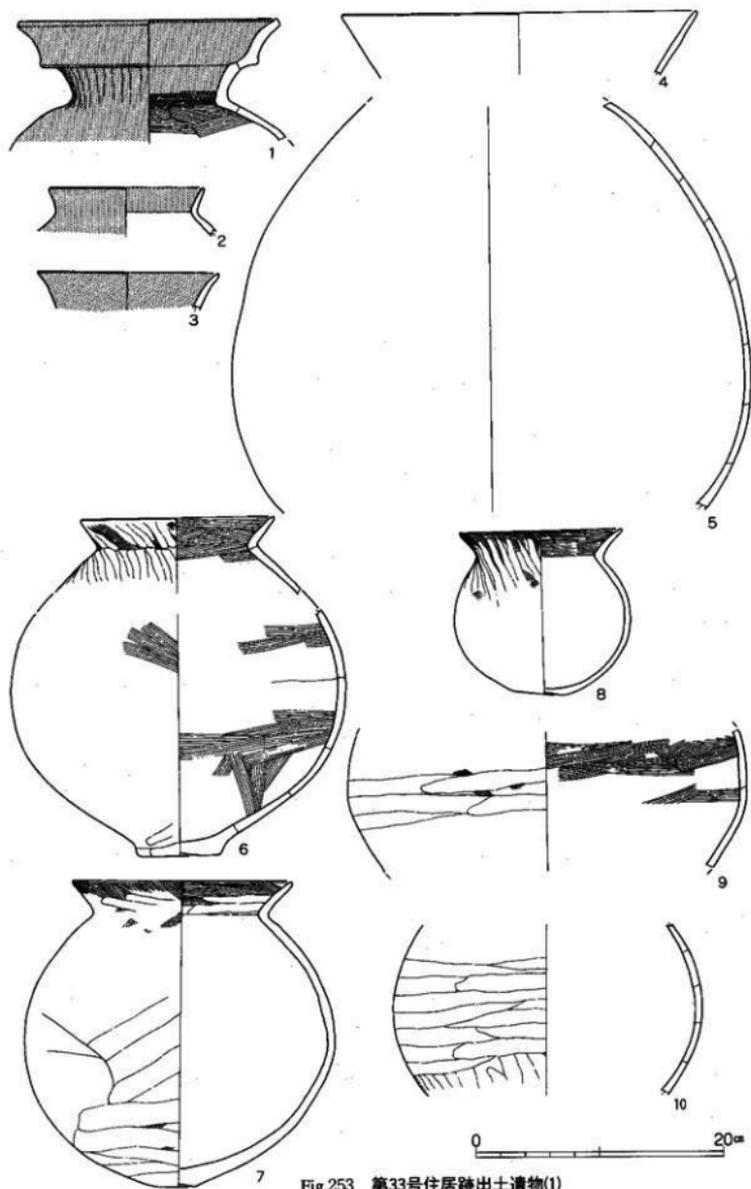


Fig.253 第33号住居跡出土遺物(1)

する。口径20.4cm、現器高7.3cmを測る。口縁部と底部との境にはわずかな稜をもつ。口縁部は反気味に外方へ高く開く。外面口縁部上端は横ナデ。体部は横位のヘラナデ、内面もナデ整形。内外面とも赤彩される。焼成は良好である。20は坏部底部から脚部までほぼ完存する。現器高12.0cm、裾径15.6cmを測る。坏部は口縁部と底部の境界に明瞭な稜をもち、脚部は柱状部が中膨らみし、裾部は小さく屈曲して外方へ張りだす。柱状部と裾部との境には段がない。外面坏部底部は斜行するヘラナデ。柱状部は縦位のヘラナデ。裾部は横ナデ。内面は坏部はナデ。柱状部上部にシボリ痕を残し、以下ナデ整形を施し、粘土帯の積み上げによる接ぎ目が3段残置する。焼成は良好で、橙色を呈する。21は坏部底部から脚部までほぼ完存する。現器高10.8cm、裾径16.0cmを測る。脚部は柱状部が中膨らみし、裾部は短く屈曲して外方へ張りだす。柱状部と裾部との境には明瞭な段を有す。外面坏部底部は斜行するヘラナデ。柱状部は縦位のヘラナデ。裾部もナデ。内面は坏部はナデ。柱状部上部にシボリ痕を残し、坏部の臍が突出している。下位はナデ整形を施し、粘土帯の積み上げによる接ぎ目が2段残置する。焼成は良好で、赤色を呈する。22は坏部底部から脚部までほぼ完存する。現器高10.5cm、裾径15.0cmを測る。脚部は柱状部が中膨らみし、裾部は低くしかも強く屈曲して外方へ張りだす。外面坏部底部は斜行するヘラナデ。柱状部は縦位のヘラナデ。裾部もナデの後、全面赤彩する。坏部内面はナデ。柱状部上部に坏部の臍が突出している。下位はナデ整形を施し、粘土帯の積み上げによる接ぎ目が5段残置する。焼成は良好である。23は脚部のみ約3/4程度を遺存する。現器高9.0cm、裾径14.2cmを測る。脚部は柱状部が中膨らみし、裾部は低く、しかも強く屈曲して外方へ張りだす。柱状部は縦位のヘラナデ。裾部は横ナデの後、全面赤彩する。内面は柱状部上部にシボリ目を残し、ナデ整形を施し、粘土帯の積み上げによる接ぎ目が3段残置する。さらに下位は横位のハケメ調整。裾部は横ナデ。焼成は良好である。24は脚部のみほぼ完存する。現器高9.0cm、裾径15.2cmを測る。脚部は柱状部が中膨らみが弱く、直線的に下方へ開き、裾部は低くしかも強く屈曲して外方へ張りだす。柱状部は縦位のヘラナデ。裾部は横ナデの後、全面赤彩する。内面は柱状部上部にシボリ目を残し、下位はナデ整形を施し、裾部は横ナデ。焼成は良好である。25は坏部底部から脚部にかけて約1/4程度を遺存する。現器高10.2cm、推定裾径14.0cmを測る。脚部は柱状部が中膨らみし、裾部は低くしかも短く屈曲して外方へ張りだす。外面坏部底部は斜行するヘラナデ。柱状部は縦位のヘラナデ。裾部もナデの後、全面赤彩する。内面は坏部はナデの後、赤彩する。柱状部上部に坏部の臍が突出し、さらにシボリ目が残る。下位は横位のハケメ調整を施す。焼成は良好である。26は脚部の柱状部のみ完存する。現器高5.4cmを測る。柱状部は中膨らみを呈する。外面はナデ。内面もナデ整形を施す。焼成は良好で、明褐色を呈する。27～29は高坏の裾部破片。いずれも小破片。27・28は赤彩。焼成は良好。30は鉢の口縁部破片、約1/2程度を遺存する。口径16.2cmを測る。内外面ともハケメ調整の後、ナデ整形。焼成は良好で、赤褐色を呈する。31は鉢の口縁部破片。約1/6程度を遺存する。口縁部はほぼ直線的に外方へ開く。外面は縦位のハケメ調整。内面はナデ整形を施す。焼成は良好で、赤褐色を呈する。32は埴で完存する。器高9.6cm、口径10.2cm、底径3.4cm、最大径は胴部中位に位置し、10.2cmを測る。平底の底部から押しつぶした胴部をもち、内湾気味の口縁部が外方へ開く。外面は口縁部が縦位、胴部が横位の入念なナデ整形の後、赤彩。内面は口縁部が横位、胴部が斜めのナデで、口縁部のみ赤彩される。焼成は良好。33も埴で、胴部約1/2程度欠損する。器高7.8cm、口径8.9cm、底径3.4cmを測る。やや丸底の底部から上下を押しつぶした胴部に移行し、口縁部はやや内湾気味に外方へ立ち上がる。外面は縦方向のナデ整形。内面は口縁部が横位ナデ、胴部がナデ整形を施す。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。34・35は埴の底部破片。34は底面1/4程度遺存し、底径7.0cmを測り、外面は赤彩される。35は底部のみ完存し、底径4.4cmを測る。内外面ともナデ整形。焼成は良好で、ぶい褐色を呈する。36は軽石である。扁平な円形を呈し、全面に磨耗している研磨具である。

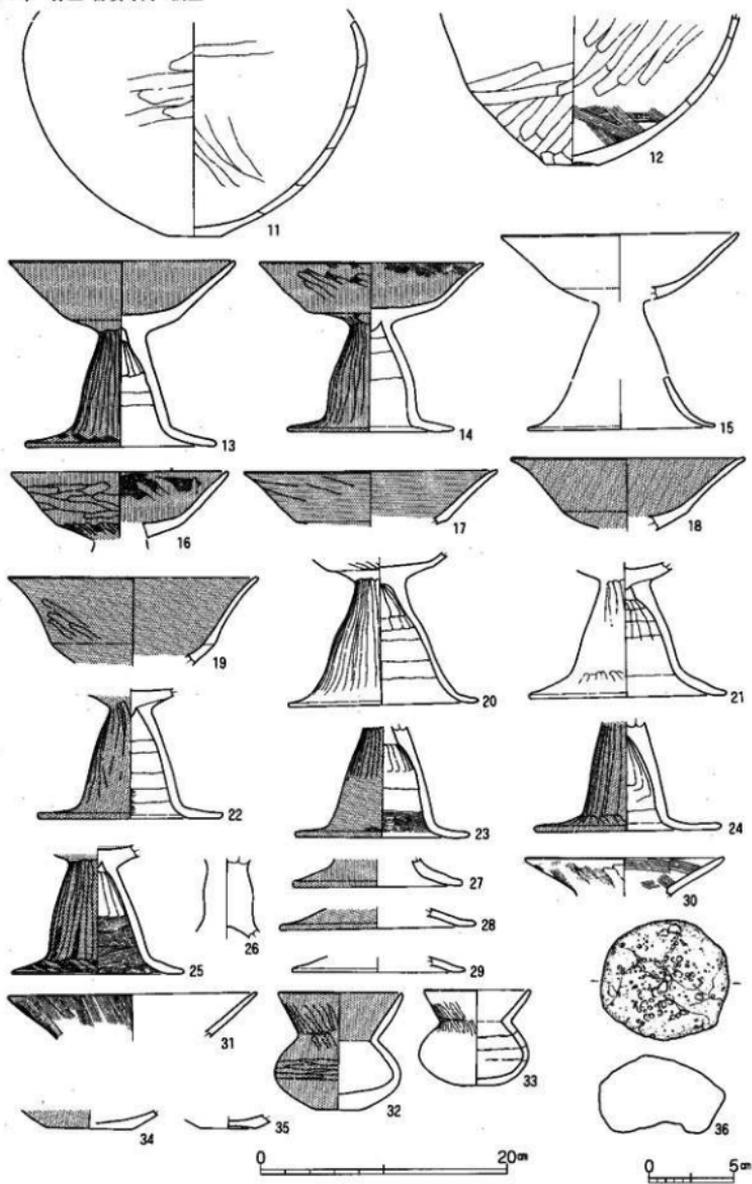


Fig.254 第33号住居跡出土遺物(2)

第34号住居跡 (SI34) (Fig. 255~261)

位置 本跡は、調査区南部にあたり、8-M、8-N区の標高22.78m~22.94mに位置し、北西側に第38号住居跡 (SI38) が、南東側に第33号住居跡 (SI33) が、南側に第32号住居跡 (SI32) が隣接する。

形態 平面形は、隅丸方形を呈する。長軸5.40m、短軸5.20mを測り、長軸方位はN-0°-WEを指し、中形の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上る。床面は若干の起伏を呈するが、平坦面がほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと暗褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。なお、主柱穴P1の北側に炭化物が、北東隔壁際と貯蔵穴北側に焼土が検出されている。それぞれ出土量は少ないものの、火災住居と考えられる。

覆土 5層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|----------|------|-----------------------------|
| 1層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 2層 | 7.5YR3/1 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 3層 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 4層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 5層 | 7.5YR7/8 | 黄褐色土 | 多量のロームブロックを含み、粘性に欠け、締まりがある。 |

住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本と入口部施設の梯子穴1基、地床炉1基および貯蔵穴1基が確認された。

主柱穴はP1~P4で、P1は北西側に位置し、上面が20×30cmの楕円形を呈し、深さ56cmである。P2は北東側で上面は22×26cmの楕円形で、深さ67cm。P3は南西側に位置し、上面が24×30cmの楕円形、深さ42cm。P4は南東側で、24×26cmの楕円形、深さ70cmを測る。P5は南壁際中央に設置された入口部施設の梯子穴である。形状は14×17cmの楕円形を呈し、深さ15cmを測る。

炉は地床炉で、楕円形を呈し、住居中央から北寄りに設置され、規模は長径60cm、短径48cm、深さ9cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は2層に分層でき、第1層が赤褐色焼土層で、多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

貯蔵穴は南東隔壁際に設置され、形状は隅丸方形を呈し、長軸60cm、短軸51cm、深さ34cmを測る。覆土は3層に分層でき、第1層黒褐色土 (7.5YR3/1) 多量のローム粒子をふくむ。第2層黒褐色土 (7.5YR3/2) 少量のローム粒子を含み、締まりがある。第3層褐色土 (7.5YR4/4) 多量のローム粒子を含み、締まりがある。

周溝は南壁西寄りから西壁南寄りの一部に構築されており、幅14~26cm、深さ6cmを測る。

掘り方 掘り方は、床下全面におよぶが、とくにP4および貯蔵穴周辺の南東隔壁際、P1の北西隔壁際、P3の南西隔壁際周辺には粗雑で複雑な掘り窪みが認められる。

遺物出土状況 遺物は、住居全体に出土するが、とくに南東隔壁際の貯蔵穴とその周辺に集中する傾向が観察できる。その内、個体として図示しうる資料は、壺6点、高坏8点、埴9点である。

遺物 1~6は甕形土器である。1は口縁部から底部にかけて約1/2程度を遺存する。器高25.3cm、口径17.8cm、底径4.2cm、最大径を胴部中位にもち25.7cmを測る。上げ底気味の小さな底部から球形の胴部に移行し、口縁部は「く」の字状に外反する。外面は斜行するハケメ調整の後、ナデ整形。胴部もハケメ調整の後、ナデ整形を施す。内面は口縁部は横位のハケメ調整。胴部はナデ整形を施す。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。2は完存する甕。器高26.3cm、口径16.2cm、底径4.2cm、最大径を胴部中位にもち24.5cmを測る。平底の小さな底部から「いちじく」形の胴部へ移行し口縁部は「く」の字状に外反する。外面は斜行するナデ整形。胴部も横位のナデ整形を施す。内面は口縁部は横位のナデ。胴部もナ

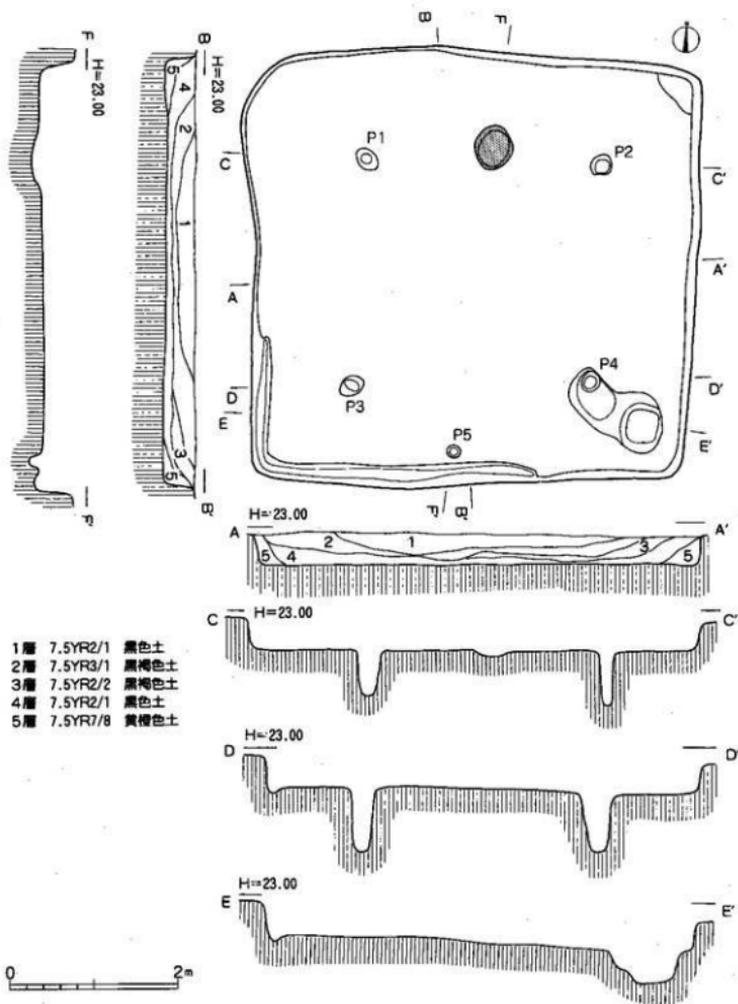


Fig.255 第34号住居跡

ナデ整形を施す。焼成は良好で、赤褐色を呈する。3は底部および胴部の一部を欠損するものの、ほぼ完存する。器高25.6cm、口径16.4cm、底径5.0cm、最大径を胴部中位にもち25.0cmを測る。平底の小さな底部からほぼ球形の胴部へ移行し、口縁部は「く」の字状に外反する。外面は斜行するナデ整形。胴部も横位のナデ整形を施す。内面は口縁部が斜行するハケメ調整の後、横位のナデ。胴部もナデ整形を施

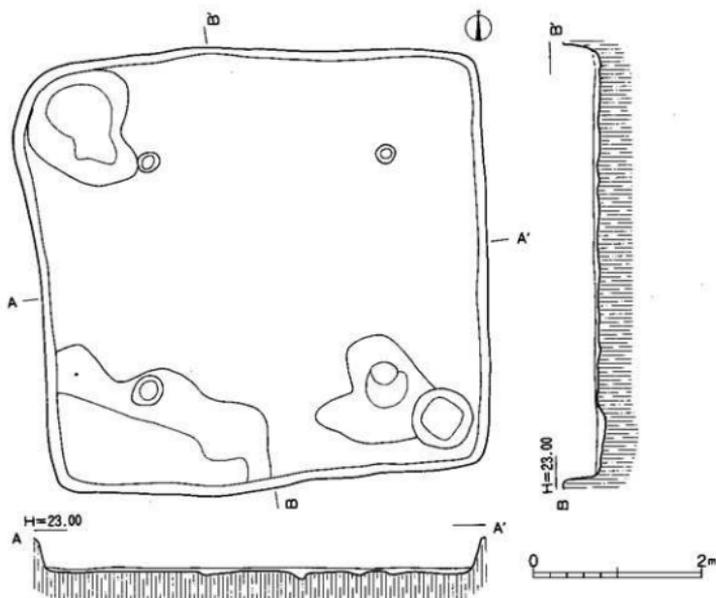


Fig.256 第34号住居跡掘り方

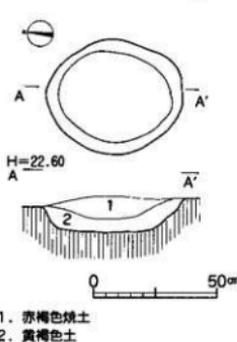


Fig.257 第34号住居跡炉

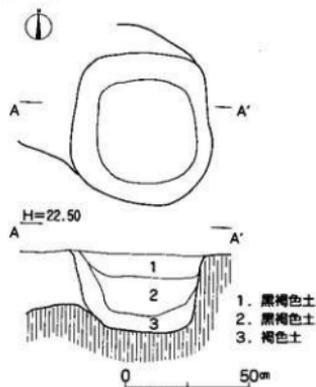


Fig.258 第34号住居跡貯蔵穴

す。焼成は良好で、赤褐色を呈する。4は小型の甕。口縁部1/3程欠損。胴部3/4程度欠損する。器高17.5cm、口径14.4cm、底径3.7cm、最大径を胴部中位にもち18.1cmを測る。上げ底気味の底部からはほぼ球形の胴部へ移行し口縁部は「く」の字状に外反する。外面の口縁部は斜行するハケメ調整。胴部はナヅ整形。内面は口縁部が斜行するハケメ調整の後、部分的に横位のナヅ整形を施し。胴部もナヅ整形。

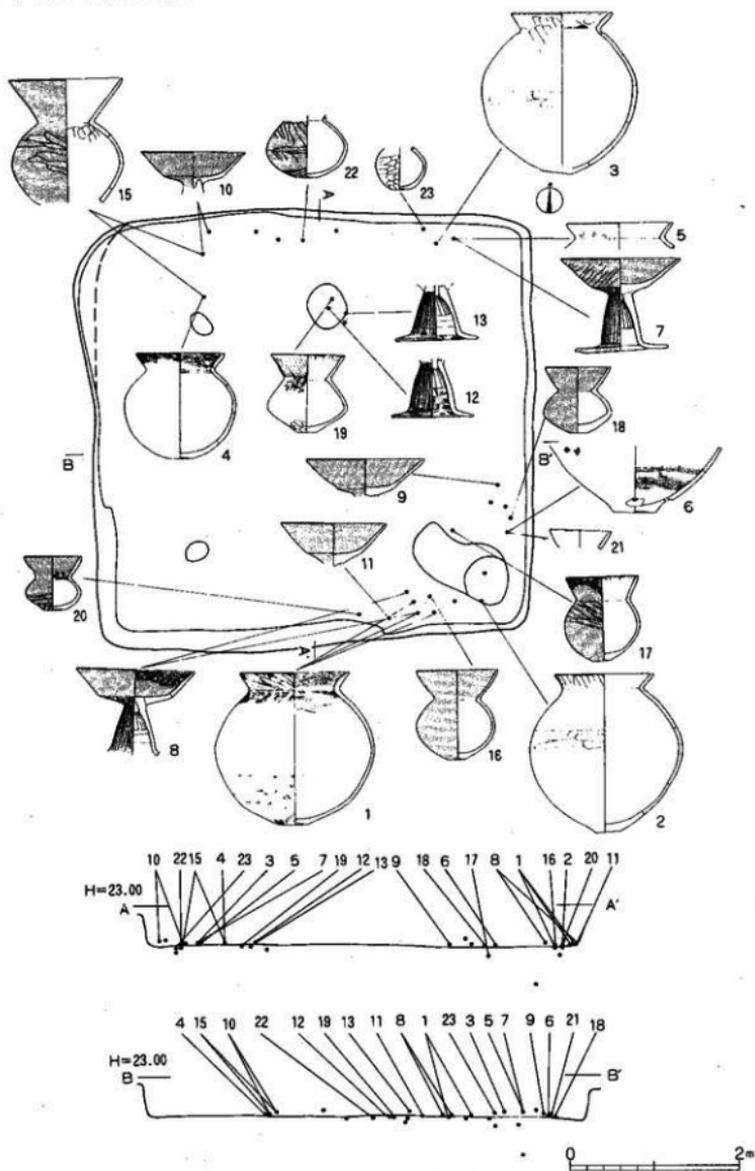


Fig.259 第34号住居跡遺物分布図

焼成は良好で、暗赤褐色を呈する。5は壺口縁部破片。1/4程度遺存する。推定口径17.2cm測る。口縁部は「く」の字状に外反する。内外面ともナデ整形が施されている。焼成は良好で、赤褐色を呈する。6は壺で底部から胴部下半部にかけて約1/3程度遺存する。底径7.0cm、現器高10.9cmを測る。やや上げ底気味の底部から球形を呈する胴部へ移行する。外面はナデ整形されているが、斜行するハケメ調整痕が残る。内面は横位のハケメ調整とナデ整形が施されている。また底部側面には直径0.8cmの円形孔が穿ってある。焼成は良好。赤褐色を呈する。7は口縁部と裾部の一部が欠損している以外完存する。器高15.4cm、口径19.4cm、裾径15.2cmを測る。坏部は口縁部と底部の境界に明瞭な稜をもち、口縁部はほぼ直線的に外方へ開く。脚部はやや中膨らみの柱状部から強く屈曲し、底面となりながら裾部が張り出す。外面は全面ナデ整形が施され、坏部底部にはヘラケズリ痕が一部残る。内面口縁部もナデ。柱状部内面にはヘラの回転によるケズリ痕が残り、裾部は横ナデである。外面と坏部内面に赤彩される。焼成は良好である。8は裾部を除き完存する。口径19.4cm、現器高13.6cmを測る。坏部は口縁部と底部の境界に明瞭な稜をもち、口縁部はほぼ直線的に外方へ開く。脚部はやや中膨らみの柱状部から強く屈曲しながら裾部をもち、外面口縁部全面ナデ整形。坏部底部にはハケメ調整の後、ヘラナデによってハケメ痕の一部を消失させている。柱状部は縦位のナデ整形。内面口縁部は横位のハケメ調整の後、ナデ整形。柱状部内面にはヘラの回転によるケズリ痕が残り、下位はナデ整形が施され、下端部には横位のハケメ調整がみられる。また粘土帯の積み上げ痕が残る。外面と坏部内面に赤彩される。焼成は良好である。9は坏部のみ完存する。口径19.2cm、現器高6.3cmを測る。口縁部と底部との境界に稜をもち、口縁部はほぼ直線的に外方へ開く。内外面ともナデで、赤彩されている。焼成は良好である。10も坏部破片。坏部2/3程度遺存する。口径17.2cm、現器高6.0cmを測る。口縁部と底部の境界に明瞭な稜をもち、口縁部は大きく外反気味に開き、坏部の脰が突出している。内外面ともナデ整形で、赤彩される。焼成は良好である。11も坏部破片。坏部約1/2程度を遺存する。推定口径17.2cm、現器高7.2cm測る。口縁部と底部の境界は明瞭な稜をもち、口縁部はほぼ直線的に外方へ立ち上がる。内外面ともナデ整形で、赤彩される。焼成は良好である。12は脚部のみ1/3程度欠損する。裾径13.6cm、現器高9.5cmを測る。柱状部は中膨らみを呈し、裾部は低く、底面として外方へ張り出す。外面は柱状部と裾部の境界にハケメ痕が残るが、ナデ整形が丁寧に施され、赤彩。内面は柱状部上部にシボリ目が残り、下半部はハケメ調整。粘土帯積み上げ痕4段残置する。裾部もハケメ調整。焼成は良好である。13は裾部の一部を欠損するもの、脚部はほぼ完存する。裾径13.6cm、現器高9.0cmを測る。柱状部は中膨らみを呈し、裾部は低く、底面として外方へ張り出す。外面は柱状部と裾部の境界にハケメ痕が残るが、ナデ整形が施され、赤彩。内面は柱状部上部にシボリ目が残り、下半部はナデ整形が施され、一部ハケメ調整がみられる。粘土帯積み上げ痕3段残置する。裾部もハケメ調整。焼成は良好である。14は高坏の脚部破片。裾部のみ約1/6程度遺存する。推定裾径13.6cm、現器高2.4cmを測る。裾部は柱状部から強く屈曲し、短く張り出す。外面はハケメ調整の後、ナデ整形。赤彩される。内面はハケメ調整。焼成は良好である。15は埴形を呈する壺である。口縁部から胴部下半部にかけて約1/2程度を遺存する。口径18.4cm、現器高20.8cm、最大径は口縁部と胴部中位がほぼ同値である。球形の胴部から口縁部が直線的に外方へ大きく開く。外面はナデ整形の後、赤彩される。内面はナデ整形。焼成は良好。16~23は埴形土器である。16は完存する埴。器高14.9cm、口径13.4cm、底径3.6cmを測る。最大径が口縁部にあり、上げ底の小さな底部から球形の胴部に移行し、口縁部は内湾気味に外方へ開く。外面口縁部はハケメ調整の後、丁寧なナデ整形によってハケメ痕を消失させる。胴部は横位のナデ整形。全面赤彩される。内面口縁部はハケメ調整の後、ナデ整形。赤彩される。脰はナデ整形。焼成は良好。17は口縁部2/3程度欠損するもの、口縁部から底部まで遺存する。器高14.0cm、現口径11.8cm、底径2.8cm、最大径が胴部中位に位置し、12.2cmを測る。

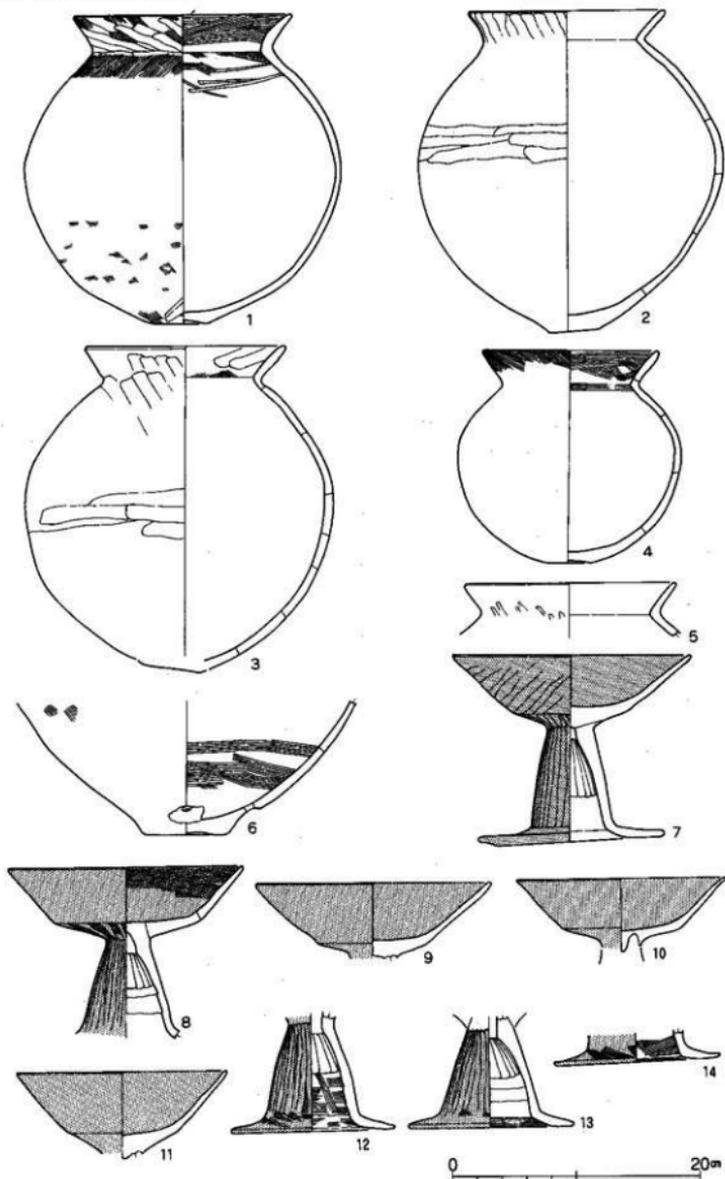


Fig.260 第34号住居跡出土遺物(1)

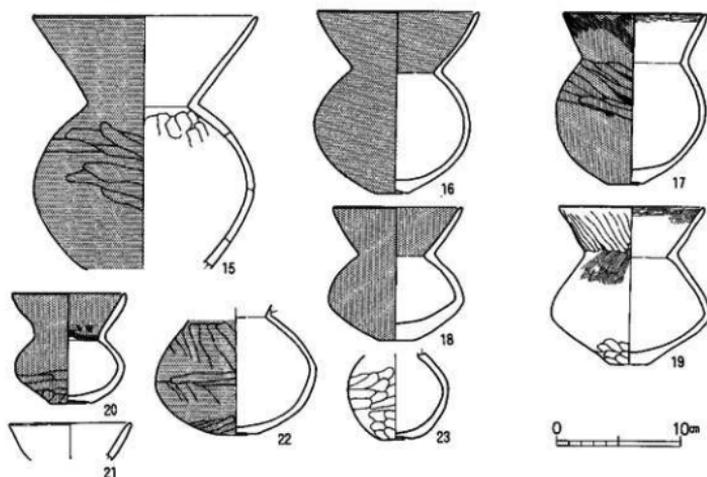


Fig.261 第34号住居跡出土遺物(2)

上げ底の底部から球形の胴部へ移行し、口縁部はほぼ直線的に外方へ開く。外面口縁部はハケメ調整後、ナデ整形が加えられ、胴部もやはりハケメ調整の後、ナデ整形が施される。部分的にハケメ痕が残置する。内面は口縁部は横位のハケメ調整の後、ナデ整形。胴部はナデ整形が施される。外面と内面口縁部に赤彩され、焼成は良好。18は口縁部の一部を欠損するものの、底部までほぼ完存する罎。器高10.9cm、口径10.8cm、底径2.8cm、最大径を胴部中位にもち11.0cmを測る。わずかに上げ底の底部から胴部は上下に押しつぶした扁球形で、口縁部はやや内湾気味に外方へ開く。外面口縁部は縦位の丁寧なミガキ。胴部は横位のミガキが施され、赤彩する。内面も口縁部はミガキの後、赤彩され、胴部はナデ整形が施される。焼成は良好である。19は口縁部から底部にかけて約1/3程度を遺存する。器高12.9cm推定口径11.8cm、底径3.2cm、最大径が胴部中位にあり、12.8cmを測る。平底の底部から胴部は断面そろばん玉状を呈し、口縁部はほぼ直線的に外方へ開く。外面口縁部は斜行するナデ整形。胴部は肩部付近が斜行のハケメ調整痕を残し、下位はナデによって仕上げている。内面口縁部上端は横位のハケメ調整。下位はナデ。胴部は肩部は指頭による押さえ、以下ナデ整形を施す。焼成は良好で、暗赤褐色を呈する。20は口縁部の一部を欠損するものの、ほぼ完存する罎。器高9.0cm、口径9.8cm、底径3.6cm、胴部最大径は8.3cmを測る。上げ底の底部から胴部は断面そろばん玉状を呈し、口縁部は内湾気味に外方へ開く。口縁部から胴部上半部はミガキ、胴部下半部は横位のヘラケズリ。内面は口縁部がミガキ、胴部はナデ整形を施す。外面と内面口縁部に赤彩され、焼成は良好である。22は口縁部を欠損する胴部だけの罎。現器高10.5cm、底径3.4cm、胴部最大径13.0cmを測る。上げ底の底部から胴部は上下を押しつぶした扁球形を呈する。外面胴部上半部はナデ整形。下半部は横位のケズリが施されている。内面胴部はナデ整形。焼成は良好で、暗赤褐色を呈する。23も口縁部を欠損するものの、胴部は完存する。現器高7.0cm、底径2.8cm、胴部最大径は8.0cmを測る。上げ底気味の底部から「いちじく」形を呈する胴部へ移行する。外面胴部は横位の粗いナデ。内面はナデ整形。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。21は罎の口縁部破片。約1/3程度を遺存する。推定口径10.0cm、現器高3.0cmを測る。口縁部はやや内湾気味に外方へ開く。

焼成は良好で、褐色を呈する。

第41号住居跡 (SI41) (Fig. 262~264)

位置 本跡は、調査区北部にあたり、3-L区の標高22.98m~23.00mに位置し、西側に第40号住居跡 (SI40) が、南側に第39号住居跡 (SI39) が隣接する。

形態 本跡の大半は北側保存区域に入るため、規模は不詳である。平面形は、隅丸方形であろう。確認された規模は長軸1.40m、短軸1.04mを測り、長軸方位はN-8°-Wを指す。検出された壁は南辺と西辺の一部で、それぞれ壁は浅く、いずれも緩やかに立ち上がる。床面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、確認された床面は硬化している。

覆土 2層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層 7.5YR2/2 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。

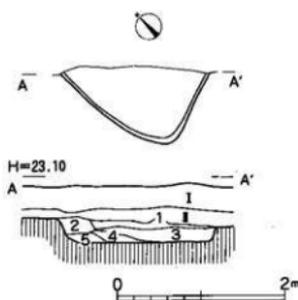
2層 7.5YR5/6 明褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設は確認できなかった。

掘り方 掘り方は、床下全面におよぶ。

遺物出土状況 遺物は、住居確認面全体に4点程散在する。その内、個体として図示しうる資料は、甕1点である。

遺物 1は甕の口縁部から胴部上半部にかけて約1/2程度を遺存する。口径16.0cm、現器高7.2cmを測る。胴部はほぼ球形を呈し、口縁部は「く」の字状に外反する。外面口縁部は横ナデ、胴部も斜行のナデ整形。内面は口縁部は横ナデされ、胴部は横位のナデ整形。焼成は良好である。



- 1. 7.5YR3/2 黒褐色土
- 2. 7.5YR4/6 褐色土
- 3. 7.5YR3/3 暗褐色土
- 4. 7.5YR4/4 褐色土
- 5. 7.5YR3/3 暗褐色土

Fig.262 第41号住居跡

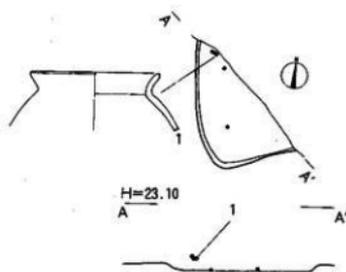


Fig.263 第41号住居跡遺物分布図

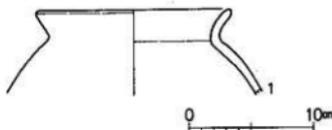


Fig.264 第41号住居跡出土遺物

第44号住居跡 (SI44) (Fig.265~269)

位置 本跡は、調査区の北西部、5-F、5-G、6-F、6-G区の標高23.60m~23.66mに位置する。北西側に第45号住居跡 (SI45) が、北東側に第42号住居跡 (SI42) が隣接する。

形態 平面形はほぼ隅丸長方形を呈する。長軸3.30m、短軸2.66mを測り、長軸方位はN-48°-Eを指し、小型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともやや緩やかに立ち上がる。床面は起伏も認められるが、ほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土 5層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|----------|-------|-----------------------------|
| 1層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 2層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。 |
| 3層 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 4層 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 5層 | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |

住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本と地床炉1基および貯蔵穴1基が確認された。

P1~P4が主柱穴である。P1は西部に位置し、上面が16×18cmの楕円形、深さ19cm。P2は北部で上面が15×20cmの楕円形で、深さ20cm。P3は南部に位置し上面が15×20cmの楕円形で、深さ14cm。P4は東部で上面が14×15cmのほぼ円形、深さ17cmを測る。

炉は地床炉で、住居中央から西寄りに設置され、その平面形は楕円形を呈し、長径46cm、短径28cm、深さ8cmを測る。断面は鍋底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は3層に分層でき、第1層と第2層が焼土層で、とくに第2層の赤褐色焼土層には多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

貯蔵穴は東壁際に構築されている。形状は楕円形を呈し、規模は長径64cm、短径38cmで、深さは25cmを測る。断面は鍋底で、壁は急傾して外方へ開口する。覆土は単層で、黒褐色土 (7.5YR3/2) 少量のローム粒子を含み、締まりがある。

掘り方 掘り方は床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっている。

遺物出土状況 遺物は、住居西側にまわって出土している。壺1点、甕5点、高坏2点、鉢2点、埴1点である。

遺物 1は甕で、胴部の一部を欠損するものの、口縁部から底部にかけて遺存する。器高12.4cm、口径13.0cm、底径4.8cm、胴部最大径16.0cmを測る。平底の底部から球形に近い胴部から口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。外面口縁部は横ナデ、胴部もナデ整形。内面口縁部は横ナデ、口縁部下半部から底部にかけてヘラナデを施す。外面全面にスス状の炭化物を付着する。焼成は良好。にぶい褐色を呈する。2は小型壺の口縁部から肩部にかけて約1/2程を遺存する。推定口径9.0cm、現器高3.9cmを測る。球形の胴部から口縁部は大きく外反する。外面口縁部の上半部は横ナデ。下半部から肩部は縦位のヘラナデ。剥落しているが、赤彩されている。内面は口縁部がナデ整形。胴部は粘土帯の接目痕がみられる。口縁部に赤彩される。焼成は良好である。3は壺底部破片。1/2程度を遺存する。底径4.8cm、現器高5.3cmを測る。上げ底気味の底部からは球形の胴部へ移行する。外面胴部は斜行するヘラケズリの後、ナデ整形。底面もナデ整形。内面はナデ整形によって仕上げている。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。4は甕の胴部下半部がほぼ完存する。底径6.2cm、現器高10.8cm、胴部最大径は22.4cmを測る。平底の底部からは球形を呈する胴部へ移行する。外面は横位のヘラケズリの後、ナデ整形を施し、内面はナデによって仕上げている。焼成は良好。暗赤褐色を呈する。5は壺底部破片で、1/2程度を遺存する。

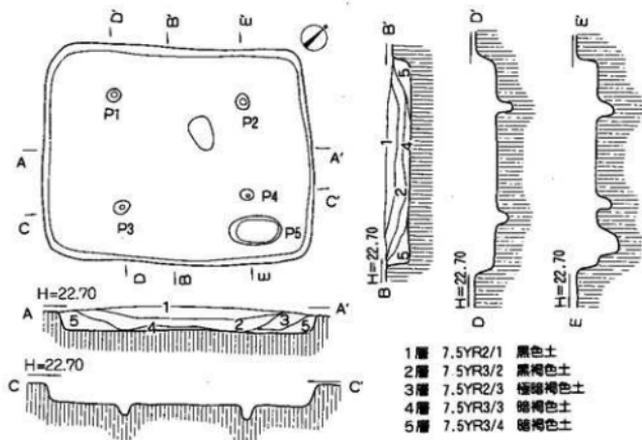


Fig.265 第44号住居跡

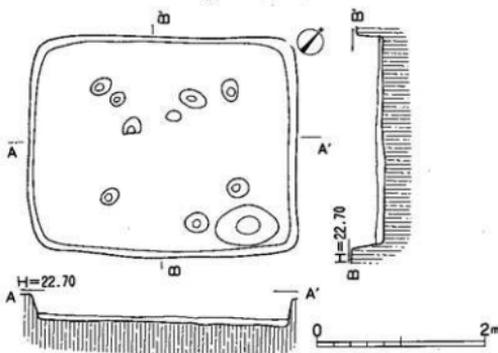


Fig.266 第44号住居跡掘り方

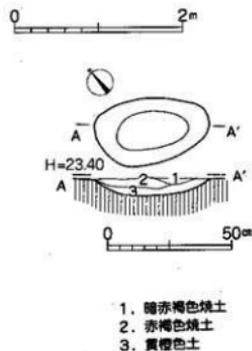


Fig.267 第44号住居跡炉

平底の底部から大きく体部が開く。底部付近まで赤彩される。外面の胴部は斜行するヘラケズリ、底部もヘラケズリ、内面は木板の木口部分のナデ。焼成は良好。6は口縁部の一部を欠損する壺形土器である。器高15.6cm、口径10.6cm、底径3.8cm、最大径は胴部中位にあり、11.4cmを測る。胴部はやや上げ底気味の底部から胴長の扁球形をもつ胴部と口縁部は直線的に内外方へ立ち上がり、口唇部に至る。外面はナデ整形の後、縦位の線状のミガキが加わる。また底側面はヘラケズリが施されている。口縁部から胴部下半部までスス状の炭化物が付着している。内面はナデ整形で仕上げられている。焼成は良好で、橙色を呈する。7は高坏の坏部で、坏部は完存である。接合部で離脱している。口径18.0cm、現器高は5.3cmを測る。口縁部と底部との境界には接ぎ目がみられる。内外面ともナデ整形の後赤彩される。焼成は良好。8は高坏の脚部。柱状部は完存。裾は約1/2程欠損する。中影らみの柱状部から裾部は比較

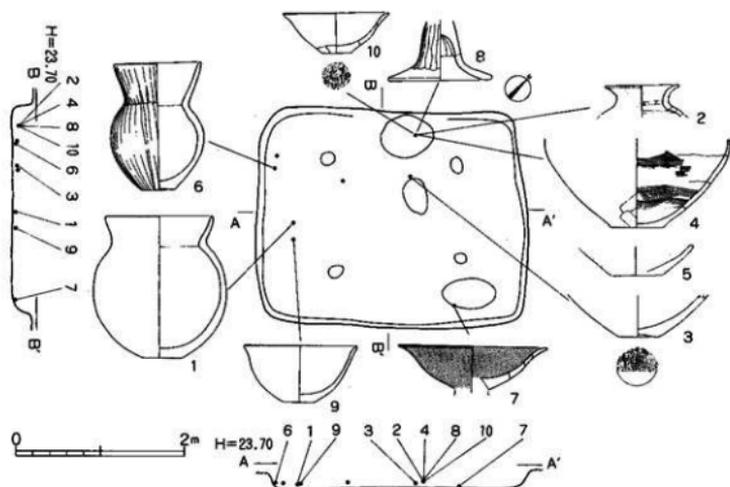


Fig.268 第44号住居跡遺物分布図

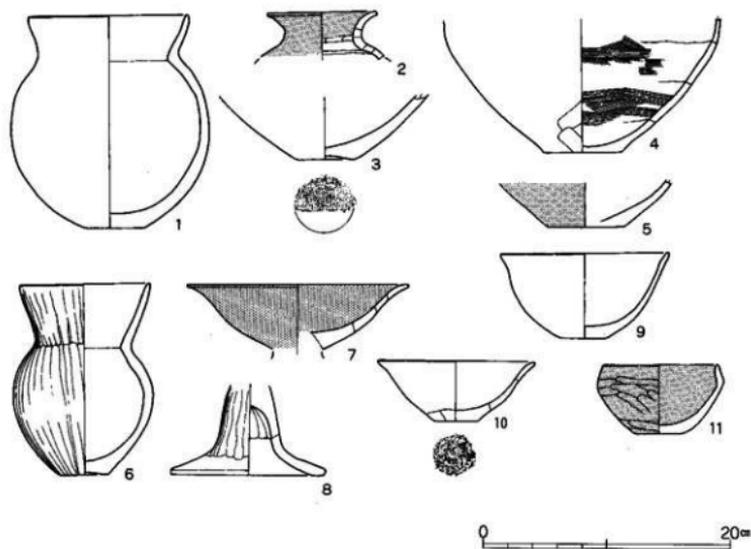


Fig.269 第44号住居跡出土遺物

の高く外方へ延びる。外面柱状部は縦位のヘラナデ、裾部は横ナデ。内面は柱状部にシボリ目が残り、裾部はナデ整形。なお内面裾部には転用砥石として再利用されている。焼成はやや良好で、にぶい赤褐色を呈する。9～11は埴形土器である。9は体部の一部を欠損するものの、ほぼ完存する。器高7.0cm、口径13.8cm、底径3.7cmを測る。平底の底部から体部は外方へ開き、さらに口端部で小さく外反する。外面・底部ともナデ、内面は丁寧なナデ整形で仕上げている。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。10は底面が完存。体部は約1/3程度を遺存する。器高5.0cm、口径12.8cm、底径3.4cmを測る。平底の小さな底部から大きく体部が開き、口端部でさらに外反する。外面はヘラケズリの後、ナデによって仕上げ、底部はヘラケズリ、内面は口端部が横ナデ、体部はヘラによるナデ整形を施す。焼成は良好。にぶい褐色を呈する。11は完存品である。器高5.6cm、口径9.4cm、底径4.0cmを測る。平底から体部は外方へ開き、口端部で内湾気味に内側へ短く屈曲する。外面口端部は横ナデ、体部は横位のヘラケズリ、底面もヘラケズリ。内面は口端部が横ナデ、体部がナデ整形で仕上げている。焼成は良好で、内外全面に赤彩されている。

第46号住居跡 (SI46) (Fig. 270～274)

位置 本跡は、調査区北西側で、4-E区の標高23.60m～23.66mに位置する。南東側に第45号住居跡 (SI45) が隣接する。

形態 本跡は東側約1/3ほどが保存区域にあるため、調査は住居の約2/3である。まず平面形は、隅丸方形を呈する。長軸6.26m、短軸6.00mを測り、長軸方位はN-55°-Wで、大型の住居跡である。壁は全体に低く、東辺、西辺、南辺、北辺ともやや緩やかな立ち上がりを見せている。床面は若干の起伏はあるものの、ほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土、暗褐色土の混合土からなる貼床である。

覆土 4層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|------------|-------|---------------------------|
| 1層 | 7.5YR1.7/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 2層 | 7.5YR3/3 | 極暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 3層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 4層 | 7.5YR4/2 | 褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |

住居施設 確認された住居内部の施設として、柱穴3本と地床炉1基を確認した。

P1～P3が主柱穴である。P1は西部に位置し、上面が26×28cmの楕円形、深さ67cm。P2は北部で上面が30×32cmの楕円形で、深さ47cm。P3は南部に位置し上面が30×32cmの楕円形で、深さ59cmを測る。

炉は地床炉で、住居中央から北西側に位置している。形状は楕円形を呈し、規模は長径32cm、短径26cm、深さ8cmを測る。断面は平底で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。焼け締まった焼土層が炉の中央部に堆積し、楕円形の燃焼部を形成している。覆土は2層に分層でき、第1層が赤褐色焼土層で、多量の焼土粒子を含み、締まりがある。

掘り方 掘り方は細かな起伏をもちながら、さらに北隔壁際と西隔壁際には浅く複雑な掘り窪みが施されている。

遺物出土状況 遺物は、炉の北西側とP3の南際にまとった出土をしている。個体として図示しうる資料は、甕6点、埴3点、高坏1点、埴2点である。

遺物 1は甕口縁部の小破片。口縁部約1/8程度を遺存する。推定口径20.0cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反する。外面口縁部上半部は横ナデ、下半部は斜行のヘラナデ。内面は横位のヘラナデ整形。焼成は良好で、褐色を呈する。2も甕の口縁部で、口縁部のみ完存する。口径14.8cm、現器高4.6cmを

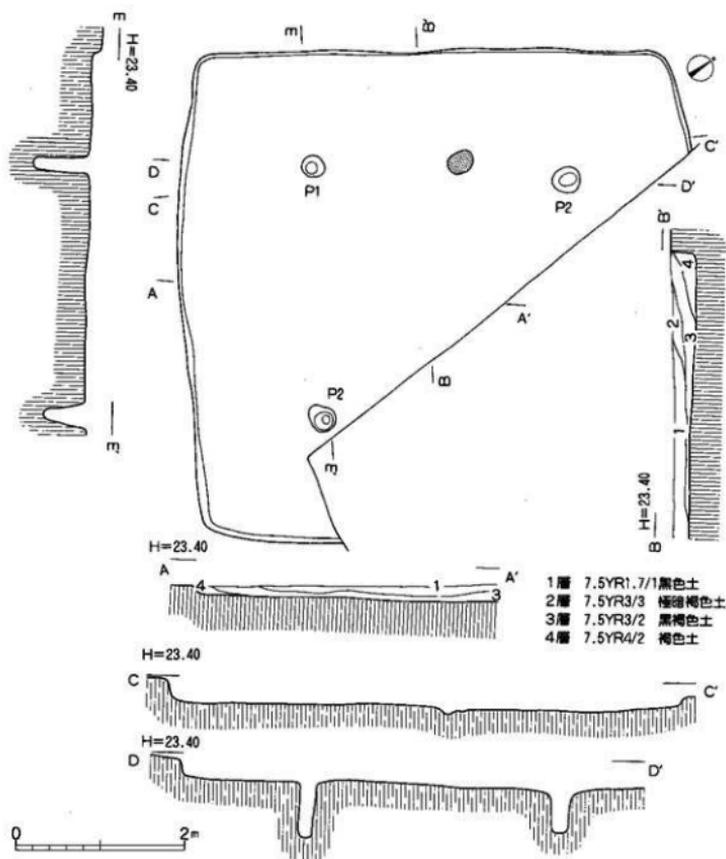


Fig.270 第46号住居跡

測る。口縁部は高く外反気味に立ち上がる。外面口縁部は横ナデ、内面も横ナデ、下半部ヘラナデ整形を施す。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。3も口縁部破片で1/6程を遺存する。推定口径14.4cm測る。口縁部は緩く外反する。口縁部内外面とも横ナデで仕上げられている。焼成は良好で明赤褐色を呈する。4は胴部破片で、約1/3程度を欠損する。胴部最大径は中位にあり、29.8cmを測る。胴部はほぼ球形を呈する。外面は横位もしくは斜位のヘラケズリ、内面は木板の木口部分による横位のヘラナデ整形によって仕上げている。5は胴部下半部の甕である。胴部の一部を欠損する。底径6.2cm、現器高は13.0cm、最大径が胴部中位にあり、17.0cmを測る。平底の底部から胴長で扁球形の胴部へ移行する。外面胴部は斜行するヘラケズリ、底面はナデ。内面は縦位のナデ整形。粘土帯の接ぎ目がみられる。焼

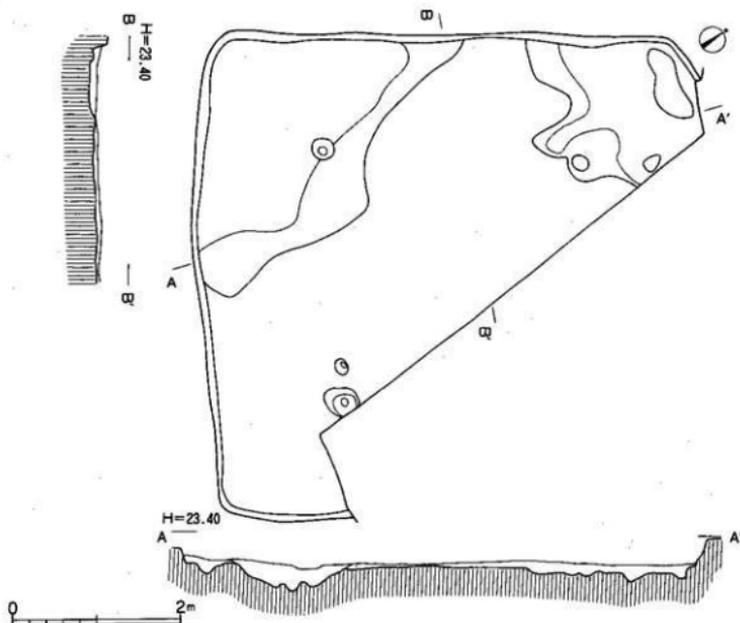


Fig.271 第46号住居跡掘り方

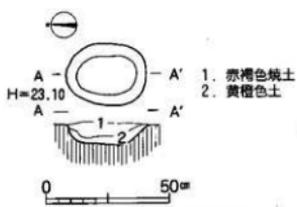


Fig.272 第46号住居跡炉

成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。6も胴部下半部の甕である。胴部中位下位付近の接合部で離脱している。底径5.2cm、現器高は10.0cm、最大径が胴部中位にあり15.0cmを測る。平底の底部から胴長で扁球形の胴部へ移行する。外面胴部は斜行するヘラケズリ、底面はナデ。内面は斜位のヘラナデ整形。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。7は壺口縁部破片。口縁部のみ1/4程度欠損する。口径15.2cm、現器高6.6cmを測る。口縁部は内湾気味に立ち上がる。外面口縁部上端部は横ナデ、下半部はナデ整形の後、縦位の細かなヘラミガキ。内面はナデ。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。8は口端部の一部を欠損するだけで、ほぼ口縁部のみ完存する。口径13.0cm、現器高6.6cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。外面口端部は横ナデ、下半部は縦位のヘラケズリ。内面はナデ整形。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。9は壺底部付近の破片。底部から胴部下半部にかけて1/2程度欠損する。底径3.4cm、現器高6.4cmを測る。上げ底気味の小さな底部から長目の扁球形の胴部へ移行する。外面は斜行するヘラケズリ、底部もヘラケズリ。内面はナデ整形。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。10は高坏脚部のみ完存する。裾径10.8cm、現器高7.0cmを測る。中膨らみの柱状部から裾部高く短く下方へ広がる。外面の柱状部は縦位のヘラケズリ、裾部は横ナデ。内面の柱状部はシボリ目が残り、

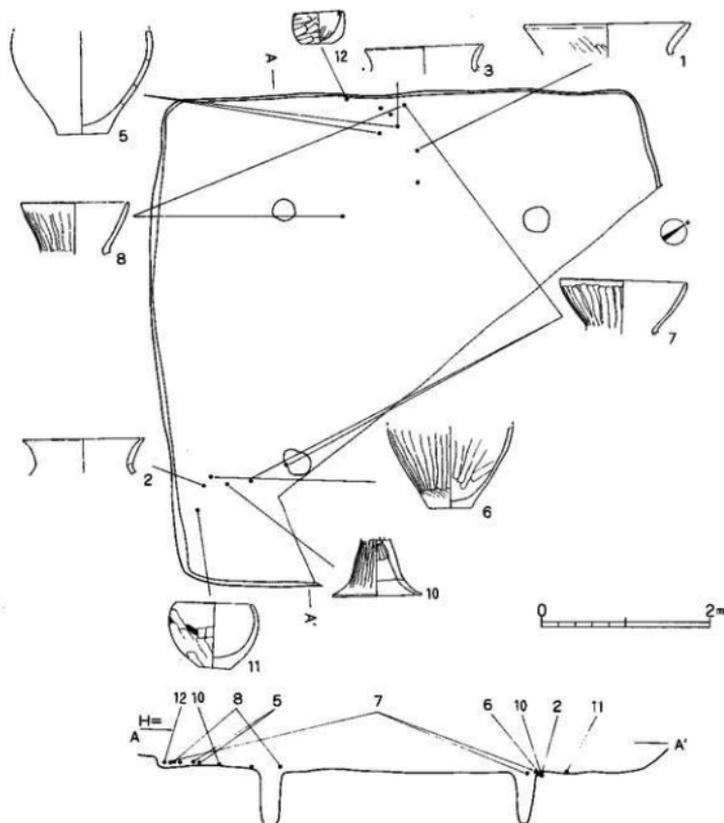


Fig.273 第46号住居跡遺物分布図

裾部は横ナデ。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。11は体部の一部が欠損するものの、底部までは完存する。口径9.4cm、器高8.0cm、底径3.7cmを測る。平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。外面口端部は横ナデ、体部と底部は斜行するナデ整形の後、指頭によるナデ付け。内面は丁寧なナデ整形が施されている。焼成は良好で、赤褐色を呈する。12は小型の壺で完存する。器高3.9cm、口径6.0cm、底径3.8cmを測る。平底の底部から内湾気味に体部が立ち上がる。外面体部は横ナデ整形し、下端部のみヘラケズリ。内面はナデ整形で仕上げている。焼成は良好で、明褐色を呈する。

第49号住居跡 (SI49) (Fig.275~277)

位置 本跡は、調査区南西部にあたり、11-H、12-H、12-I区の標高23.12m~23.20mに位置し、南側に第01号住居跡 (SI01) が、南東側に第02号住居跡 (SI02) が隣接する。

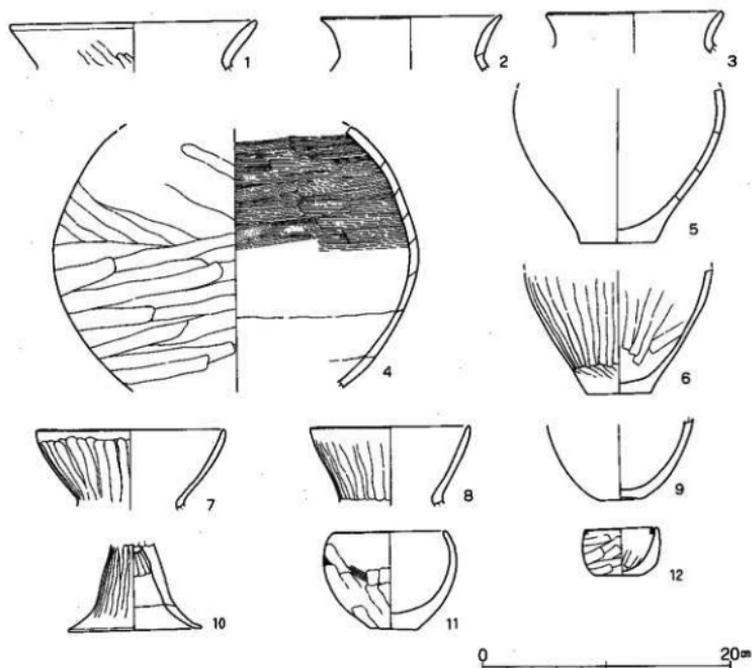


Fig.274 第46号住居跡出土遺物

形態 本跡の大半は北側保存区域に入るため、規模は不詳である。平面形は、隅丸方形であろう。確認された規模は長軸2.90m、短軸1.24mを測り、長軸方位はN-36°-Wを指す。検出された壁は南辺と東辺の一部で、それぞれ壁は比較的深く、いずれも急角度で立ち上がる。床面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、確認された床面は硬化している。

覆土 2層に分層可能である。自然埋没土層である。

1層 7.5YR2/2 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。

2層 7.5YR5/6 明褐色土 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。

住居施設 住居内部の施設は周溝のみ確認できた。

周溝は確認された壁に検出でき、幅6～12cm、深さ7～9cmを測り、底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

なお、検出された床面には全面焼土と壁際には炭化物が出土しており、本跡が焼失家屋であることを示している。

掘り方 掘り方は、床下全面におよぶ。

遺物出土状況 遺物は、住居確認面全体に4点程散在する。その内、個体として図示しうる資料は、壺2点である。

遺物 1は甕形土器で、口縁部から胴部中位にかけて約1/4程度を遺存する。推定口径19.4cm、現器高15.0cmを測る。最大径が胴部中位に位置し、23.6cmである。胴部は胴長で、口縁部は短く「く」の字状に外反する。外面口縁部は横ナダ、胴部は縦位のヘラケズリ。内面は口縁部が横ナダ、胴部は横位のヘラナダ。粘土帯の積み上げ痕が残る。焼成は良好で、にぶい褐色を呈する。2は甕底部である。約1/2程度を遺存する。底径6.2cmを測る。平底の底部から体部が外方へ開く。外面は斜行するヘラケズリ、底面もケズリ。内面はナダ整形。焼成は良好で、黒褐色を呈する。

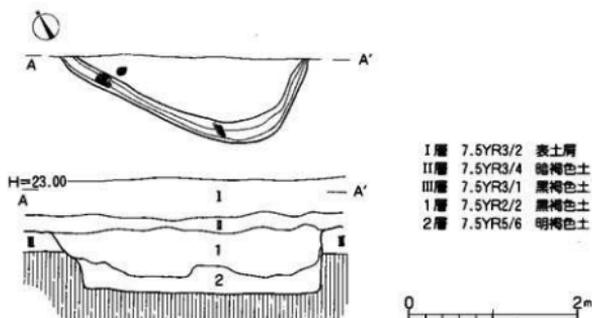


Fig.275 第49号住居跡

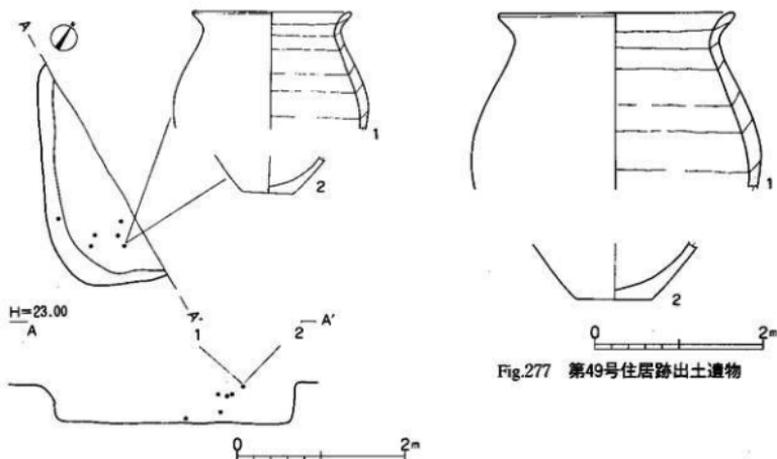


Fig.276 第49号住居跡遺物分布図

Fig.277 第49号住居跡出土遺物

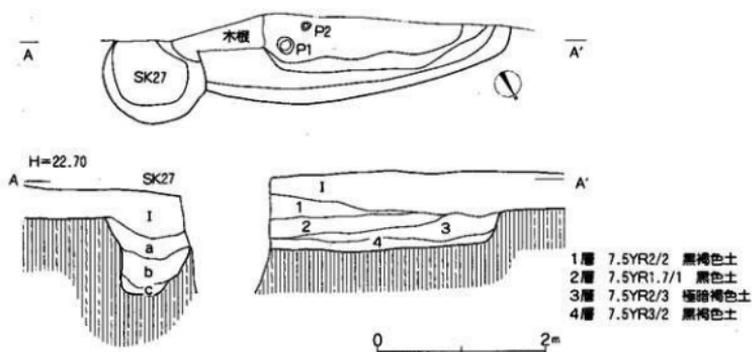


Fig.278 第50号住居跡

第50号住居跡 (SI50) (Fig. 278)

位置 本跡は、調査区南西端にあたり、15-F区の標高22.02m~22.26mに位置し、東側に第51号住居跡 (SI51) が隣接する。

形態 本跡の大半は南側保存区域に入るため、規模は不詳である。平面形は、隅丸方形であろう。確認された規模は長軸3.78m、短軸1.10mを測り、長軸方位はN-25°-Eを指す。検出された壁は南辺と東辺の一部で、西辺は土坑 (SK27) によって切られている。確認された南壁は比較的深く、緩やか角度で立ち上がる。床面はほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、確認された床面は硬化している。

覆土 4層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|------------|-------|-----------------------------|
| 1層 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。 |
| 2層 | 7.5YR1.7/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 3層 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。 |
| 4層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |

住居施設 住居内部の施設は柱穴2本のみ確認できた。

P1とP2は支柱穴というよりも支柱穴である。いずれも西壁際に構築されている。P1は西壁際に位置し、上面が20×20cmの円形、深さ14cm。P2はP1の東側で上面が10×12cmの楕円形で、深さ15cmを測る。

掘り方 掘り方は、床下全面におよぶ。

遺物出土状況 遺物は小破片の土師器のみで、図示できるものは皆無であった。時期は古墳時代中期である。

(小川 和博)

第Ⅵ章 古墳・歴史時代の調査

第1節 川崎山Ⅳ・Ⅴ期の遺構と遺物

1. 第Ⅳ・Ⅴ期の概要 (Fig.279)

本遺跡の集落形成第Ⅳ期とされるのは、古墳時代後期の「鬼高式土器」に係わる段階で、2軒の住居跡が検出されている。第14号住居跡と第29号住居跡である。規模も全く異なり、出土遺物も第14号住居跡は極端に少なく、これら2軒の関連性について十分に把握できない。また歴史時代とされるのは平安時代に比定される段階の住居跡で、第17号住居跡と第25号住居跡の2軒のみ検出されている。土器から判断して9世紀後半であるが、うち第25号住居跡は約半分のみ調査のため詳細については不明な点が多い。いずれも本遺跡内では集落としての広がりには全く認められない。

2. 第Ⅳ期の住居跡

第14号住居跡 (SI14) (Fig.280~284)

位置 本跡は、調査区南東部、15-M、15-N区の標高21.44m~21.70mに位置する。北西部で第15号住居跡 (SI15) を切って構築している。南側に第12号住居跡 (SI12) が、南西に第10号住居跡 (SI10) が隣接する。

形態 平面形は、方形を呈する。長軸6.34m、短軸6.24mを測り、長軸方位はN-25°-Wを指し、大型の住居跡である。壁は全体的に深く、東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は若干の起伏にとむが、平坦面がほぼ水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、

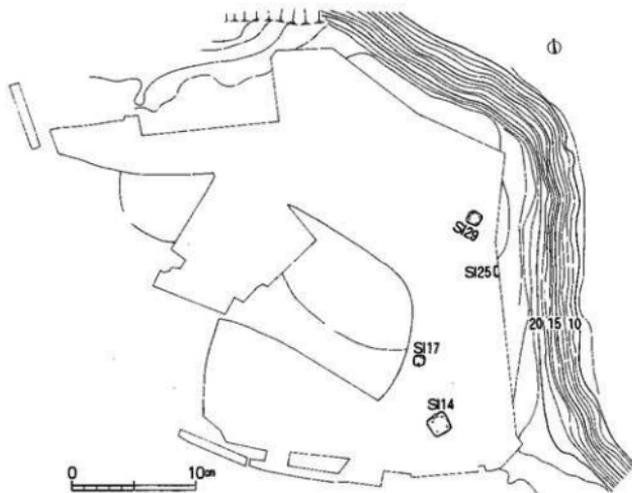


Fig.279 川崎山Ⅳ・Ⅴ期集落

全面にわたって硬化している。

覆土 7層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|---------|---------|-----------------------------|
| 1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。 |
| 2層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 3層 | 10YR6/4 | にぶい黄褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 4層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 5層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。 |
| 6層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 7層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にややとみ、締まりがある。 |

住居施設 住居内部の施設として柱穴5本とカマド1基が確認された。

主柱穴はP1～P4で、P1は北西部に位置し、上面が32×34cmの楕円形、深さ67cm。P2は北東部で30×36cmの楕円形で、深さ54cm。P3は南西部に位置し、上面が26×28cmの楕円形で、深さ60cm。P4は南東部で、24×34cmの楕円形、深さ59cmを測る。また南壁中央のやや北側に位置する、上面が30×44cm、深さ33cmの楕円形ピットであるP5とがある。これは支柱穴もしくは梯子穴の可能性が高い。

カマドは北壁中央に位置する。壁への掘り込みは比較的小さく、壁より20cm奥に煙道部として掘られ、急傾して立ち上がる。またここは間口が50cmと標準的な広さを持ち、広間口部の両側に袖部を付けている。燃燒部の掘り方は浅く、床面上からわずか5cmで、火床面にはわずかな赤化が認められるに過ぎない。袖部の遺存は良好で、燃燒部を囲むように全体が内湾している。現存する袖部の幅は右袖部で55cm、左袖部で33cmを測る。袖部の部材は砂質粘土を使用している。

周溝は、カマド部分を除き全周するが、西壁中央部において周溝の張り出し部がみられる。幅10～24cm、深さ5～16cmで、底面は平坦である。

掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏を持ち、全面に広がっている。

遺物出土状況 遺物は、住居全体に散在するが、とくに南端から南東部にかけて集中する。いずれも小破片で、図示しうる資料は甕6点、高坏1点、土製玉1点である。

遺物 1～6は甕形土器である。1は口縁部破片。口縁部約1/12以下の遺存である。推定口径15.4cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部は上半部は横ナデ、下半部は縦位のナデ整形。内面は横位の丁寧なナデ整形。焼成は良好で、橙色を呈する。2は底部約1/4程度遺存する。推定底径11.8cmを測る。平底の底部は全面ナデ整形。焼成は良好で、赤褐色を呈する。3は底部1/12以下の小破片。推定底径12.6cmを測る。平底の底部でナデ整形。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。4は肥厚する底部破片で、1/6程を遺存する。推定底径10.0cmを測る。全面ナデ整形で仕上げられているが、底面は細い溝状の刻みがみられ、転用砥石として使用されている。焼成は良好で、明褐色を呈する。5は底部約1/4程度遺存する。推定底径5.8cmを測る。平底の底部で、内外面ともナデ整形。器面の粗れが目立つ。焼成はやや不良。にぶい赤褐色を呈する。6も底部の小破片。約1/12以上で、推定底径8.6cmを測る。内外面ともナデ整形。焼成はやや不良。にぶい赤褐色を呈する。7は高坏脚部1/3程度遺存する。現器高7.0cmを測る。柱状部は中張らみ。外面は縦位のナデ。内面は上半部がシボリ目を残し、下半部ナデ。焼成は良好で、赤褐色を呈する。10は甕玉を模した土製玉と思われる。小型の土錘に酷似しているが、土製の装身具としてよいであろう。全体にずんぐりした、ちょうど果実の種に似た感じの作りである。なお下端に刻みを入れれば土製の鈴形模造品となる。長さ2.75cm、最大径が中央部に位置し1.28cm、穿孔面の小口径0.55cm、重さ12gを測る。全体に丁寧にナデ整形され、焼成も良好。褐色を呈する。

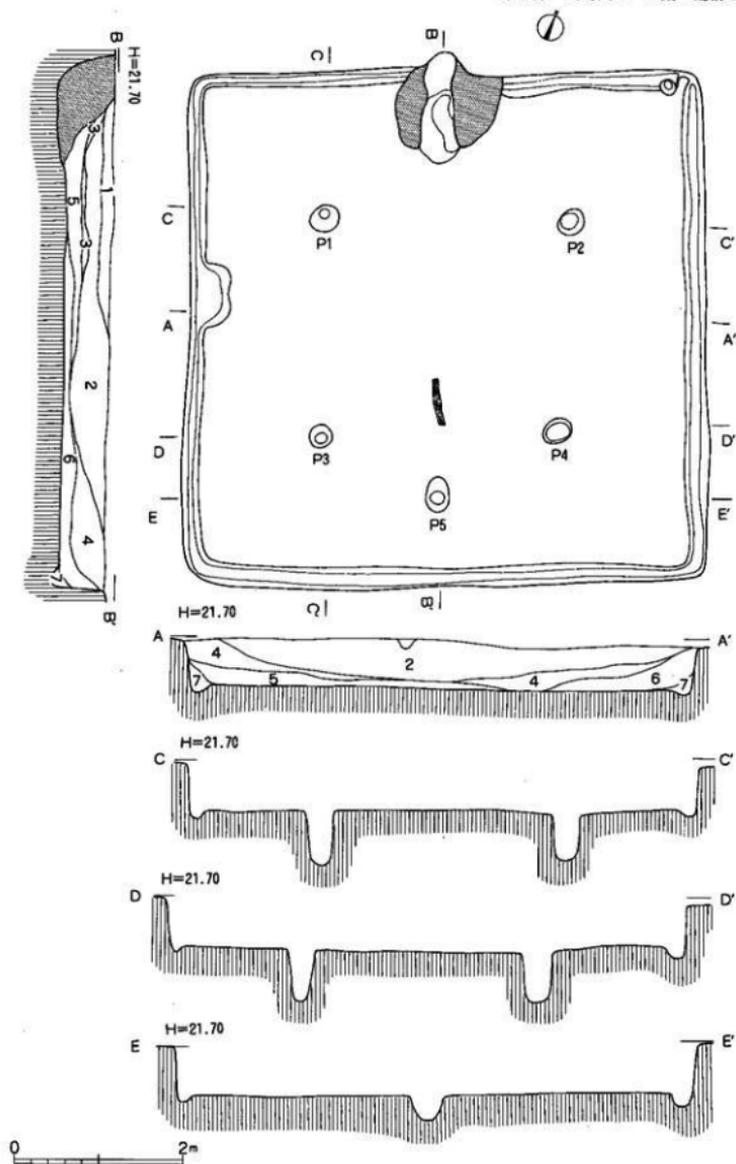


Fig.280 第14号住居跡

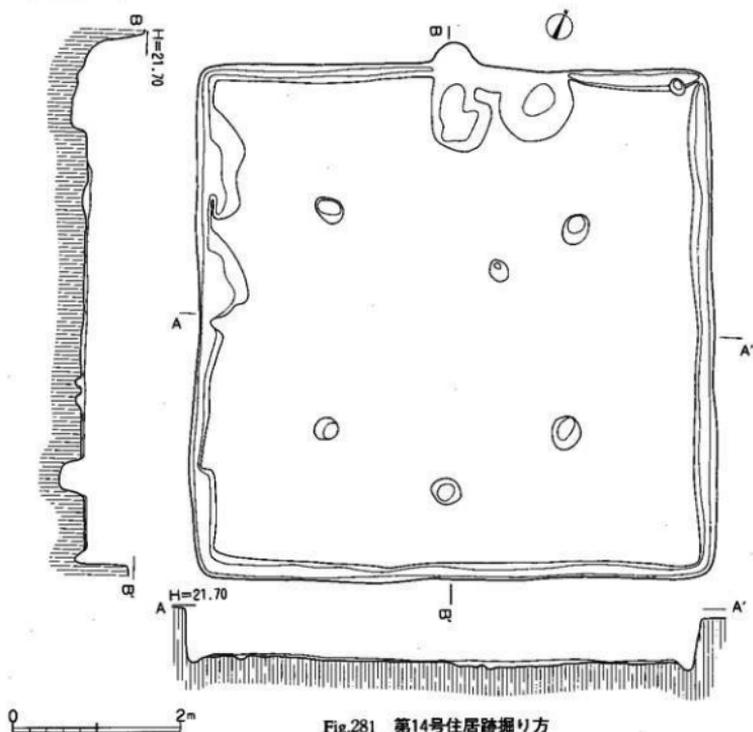


Fig.281 第14号住居跡掘り方

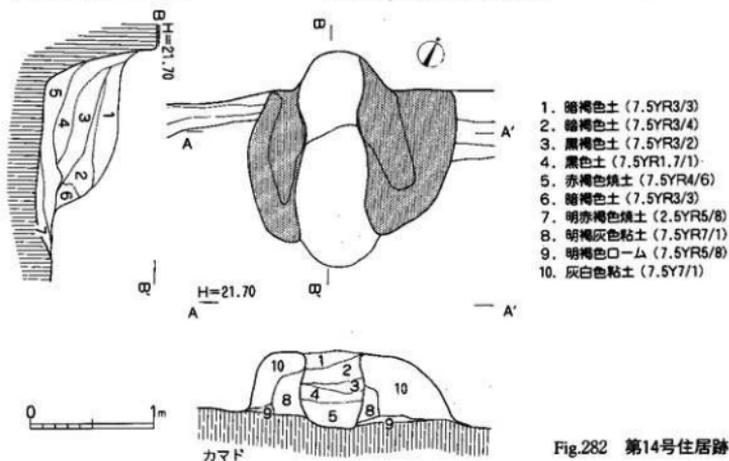
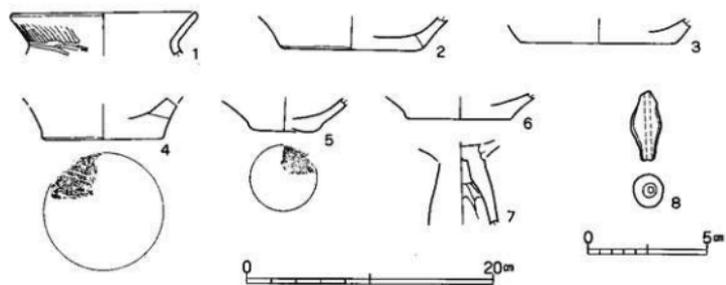
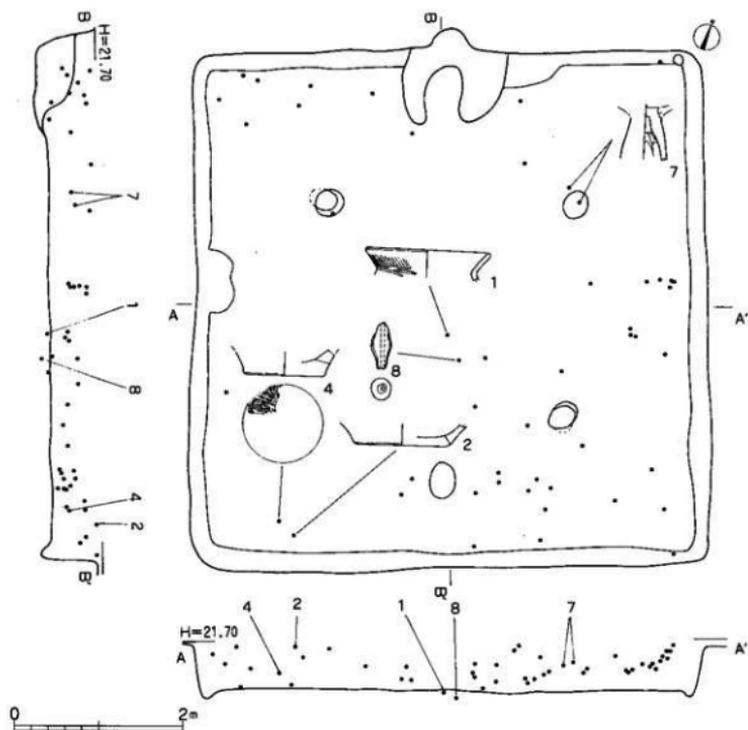


Fig.282 第14号住居跡カマド



第29号住居跡 (SI29) (Fig. 285~289)

位置 本跡は、調査区東部、8-O、8-P、9-P区の高標22.72m~22.88mに位置する。南側で第28号住居跡 (SI28)、西側で第33号住居跡 (SI33) が、北側で第30号住居跡 (SI30) が隣接する。

形態 平面形は、方形を呈する。長軸3.70m、短軸3.60mを測り、長軸方位はN-52°-Wを指し、小型の住居跡である。壁は東辺、西辺、南辺、北辺ともほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平に広がる。床は黄褐色ロームと黒褐色土の混合土からなる貼床で、全面にわたって硬化している。

覆土は7層に分層可能である。自然埋没土層である。

- | | | | |
|----|------------|-------|-----------------------------|
| 1層 | 7.5YR2/3 | 極暗褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性ややあり、締まりがある。 |
| 2層 | 7.5YR1.7/1 | 黒色土 | 少量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 3層 | 7.5YR2/1 | 黒色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にやや欠け、締まりがある。 |
| 4層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 5層 | 5YR3/6 | 暗赤褐色土 | 多量のローム粒子を含み、粘性にとみ、締まりがある。 |
| 6層 | 7.5YR5/6 | 明褐色土 | 少量のローム粒子を含み、締まりがある。 |
| 7層 | 7.5YR7/6 | 黄橙色土 | 多量のローム粒子を含み、締まりがある。 |

住居施設 住居内部の施設として、柱穴4本とカマド1基が検出された。

主柱穴はP1~P4で、P1は北西側に位置し、上面が22×26cmの楕円形、深さ48cm。P2は北東側で24×34cmの楕円形で、深さ44cm。P3は南西側に位置し、上面が18×22cmの楕円形、深さ45cm。P4は南東側で18×22cmの楕円形で、深さ36cmを測る。

カマドは北西壁中央に位置する。天井部は既に崩落しているものの、遺存状態は良好である。壁より17cm奥に煙道部として掘り込まれ、急傾して立ち上がる。また袖部取り付け部の開口は32cmと狭く、現存する袖部の幅は右袖部で50cm、左袖部で37cmを測る。袖部の部材は砂質粘土を使用し、燃焼部を囲むように構築されている。燃焼部は床面から僅か12cmの掘り込みであるが、火熱による赤化が顕著に認められる。

周溝は北西壁中央に位置するカマド部分と南西壁北側約半分を除き掘り込まれている。その規模は幅が12~20cm、深さは4~9cmで、底面はほぼ平坦で起伏部分はほとんどみられない。

掘り方 掘り方は、床下全面に及び、緩やかな起伏をもち、全面に広がっている。

遺物出土状況 遺物は、住居の全体に散在するが、カマド内およびカマド周辺から甕、甔類の完形品が出土している。図示した資料は甕3点、甔1点、手捏土器1点である。

遺物 1は胴長の甕で完存する。器高29.8cm、口径16.6cm、底径6.6cm、最大径が胴部中位にあり18.2cmを測る。平底の底部から胴長の胴部へ移行し、口縁部は「く」の状に短く外反する。外面口縁部は横ナデ。胴部は縦位のヘラケズリ。内面ナデ整形。焼成は良好で、明褐色を呈する。2は胴部下半部を欠損するが、口縁部から底部にかけて約1/3程度の遺存である。推定器高25.0cm、口径16.3cm、底径6.8cm、胴部最大径22.2cmを測る。平底の底部で、胴部最大径は上位に位置し、口縁部は小さく「く」の字状に外反する。外面口縁部は横ナデ、胴部は斜行するヘラケズリの後、ナデ整形。内面口縁部は横ナデ、胴部はナデ整形を施す。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。3は口縁部の一部を欠損するものの、口縁部から底部にかけて遺存する。器高21.0cm、口径15.4cm、底径6.0cm、胴部最大径17.8cmを測る。平底の底部からやや丸みをもちながら上方へ立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。外面口縁部は横ナデ、胴部は縦位のヘラケズリ。内面口縁部は横ナデ、胴部はナデ整形で仕上げる。焼成は良好で、明褐色を呈する。4は口縁部の一部を欠損するもののほぼ完存する単孔式の甔である。器高22.6cm、口径25.0cm、底径9.7cmを測る。最大径を口縁部にもち、以下頸部から胴部にかけて漸移的に径を縮めて底部へ移行す

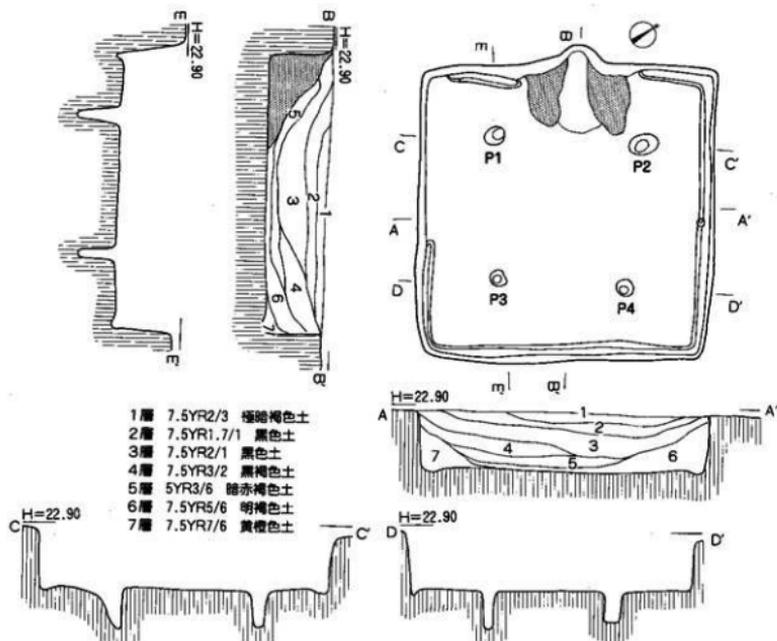


Fig.285 第29号住居跡

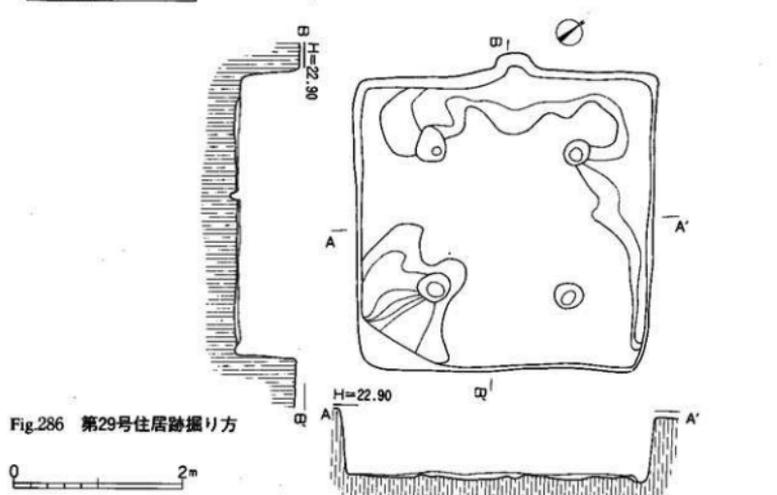


Fig.286 第29号住居跡掘り方

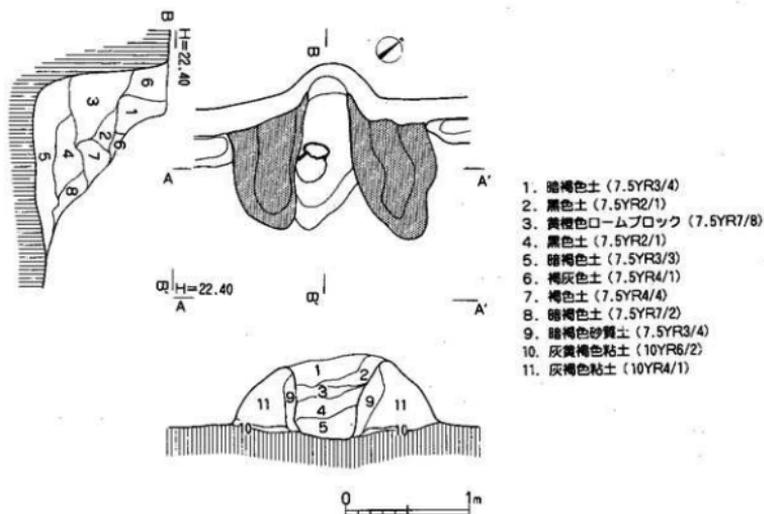


Fig.287 第29号住居跡カマド

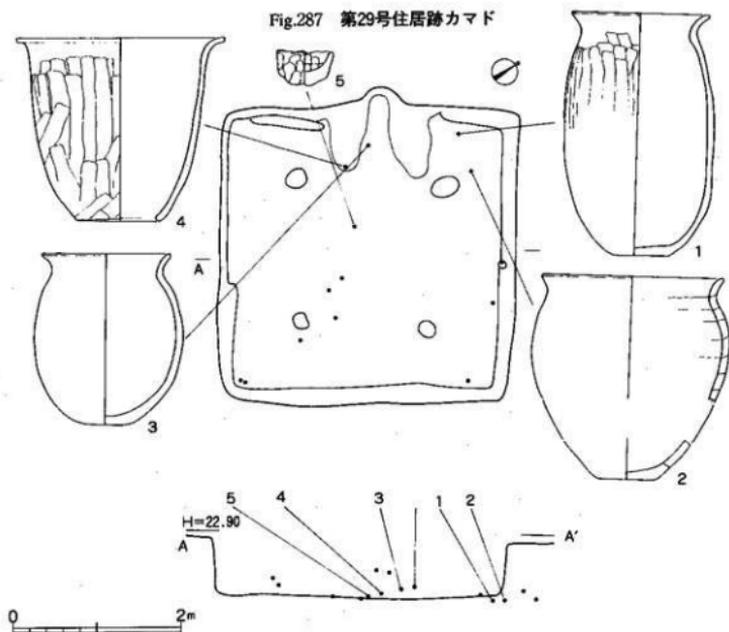


Fig.288 第29号住居跡遺物分布図